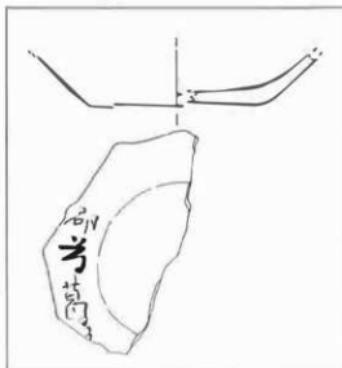


# 筑後市内遺跡群IV

福岡県筑後市大字鶴田、山ノ井所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書  
第45集



羽太塚中道遺跡（第2次調査）2SK 176出土の墨書き上記

2002

筑後市教育委員会

# 筑後市内遺跡群IV

つるだなかいものあ  
鶴田中市ノ塚遺跡（第1～5次調査）

やまのいがはらじち  
山ノ井川口遺跡

2002

筑後市教育委員会

## 序

現在の筑後市は、九州を縦断する高速道路や鉄道、市内の中心部で交差する国道209・442号が集中するなどの恵まれた交通網を基盤とした「まち」であります。このほど先学諸氏らの研究並びに発掘調査の成果によって、古代から交通の要所であったことが明らかになりました。

10世紀前半に制定された「延喜式」には、現在の羽犬塚付近に設けられたいたと想定される「葛野駅」の名が記載されており、九州の各地に点在していた国府を結ぶ幹線道路（西海道）が、市内を直線的に縦断していただとされています。西海道は、近世になると大幅なルートの変更とともに、宿場町（羽犬塚）や住郷町（一条・尾島）を貫通する旧街道（坊津街道）として受け継がれ、現在の国道209号線に至っている次第であります。

さて、本書は高速道路や鉄道、国道の前身とも提えられる「西海道」に焦点をあてた関連遺跡の調査成果をまとめたものであります。本書が地域における文化財や歴史に対する認識と理解を深めるとともに学術研究の一助になれば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加の方々に深く感謝を申し上げます。

平成14年3月

筑後市教育委員会  
教育長　牟田口和良

## 例 言

- 本書は、平成5~8・10年度に筑後市教育委員会が実施した鶴田中市ノ塚遺跡（第1~5次調査）、山ノ井川口遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真などは筑後市教育委員会において所蔵・保管をしている。なお、発掘調査及び整理作業の関係者は「I.調査経過と組織」に記したとおりである。
- 調査に用いた測量座標は、国土調査法第II座標系を基準としたため本書に示される方位はすべてG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の方位はこれを基準としたものである。また、水準はT.P.を基準としている。
- 本附に使用した図面類のうち、遺構実測図の作成者は各章の「(1)はじめに」で記したとおりで、遺物実測図は平塚あけみ、江藤裕子、仲文恵、小林勇作が作成し、図版の添書は平塚、仲、横井理絵が行った。
- 本書に使用した写真のうち、遺構の写真撮影は各章の「(1)はじめに」で記したとおりで、遺物の写真撮影は上村英士が行った。
- 本書に使用した遺構表示は下記の略号による。

SA—柵列状遺構 SB—掘立柱建物 SD—溝・側溝 SE—井戸 SF—道路状遺構  
SK—土塙 SP—ピット SX—不明遺構

- 各調査における遺構番号は調査段階で使用した仮番号を生かし、遺構の種別記号（SB、SF等）の前に調査次数を冠することで、過去及び将来の同遺跡の調査における遺構番号との重複を避けた。従って、遺構の表記は下記のとおりである。

（例）第3次調査から確認された溝に対して10の仮番号を与えた場合・・・3SD010

- 本書の執筆・編集は小林が担当し、一部で上村、立石真二の協力を得た。

## 目 次

I.調査経過と組織	1
II.位置と環境	3
III.調査成果	5
1.鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）	5
2.鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）	43
3.鶴田中市ノ塚遺跡（第3次調査）	69
4.鶴田中市ノ塚遺跡（第4次調査）	93
5.鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）	107
6.山ノ井川口遺跡	111
IV.まとめ	129

## I. 調査経過と組織

今般報告する筑後市内遺跡群Ⅳは、平成5～8・10年度に筑後市教育委員会が実施した鶴田中市ノ原通跡（第1）～5次調査、山ノ井川口遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。発掘調査における調査経過、実施期間、調査面積等は各遺跡の「(1)」はじめに記し、発掘調査において出土した遺物の整理と報告書作成については、随時、筑後市役所内にある文化財整理室で行った。以下は、報告する調査が多年度にまたがっているため、ここでは一括して調査並びに報告書作成に関する組織をあげる。

### 調査組織

- 1) 平成5年度調査体制（鶴田中市ノ原通跡 第1次調査）

松橋	教育長	森田 基之
庶務	教育部長	森本 繁夫
	社会教育課長	下川 雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	水見 秀徳
		小林 勇作（調査担当）
- 2) 平成6年度調査体制（鶴田中市ノ原通跡 第2次調査）

松橋	教育長	森田 基之
庶務	教育部長	津留 忠義
	社会教育課長	下川 雅晴
	社会教育係長	松永盛四郎
	社会教育係	水見 秀徳
		小林 勇作（調査担当）
- 3) 平成7年度調査体制（鶴田中市ノ原通跡 第3次調査）

松橋	教育長	森田 基之
庶務	教育部長	津留 忠義
	社会教育課長	下川 雅晴（H7.9.30～）
	社会教育係長	山口 邦郎（H7.10.1～）
	社会教育係	木村 正晴
		水見 秀徳
		小林 勇作（調査担当）
- 4) 平成8年度調査体制（鶴田中市ノ原通跡 第4・5次調査）

松橋	教育長	森田 基之
庶務	教育部長	津留 忠義
	社会教育課長	山口 邦郎
	社会教育係長	木村 正晴
	社会教育係	水見 秀徳
		小林 勇作（調査担当）
		田中 剛（嘱託）
		坂本 咲子（嘱託）[現：三篠町教委]
		大島真一郎（嘱託；H7.12.1～）[現：黒木町教委]

5) 平成10年度調査体制（山ノ井川口遺跡）

総括	教育長	牟田口和良 (H10.4.7~)
	教育部長	下川 雅晴
庶務	社会教育課長	山口 達郎
	社会教育係長	田中 晴通
	社会教育係	水見 秀徳
		小林 勇作 (調査担当)
		田中 利剛
		上村 英士
		柴田 剛 (嘱託)
		立石 真二 (嘱託)

6) 平成13年度報告書作成

総括	教育長	牟田口和良
	教育部長	下川 雅晴
庶務	社会教育課長	松永盛四郎
	文化係長	成清 幸和
	文化係	水見 秀徳
		小林 勇作 (調査担当)
		上村 英士
		柴田 剛 (嘱託)
		立石 真二 (嘱託)

7) 発掘調査参加者（順不同、敬称略）

調査補助員  
発掘作業員  
坂本暎子・大島真一郎・野田洋子・永田佳子  
地元有志

8) 整理作業参加者（順不同、敬称略）

整理補助員  
整理作業員  
平塚あけみ・江藤玲子・仲文恵  
野間口靖子・江崎千鶴・馬場敦子・湊まと香・深川善子  
野口晴香・湯川琴美・福田澄子・横井理絵・佐々木寿代

発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々にご指導・ご教示を賜ったので、記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

木下良（古代交通研究会、日中古代道路研究所）、建部健一（道路文化研究所）、山中敏史（奈良国立文化財研究所）、木本雅康（長崎外国語短期大学）、日野尚志・佐田茂（以上、佐賀大学）、田中正日子（第一経済大学）、平川剛（国立歴史民俗博物館兼総合研究大学院大学）、狹川真一（元興寺文化財研究所）、伊崎後秋・馬田稔・小田利和・小川泰樹（以上、福岡県教育庁）、城戸康利・中島恒次郎・山村信榮（以上、太宰府市教育委員会）、松村一良・富永直樹・水原道範・白木守・小沢太郎・神保公久（以上、久留米市教育委員会）、片岡宏二・柏原孝俊（以上、小郡市教育委員会）、法村忠

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にある。市域をJR鹿児島本線と国道209号が横断し、南北に国道42号線が横断する。また、市域西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ川川や化成川、北部には日向灘に注ぐ小川が点在する。市北端には伊勢山地から派生する八女丘陵が東西に延び、海抜約100mの高台が発達している。市内には農業地帯が広がる。市街地は糸島平野や佐賀平野の東部や北部である。市域の南北には糸島半島や佐賀半島である。市域の南北には糸島半島や佐賀半島である。

今回報告する鶴田中市、堺道路、山井川右遺跡は各圖道29号線付近に位置する。

鶴田市木ノ坂遺跡は、市内の東側部に近い、標高12~13m位の低地上に立地し、当遺跡周辺には多くの土器片や石器片が出土する。その代表的な遺跡として、西ノ山には「裏山遺跡（純文＝弥生時代にかけての集落跡）」、北東方では「鶴田岸添遺跡（弥生時代後期の集落跡）」、「上北島平塚遺跡（弥生～古墳時代の集落跡）」、北西方では「鶴田岸添遺跡（弥生時代終末期の複式住居を確認）」、北方では「鶴田岸添遺跡（弥生時代終末期の複式住居跡）」等があげられる。更に、当遺跡が所在する大字尾島町は、現在も多くの新規開拓地が形成されている。

- [参考文献] 1. 陈永海著. 国际社会学年鉴(1996). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(1996). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(1997). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(1998). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(1999). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2000). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2001). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2002). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2003). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2004). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2005). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2006). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2007). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2008). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2009). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2010). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2011). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2012). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2013). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2014). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2015). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2016). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2017). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2018). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2019). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2020). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2021). 《国际社会学》. 黄承伟编. 国际社会学年鉴(2022).

Fig. 2 主要小字地名図 (1/30,000)

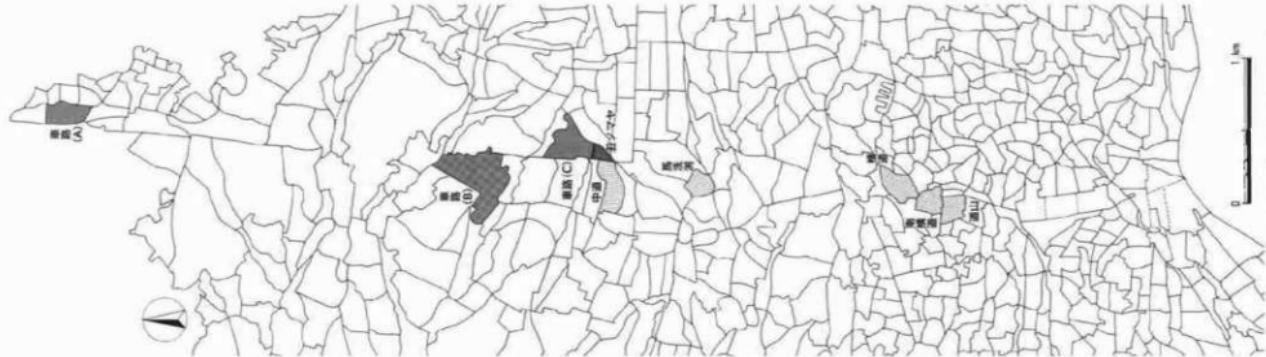


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/30,000)



### III. 調査成果

#### 1. 鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）

##### （1）はじめに（Fig.3）

当遺跡は筑後市大字鶴田字中市ノ塚413-1外に所在し、標高12m位の低位段丘上に立地する。開発事業者であるコガホームから宅地分譲予定地内における埋蔵文化財の取扱いについて照会された。市教委ではこれを受け、試掘調査を実施したところ予定地内全域から遺構や遺物を確認した。その後協議を行い、予定地内全域である2,253m<sup>2</sup>において発掘調査を実施することで合意した。筑後市教育委員会は平成5年12月7日から平成6年3月16日まで発掘調査を実施し、この間、重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、大島真一郎（現：黒木町教育委員会）、野田洋子の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林、大島、野田が担当した。調査の結果、調査区からは道路状遺構、柵列状遺構、掘立柱建物、井戸、溝、土坑等を検出した。ところで、当調査区は、整理段階において座標値にズレが生じていることが判明した。現段階においては現場での検証が困難であるため、遺構図は周辺地形図を参考として筑後市発行の地図（S=1:2500）上において補正した。従って、本文中に記載される方位等は全て補正後の座標を基準としている。



Fig.3 鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）調査地点位置図（1/2,500）

##### （2）検出遺構

###### 柵列状遺構

###### 1SA400（Fig.4）

調査区内北東部から検出した東西方向の柵列状遺構で、P1～P4（3間分：6.58m）を確認した。掘形は掘立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは関連する遺構が認められなかつたので柵列状遺構とした。平面プランはほぼ円形状を呈し、P1-P2間2.17m、P2-P3間2.23m、P3-P4間2.18mを測る。方位はN-5° 40' 09'' -Wを示す。

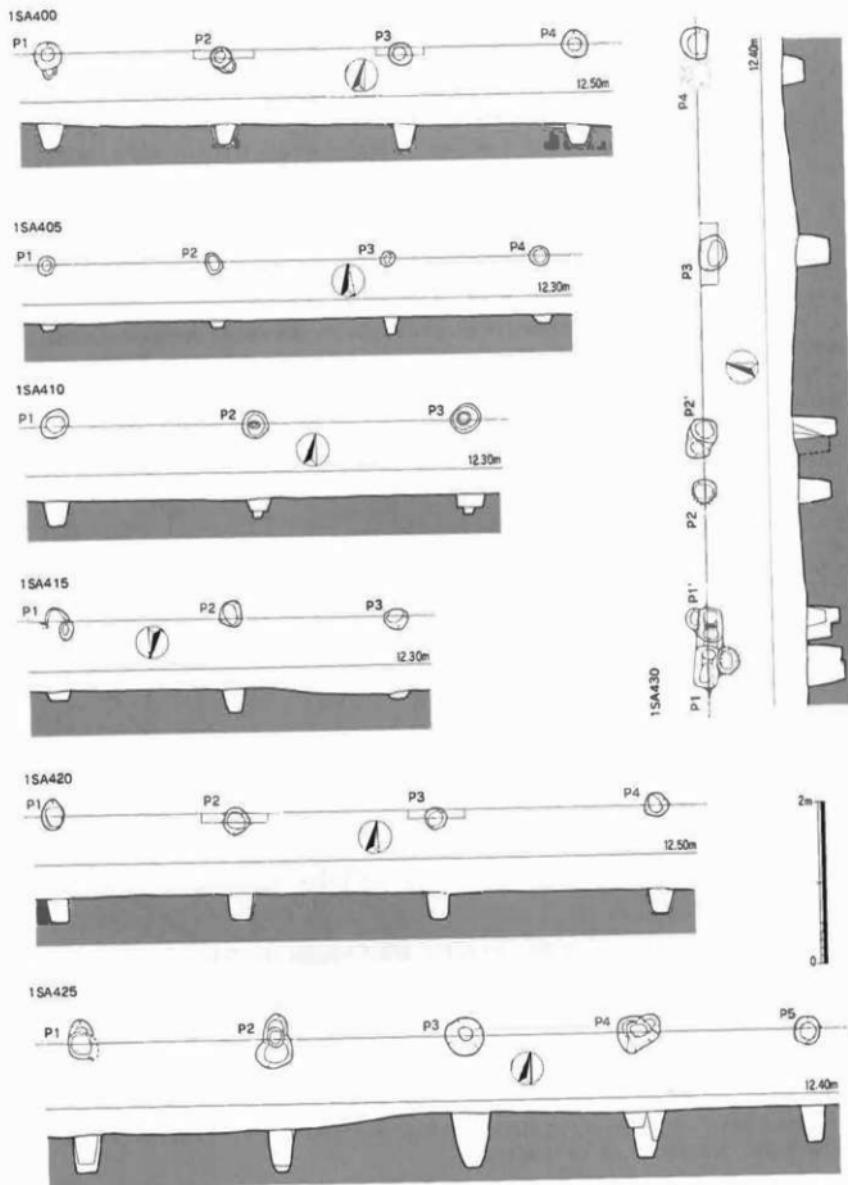


Fig.4 棚列状遺構実測図 (1/60)

**1SA405 (Fig.4)**

調査区内中央部よりで検出した東西方向の柵列状遺構であるが、柵形は柵立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れない。P1～P4（3面分：6.16m）を確認したが、著しく削平を受けしており残存する遺構の深さは0.09～0.22mを測る。平面プランは特円形ないしは円形状を呈し、P1～P2間21.3m、P3～P4間1.92mを測る。方位はN=1° 29' 48" -Wを示す。

**1SA410 (Fig.4)**

調査区内南東部で検出した東西方向の柵列状遺構で、P1～P3（2面分：5.13m）を確認した。柵形は柵立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは削平を受けおり残存するので柵列状遺構とした。平面プランはほぼ円形状を呈し、P2、P3は底面に小ビットを認める。P1～P2間2.52m、P2～P3間2.61mを測る。方位はN=10° 51' 09" -Wを示す。

**1SA415 (Fig.4)**

調査区内南東部から検出した東西方向の柵列状遺構で、P1～P3（2面分：4.23m）を確認した。柵形は柵立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは削平を受けた遺構が認められなかつたので柵列状遺構とした。平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.09～0.30m、P1～P2間2.18m、P2～P3間2.05mを測る。方位はN=2° 39' 17" -Eを示す。

**1SA420 (Fig.4)**

調査区内南東部から検出した東西方向の柵列状遺構で、P1～P3（3面分：7.47m）を確認した。柵形は柵立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れない。平面プランはほぼ円形状を呈し、P1～P2間2.23m、P2～P3間2.48m、P3～P4間2.76mを測る。方位はN=9° 52' 54" -Wを示す。

**1SA425 (Fig.4)**

調査区内北西部から検出した東西方向の柵列状遺構で、P1～P5（4面分：9.18m）を確認した。柵形は柵立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れないが、周囲からは削平を受けた遺構が認められなかつたので柵列状遺構とした。遺構はある程度の削平を受けていると思われるが、非常残存が良く現存する遺構の深さは0.45～0.68mを測る。平面プランはほぼ円形状を呈し、P1～P2間2.45m、P2～P3間2.37m、P3～P4間2.16m、P4～P5間2.10mを測る。方位はN=11° 58' 46" -Wを示す。

**1SA430 (Fig.4)**

調査区内中央西側で検出した東西方向の柵列状遺構であるが、周囲には柵立柱建物の柱穴が密集しているので柵列状遺構とした。遺構はある程度の削平を受けていると思われるが、非常残存が良く現存する遺構の深さは0.27～0.54mを測る。P1～P2間2.00m、P1～P2間2.32m、P2～P3間2.95m、P2～P3間2.18m、P3～P4間2.23mを測り、方位はN=13° 12' 49" -Wを示す。

**1SB200 (Fig.5)**

調査区内北端で検出した東西棟の柵立柱建物でP1～P7を確認した。追跡の遺構はP1～P6までの東西状または南北1間以上とP1～P4～P7の東西2間又南北1間以上等が想定される。柱穴の平面プランは不整円形状または椭円形状を呈するので、残存する遺構の深さは0.39～0.57mと残存状況は良い。柱間はP1～P2間3.04m、P2～P3間2.13m、P3～P4間2.75m、P4～P5間2.70m、P5～P6間2.74m、P4～P7間2.56mを測り南北軸はN=13° 04' 43" -Wの方位を示す。

**1SB205 (Fig.6)**

調査区内北端で検出した東西棟の柵立柱建物で、柱穴（P1～P9）の平面プランは不整円形状を呈する。柱穴は複数によって著しく削平を受けおり、残存する遺構の深さは0.15～0.32mである。遺物の規模は東西3.06m×南北1間で、東西柱間はa-d間6.90m、c-e間6.94m、南北柱間はb-h間3.88m、d-d'間4.09m、建物面積27.18m<sup>2</sup>（≒8.23坪）で、南北軸はN=13° 04' 43" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間4.09m、P2～P3間12.53m、P3～P4間2.26m、P4～P5間2.11m、P5～P6間3.88m、P6～P7間2.21m、P7～P8間2.37m、P8～P1間2.36mを測る。P5～P8においては柱間が接続して2穴確認さ

れども、少なくとも1回以上の修復等がされている可能性が考えられる。

### 1SB210 (Fig.6)

調査区内北部で検出した東西棟の掘立柱建物で、柱穴（P1～P6）の平面プランはほぼ円形状を呈する。柱穴は擾乱によって著しく削平を受けており、2箇所において柱穴を確認することができなかった。残存する遺構の深さは0.04～0.32mである。建物の規模は東西3間×南北1間が想定され、東西柱間はa-a'間5.92m、南北柱間はb-b'間3.60m、建物面積21.18m<sup>2</sup>（約6.41坪）で、南北軸はN-10°07'51"→Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.21m、P3-P4間3.60m、P4-P5間2.11m、P5-P6間1.70mを測る。

### 1SB215 (Fig.7)

調査区内北部で検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴（P1～P8）の平面プランは不整円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.17～0.45mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa-a'間4.86m、c-c'間4.66m、南北柱間はb-b'間3.07m、d-d'間3.13m、建物面積14.68m<sup>2</sup>（約4.40坪）で、南北軸はN-11°31'44"→Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間3.13m、P2-P3間1.68m、P3-P4間1.52m、P4-P5間1.66m、P5-P6間3.07m、P6-P7間1.57m、P7-P8間1.53m、P8-P1間1.56mを測る。

### 1SB220 (Fig.7)

調査区内北部西よりで検出した東西棟の掘立柱建物である。柱穴（P1～P10）の平面プランは円形状または楕円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.12～0.56mを測る。建物の規模は東西3間×南北2間で、東西柱間はa-a'間5.97m、c-c'間5.97m、南北柱間はb-b'間4.25m、d-d'間3.98m、建物面積24.05m<sup>2</sup>（約7.22坪）で南北軸はN-11°05'21"→Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.12m、P2-P3間1.86m、P3-P4間2.03m、P4-P5間1.96m、P5-P6間1.98m、P6-P7間2.20m、P7-P8間2.05m、P8-P9間2.01m、P9-P10間1.90m、P10-P1間2.06mを測る。P7・P8においてほぼ同様の柱穴が隣接して2穴確認されており少なくとも1回以上の修復等がされている可能性が考えられる。

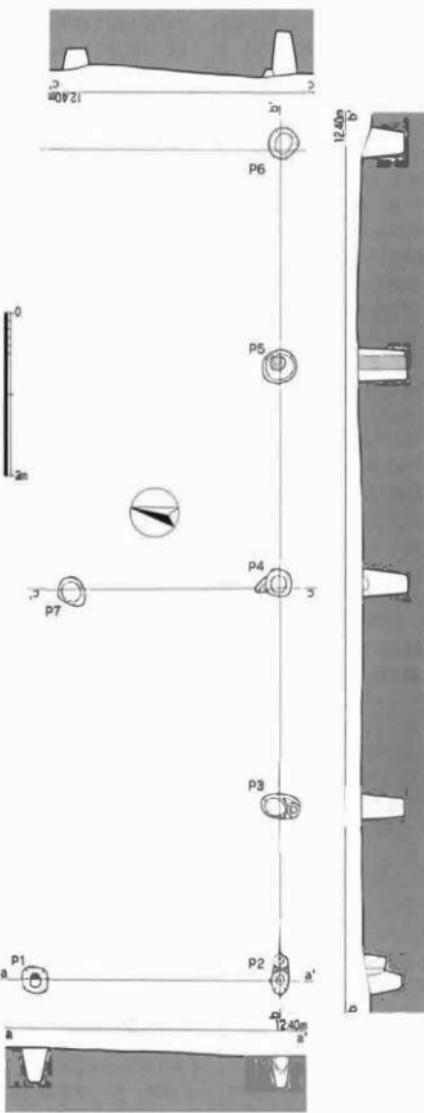


Fig.5 1SB200実測図 (1/60)

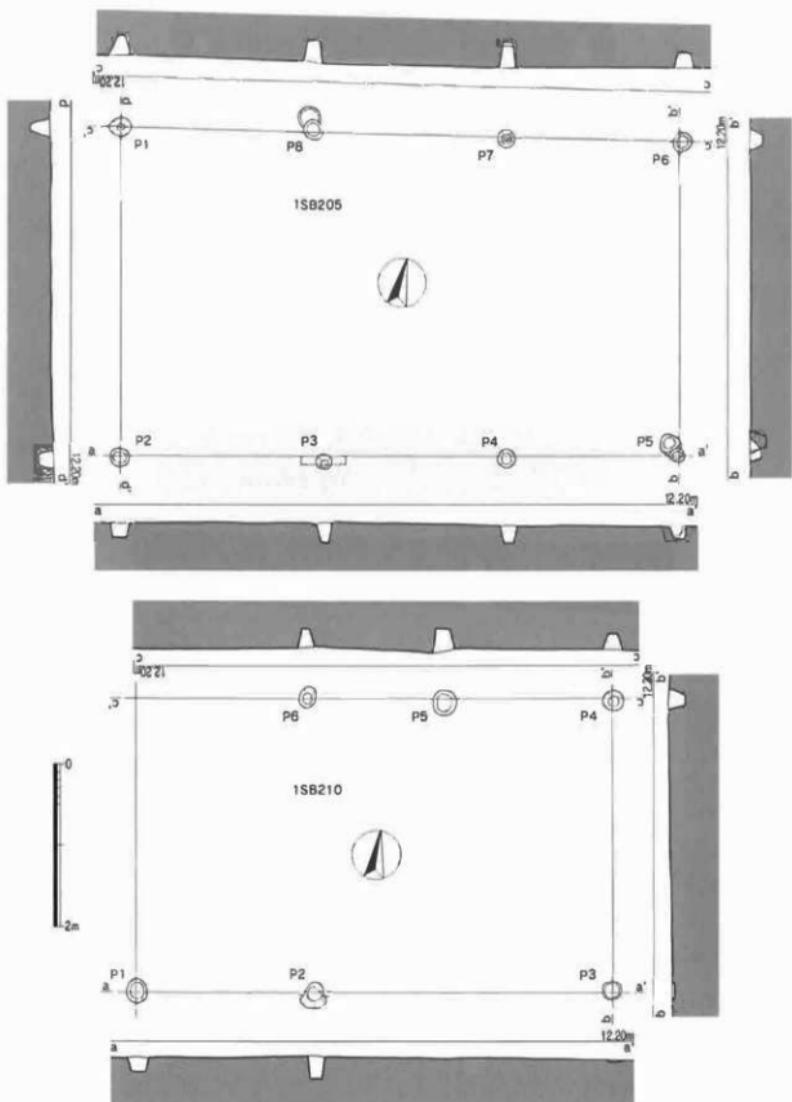


Fig.6 1SB205・210実測図 (1/60)

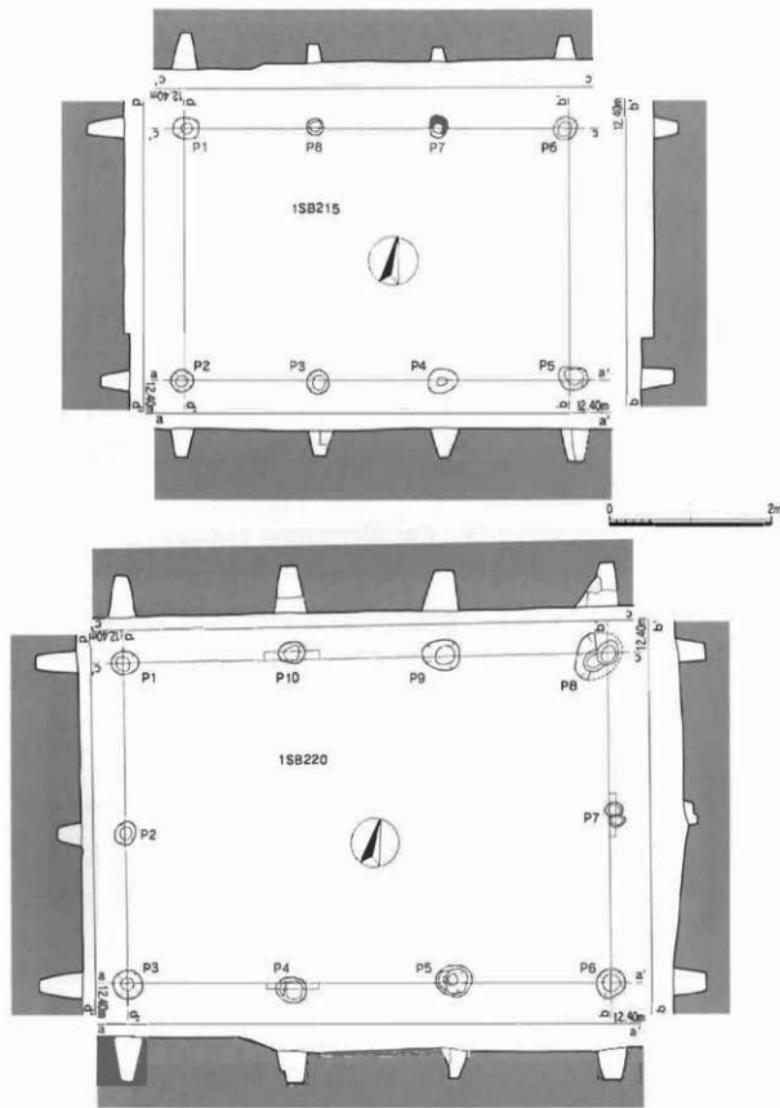


Fig.7 1SB215・220実測図 (1/60)

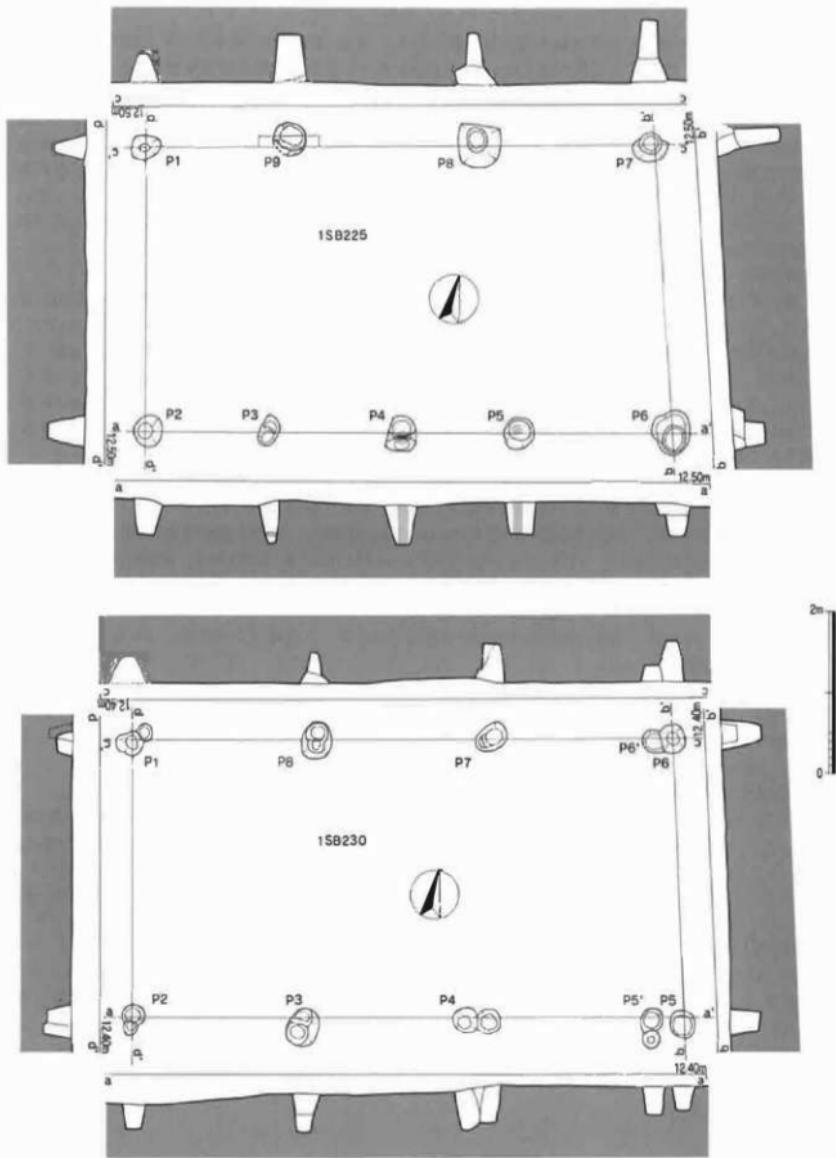


Fig.8 1SB225・230実測図 (1/60)

**1SB225 (Fig.8)**

調査区内北側で検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴（P1～P9）の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.41～0.77mを測る。建物の規模は南側東西軸4脚・北側東西軸3脚と南北1間で、東西柱間はa=1間6.56m、c=c=1間6.25m、南北柱間はb=1間3.56m、d=d=1間2.48m、建物面積23.16m<sup>2</sup>（≒6.95坪）で、南北軸はN=13° 21' 49''～Wの方位を示す。各柱穴則はP1=P2間3.48m、P2=P3間1.55m、P3=P4間1.63m、P4=P5間1.41m、P5=P6間1.97m、P6=P7間3.56m P7=P8間2.18m、P8=P9間2.26m、P9=P1間1.81mを測り、特殊な構造を呈した建物であることがわかる。柱穴間に3.5mを測る。P5～P6間はやや広く、P5～P6間はやや狭くなっている。P4は径0.15m前後、P5は径0.13m前後の柱頭跡がほぼ中央から確認されている。

**1SB230 (Fig.8)**

調査区内北側西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴（P1～P8）の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.20～0.52mを測る。建物の規模は東西3脚×南北1間で、東西柱間はa=a=1間6.78m、c=c=1間6.72m、南北柱間はb=1間3.57m、d=d=1間3.35m、建物面積24.34m<sup>2</sup>（≒7.30坪）で、南北軸はN=10° 53' 02''～Wの方位を示す。更に各柱穴則はP1=P2間3.35m、P2=P3間2.11m、P3=P4間2.01m、P4=P5間2.61m、P5=P6間3.57m、P6=P7間2.23m、P7=P8間2.21m、P8=P1間2.28mを測る。P1～P3・P6・P8～らは2脚、P5からは3脚、P4からは4脚の柱穴が隣接して確認されており、焼成の修復等が施されている可能性が考えられる。

**1SB235 (Fig.9)**

調査区内北側西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴（P1～P8）の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.40～0.63mを測る。建物の規模は東西3脚×南北1間で、東西柱間はa=a=1間6.16m、c=c=1間6.30m、南北柱間はb=1間3.20m、d=d=1間3.10m、建物面積20.26m<sup>2</sup>（≒6.08坪）で、南北軸はN=10° 09' 17''～Wの方位を示す。更に各柱穴則はP1=P2間3.10m、P2=P3間2.11m、P3=P4間1.92m、P4=P5間2.13m、P5=P6間3.20m、P6=P7間2.17m、P7=P8間2.03m、P8=P1間2.10mを測る。P6～8では径0.12m前後の柱頭跡が確認されたが、土層断面では確認していない。

**1SB240 (Fig.9)**

調査区内北側西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴（P1～P4）の平面プランは梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.27～0.57mを測る。建物の規模は東西1間×南北1間であるが、P1=P2間2.95m、P2=P3間4.38m、P3=P4間2.94m、P4=P1間4.22mと南北よりも東西の柱穴則が広くなっている。建物面積12.40m<sup>2</sup>（≒3.72坪）で、南北軸はN=13° 36' 44''～Wの方位を示す。

**1SB245 (Fig.10)**

調査区内北側西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴（P1～P6）の平面プランは梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.19～0.36mを測る。建物の規模は東西2脚×南北1間で、東西柱間はa=1間4.51m、c=c=1間4.36m、南北柱間はb=1間3.70m、d=d=1間2.97m、建物面積16.86m<sup>2</sup>（≒5.06坪）で、南北軸はN=9° 14' 42''～Wの方位を示す。更に各柱穴則はP1=P2間3.86m、P2=P3間2.41m、P3=P4間2.0m、P4=P5間3.70m、P5=P6間2.15m、P6=P1間2.1mを測る。

**1SB250 (Fig.10)**

調査区内中央よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴（P1～P6）の平面プランは梢円形状を呈し、著しく扁平を受けていたため現存する遺構の深さは0.08～0.23mと浅い。建物の規模は東西2脚×南北1間で、東北軸はa=1間4.07m、c=c=1間4.07mで、南北柱間はb=1間2.93m、d=d=1間2.97mとほぼ等しい。建物面積11.82m<sup>2</sup>（≒3.54坪）で、南北軸はN=7° 55' 27''～Wの方位を示す。更に各柱穴則はP1=P2間2.97m、P2=P3間2.21m、P3=P4間1.86m、P4=P5間2.93m、P5=P6間1.99m、P6=P1間2.08mを測る。

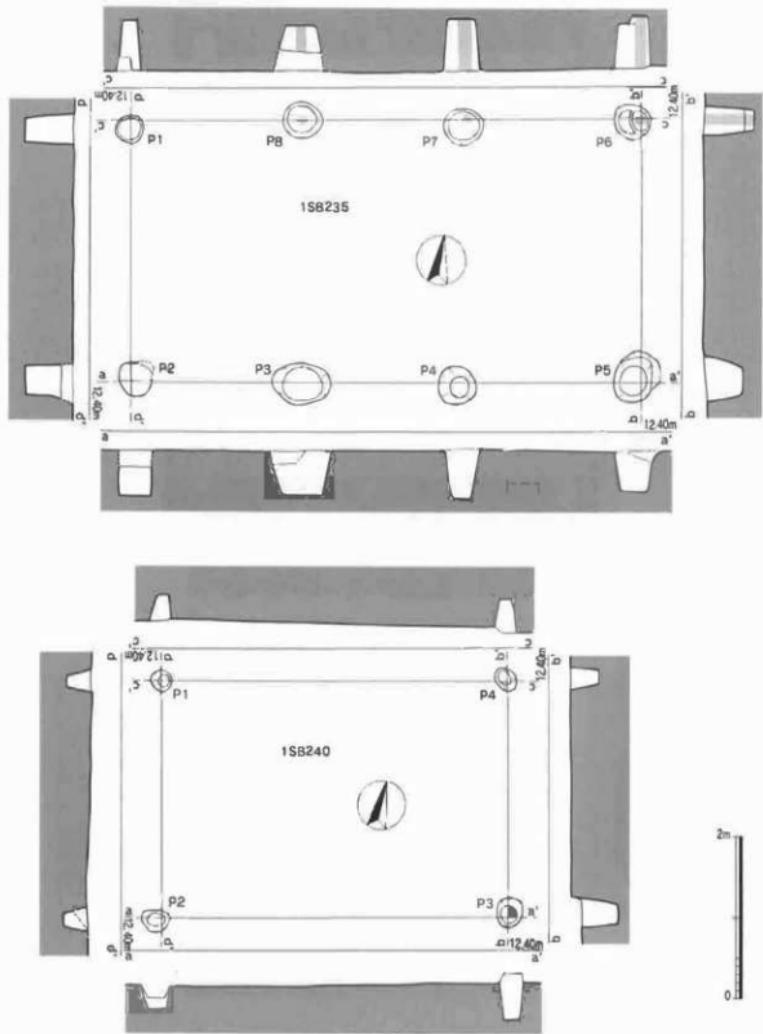


Fig.9 1SB235・240実測図 (1/60)

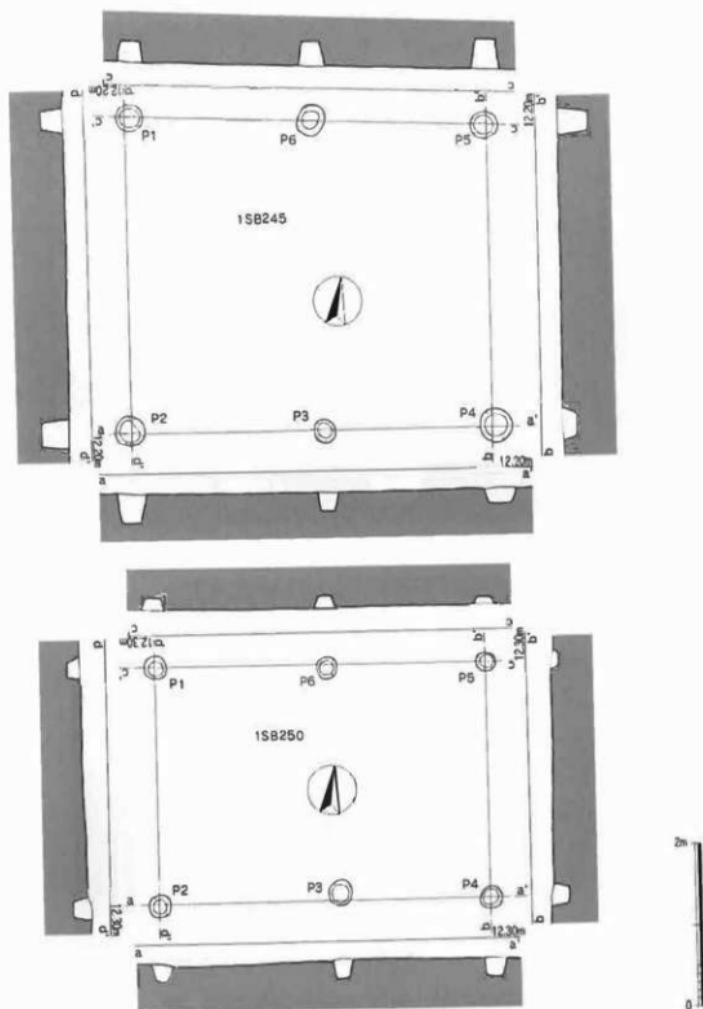


Fig.10 1SB245・250実測図 (1/60)

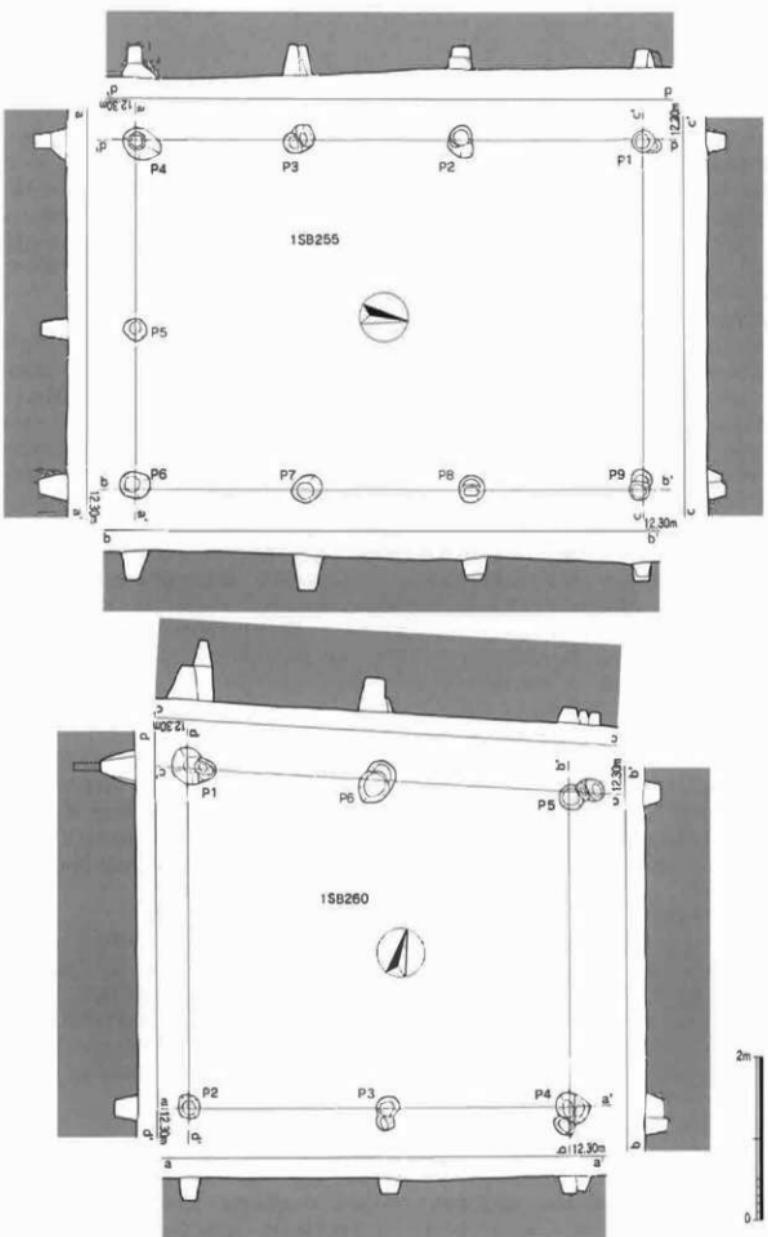


Fig.11 1SB255・260実測図 (1/60)

**1SB255 (Fig.11)**

調査区内中央の西よりで検出した南北棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P9) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.20～0.46mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—d間2.68m<sup>2</sup> (≈8.06坪) で、南北柱間はa—c間4.24m、c—e間4.29m、南北柱間はb—b間6.28m、d—d間6.26m、建物面積26.86m<sup>2</sup> (≈8.06坪) で、南北軸はN=9° 55' 28" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間2.25m、P2—P3間2.07m、P3—P4間1.94m、P4—P5間1.90m、P5—P6間2.33m、P5—P7間1.91m、P6—P7間2.15m、P7—P8間2.07m、P8—P9間2.06m、P9—P1間4.29mを測る。建物の東西軸において柱穴数が異なる建物である。遺構は若干の削除を受けているものの現状状況は良い方で、著しい変形としては特徴的な構造を呈した植物と考えたいが、残念ながら現地での発掘はできていない。

**1SB260 (Fig.11)**

調査区内中央の西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.20～0.75mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—d間4.68m、c—e間4.74m、南北柱間はb—b間3.86m、d—d間4.19m、建物面積8.83m<sup>2</sup> (≈5.65坪) で、南北軸はN=15° 35' 07" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間4.19m、P2—P3間2.46m、P3—P4間2.22m、P4—P5間1.36m、P5—P6間2.41m、P6—P1間2.33mを測る。P1・P3・P6では2穴、P4・P5では3穴の柱穴同様の柱穴2穴が隣接して確認されており、1～2回以上の修復等が施されている可能性がある。

**1SB265 (Fig.12)**

調査区内中央の西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.33～0.53mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—d間5.89m、c—e間5.84m、南北柱間はb—b間3.48m、d—d間3.16m、建物面積8.75m<sup>2</sup> (≈5.63坪) で、南北軸はN=9° 48' 14" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間3.16m、P2—P3間1.84m、P3—P4間2.01m、P4—P5間0.94m、P5—P6間3.34m、P6—P7間1.83m、P7—P8間2.04m、P8—P1間2.01mを測る。P2・P6～8では2穴同様の柱穴2穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上修復等が施されている可能性がある。

**1SB270 (Fig.12)**

調査区内中央の西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P2～P8) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.32～0.48mを測る。P1は残念ながら壊乱を受けているため不明である。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—d間6.41m、南北柱間はb—b間3.98m、建物面積は推定で6.42坪 (≈7.93坪) で、南北軸はN=8° 30' 53" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP2—P3間2.19m、P3—P4間2.08m、P4—P5間2.14m、P5—P6間3.98m、P6—P7間2.28m、P7—P8間1.91mを測る。

**1SB275 (Fig.13)**

調査区内中央の西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P10) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.26～0.52mを測る。P2は実測時ににおいて壊乱跡と誤認し、残念ながら上場ライクのみの実測に止まっている。建物の規模は東西4間×南北1間で、東西柱間はa—d間8.38m、c—e間8.30m、南北柱間はb—b間4.57m、d—d間4.21m、建物面積は推定で35.95坪 (≈10.79坪) で、南北軸はN=7° 27' 09" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間14.21m、P2—P3間2.11m、P3—P4間2.01m、P4—P5間1.90m、P5—P6間2.36m、P6—P7間4.57m、P7—P8間2.41m、P8—P9間1.85m、P9—P10間1.92m、P10—P1間2.12mを測る。

**1SB280 (Fig.14)**

調査区内中央の西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランは不整円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.32～0.73mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—d間6.28m、c—e間6.14m、南北柱間はb—b間4.64m、d—d間4.65m、建物面積77.80坪 (≈8.34坪) で、南北軸はN=9° 30' 53" —Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間4.65m、P2—P3間2.23m、P3

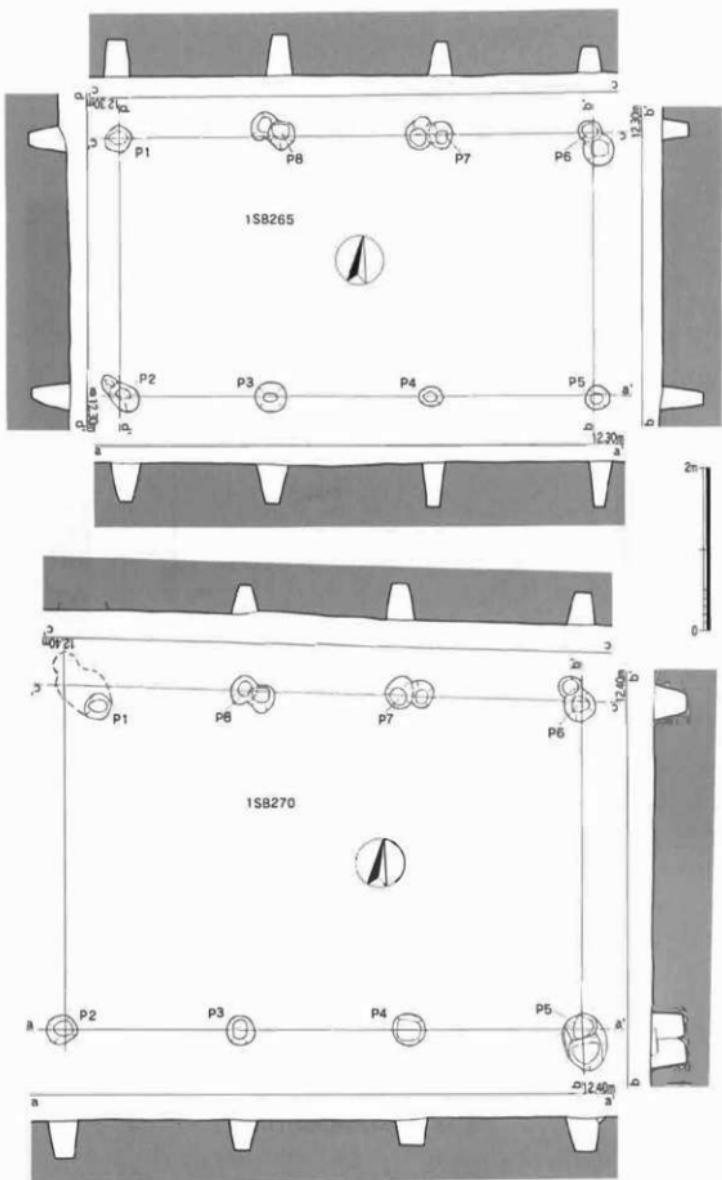


Fig.12 1SB265・270実測図 (1/60)

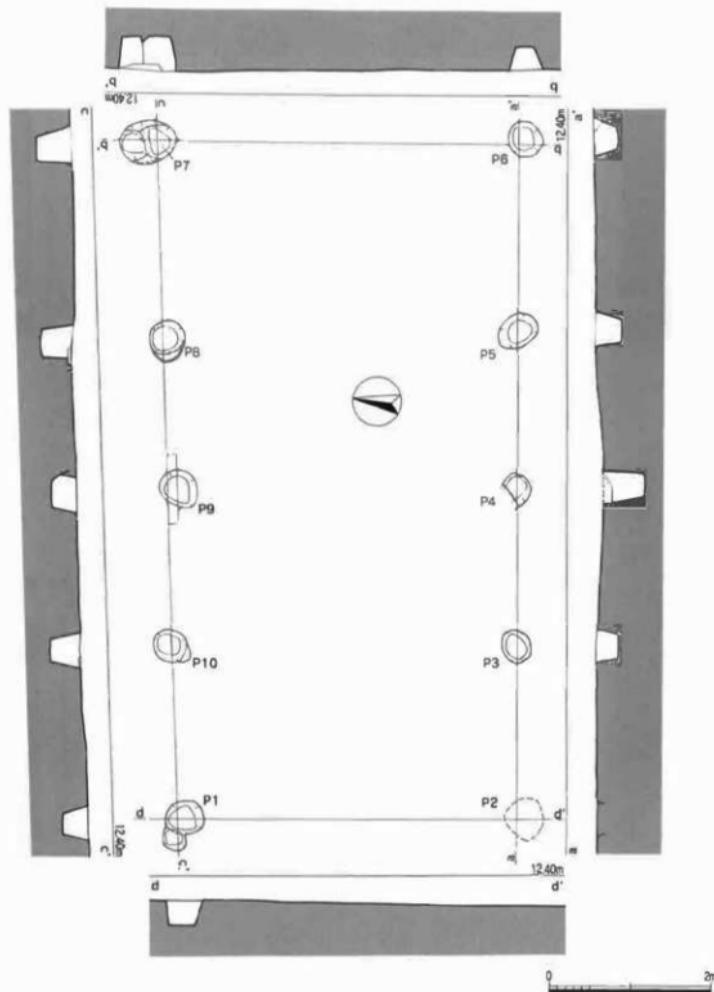


Fig.13 1SB275実測図 (1/60)

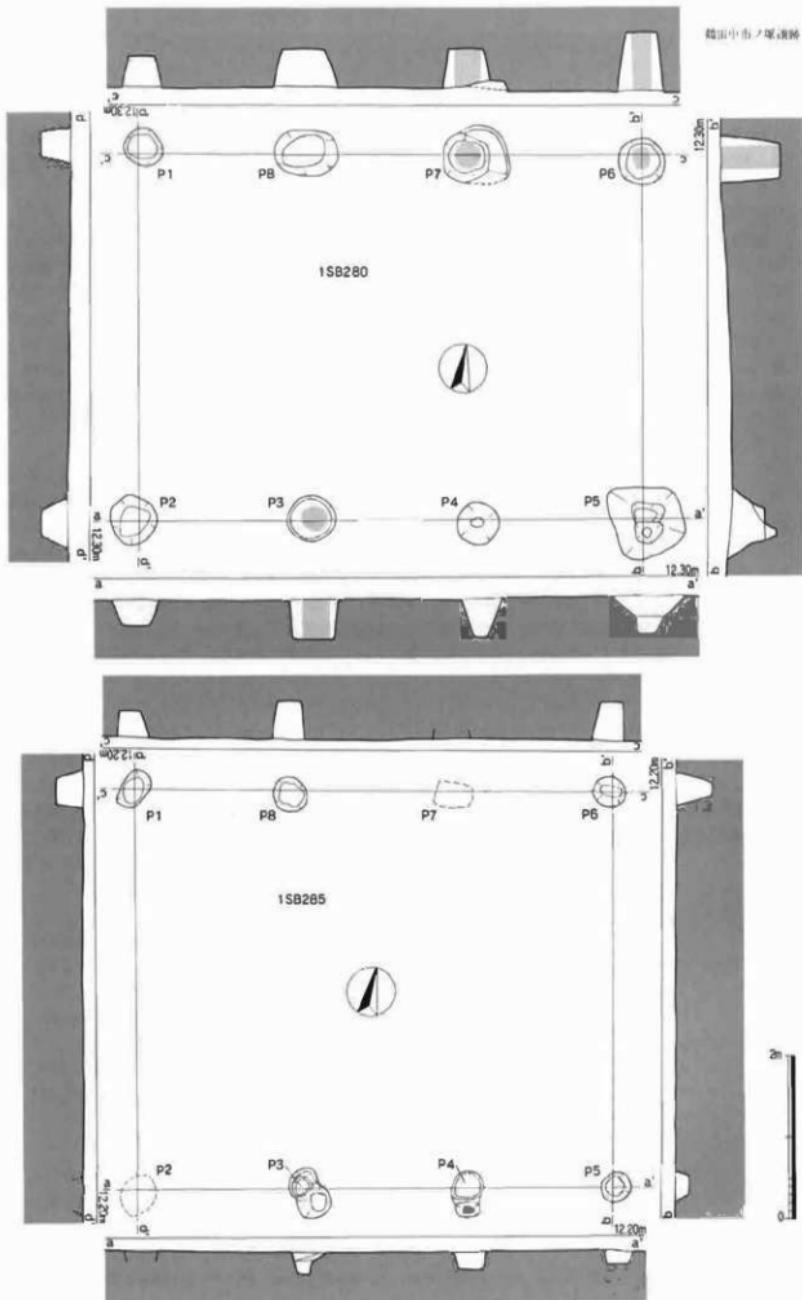


Fig.14 1SB280・285実測図 (1/60)

—P4間0.02m、P4—P5間2.03m、P5—P6間4.6dm、P6—P7間2.14m、P7—P8間2.00m、P8—P1間2.00mを測る。柱穴3・6・7においてはほぼ中央部から $\pm 0.25\text{m}$ ～ $0.30\text{m}$ 前後の柱抜き取りと思われる痕跡を平面で確認したが、残念ながら土層断面では確認できていない。

### 1SB855 (Fig.14)

調査区内中央の西よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランは円形状または橢円形状を呈り存する。遺構の深さは0.13～0.48mを測る。P2・7は夷調山<sup>1</sup>において焼瓦跡と認定し、残念ながら上場ラインのみの実測止まっている。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—a'間5.91m、c—c'間5.96m、南北柱間はb—b'間4.86m、d—d'間5.00m、建物面積は推定で $28.56\text{m}^2$ ( $\approx 8.57\text{坪}$ )で、南北軸はN—12° 51' 17"—Wの方位を示す。更に各柱穴間にP1—P2間0.08m、P2—P3間0.20m、P3—P4間2.07m、P4—P5間1.82m、P5—P6間4.86m、P6—P7間2.00m、P7—P8間2.02m、P8—P1間1.94mを測る。P3・4ではほぼ同等の柱穴2穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性がある。

### 1SB290 (Fig.15)

調査区内中央の東よりで検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P10) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.22～0.50mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa—a'間6.01m、c—c'間6.08m、南北柱間はb—b'間3.85m、d—d'間4.16m、建物面積は $24.30\text{m}^2$ ( $\approx 7.29\text{坪}$ )で、南北軸はN—6° 05' 19"—Wの方位を示す。更に各柱穴間にP1—P2間2.08m、P2—P3間2.08m、—P3—P4間2.00m、P4—P5間2.01m、P5—P6間2.00m、P6—P7間2.01m、P7—P8間1.84m、P8—P9間2.07m、P9—P10間1.97m、P10—P1間2.04mを測る。柱穴P4—6・7・10(左)では柱本部が6.11～0.16m前後の柱軸跡を平面で確認したが、柱抜き取り痕の可視性を考えておきたい。P6においては残念ながら上層H削除<sup>2</sup>では確認できないが、他の土層断面からは柱穴底面に跡ないしは始上が數かれていることか判然として見える。

### 1SB295 (Fig.15)

調査区内南部で検出した東西棟の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.09～0.30mを測る。建物の規模は東西3間×南北2間で、東西柱間はa—a'間3.86m、c—c'間3.00m、南北柱間はb—b'間3.60m、d—d'間3.64m、建物面積は推定で $18.45\text{m}^2$ ( $\approx 5.54\text{坪}$ )で、南北軸はN—11° 59' 41"—Wの方位を示す。更に各柱穴間にP1—P2間2.64m、P2—P3間1.70m、P3—P4間1.73m、P4—P5間1.62m、P5—P6間3.60m、P6—P7間1.80m、P7—P8間1.68m、P8—P1間1.63mを測る。P1・6ではほぼ同等の柱穴2穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性がある。

### 1SB300 (Fig.16)

調査区内南部で検出した独立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.26～0.40mを測る。建物の規模は東西2間×南北2間で、東西柱間はa—a'間3.86m、c—c'間3.00m、南北柱間はb—b'間3.85m、d—d'間3.82m、建物面積は $14.74\text{m}^2$ ( $\approx 4.42\text{坪}$ )で、南北軸はN—9° 27' 18"—Wの方位を示す。更に各柱穴間に(P1)—P2間1.90m、P2—P3間1.83m、P4—P5間2.03m、P5—P6間1.85m、P6—P7間2.00m、P7—P8間2.00m、P8—P1間1.90mを測る。柱穴P1～3・P6～8においてはほぼ中施か、後0.10～0.18m前後の柱軸跡を平面で確認したが、P4・5においては残念ながら確認できることができなかった。柱抜き取り痕の可視性もあり、土層断面からは柱底断面に船土が数かれていることが特徴として見える。

### 1SB305 (Fig.16)

調査区内南部で検出した独立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.45～0.64mを測る。建物の規模は東西2間×南北2間で、東西柱間はa—a'間3.69m、c—c'間3.71m、南北柱間はb—b'間3.76m、d—d'間3.75m、建物面積は $14.84\text{m}^2$ ( $\approx 4.45\text{坪}$ )で、南北軸はN—6° 05' 19"—Wの方位を示す。更に各柱穴間に(P1)—P2間1.85m、P2—P3間1.90m、P3—P4間1.83m、P4—P5間1.86m、P5—P6間1.83m、P6—P7間1.93m、P7—P8間1.82m、P8—P1間1.89mを測る。P1～8

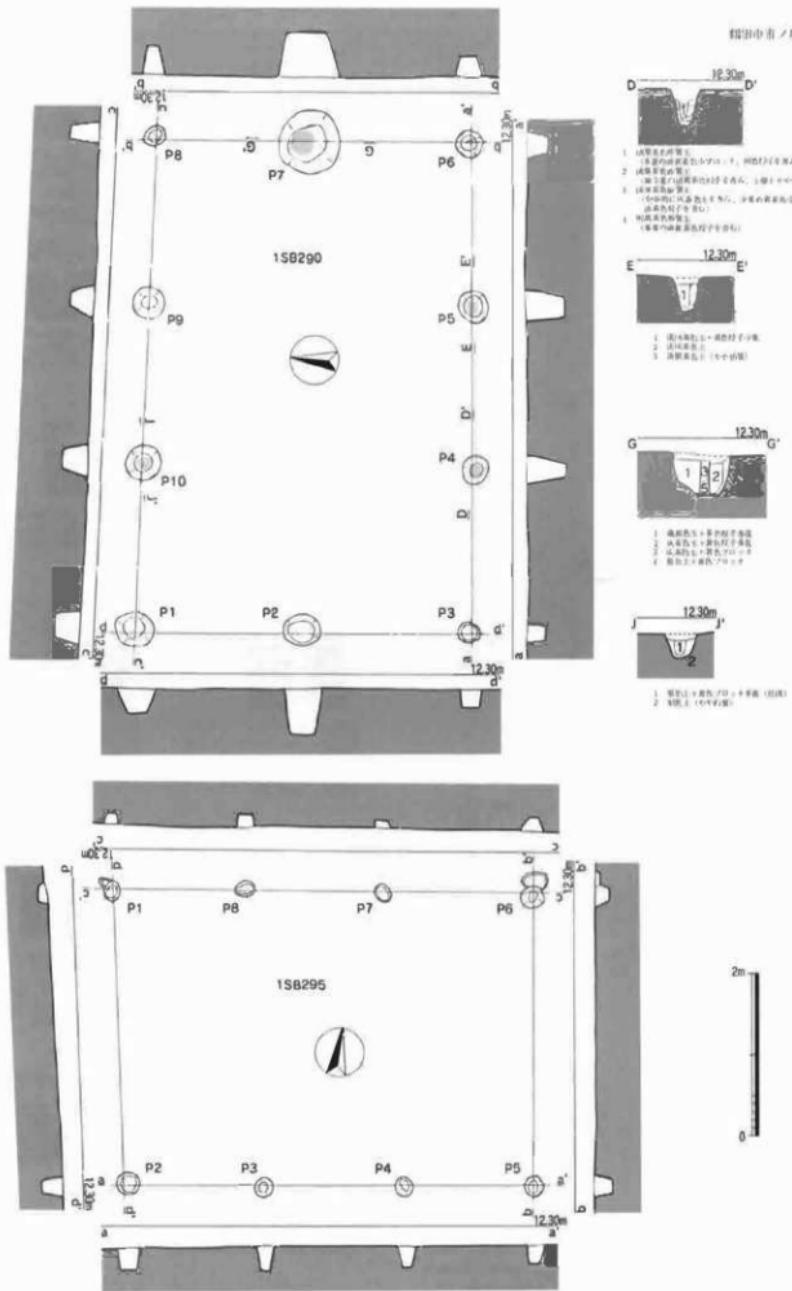


Fig.15 1SB290・295実測図 (1/60)

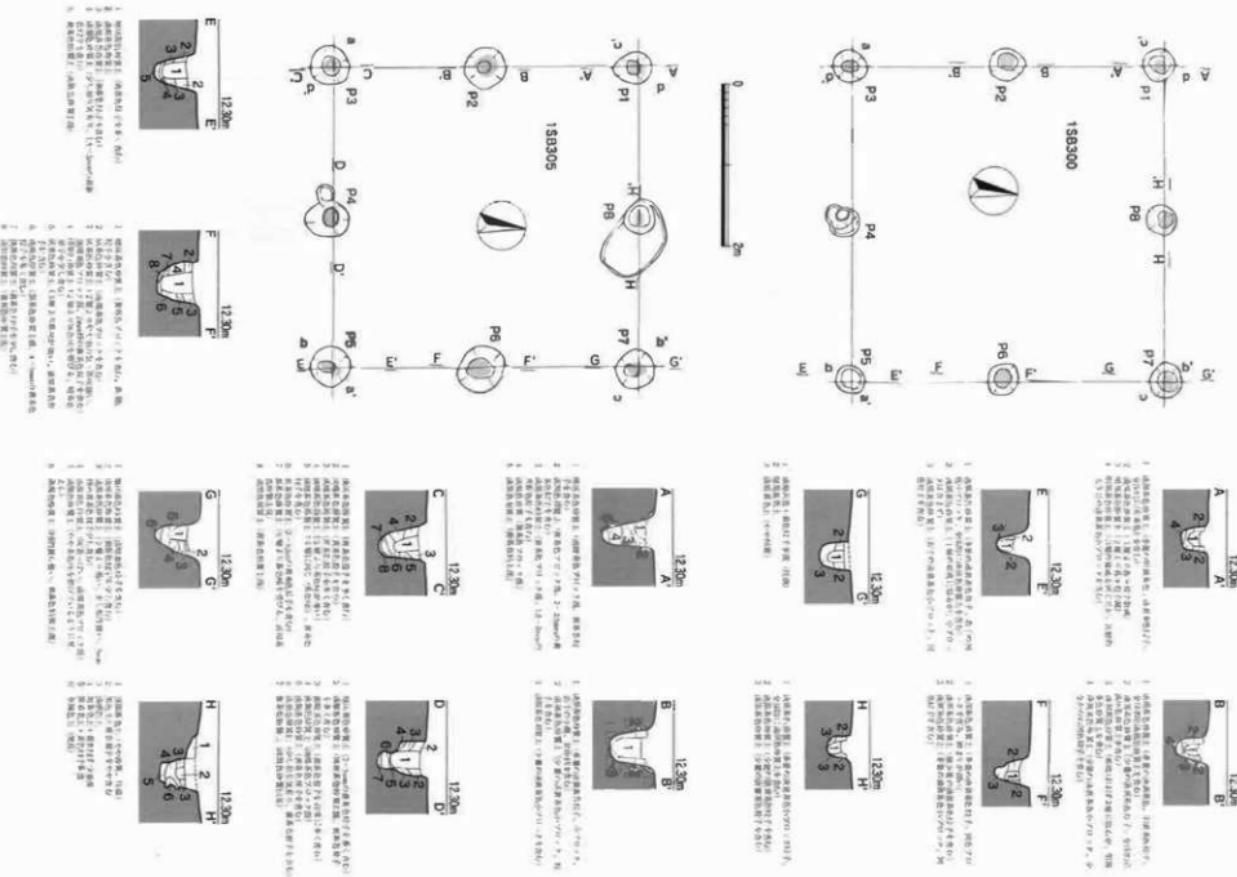


Fig.16 1SB300・305実測図 (1/60)

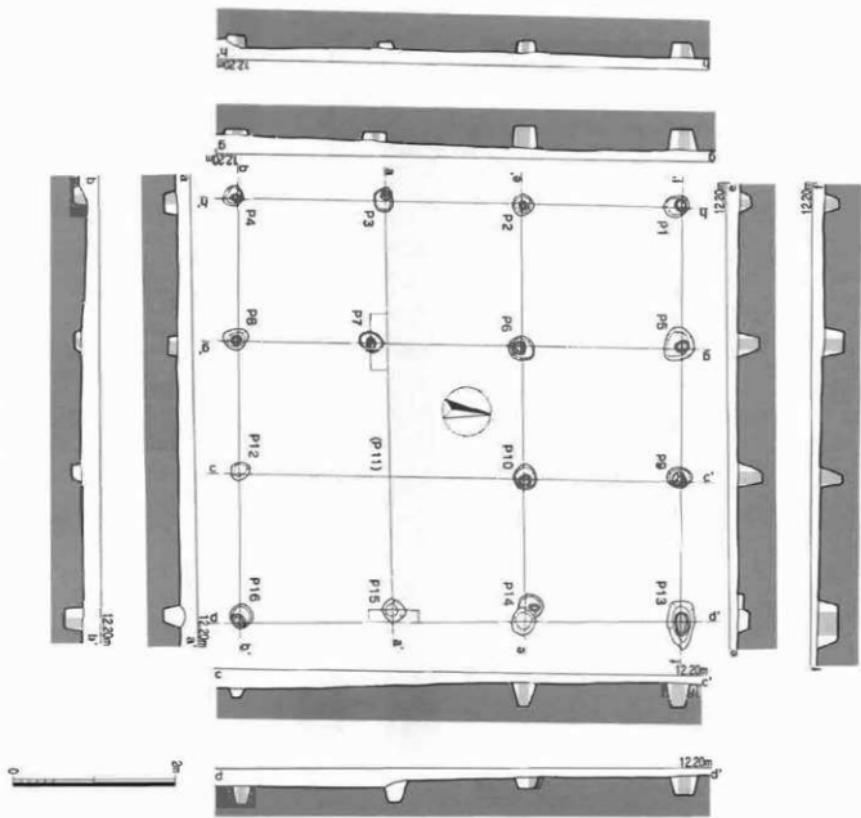


Fig. 17 1SB310実測図 (1/160)

においてはほぼ中央部から±0.15~0.27m前後の柱間隔若しくは抜き差を平面で確認した。土層断面からは柱穴底面に砂ないしは粘土が散かれていることが特徴として覚える。

#### 1SB310 (Fig.17)

調査区内南端より検出した純粋の獨立柱建物である。柱穴 (P1~P10・P12~P16) の平面プランは円形孔または梢円形状を呈し、著しく削平を受けているため残存する邊縁の深さ±0.06~0.31mと浅く。P11は漏斗形を確認することができていない。建物の規模は東西3間×南北2間で、東西住間はb-c間5.24m、e-f間5.21m、南北住間はa-d間5.46m、h-i間5.51m、建物面積は28.31m<sup>2</sup> (=8.50坪) で、南北側はN-7° 12' 42" -Wの方位を示す。更に各柱間は1.61~1.98mを測り、柱穴P1~10・13・14・

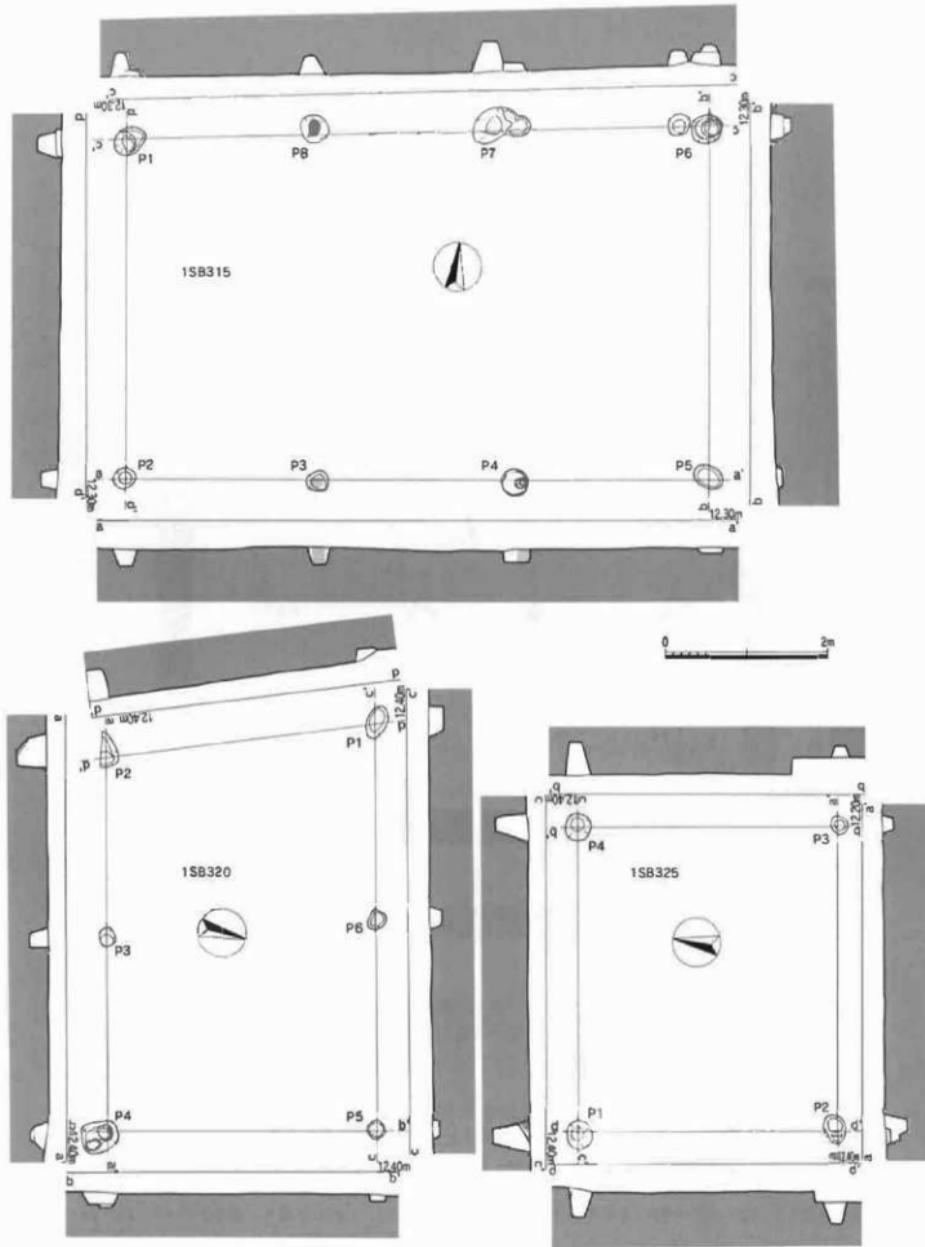


Fig.18 1SB315・320・325実測図 (1/60)

161においてはほぼ中央部から往後0.12m前後の柱痕跡ないしは柱抜き取り痕を平面で確認することができたが、残存状況が悪かったことから土質断面では確認できていない。

### 1SB315 (Fig.18)

調査区内南端で検出した東西側の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランは横円形状を呈し、残存する遺構の深さは0.07～0.38mを測る。建物の規模は東西3間×南北1間で、東西柱間はa～a'間7.23m、c～c'間7.28m、南北柱間はb～b'間4.32m、d～d'間4.12m、建物面積は30.50m<sup>2</sup> (毎9.15坪)で、南北側はN=18° 41' 28''～Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間4.12m、P2～P3間2.39m、P8～P1間2.33mを測る。P6～7ではほぼ同等の柱穴2穴が隣接して確認されており、少なくとも1回以上の修復等が施されている可能性がある。また柱穴P3・4においてはほぼ中央部から往後0.15～0.20m前後の柱痕跡を確認した。

### 1SB320 (Fig.18)

調査区内南端で検出した東西側の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは横円形北塗・東塗し、残存する遺構の深さは0.09～0.36mを測る。建物の規模は東西2間×南北1間と推測され、東西柱間12.5～a'間4.61m、c～c'間5.16m、南北柱間12b～b'間3.23m、d～d'間3.30m、建物面積は推定で15.81m<sup>2</sup> (毎4.745坪)で、南北側はN=14° 50' 05''～Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間3.36m、P2～P3間2.22m、P3～P4間2.40m、P4～P5間3.23m、P5～P6間2.61m、P6～P1間2.5mを測る。

### 1SB325 (Fig.18)

調査区内中央の西よりで検出した獨立柱建物である。柱穴 (P1～P4) の平面プランは円形状または内円形振出・退・残存する遺構の深さは0.15～0.45mを測る。建物の規模は東西1間×南北1間で、各柱穴間はP1～P2間3.21m、P2～P3間3.70m、P3～P4間3.25m、P4～P1間3.80mを測る。建物面積は11.90m<sup>2</sup> (毎3.57坪)で、南北側はN=10° 29' 14''～Wの方位を示す。

**#戸**

**1SD010 (Fig.19)**  
調査区のほぼ中央を東西方向にはしる溝を約25m分を検出した。  
溝の断面形は鍬やかひ芋状を呈し、上幅1.10m前後、下幅0.55m前後、残存する溝の深さは0.30m前後を測る。堆土は淡黒茶色砂質土を基調とする3層に分層でき、レナズ状に堆積していた。溝からの出土遺物は僅かに土師器 (片) 1点のみであった。

### 1SE020 (Fig.20)

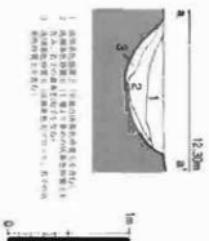
調査区内南端東よりで確認したほぼ正方形を呈する系掘りの井戸である。東西幅1.17m、南北幅1.14mを測り、遺構表面から約1mまで掘り下げた。掘削までの出土遺物は認められなかつた。

### 1SE030 (Fig.20, Pla.2)

調査区内中央東よりで確認した横円形形状を呈する系掘りの井戸で、東西幅1.41m、南北幅1.43mを測る。黒色土を基調とした堆土で、危険防止のため遺構表面から約2.2mで掘り下げを断念している。深さ0.75m付近で集石を確認し、集石の大半は0.10～0.20m程度の河原石に似たもので、一気に投下されたものと判断する。出土遺物は須恵器 (壺体)、土師器 (火鉢・鍋)、柴骨 (壺)、陶器 (常滑碗焼)、石製品 (椎臼) 等が認められており、下限の参考となる。

### 1SE040 (Fig.20, Pla.2)

調査区内中央やや東よりで確認した不整円形状を呈する系掘りの井戸である。遺構はJK160を切るように掏出され、幅1.35m程度を削る。黒灰色土を基調とした堆土で、危険防止のため約1mで掘り下げを断念している。出土遺物は須恵器 (壺体)、土師器 (壺体)、陶器 (常滑碗焼) 等が認められている。



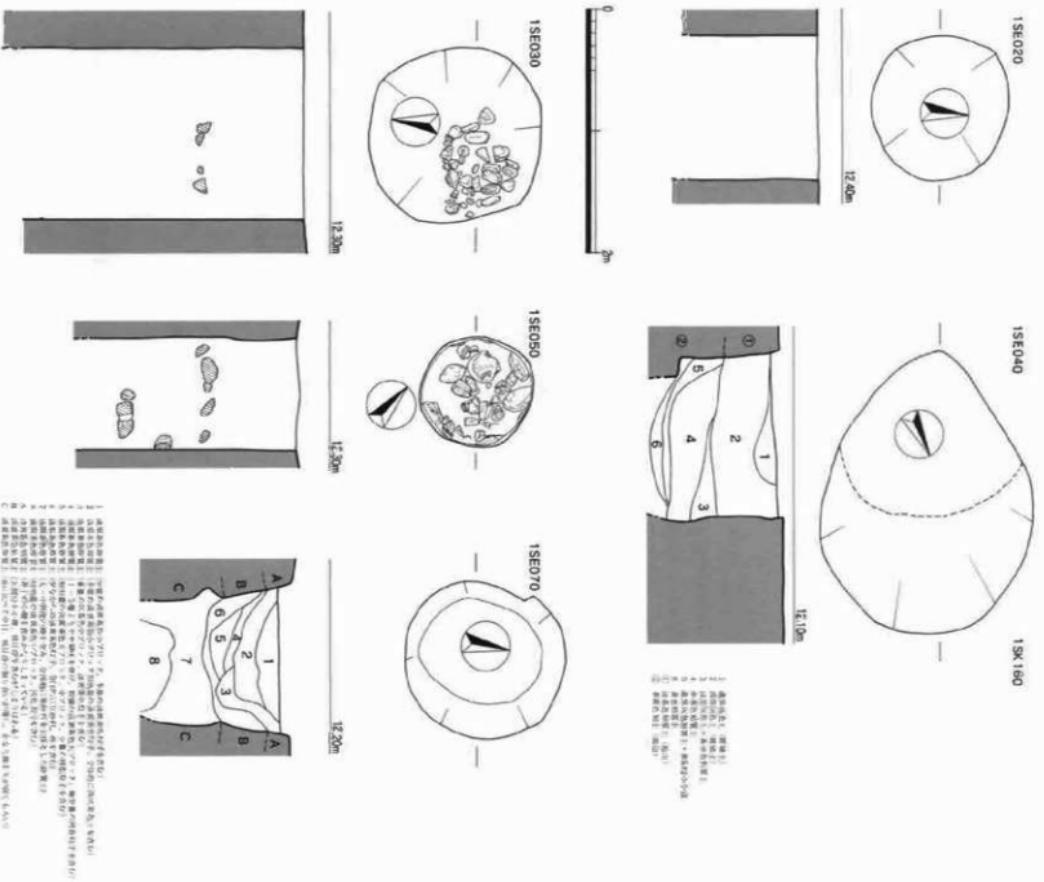


Fig.20 井戸実測図 (1/40)

のと判断する。出土遺物は須恵器（甕）、土師器（甕）、陶磁器（片）等が認められており、下限の参考となる。

#### 1SE060 (Fig.22)

調査区内北端の車よりで確認した不整円形状を呈する素振りの井戸である。直縁はISK105を切るようく被出されたが、掘削当初は被出と誤認していたため、土層断面を確認できていない。推定される井戸の幅は1.5m前後で、深さは道傍段丘から2.40m前後と思われる。出土遺物は土師器（罐鉢）等が認められた。

#### 1SE070 (Fig.20, Pla.3)

調査区内北端の東よりで確認したほぼ円形状を呈する素振りの井戸である。径1.25m前後を測り、危険防止のため道傍段丘から約1.15mで切り下げて掘り下げる所を示している。土層断面では黒茶色砂質土を基層とした堆土で、上位から深さ0.70m付近までにおいては左石から積み重なるように堆積している。一見すると他でみられる井戸の堆積状況と同等のものであるが、ここで気になる点は井戸を構成する堆山である。堆山は淡黄色粘土質土を基層と、疊るものであるが、上位から約0.25m付近の深さでは巣目砂を含み、更に深さ約0.60m付近では巣目砂の巣が増加していることで井戸壁の崩落を示している。当時の水深レベルがどこであったかまでは検討されていないが、参考資料として提示できるものである。出土遺物は皆無であった。

道路状況を説明するにあたっては、まず道路状況に付随する遺構（細溝・路面等の状況）について先述する。

#### 西側斜面

当溝は西側斜面3条の内の東溝にある。溝の北側は擾乱を受けているため終点するが再度北側では溝の痕跡を僅かに検出し、断端は調査区外へ延びていくと思われる。長さ約1.5m分を確認し、上幅0.60～0.65m、下幅0.23～0.38m、残存する溝の深さ0.16～0.19mを測る。溝の断面は緩やかなU字状ないしは逆台形状を呈し、堆土は上層から淡灰褐色土・褐色土（焼化土（1））・褐灰色土・灰白色土（黄色粒子多泥）となる。淡灰色土の焼化土は断面が凹状を呈した幅約0.30m前後、厚さ0.05m前後もとので、当溝には沿うように検出された。出土遺物は須恵器（片）、土師器（皿・火鉢・土鍋・甕・片）、石製品（五輪塔火輪・鏡臼）を認めている。

#### 1SD125 (Fig.21, Pla.1・4)

当溝は西側斜面3条の内の西溝にある。溝は途中、擾乱を受けているものの残存状況は良い。長さ約1.11mを確認し、上幅0.84～0.96m、下幅0.23～0.57m、残存する溝の深さ0.16～0.21mを測る。溝の断面は緩やかないU字状を呈し、堆土は上層から黒茶色土（やや縮まっている）・淡灰褐色土・（黄色粒子多泥）となる。溝内からの焼化土は確認されていない。出土遺物は黒茶色土から器類（片）を認めている。

#### 1SD135 (Fig.21, Pla.1・4)

当溝は西側斜面3条の内の中央溝にあたる。開平・擾乱を受けているため残存状況は悪く、後出長約2.3m、上幅0.45～0.62m、下幅0.26～0.41m、残存する溝の深さ0.06～0.30mを測る。溝の断面は緩やかなU字状を呈し、溝底の削落部は一段下がって深くなっている。堆土はやや縮まっている黒茶色土の單一土層で、溝内からの焼化土は確認されていない。出土遺物は認めていない。

#### 1SD140 (Fig.21, Pla.1)

当溝は東側斜面3条の内の東溝にあたり、切り合っている地溝の全てに跨っている。溝の北側一部被出を受けているものの残存状況は良く、後出長約43.5m、上幅0.50～1.15m、下幅0.21～0.72m、残存する溝の深さは北部で約0.24m、中部で約0.29m、南端でも0.32mを測る。溝の断面は北端では緩やかなU字状を呈し、中央部から南端にかけては逆台形状を呈する。北部の堆土は、上層から黒茶色土・黒茶色土（やや縮まっている）・茶色土（黄色粒子多泥）の3層が西側から流れ込むように堆積している。

た。一方、中央部から南部にかけての埋土は、上層から淡灰茶色砂質土（淡茶色粒子混）・暗茶色粘質土の2層が堆積する。硬化土は確認されていない。出土遺物は壇茶色粘質土から須恵器（壺）、土師器（壺）、淡灰茶色砂質土から須恵器（壺）を認めている。

#### 1SD145 (Fig.21, Pla.1)

当溝は東側側溝2条の内の西溝にあたる。溝の途中は擾乱を受けているため途切れおり、溝の北端から南端までの長さは約39.5mである。北部では上幅約0.95m、下幅約0.30m、残存する溝の深さ0.20m前後、中央部では上幅約0.95m、下幅約0.55m、残存する溝の深さ0.15m前後、南部では上幅約0.60m、下幅約0.30m、残存する溝の深さ0.38m前後を測る。溝の断面は緩やかなU字状ないしは逆台形状を呈し、淡黒茶色土を基盤とする埋土であった。ここでも溝内からの硬化土は確認されていない。遺物は土師器（片）を出土している。

#### 推定道路

##### 1SF500 (Fig.21, Pla.1)

当道路状構造は1SD130（西側側溝）—1SD140（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約10.00m、溝の内々幅で約9.20mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

##### 1SF510 (Fig.21, Pla.1)

当道路状構造は、1SD135（西側側溝）—1SD145（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約8.50m、溝の内々幅で約7.65mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

##### 1SF520 (Fig.21, Pla.1)

当道路状構造は、1SD125（西側側溝）—1SD145（東側側溝）間が該当する。溝の心々幅で約7.65m、溝の内々幅で約7.00mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

##### 1SF530 (Fig.21, Pla.1)

当道路状構造は帯状にのびて検出された硬化面①～③を指すもので、硬化土は幅約0.30m前後、厚さ0.05m前後を測る濃黒色土で、断面は凹状を呈する。硬化面④～⑤は1SF500・510・520にはば沿うように確認されており、当調査区から検出された道路状構造の最終段階にある。硬化面・硬化土は、その規模や状況から人の往来等によってできた痕跡（あぜ道のような小径）であることが予想される。

#### 土坑

##### 1SK015 (Fig.22)

調査区内中央の東よりで検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸1.96m、短軸0.80m、残存する深さは北部で0.20m、南部で0.38mを測る。主軸は座標北を示し、遺構内底はほぼフラットである。出土遺物は須恵器（鉢）、土師器（小皿）等を認めている。土坑墓としての可能性も考えておきたい。

##### 1SK025 (Fig.22)

調査区内中央で検出し、南部は擾乱によって失う。幅1.20m、残存する深さは0.16mを測る。出土遺物は土師器（小皿）等を認めている。

##### 1SK035 (Fig.22)

調査区内北端で検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸2.00m、短軸1.38m、残存する深さは約0.30mを測る。主軸は座標北を示し、遺構内底はほぼフラットである。出土遺物は土師器（小皿）等を認めている。

##### 1SK045 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した隅丸長方形状の土坑である。遺構の南端部は1SK055と切り合うが境界部分で擾乱を受けていたため確認できていない。長軸は推定で2.76m、短軸は0.90m、残存する深さは0.27mを測る。主軸はN=16°38'37"-Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。淡黒茶色砂質土を基盤とした埋土で、出土遺物は土師器（片）が僅かに認めた。

##### 1SK055 (Fig.22)

調査区内中央の西よりで検出した隅丸長方形状の土坑で、遺構の北端部は1SK045と切り合うが境界部分に擾乱を受けていたため確認できていない。長軸は推定で2.95m、短軸は1.70m、残存する深さは

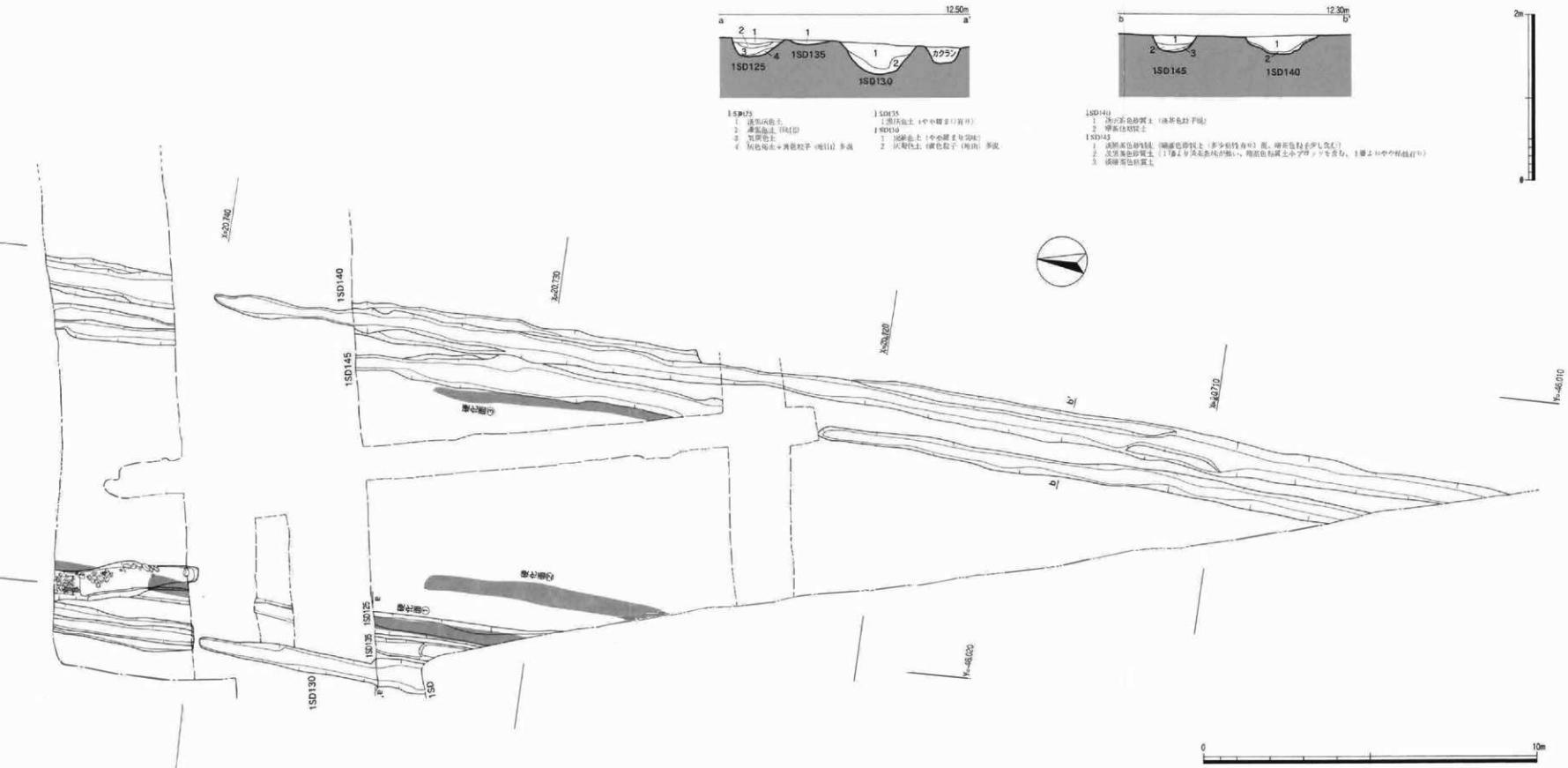


Fig.21 道路状遺構実測図 (1/40・1/100)

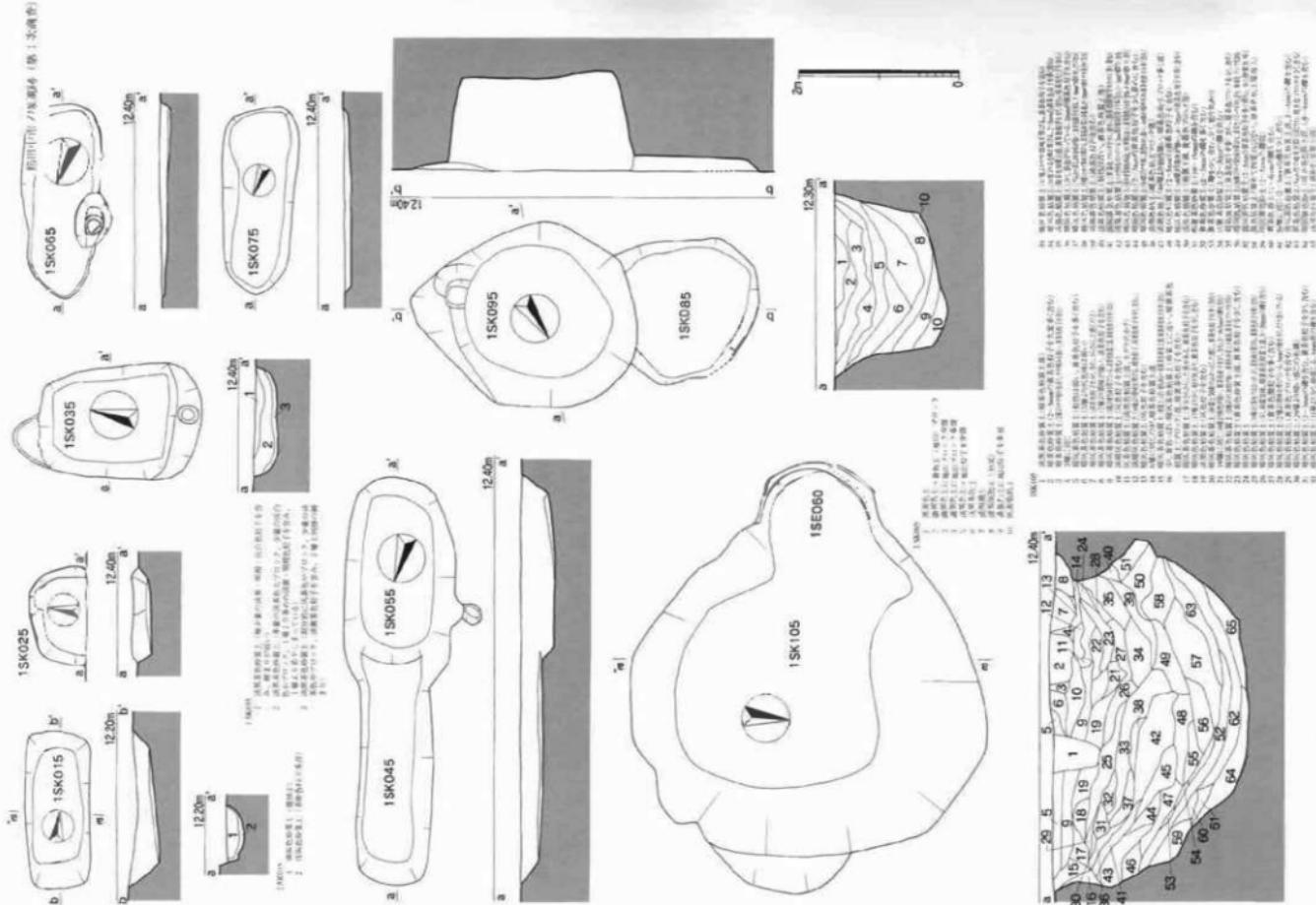


Fig.22 土壌測定図 (1/60)

0.52mを測る。主軸はN=16° 38' 37"—Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。淡黒茶色砂質土を基調とした塊土で、出土遺物は土師器（小皿）等を認めている。

#### 1SK065 (Fig.22)

調査区内外の中央の西よりで検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸は3.05m、短軸は1.21m、残存する深さは0.12mを測る。主軸はN=19° 13' 21"—Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。埋土は淡黒茶色砂質土の單一土層で、出土遺物は皆無であった。

#### 1SK075 (Fig.22)

調査区内外の中央の西よりで検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸は2.87m、短軸は1.12m、残存する深さは0.10mを測る。主軸はN=20° 57' 24"—Wを示し、遺構内底はほぼフラットである。埋土は淡黒茶色砂質土の單一土層で、出土遺物は皆無であった。

#### 1SK085 (Fig.22)

調査区内外の中央の西よりで検出した楕円形状の土坑である。遺構の南東部は1SK095に切られ、幅は約1.75m、残存する深さは0.20mを測る。遺構内底はほぼフラットで、埋土は淡黒茶色砂質土の單一土層であつた。出土遺物は皆無であった。

#### 1SK095 (Fig.22)

調査区内外の中央の西よりで検出した楕円形状の土坑である。遺構の北西部は1SK085を切り、幅は約2.30m、残存する深さは1.40mを測る。遺構内底は北端がやや深くなっている。遺物は土師器（片）が僅かに出土した。

#### 1SK105 (Fig.22, Pla.5)

調査区内外の東よりで検出した不整形圓形状を呈する大型の土坑で、遺構西端は1SE060に切られるようにより検出された。南北長は約4.45m、残存する深さは約2.45mを測り、1SE060と同じレベルに達していいる。遺構内底はほぼフラットな状態で、遺物は頭蓋器（鉢）、土師器（小皿・杯・土鍋・鬚鉢・火鉢）、瓦質土器（埴鉢）、青磁（碗）、石製品（石皿）等が出土している。

### (3) 出土遺物

#### 壠立性遺物

##### 1SB220-P9 (Fig.23, Pla.6)

#### 土師器

小皿（1） 口径9.60cm、底径7.20cm、器高1.80cmを復原する。外底は糸切りで、口縁端部に油焼痕を認める。

##### 1SB225-P4 (Fig.23, Pla.6)

#### 土師器

土盤（2） 完形で、全長3.90cm、内径1.5cmを測る。

##### 1SB235-P3 (Fig.23, Pla.6)

#### 土師器

土盤（3） 口縁部の細片で、内面には横方向の刷毛目、口縁部外面は指押さえ、体部・盤は斜め方向の刷毛目の調整を施す。口縁部外面には焼が付着する。

##### 1SB235-P5 (Fig.23, Pla.6)

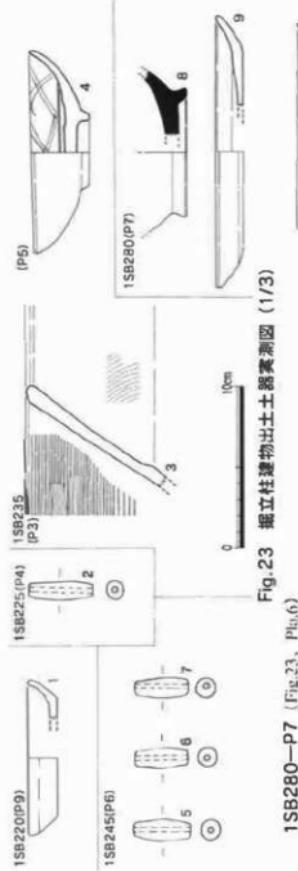
#### 塗付

皿（4） 口径1.60cm、高台径4.40cm、器高3.40～3.70cmを測る。内面には斜須で文様を描き、乳白色の漆を全面に施塗する。見込みは蛇ノ目状に割が盛り取られ、見込み及び塗付けには妙が付着している。

##### 1SB245-P6 (Fig.23, Pla.6)

#### 土師器

土盤（5～7） 完て完形で、5は全長3.50cm、内径1.30cm、6は全長3.30cm、内径1.20cm、7は全長3.30cm、内径1.30cmを測る。



1SB280-P7 (Fig.23, Pla.6)

**須 惑 器**

環 (8) 高台径8.00cmを復原する底部の細片である。色調は淡灰茶色で、底部内面はナデ、体部内外面はヘラケズリ、高台内外面はヨコナデの調整を施す。

**土 器**

皿 (9) 口径16.80cm、底径12.00cm、器高1.70cmを復原する。内外面はヨコナデ調整で、外底は糸切りである。内底には小動物による引っかき痕が認められる。

**湯**

1SD010 (Fig.24, Pla.6)

1SD010 (Fig.24, Pla.6)

土 器

环 (10) 口径12.60cm、底径10.00cm、器高2.50cmを復原する。内外面はヨコナデで、外底は糸切りで糸切りで、内底には小動物による引っかき痕が認められる。

**井 戸**

## 1SE030 (Fig.25, Pla.6)

**土 器**

小皿 (11) 口径10.00cm、底径6.60cm、器高2.50cmを復原する。内外面はヨコナデで、外底は糸切りである。内外面には縁が薄く付着しており、二次焼成を受けた可能性がある。

**口縁部の細片**

口縁部の細片で、端部は玉締状を呈する。

土 瓢 (12) 口径4.00cmを復原する。内面は横方向の刷毛目、口縁端部から外面上にかけては工具によるナデの調整である。内面には縁が薄く付着し、二次焼成を受けている。

火鉢 (14・15) 14は口縁部の細片で、内面は横方向の細かい刷毛目、外側はヨコナデの調整で、鉢文のスタンプを押印する。15は底部の細片で、外側には花文と思われるスタンプが押印される。体部内面はナデ、内底は刷毛目で外側は工具によるナデ調整が施される。

**須 惑 器**

斧 (16・17) 16は口縁部の細片で、外面上に横方向の刷毛目が施される。内面の調整は不明。17は内面に横方向の細かい刷毛目、外側はナデ調整を施し、内面には縁が薄く付着する。

擂鉢 (18) 底径13.00cmを復原する底部の細片である。体部内面には7本単位の端目を糾め方向に施し、内底には不定方向に端目を施す。内面はヨコナデ、外面上は指押さえ後ナデで、下位はヘラケズリ調整である。外底は調整不明で外側には縁が付着している。

**常滑燒陶器**

甕 (19) 口縁部の細片で、常滑窯變の微であるN字状の口縁部を呈する。外側はヨコナデ、内面は工具によるナデ調整である。

Fig.23 垂立柱建物出土土器実測図 (1/3)



Fig.24 1SD010 出土土器実測図 (1/3)

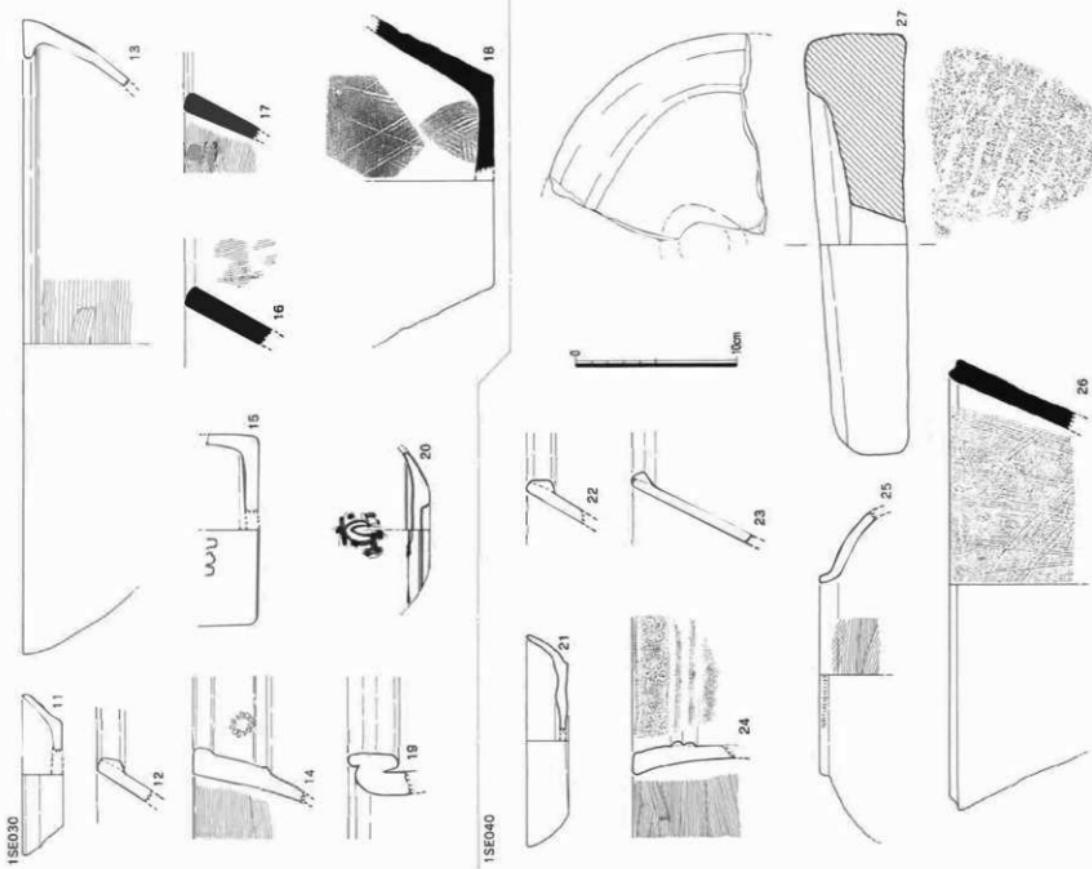


Fig.25 1SE030・040出土遺物実測図 (1/3)

## 染付

川 (20) 底部の細片で、底径は3.40cmを測る。素地は軽選された乳白色で、釉調は香味がかった透明釉を垂付け以外に施す。見込み及び外面上には呉須で文様を描き、茎付け附近には目刷模を看取する。

**1SE040** (Fig.25, Pla.7)

## 土師器

皿 (21) 口径13.00cm、底径9.60cm、器高2.50cmを復原し、内外面はヨコナデ、外底は糸切りである。土鍋 (21・23) 共に口輪部の細片で、端部は玉縁状を呈する。外面には媒が付着している。

## 瓦質土器

火鉢 (24) 口縁部の細片で、内面は横方前の網がかい刷毛目、外面はヨコナデで、2条の貼付帶を施す。更にその上位には菊花文のスタンプを押印する。

芥釜 (25) 口径12.00cmを復原する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は刷毛目、体部外面は工具によるナデ調整を施し、口縁端部外面には刺突文を施す。

## 須恵器

擂鉢 (26) 口径27.60cmを復原し、内面には刷毛目の後7本単位の擂目を放射状に施す。外面はナデ調整である。

## 石製品

挽臼 (27) 外径26.00cmを復原する上臼で、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。安山岩製と思われ、二次焼成を受けている。

**1SE050** (Fig.26, Pla.7)

## 瓦質土器

擂鉢 (28・29) 28・29は同一個体と思われる。28は口縁部の細片で、口径27.60cmを復原する。内面の調整は不明であるが6・7本単位の擂目が放射状に施されている。外面はナデ後細い刷毛目を施す。29は底盤部の細片で、底径13.00cmを復原する。内底には4本単位の擂目が不定方向に施される。

## 繩文縦系青磁

碗 (30) 口径16.00cmを測り、淡青灰色の素地に青緑色の釉を施す。外側には縫型弁が施されている。

## 染付

例 (31) 底部の細片で、高齢者4.40cmを測る。やや微削段を含む乳白色の素地に乳白色の釉を内外面に施施する。見込み及び外面上には呉須で文様を描き、茎付けは釉が落取られている。

## 石製品

挽臼 (32) 外径31.00cmを復原する上臼で、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。中心部下端には削穴が施されている。安山岩製と思われる。

## 道路状遺構

**1SD125—淡黒灰土** (Fig.27, Pla.7)

## 土師器

土鍋 (33) 素口縁の細片で、内面は横方前の刷毛目、外面の口縁部及び体部上位は指削さえ、体部下位は斜め方向の刷毛目調整を施す。外面には媒が厚く付着している。

**1SD130—黒茶色土** (Fig.27, Pla.7・8)

## 土師器

坪 (34・35) 34は口径13.00cm、底径9.30cm、器高5.340cm、35は口径15.00cm、底径13.00cmを復原する。34・35の調整は内面及び体部外面はヨコナデで、外底は手持ちによるヘラケズリである。

**1SD140—淡灰茶色砂質土** (Fig.27, Pla.8)

## 須恵器

甌 (36) 体部の細片で、内面は同心円、外面は正格子の叩きを施す。色調は青灰色で底土に砂粒及び黑色粒子を少量含む。

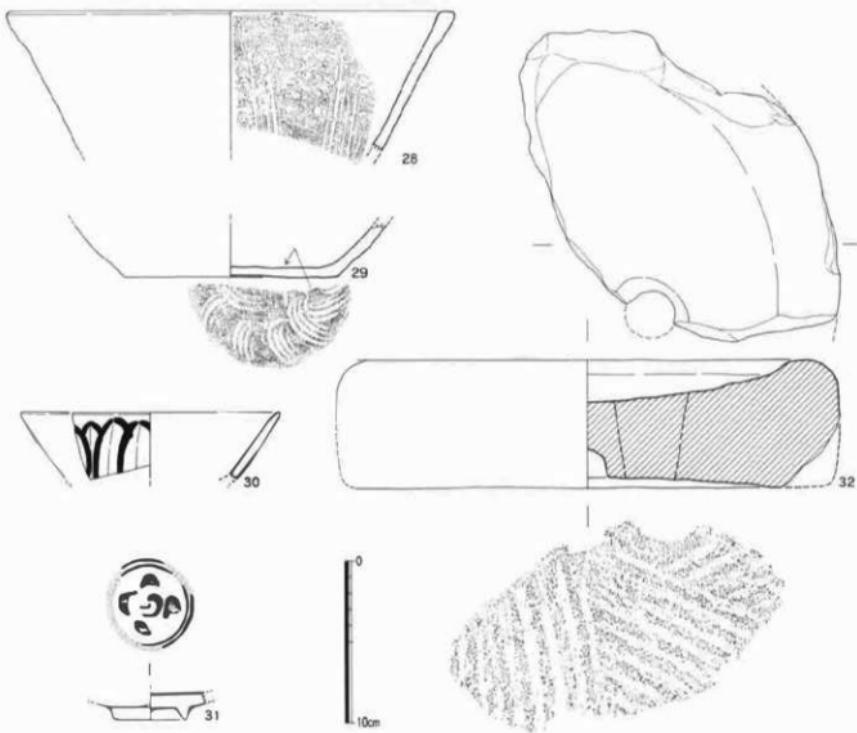


Fig.26 1SE050出土遺物実測図 (1/3)

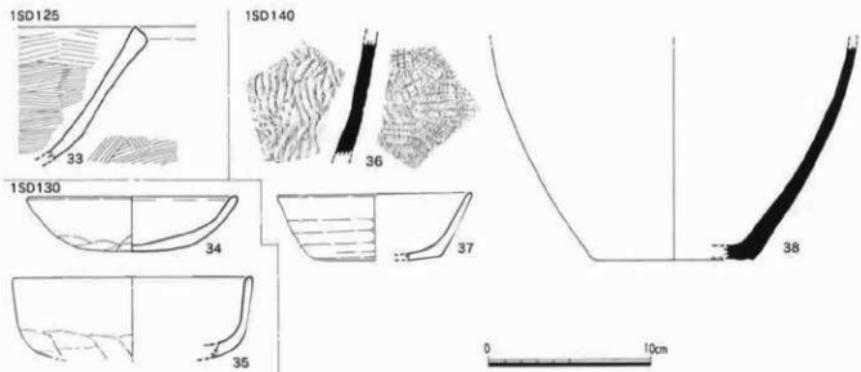


Fig.27 道路状遺構出土土器実測図 (1/3)

**土 諸 器**

杯 (37) 口径12.00cm、底径8.00cm、器高4.00~4.20cmを測る。3調整は内面及び体部外面はヨコナナデで、外底は面板ヘラケズリである。

**1SKD140—暗茶色粘質土 (Fig.27, Pla.8)****須恵器**

甕 (38) 底部の底片で、底径10.00cmを復原する。内面は同心円叩き後ヨコナデ、外底は正格子叩き後ケヌリ調整を施す。外底はヘラ切りと思われる。

**土坑****1SKQ55 (Fig.28, Pla.8)****土 諸 器**

蓋 (39) 口径10.40cmを復原する細口で、小皿になる可能性も考えておきたい。口縁部には焼成後に径0.25cm前後を測る穿孔が貫通する。

**1SK105 (Fig.28, Pla.8)**

小皿 (40・41) 40は口径9.00cm、底径5.60cm、器高3.50cm、41は口径9.60cm、底径5.50cm、器高2.50cm。調整は裏に斜外面がヨコナデで、外底は糸切りである。41は内外面に煤が厚く付着している。

**1SKQ56****土 諸 器**

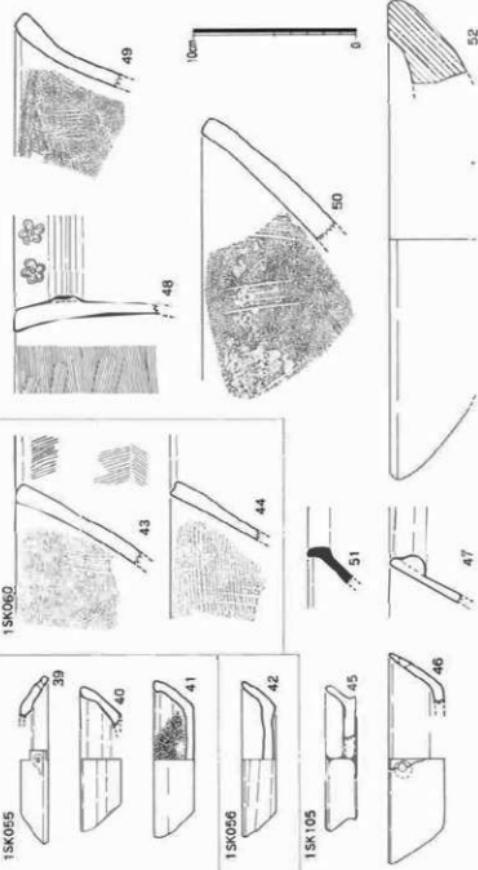
小皿 (42) 口径9.60cm、底径6.50cm、器高2.10cmを復原し、調整は内外面がヨコナデ、外底は糸切りである。

**1SKQ60 (Fig.28, Pla.8)****瓦質土器**

椭体 (43・44) 共に素口縁である。43は内面が楕方向の刷毛目後放射状に瘤目、外面は楕方向の刷毛目を施す。44は内面が楕方向の刷毛目後放射状に瘤目、外面はナデを施す。

**1SK105 (Fig.28, Pla.8)****土 諸 器**

小皿 (45) 口径9.00cm、底径7.60cm、器高1.90cmを復原する。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

**Fig.28 土坑出土遺物実測図 (1/3)**

环 (46) 口径13.00cm、底径8.70cm、器高3.40cmを復原する。調整は内外面がヨコナナデで、外底は余切りである。口縁部には焼成後に径0.50cm前後を削る穿孔が貫通する。外面一部に煤が付着している。

土鍋 (47) 玉縁状の口縁部を呈する細片で、内面はナマ調整である。外面には煤が厚く付着しているため、調整は不明である。

#### 瓦質土器

火鉢 (48～50) 48は口縁部の細部で略彫り、刃毛目、外面はヨコナナデである。2条の脚付付帯を施し、その上位には菊花文のスタンプを押印する。49は口縁部が90度反した細片で、内面には側毛目後に8本単位の筋目を施す。外面はナマ調整である。50は口縁部がやや内側した細片で、内面には側毛目後後に4本単位の筋目を施す。外面は調整不明である。

#### 粟播系瓦質器

火皿 (51) 口縁部は玉縁状を呈する。内外面の調整はヨコナナデで、極端な受け皿になる可能性も考えておきたい。石材は不明である。

#### ビット

1SP001 (Fig.29, Pla.8)

#### 粟播系瓦質器

火皿 (53) 口縁部は玉縁状を呈する。内外面の調整はヨコナナデで、極端な受け皿になる。

1SP002 (Fig.29, Pla.8)

#### 石製品

石製品 (54) 石材は滑石製で、口径19.00cmを復原する。口縁部は斜め上方へ立ち上がり、端部の断面形状は方形状を呈する。外面にはノミ痕が鏽着に看取される。

1SP023 (Fig.29)

#### 土師器

小皿 (55) 口径0.80cm、底径7.60cm、器高1.90cmを復原する。調整は内外面がヨコナナデで、外底は余切りである。

1SP029 (Fig.29, Pla.9)

#### 土師器

土皿 (56) 玉縁状の口縁部を呈する細片で、内面は横方向の刃毛目調整である。外面には煤が厚く付着しているため、調整は不明である。

1SP034 (Fig.29, Pla.9)

#### 土師器

小皿 (57) 口径7.00cm、底径4.50cm、器高1.70～2.20cmを測る。調整は内外面がヨコナナデで、外底は余切りである。

1SP044 (Fig.29, Pla.9)

#### 土師器

小皿 (58) 口径10.50cm、底径6.90cm、器高1.50～1.70cmを測る。調整は内外面がヨコナナデで、外底は余切りである。

1SP084 (Fig.29, Pla.9)

#### 土師器

小皿 (59) 口径6.70cm、底径4.50cm、器高1.70cmを測る。内外面がヨコナナデで、外底は余切りである。

1SP089 (Fig.29, Pla.9)

#### 鉢

III (60) 口径10.60cmを復原し、乳白色の素地に赤色の透明釉を施釉し、表面には貫入を看取する。内外面にはくすんだ呉須で文様を描く。

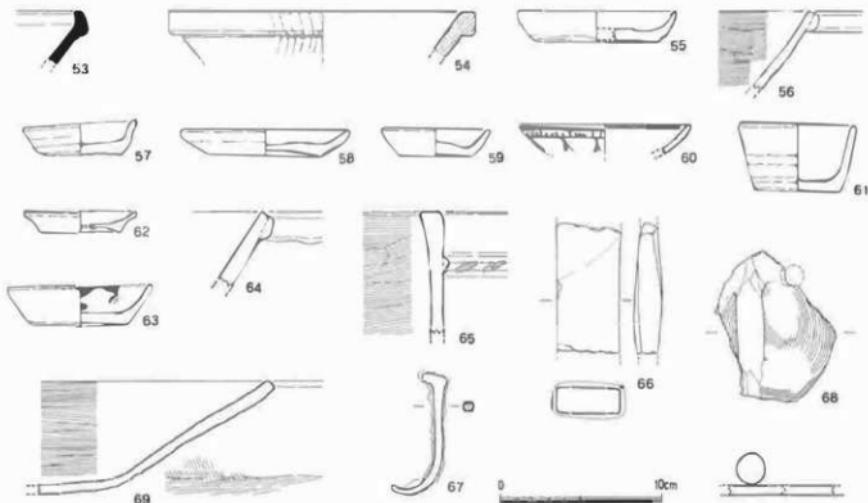


Fig.29 その他の出土遺物実測図 (1/3)

## ISP122 (Fig.29, Pla.9)

## 土師器

壺 (61) 口径7.20cm、底径5.40cm、器高4.20cmを測る。調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。

## 撲乱 (Fig.29, Pla.9)

## 土師器

小皿 (62・63) 62は口径7.00cm、底径5.00cm、器高1.30cm、63は口径9.00cm、底径6.10cm、器高2.40cmを測る。共に調整は内外面がヨコナデで、外底は糸切りである。63は内外面に油煙痕が付着する。

土鍋 (64) 玉縁状の口縁部を呈する細片である。内面及び体部外面はナデで、口縁部はヨコナデである。外面には煤が付着している。

## 瓦質土器

火鉢 (65) 口縁部の細片で内面は横方向の細かい刷毛目、外面はナデ調整である。1条の貼付突帯を施し、その突帯には縄目状の文様を押印する。

## 石器

砥石 (66) 石材は砂岩製と思われ、上下部は欠損している。表面は全て砥面として使用されている。

## 鉄製品

釘 (67) 先端部は湾曲しており、頭部はやや「くの字」状を呈する。断面形は正方形状を呈する。

## 表土 (Fig.29, Pla.9)

## 瓦質土器

蓋 (68) 器厚は0.60cmを測る。ほぼ平らな盤状の蓋に径1.75cmの把手を取り付ける。中心軸からやや外れた場所に1.00cm程度の穿孔が施されている。内外面は刷毛目調整である。

## 調査区外表採 (Fig.29)

## 土師器

土鍋 (69) 素口縁を呈する破片である。内面及び体部外面上位は刷毛目で、体部外面上位は指押さえである。外面には煤が厚く付着している。

## (4) 小結

調査の結果、櫛列状遺構7列、掘立柱建物26棟、溝1条、井戸5基、道路状遺構4路、上塙10基等が確認された。先述したが、当調査区は整地段階において摩訶輪にズレが生じていることが判明した。現段階においては現場での検証が困難であると判断し、遺構図は地圖上において補正している。従って、ここでは方位に偏倚する遺構等は地遺跡における検出遺構と比較・検討することとした。

## 櫛列状遺構・掘立柱建物

当遺跡で確認された櫛列状遺構・掘立柱建物は後章の「IVまとめ」[Tab.2・3]に表した。  
櫛列状遺構はすべて東西方向を示しており、櫛列状遺構並びに各柱穴における瓶頸や形状は、掘立柱建物と類似していることから、その可能性も否めない。掘立柱建物は東西両造物21棟、南北横建物1棟、方形形狀の建物4棟が確認され、うち1棟は繩柱建物であった。各柱穴は古代の道路状遺構を切っていることから、当地の土地利用は、道路状遺構開発後に集落として形成されたことになる。しかし、出土遺物からの集落の開基は判断しがたい状況であり、建物の下限は16C後半頃と考えられる。

## 溝

東西方前にはしるISD010を確認した。東側隔離である第2次調査（調査区B）で延長部と思われるISD102を検出しておらず、検出長は約4.3mを測る。中世の遺物である土師器（灰）1点が僅かに出土したのみであるため時刻の判断は困難であるが、掘立柱建物と同時期に相当するものと考えられる。

## 井戸

5基を確認したが、危険防止のため残念ながら完掘はしていない。すべて素堀りの井戸で、井戸口は調査区のほぼ中央から東よりの南北方向に配置されていることから、当時における水脈がほぼ南北ライン上にあったものと判断できる。更に、井戸壁は約4.3mを測る。中世の遺物である地山の状況は、遺構検出画面から約60cm下がつたレベルを境に、純まりのある粘質土から荒目砂土へと移行していた。このレベルにあわせて井戸壁の崩壊も招いていたことから、かなり深いレベルでの含み水があつたことが想定される。井戸からは13後半～16C代にかけての出土遺物を認めており、集落が機能していた時期を示すものとして提ができる。

## 道路状遺構

当調査区からは道路状遺構に付設する溝渠、硬化土、焼成面が検出された。遺構の切り合いから古順にISPS00・ISFS00・ISFS10・ISFS20・ISFS30と4路の変遷が想定される。

さて、今回確認されたISPS00は、律令制に整備された古代官道である「西海道」の可能性が強い。古代官道の詳細については後章の「IV.まとめ」で述べることとするが、概略すると、西海道は九州地方において大字解を中心とする各町解を直線的に繋いだ鉄道のことと、道路の幅員は9~12m位であつたことが判知されている。筑後市の北側に位置する久留米市では、既に側柵事例として古代官道が報告されており、また、歴史地理学的研究から市域を復原していたことが推論されている。(当該地はその駅路の起点ライアン上に位置する) 先述したとおり、ISD130(西海道)とISD140(東側側溝)の側溝間ににおける溝の心々幅で10.0m、溝の内外幅で9.20~9.35mを計測する道路で、側溝内から8C代の遺物を出土している。このことは、道路状遺構の立地・規模・出土遺物からみても推定された西海道にほぼ一致する資料といえよう。

道路状遺構はISPS00の他に、ISFS10・ISFS20・ISFS30が復原でき、その後関係は先に述べたところである。道路の幅員は溝の心々幅で10.00m (ISFS00) → 8.50m (ISFS10) → 7.65m (ISFS20) と縮小し、ISFS30に至っては側溝を持たない狭幅であった。このことは、古代官道が律令体制の形骸化に伴って縮小し、やがては終焉を迎えたことが考えられ、道路状遺構集から終焉までの過程が調査に驚える資料である。最終段階とされるISFS30からの出土遺物は、残念ながら皆無であったことからその時期は不明であるが、13後半～16C代に比定される中世の遺構が道路状遺構を切っているため、少なくとも13C前半までには極端に減少していることは明らかである。



鶴田中市ノ塚遺跡第1次調査調査区全景（空中写真：真上から）



鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）道路状遺構（空中写真：南から）

## 2. 鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）

### (1) はじめに (Fig.30)

当遺跡は筑後市大字鶴田字中市ノ塚408-14外に所在し、標高12m位の低位段丘上に立地する。開発事業者であるコガホームから鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）の隣接地について第2期目の宅地分譲を計画しているとの連絡を受けたことにより、市教委では鶴田中市ノ塚遺跡（第1次調査）と同様に開発予定地内の全境である4.463haについて発掘調査を実施した。

筑後市教育委員会は平成6年11月15日から平成7年3月31日まで発掘調査を実施し、この間、重機による表土除去（有閑会社福島建設に委託）、遺構の検出・掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真撮影は小林勇作が担当し、坂本英子（現：三關町教育委員会）、大鳥真一郎（現：黒木町教育委員会）、野田洋子の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林、大鳥、野田が担当した。

調査区は更官上、南東部調査区を「調査区A」、北東部調査区を「調査区B」、南部調査区を「調査区C」と称した。調査の結果、調査区B・Cにおいて掘立柱建物、井戸、溝、土坑等が検出されたが、調査区Aからは主要な遺構は検出されなかつた。



Fig.30 鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）調査地点位置図 (1/2,500)

### (2) 検出遺構

#### 柱立柱建物 2SB200 (Fig.31)

調査区C内の北西部で検出した東西軸の掘立柱建物である。柱穴（P1～P6）の平面プランは円形または楕円形形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.20～0.36mを測る。鉛物の規模は東西2.4m（5.55～5.60m）×南北1.7m（2.70～2.85m）、建物面積5.36m<sup>2</sup>（4.461坪）で、南北軸はN=15°33'58"→Wの方角を示す。更に各柱穴はP1-P4間3.05m、P4-P5間2.85m、P5-P6間2.90m、P6-P1間2.70mを測る。P6からP1までは延0.15m前後の柱軸跡が確認されている。

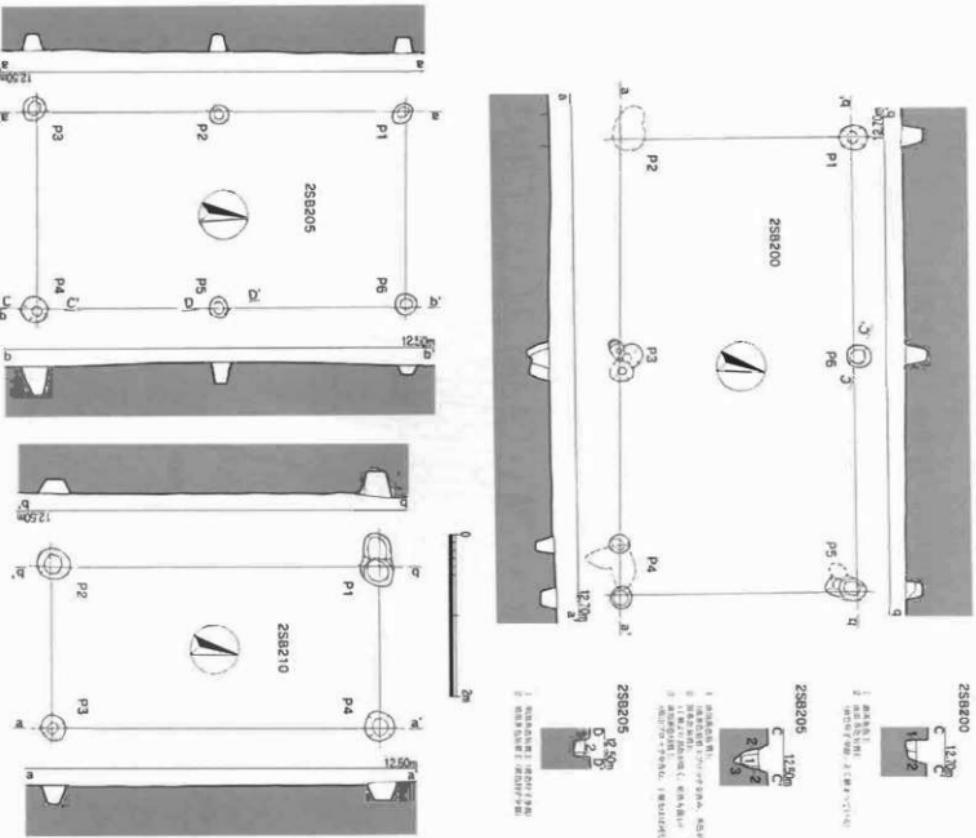


Fig.31 2SB200・205・210測量図 (1/60)

**2SB205** (Fig.31)  
 鶴川町C内の北西側で検出した北西側の独立建物である。柱穴 (P1-P6) の平面プランは4角形抜を呈し、残存する柱穴の深さは0.11～0.35mを測る。建物の規模は東西1間 (2.35～2.50m) × 南北2間 (2.55m)、建物面積10.93m<sup>2</sup> (約128坪) で、南北軸はN—8°53'33"→Wの方位を示す。更に各柱穴間 (P1—P2) 0.20m, P2—P3) 0.22.5m, P3—P4) 0.25m, P4—P5) 0.22.5m, P5—P6) 0.20m, P6—P1) 0.25mを測る。P4・5からは僅0.6mの柱痕跡が確認された。

**2SB210 (Fig.31)**

調査区C内の西北部で検出した南北軸の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P4) の平面アーランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.8～0.3mを測る。建物の規模は東西1間 (2.81m) × 南北1間 (3.97～4.05m)、建物面積7.93m<sup>2</sup> (≈2.38坪) で、南北軸はN—13°45'38"—Wの方位を示す。

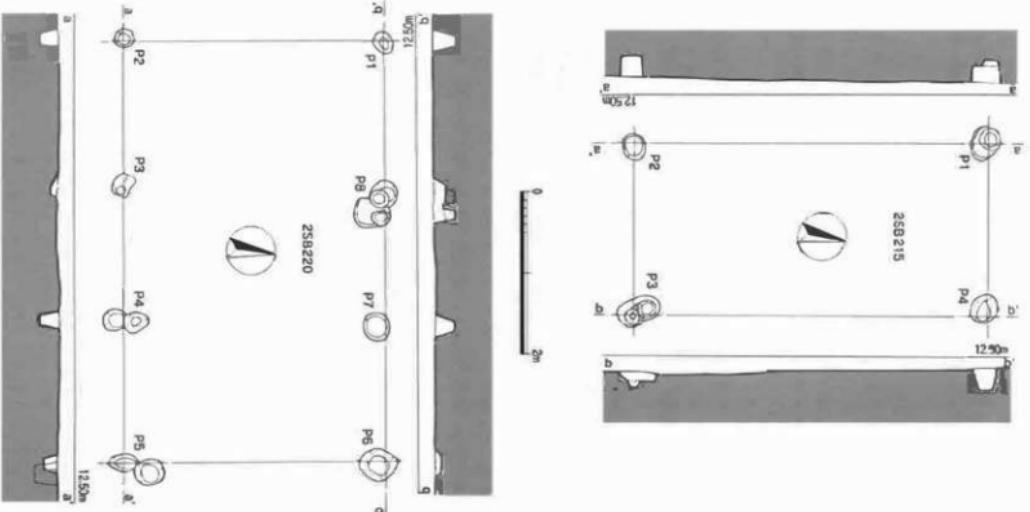
**2SB215 (Fig.32)**

調査区C内の西北部で検出した南北軸の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P4) の平面アーランは円形状または橢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.20～0.28mを測る。建物の規模は東西1間 (2.10～2.15m) × 南北1間 (4.35～4.40m)、建物面積9.05m<sup>2</sup> (≈2.71坪) で、南北軸はN—10°45'45"—Wの方位を示す。P3からP4は須恵器〈鉢〉が出土した。

**2SB220 (Fig.32)**

調査区C内の西北部で検出した東西軸の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面アーランは円形状または橢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.08～0.29mを測る。建物の規模は東西3間 (5.2.2 m) × 南北1間 (3.15～3.20m)、建物面積16.64m<sup>2</sup> (≈4.99坪) で、南北軸はN—9°37'57"—Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1—P2間3.20m、P2—P3間3.87m、P3—P4間1.60m、P4—P5間1.75m、P5—P6間3.16m、P6—P7間1.70m、P7—P8間1.37m、P8—P1間2.15mを測る。P3からは土器器(火鉢)が出土している。

Fig.32 2SB215・220実測図 (1/60)



**2SB225 (Fig.33)**

調査区C内の東西側で検出した南北側の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランはほぼ円形を呈し、残存する柱穴の深さは0.27～0.46mを測る。建物の規模は東西2間 (3.30～3.40m) ×南北2間 (4.51～4.63m)、建物面積51.18  $m^2$  ( $\approx 4.55$ 坪) で、南北軸はN=14° 30' -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.40m、P2-P3間2.23m、P3-P4間3.30m、P4-P5間2.23m、P5-P6間4.51m、P6-P1間3.40mを測る。

**2SB230 (Fig.33)**

調査区C内の西端で検出した南北側の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.10～0.44mを測る。建物の規模は東西1間 (3.10～3.30m) ×南北2間 (4.45～4.57m)、建物面積14.37  $m^2$  ( $\approx 4.31$ 坪) で、南北軸はN=17° 45' 53" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.37m、P2-P3間2.20m、P3-P4間3.30m、P4-P5間3.10mを測る。P5は擾乱を受けたため不明である。

**2SB235 (Fig.33)**

調査区C内の西端で検出した南北側の獨立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.07～0.20mを測る。建物の規模は東西1間 (2.27～2.55m) ×南北1間 (3.17～3.25m)、建物面積7.67  $m^2$  ( $\approx 2.30$ 坪) で、南北軸はN=14° 27' 08" -Wの方位を示す。

**2SB240 (Fig.33)**

調査区C内の西端で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.07～0.20mを測る。建物の規模は東西1間 (1.90～

2.55m) ×南北1間 (2.80～2.95m)、建物面積5.92  $m^2$  ( $\approx 1.62$ 坪) で、南北軸はN=13° 26' 55" -Wの方位を示す。

**2SB245 (Fig.34)**

調査区C内の西端で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.26～0.52mを測る。建物の規模は東西2間 (4.24m) ×南北1間 (3.50m)、建物面積15.28  $m^2$  ( $\approx 4.58$ 坪) で、南北軸はN=12° 53' 37" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP2-P3間0.24m、P3-P4間1.80m、P4-P5間3.50m、P5-P6間2.00mを測る。P1は擾乱を受けたため不明である。

**2SB250 (Fig.34)**

調査区C内の西端で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1～P6) の平面プランは円形状または梢円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.07～0.38mを測る。建物の規模は東西2間 (3.65～3.78m) ×南北1間 (3.35～3.55m)、建物面積13.12  $m^2$  ( $\approx 3.93$ 坪) で、南北軸はN=12° 14' 10" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間3.35m、P2-P3間0.95m、P3-P4間1.83m、P4-P5間3.55m、P5-P6間1.83m、P6-P1間1.80mを測る。P2～5においては柱や柱頭接して柱穴確認されており、少なくとも1回以上の修繕等がされている可能性が考えられる。

**2SB255 (Fig.34, Plat.11)**

調査区C内の西端で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1～P10) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.37～0.54mを測る。建物の規模は東西3間 (5.75～5.80m) ×南北2間 (3.85m)、建物面積22.61  $m^2$  ( $\approx 6.76$ 坪) で、南北軸はN=10° 18' 17" -Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.00m、P2-P3間1.85m、P3-P4間2.00m、P4-P5間2.00m、P5-P6間1.80m、P8-P9間1.97m、P9-P10間1.88m、P10-P1間1.90mを測り、P7は確認されていない。P5・9・10においては柱0.11～0.14mの柱裏脚を確認し、P10土層表面からは柱穴底部に灰白色質土が散がっていた。

**2SB260 (Fig.35)**

調査区C内の西端で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1～P8) の平面プランはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.08～0.21mを測る。建物の規模は東西3間 (4.40～4.42m) ×南北1間

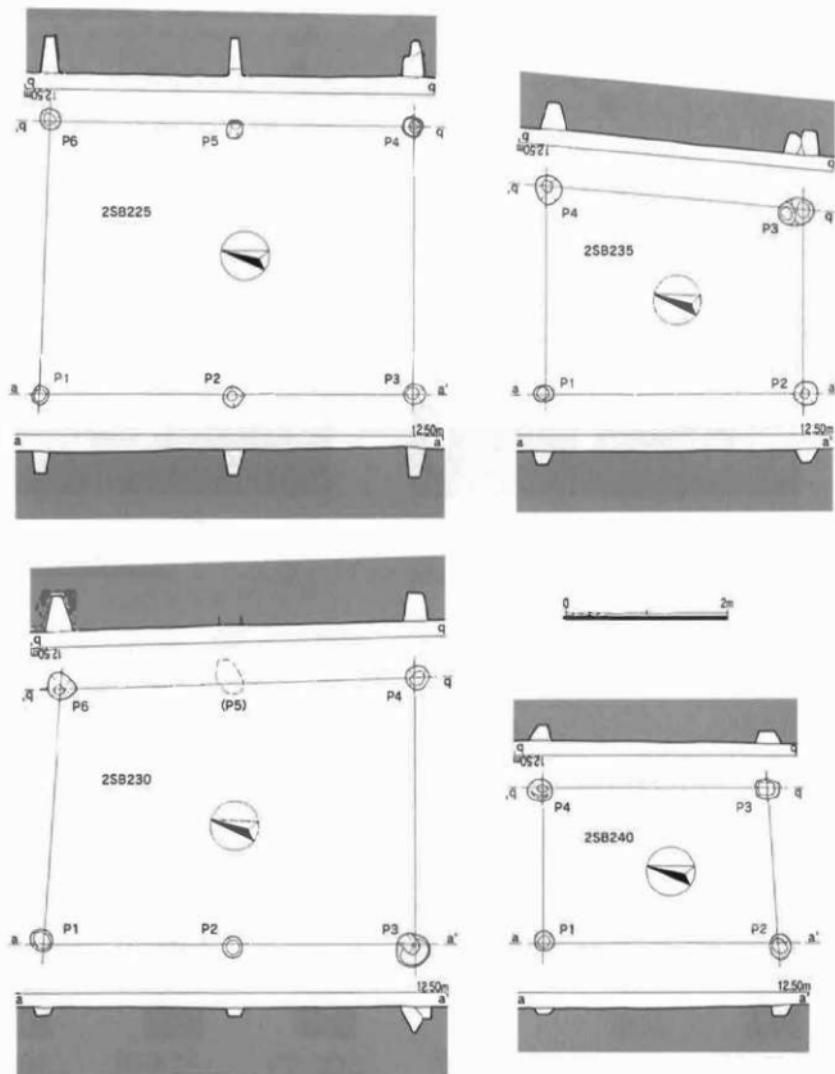


Fig.33 2SB225・230・235・240実測図 (1/60)

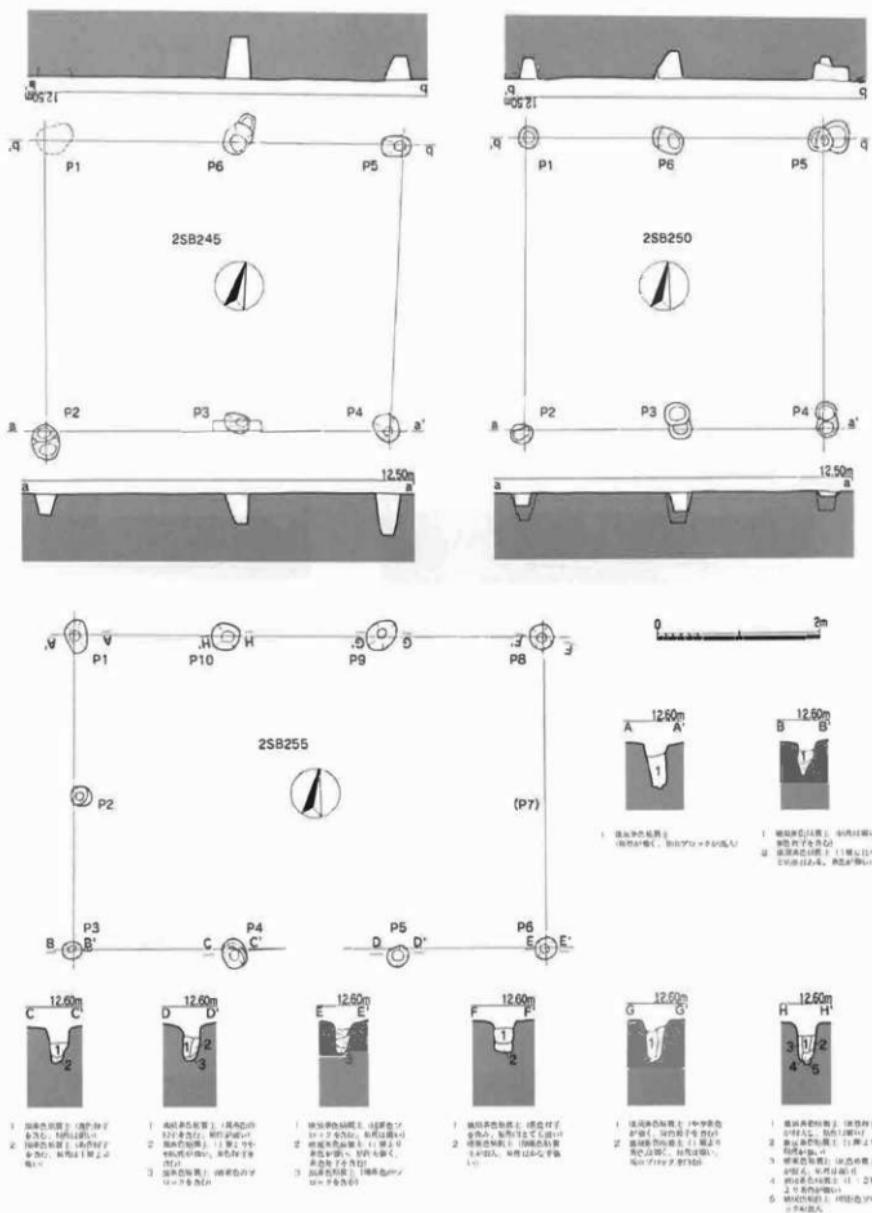


Fig.34 2SB245・250・255実測図 (1/60)

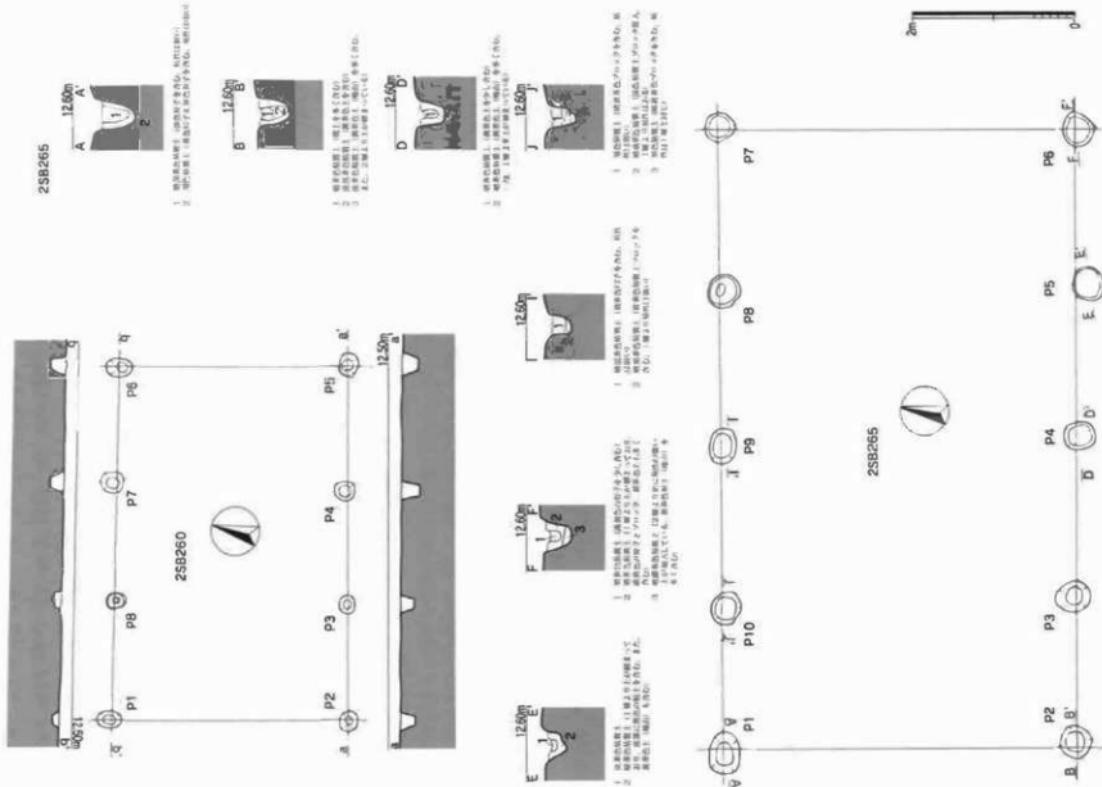


Fig. 35 2SB260 + 265毫溝圖 (1/60)

(2.85~2.05m)、植物面積12.77 m<sup>2</sup> (≈3.83坪)で、南北幅はN=15° 01' 37" →Wの方位を示す。更に各柱穴周囲はP1-P2間2.95m、P2-P3間1.45m、P3-P4間1.40m、P4-P5間1.57m、P5-P6間2.85m、P6-P7間1.45m、P7-P8間1.45m、P8-P1間1.50mを測る。

### 2SB265 (Fig.35, Pla12)

調査区C内の東西側で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1-P10) の平面プランはほぼ円形を呈し、残存する柱穴の深さは0.30~0.55mを測る。建物の規模は東西4間 (7.57~7.73m) ×南北1間 (4.35~4.40m)、建物面積33.09m<sup>2</sup> (≈9.93坪)で、南北幅はN=9° 09' 04" →Wの方位を示す。更に各柱穴周囲はP1-P2間4.35m、P2-P3間0.80m、P3-P4間0.20m、P4-P5間1.87m、P5-P6間1.90m、P6-P7間1.40m、P7-P8間0.20m、P8-P9間1.93m、P9-P10間0.00m、P10-P1間1.80mを測る。P1-P2・P3-P4・P5-P6においては径0.10~0.20mの柱痕跡を確認した。

### 2SB270 (Fig.36, Pla12)

調査区C内の東西側で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1-P10) の平面プランはT字形または梢円形を呈し、残存する柱穴の深さは0.30~0.61mを測る。建物の規模は東西4間 (8.97~9.05m) ×南北1間 (4.10~4.15m)、建物面積37.31m<sup>2</sup> (≈11.20坪)で、南北幅はN=5° 37" →Wの方位を示す。更に各柱穴周囲はP1-P2間4.15m、P2-P3間0.35m、P3-P4間2.45m、P4-P5間12.05m、P5-P6間2.12m、P6-P7間4.10m、P7-P8間0.20m、P8-P9間12.00m、P9-P10間2.40m、P10-P1間2.45mを測る。P1-P2間9.0mにおいては径0.10~0.18mの柱痕跡を確認し、P1-P3・P5においては柱穴底部に粘土を敷き詰めていた。ところで、当獨立柱建物においてはP4-P9間からP11、P6-P7間からP12が確認されている。調査時では当獨立柱建物には関係ないものとして判断していたが、P1-P3・P5の1間×1間、P4-P9の2間×2間の2種がそれ独立する建物であることも考えられる。

### 2SB275 (Fig.36)

調査区C内の東西側で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1-P8、うちP4は擾乱を受ける) の平面プランは円形または梢円形を呈し、残存する柱穴の深さは0.14~0.45mを測る。建物の規模は東西3間 (5.68~6.15m) ×南北1間 (2.97~3.09m)、建物面積17.30m<sup>2</sup> (≈5.19坪)で、南北幅はN=15° 49' 56" →Wの方位を示す。更に各柱穴周囲はP1-P2間2.97m、P2-P3間2.15m、P3-P6間3.08m、P6-P7間2.22m、P7-P8間1.92m、P8-P1間1.54mを測る。P6においては径0.15mの柱痕跡を確認し、柱穴底部に粘土を敷き詰めていた。

### 2SB280 (Fig.37)

調査区C内の東西側で検出した東西側の独立柱建物である。柱穴 (P1-P10) の平面プランは円形または梢円形を呈し、残存する柱穴の深さは0.08~0.59mを測る。建物の規模は東西3間 (6.03~6.67m) ×南北2間 (3.67~3.95m)、建物面積24.67m<sup>2</sup> (≈7.40坪)で、南北幅はN=12° 03' 40" →Wの方位を示す。更に各柱穴周囲はP1-P2間2.60m、P2-P3間1.67m、P3-P4間2.15m、P4-P5間2.05m、P5-P6間2.47m、P6-P7間2.18m、P7-P8間1.75m、P8-P9間0.90m、P9-P10間2.28m、P10-P1間1.85mを測る。P4-P5においては径0.12m前後の柱痕跡を確認している。

### 2SB285 (Fig.38, Pla12-13)

調査区C内の東西側で検出した東西側の独立柱建物である。当調査区から検出した最大級の独立柱建物で、柱穴 (P1-P12) の平面プランはほぼ円形を呈し、残存する柱穴の深さは0.26~0.68mを測る。建物の規模は東西4間 (8.45~8.54m) ×南北2間 (5.08~5.30m)、建物面積43.98m<sup>2</sup> (≈13.20坪)で、南北幅はN=10° 01' 28" →Wの方位を示す。更に各柱穴周囲はP1-P2間2.33m、P2-P3間0.75m、P3-P4間2.25m、P4-P5間1.98m、P5-P6間2.02m、P6-P7間2.20m、P7-P8間2.20m、P8-P9間2.80m、P9-P10間2.50m、P10-P11間1.92m、P11-P12間2.12m、P12-P1間2.30mを測る。全ての柱穴からは径0.09~0.25mを測る柱痕跡若しくは柱抜き取り痕を確認しており、土層断面から柱の周間にには粘土が敷き詰められている様子を見赜ることができた。

### 2SB290 (Fig.39)

調査区C内の西側で検出した東西側の獨立柱建物である。柱穴 (P1-P8) の平面プランは円形または

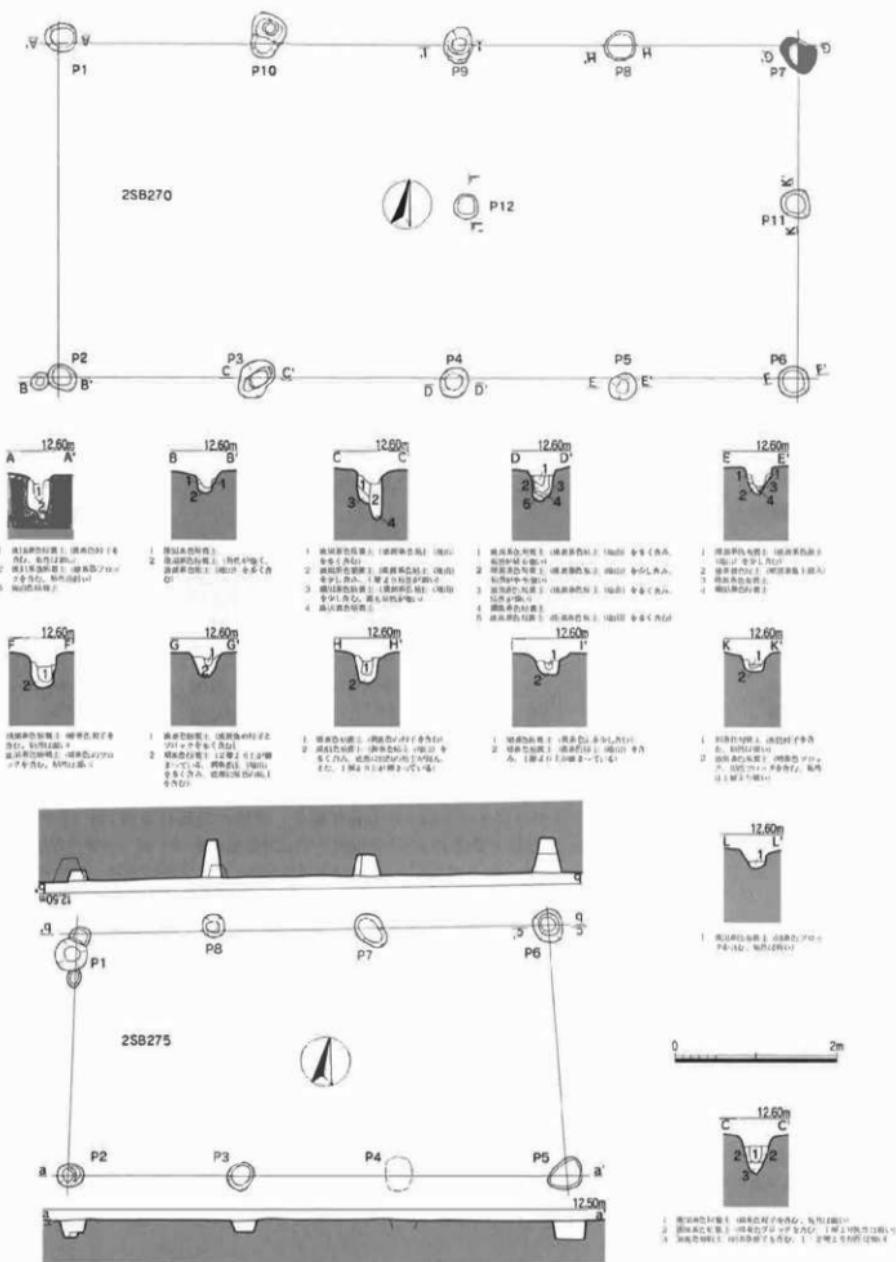


Fig.36 2SB270・275実測図 (1/60)

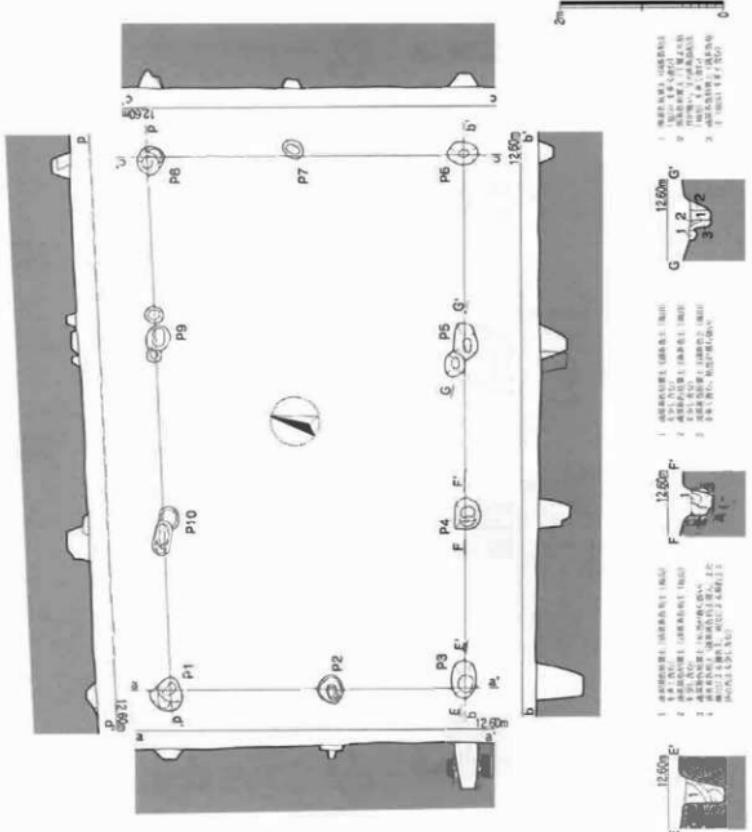


Fig.37 2SB280実測図 (1/60)

は格円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.14～0.46mを測る。建物の規模は東西3間（5.75～5.82m）×南北1間（2.75～2.98m）、建物面積6.32m<sup>2</sup>（ $\approx$ 4.90坪）で、南北軸はN—7°48'—Wの方位を示す。更に各柱穴間にはP1—P2間2.75m、P2—P3間2.05m、P3—P4間1.70m、P4—P5間2.00m、P5—P6間2.98m、P6—P7間1.92m、P7—P8間1.95m、P8—P1間1.95mを測る。P7・8においては後1.5m前後の柱真跡を確認した。

## 2SB295 (Fig.39)

調査区C内の中西部で検出した東西軸の掘立柱建物である。柱穴（P1～P8）の平面プランには円形抜または格円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.19～0.46mを測る。建物の規模は東西3間（5.88～5.91m）×南北1間（4.28～4.35m）、建物面積25.31m<sup>2</sup>（ $\approx$ 4.90坪）で、南北軸はN—10°52'06"—Wの方位を示す。更に各柱穴間にはP1—P2間4.28m、P2—P3間1.95m、P3—P4間1.95m、P4—P5間1.98m、P5—P6間4.35m、P6—P7間2.15m、P7—P8間1.66m、P8—P1間2.10mを測る。P4・7・8においては後1.0～0.15mの柱軸跡を確認した。柱穴P1～8は切り合った複数の柱穴が確認されており、幾度の建て直しが行われていることを示唆する。

## 2SB300 (Fig.40)

調査区C内の中西部で検出した南北軸の掘立柱建物である。柱穴（P1～P8）の平面プランにはほぼ円形状を呈し、残存する柱穴の深さは0.06～0.29mを測る。建物の規模は東西1間（3.56～3.76m）×南北3間

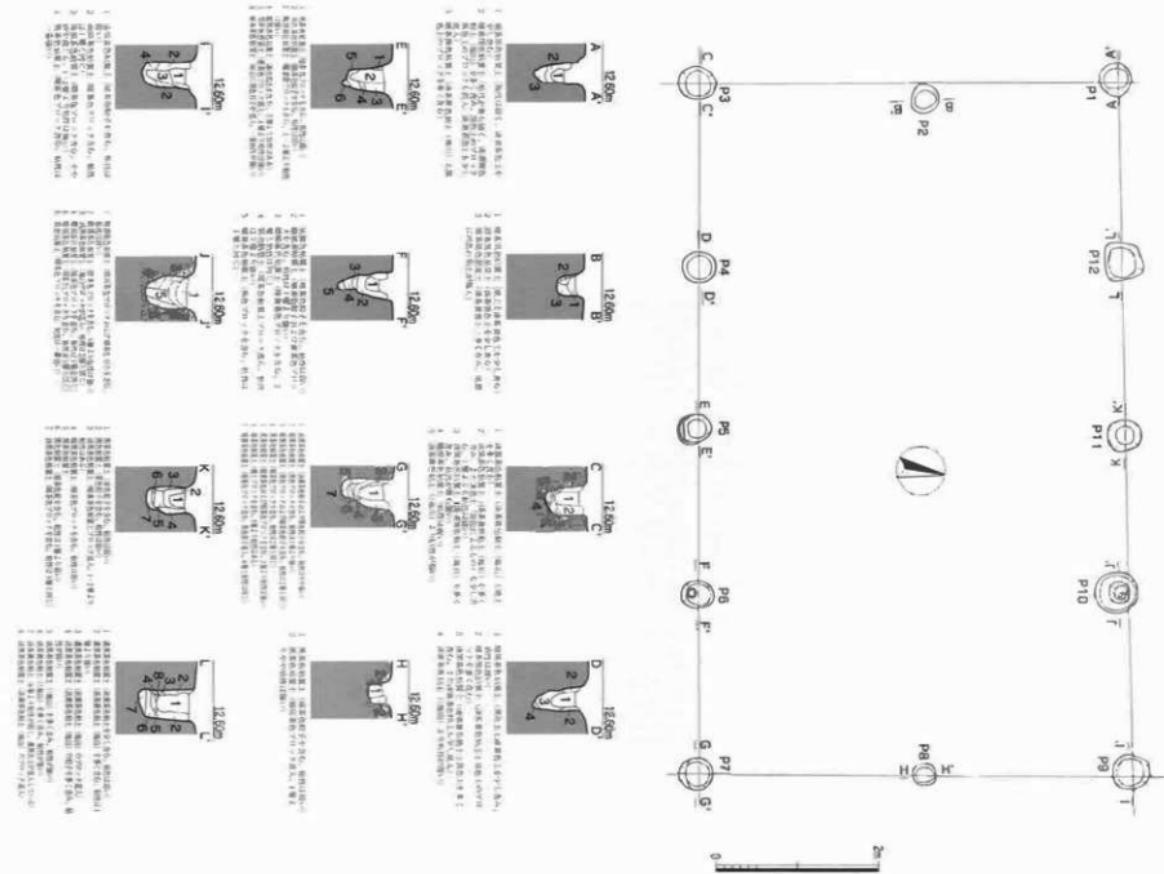


Fig.3B 2SB285実測図 (1/60)

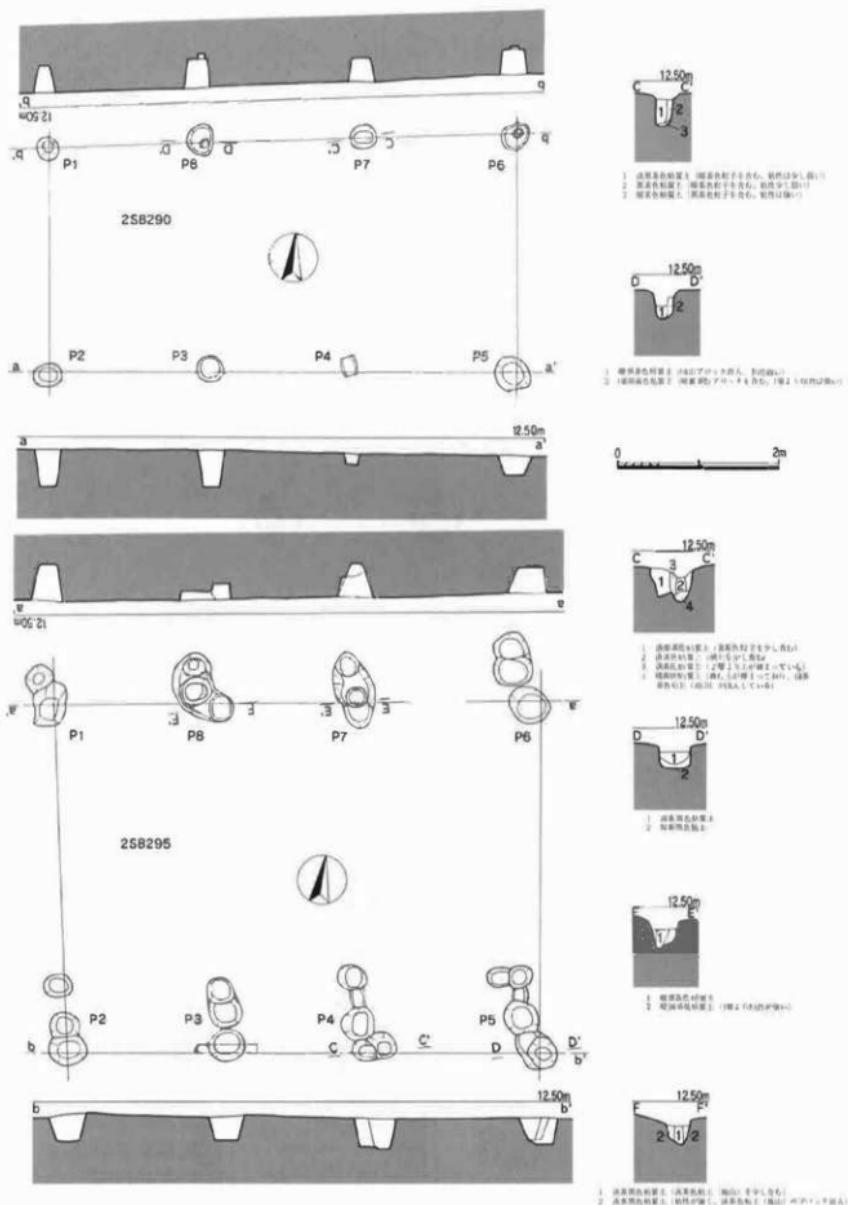


Fig.39 2SB290・295実測図 (1/60)

(5.06～5.11m)、建物面積  
18.41m<sup>2</sup> ( $\approx 5.52$ 坪) で、南  
北軸はN—12°43'27"—  
Wの方角を示す。更に各柱  
穴間はP1—P2間1.68m、P2  
—P3間1.72m、P3—P4間  
1.66m、P4—P5間3.76m、P5  
—P6間1.17m、P6—P7間  
2.72m、P7—P8間1.22m、P8  
—P1間3.56mを測る。

### 2SB305 (Fig.40)

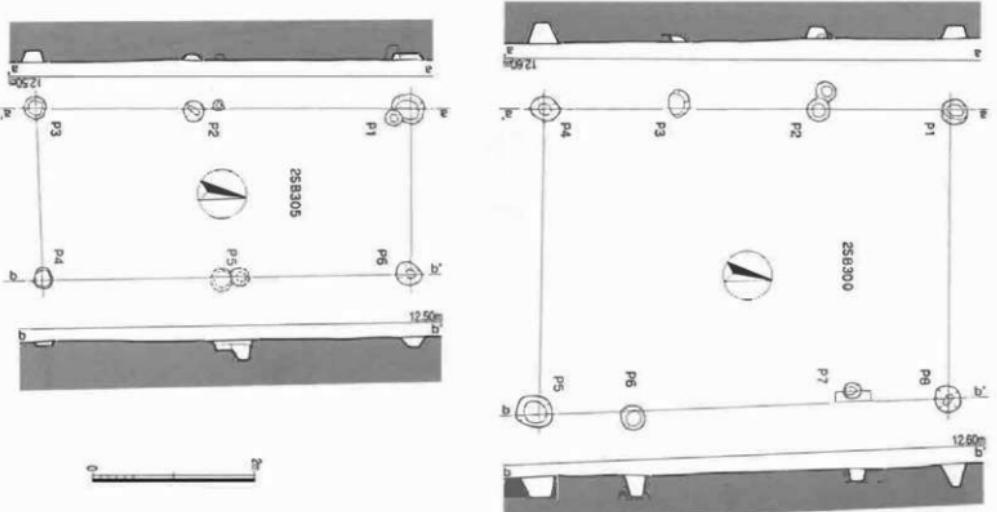
測量区C内の西端で検出  
した南北棟の獨立柱建物で  
ある。柱穴 (P1～P6) の平  
面プランはほぼ円形缺を呈  
し、残存する柱穴の深さは  
0.05～0.24mを測る。建物の  
規模は東西1間 (2.04～  
2.15m) ×南北2間 (4.58～  
4.61m)、建物面積10.12m<sup>2</sup>  
( $\approx 3.03$ 坪) で、南北軸はN  
—11°34'19"—Wの方位  
を示す。更に各柱穴間はP1  
—P2間2.30m、P2—P3間  
2.31m、P3—P4間2.15m、P4  
—P5間2.47m、P5—P6間  
2.11m、P6—P1間2.04mを測  
る。

溝

### 2SD050 (Fig.41, Pla.13)

測量区B内のはば中央部  
で検出した南北方向の溝  
で、約10m分を確認した。  
溝の北端は2SD060に接続す  
るが切り合はない。溝の  
前面は複合形状を呈し、溝  
底はほぼフラットな状態で  
ある。上幅約1.30m、下幅  
約0.55m、深さ約0.75mを測  
る。黒茶色土を基剣とした  
填土で、土層断面では東西  
からの流れ込んだ堆積状況  
が觀察できた。堆積状況か  
ら溝は空堀で、土堤等の施  
設はなかったものと考える。出土遺物は須恵器(鉢)、土師器(小皿・指鉢)、乗付(片)等を認めた。

Fig.40 2SB300・305測量図 (1/60)



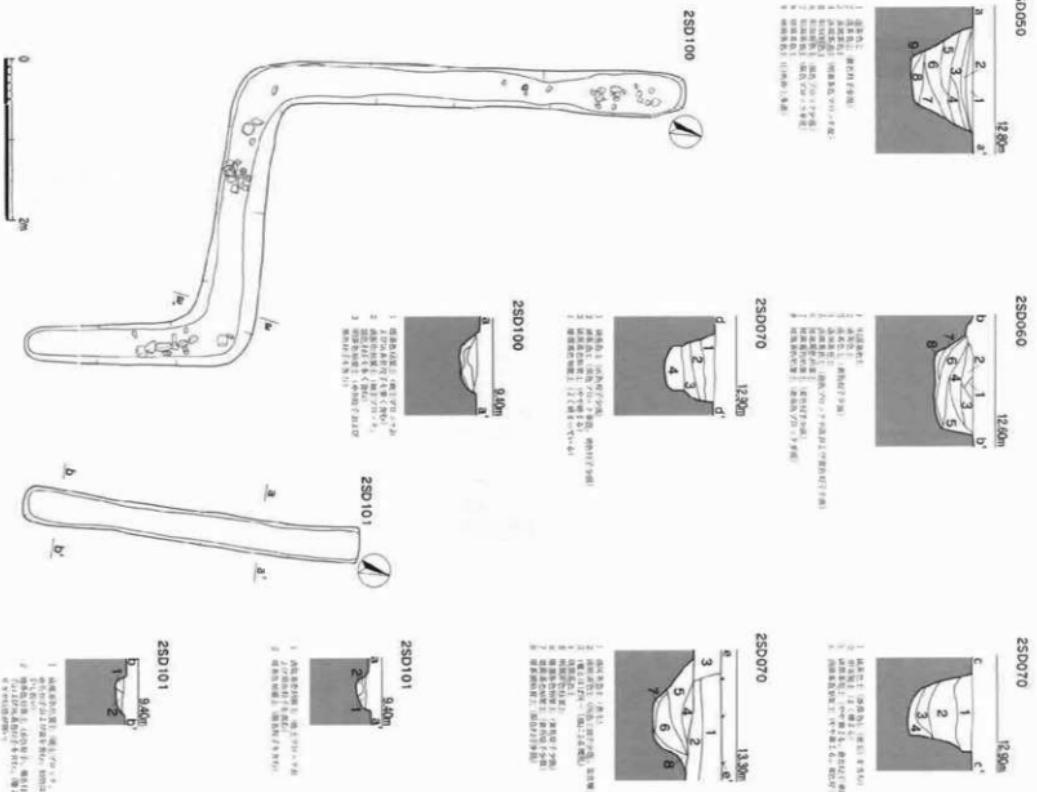


Fig. 41 溝渠測図 (1/60)

2SD060 (Fig.41, Pla.14)  
測量区B内の北部から中央部にかけて検出した南北方向の溝で、約2.3m分確認した。溝幅の方はN-7° 41' 18"-Wで、2SD050とはほぼ同位を示す。(溝の断面は逆台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態である。上幅約1.2m、下幅約0.9m、深さ約0.4mを測る。黒茶色土を基調とした風土で、土質

断面では東西からの流れ込んだ堆积状況が観察できた。堆積状況から2SD050と同じく、空堀で土堤のような施設を備えていた構造であったと考える。出土遺物は須恵器(鉢)、土師器(鉢・横鉢)、壺付瓶、陶器(常滑窯製・精錐)等を認めた。

#### 2SD070 (Fig.41, Pla.14, 15)

調査区B内のはば中央部から調査区C内の東側にかけて検出しまし東北方向の溝である。溝の北部は2SD050から東方へ約3.5m距離を開け、溝軸方位N $-7^{\circ} 41' 18'' -W$ を示しながら約55m分岐下する。溝の断面は逆台形状を呈し、溝底はほぼフリットな状態である。上幅約0.95m、下幅約0.55m、深さ約0.80mを測る。黒茶色土を基調とした風土で、上層断面では輕ねレンズ状堆積を呈していた。堆積状況から、溝は空堀で土壤のようない繊維はなかったものと考える。出土遺物は土師器(小皿・蓋・鉢)、青磁(片)、壺付(片)等を認めた。

#### 2SD100 (Fig.41)

調査区C内の西部で検出した。上幅約0.45~0.78m、下幅0.26~0.38m、深さは約0.25mを測り、断面は逆台形状を呈する。溝の平面プランは、2SB295の西側及び南西側を沿うように鉤状に屈曲して検出されており、2SB295の崩落ち溝である可能性が高い。ところで、溝の堆土中からは軽井間にわたって焼土が確認され、溝底からは多くの小石と土師器(小皿)、壺付(碗)等が出土している。この状況から想定されるのは、2SB295が焼失したために焼土が流れ込んだと考えるのが妥当で、このことは2SB295が幾度か繰り重ねられている遺物であつたことからも理解できる。溝幅はN $-1^{\circ} 45' 58'' -W$ を示す。

#### 2SD101 (Fig.41)

調査区C内の西部で検出した南北溝で約4.1m分を確認した。溝の北端は擾乱を受けているため終息しているが、元は2SD100に繋がっていたものと想定されることから用溝ら溝であったと考えている。堆土には2SD100と同じ広範囲にわたりて焼土が確認されたが小石等は出土していない。溝軸の方位はN $-0^{\circ} 38' 52'' -W$ を示す。東方には2SB295が隣接する。出土遺物は土師器(鉢・土鍋)等を認めた。

#### 2SD102 (付図2)

調査区B内のはば中央部で検出した東西方向の溝である。著しく削平を受けており残存状況は極めて悪かった。第1次調査で確認した溝(1SD010)の延長部であり、出土遺物は皆無であった。

#戸

#### 2SE010 (Fig.42, Pla.16)

調査区C内北西部で確認した素掘りの井戸

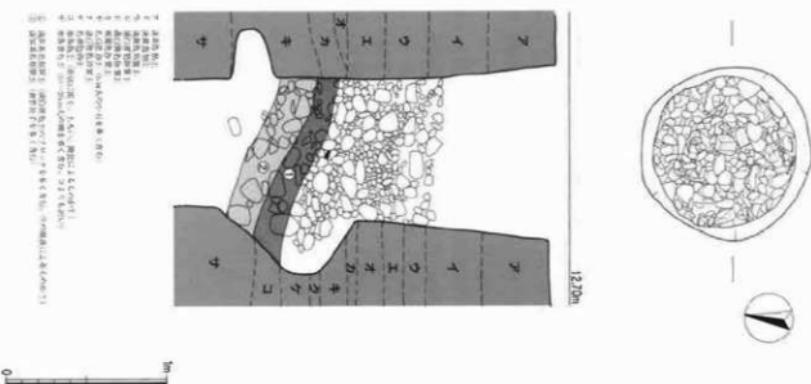


Fig.42 2SE010実測図 (1/30)

である。平面プランはほぼ円形を呈し、径1.07m程度を測る。造構体前面から約0.70mまで手振りによる掘削を施したが、危険防止のためこれより下位は垂直で半壁<sup>レ</sup>だ。黒紫色砂質土を基調とした開土である。

この集石は最大で1.30mの層を呈し、下位では次第に密度が薄くなっている状況であった。ところで、両井の下位は遺構焼出層から約1.20-1.75mの深さで壁面が抉られていた。これは、このレベルにおいて井戸の壁面がもろくなっているだけで、当時の水深レベルを示唆するものである。出土遺物は須恵器

撮影を断念した。

2SK005 (Fig.4.3)

調査区B1北端で露出した構成層の土壌で、黒茶色土を基調とした風土で長軸1.50m、最幅0.94m 深さ0.17mを測る。土壌器(小皿・坯)が出土した。

調査区C内南部で検出し

たため切り合いは不明である。幅0.92m、深さ0.16mを測る。遺構底部からは0.15m位の石を構成する「砂利層」が認められた。<sup>150</sup> 例題題(土塁)が川岸上に立っている。

2SK055 (Fig.3)

で、長軸1.76m、短軸1.16m、深さ0.23mを測る。遺物は土削器( $H_1$ )が僅かに出土した。

調査B内東部中央で検出した土境で平面プランは不整椭円形を呈する。長軸3.06m、短軸2.12m、深さ0.45mを測定。土は黒茶色土多基層と一層層である。遺物は、陶器(住)、石器(サヌカド製)、

2SK075 (Fig.43, Pn.18) が出土している。

25kmの北端を横にした開先長方形の土堤で長幅4.5m、堤高1.5mを測る。堤脚内側は北端と南端で留めがあり、北端の深さは約0.40m、東端の深さは約0.65mを測る。遺物は須磨器（鉢）、手師器（片）

が出来立っている。  
2SK076 (Fig.43, P4.19)

調査区の東北隅で発出し、道標の北端は復元を受けている。幅0.99m、深さ0.40mを測り、ほぼ完形の土輪器（小皿）が4枚出土した。埴土は黒茶色土であった。

調査区C内北部中央で検出し、燐長方形の上坑である。長軸5.46m、短軸3.57m、深さ0.10~0.20mを

卷之三

調査区C内北部中央で発出した土坑で平面アランは不整規円形底を呈する。幅2.83m、深さ0.25mを測り、填土は淡黒茶色土を基調とする2層であった。遺物は須恵器(外)、土師器(片)が出土した。

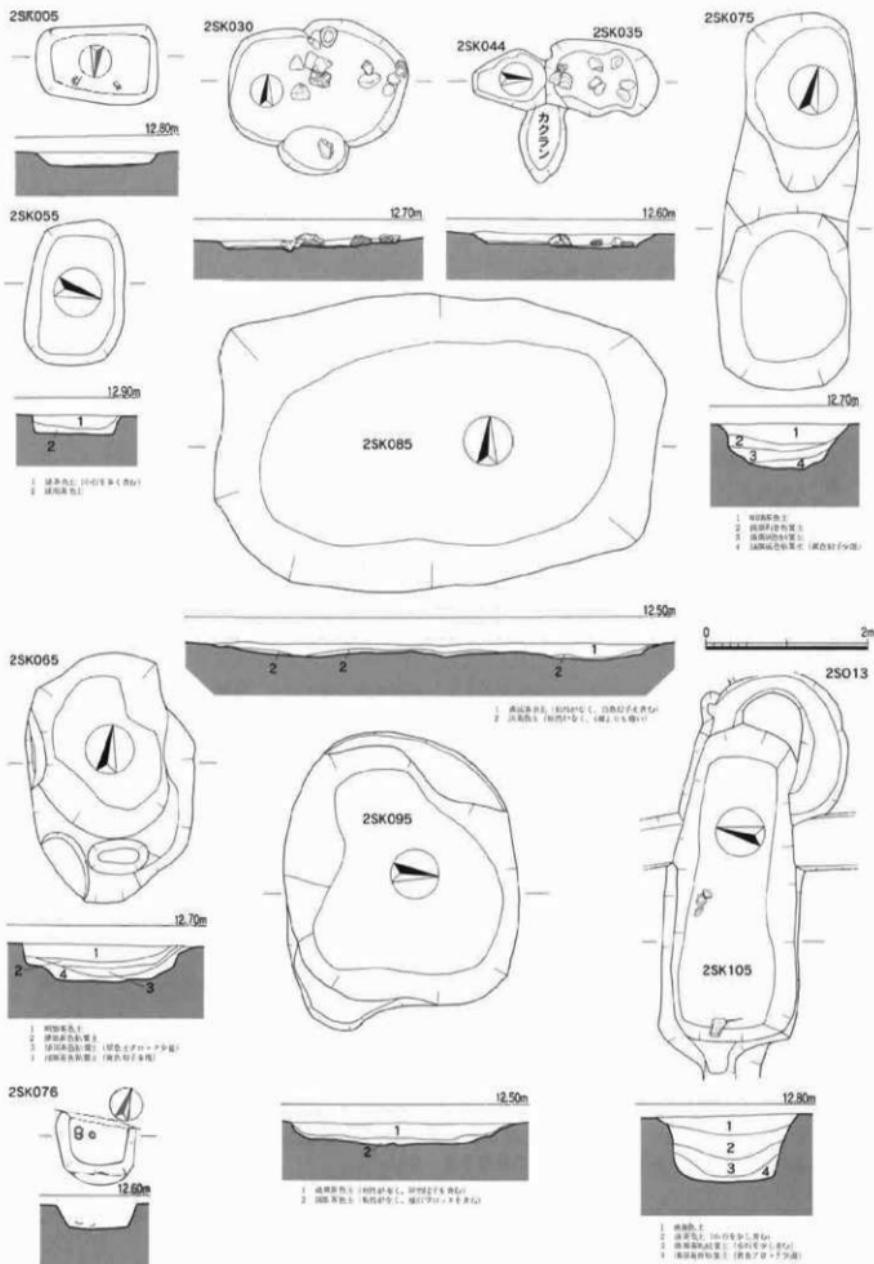


Fig.43 土坑寢測図 (1/60)

**2SK105 (Fig.43, Pla.19)**

調査区B内北西部で検出した隅丸長方形の土塊である。遺構の東部は傾斜である2S—013に切られ、則土は淡茶色土、淡黒茶色粘質土を基調とした4層でレンズ状に堆積する。遺構底面はほぼアラットで、  
⑤ 高さ9.2m、幅約1.75m、深さ0.81mを測る。遺物は土師器(小皿・片)、陶器(片)等が出土した。

**(3) 出土遺物****獨立性遺物****2SB215—P3 (Fig.44, Pla.20)****須磨器**

鉢 (1) 口縁部の細片で、口径28.00cm  
を後削する。口縁部外面はヨコナナデ、体

部外面はナナデ、内面は煤が付着している  
ため調整不明であるが、僅かに刷毛目調  
整痕を認める。胎土は微砂粒を多く含む。

**2SB255—P7 (Fig.44, Pla.20)****土師器**

火鉢 (2) 口縁部の細片である。外削面には煤が薄く付着し、内外削面はヨコナナデ調整である。

**2SD060 (Fig.45, Pla.20)****須磨器**

土鉢 (3・4) 3は第1口縁、4は壁には煤が厚く付着する。口縁端部はヨコナナデ、内面は横方筋の細かい、  
刷毛目、口縁部外面は指揮さえ、体部外面は削め方柄の刷毛目が施される。4は玉縁状口縁で外面には  
煤が薄く付着する。口縁端部は工具によるナナデ、内面は横方向の細かい刷毛目、口縁部外面はヨコナナデ、  
体部外面は指揮さえ、体部外削面下位はケアリの調整が施される。

**瓦質土器**

火鉢 (5) 底部の底片で、底径26.20cmを復原する。逆台形其の脚を有し、外削には三角状の断面形を  
呈した突起を2点貼り付ける。調整は体部外面がヨコナナデ、底盤内外面は刷毛目である。

**常滑焼陶器**

火鉢 (6) 口縁部はN字状を呈する。口縁部はヨコナナデ、体部内面はヘラケズリ後一部ヨコナナデ、体部  
外面はヘラケズリの調整を施す。

**2SD070 (Fig.45, Pla.20)****土師器**

小皿 (8・9) 表に内外削面ヨコナナデで、外底は糸切りである。8は口径8.90cm、底径5.50cm、器高1.80cm、  
9は口径10.0cm、底径5.40cm、器高1.60~2.10cmを測る。

**土鉢 (10)**

玉縁状口縁を呈した細片である。口縁端部はヨコナナデ、内面は工具によるナナデ、外面には煤  
が厚く付着しているため調整不明である。

**火鉢 (11)**

口縁部の細片で、口径25.8cmを復原する。外削には三角状の断面形を呈した突起3条とボ  
タンキガ装飾が貼り付けられている。内外削面はヨコナナデ調整である。

**土鉢 (12)**

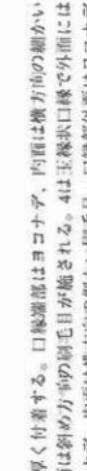
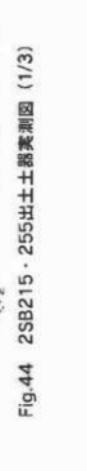
完形で長さ3.30cm、最大外径1.41cm、内径0.30cmを測る。

**陽器**

表 (13) 口縁部の細片で、口径22.00cmを復原する。淡灰色の素地に淡緑色の釉を薄く施し、表面に  
は貫入が認められる。胎土は11~2mm程度の砂粒が多く含む。

**鏡付**

皿 (14) 底部の細片で、高台径7.50cmを復原する。灰白色の素地にやや青みがかった毛釉を施すが、



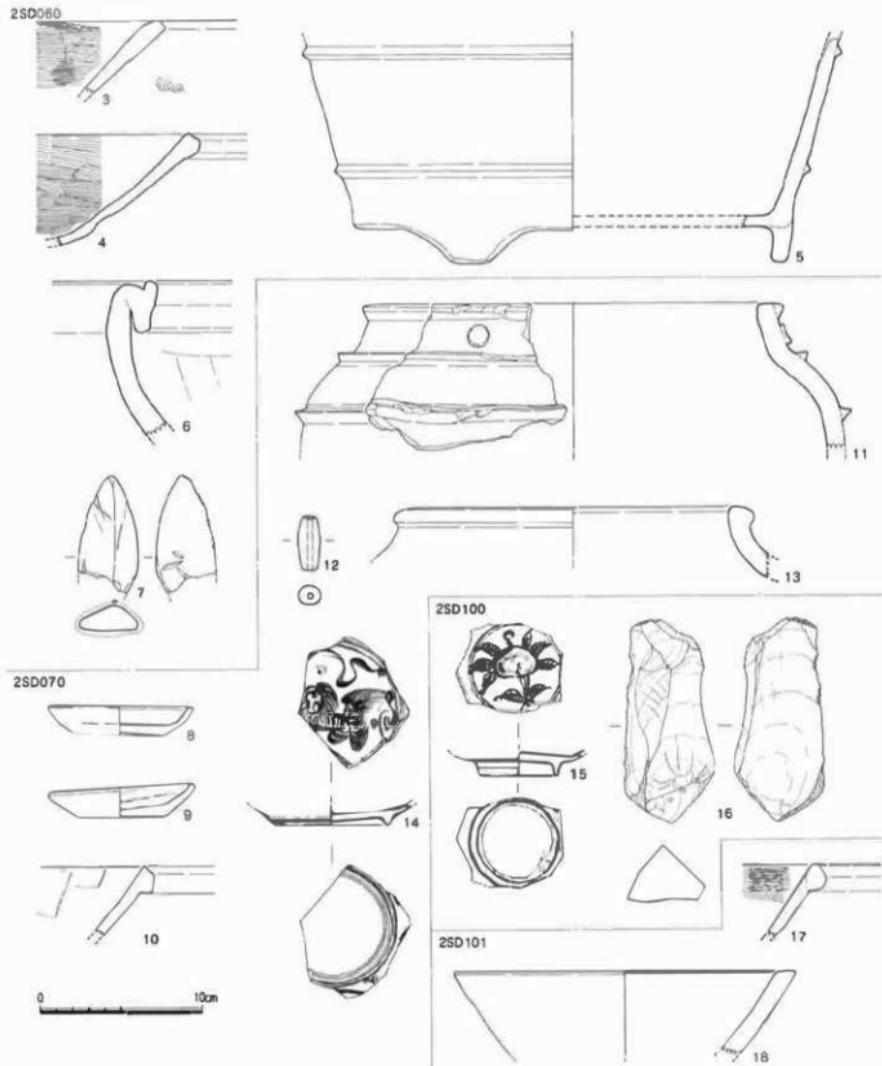


Fig.45 溝出土遺物実測図 (1/3)

程付けは露胎である。見込みにはややくすんだ呉須で花文を描く。

2SD100 (Fig.45, Pla.20・21)

**塗付**

樅 (15) 底部の細片で、高台径4.80cmを測る。乳白色の素地にやや青みがかかった透明釉を施すが、墨付けは露胎である。見込みにはくすんだ呉須で花文を描き、高台内には筋が施されている。

**石器**

石核 (16) 石材はサスカイトで、佐賀産と思われる。かなり風化しており、表面下位には加工痕が認める。

**井戸**

2SE·D01 (Fig.45, Pla.21)

**土師器**

土鍋 (17) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁端部はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目、外面は押さえである。

**火鉢**

2SE·O10 (Fig.46, Pla.21)

**瓦質土器**

小皿 (19) 圓径8.60cm、底径6.20cm、器高1.60cmを復原する。内外面はヨコナデで、外底は余切り。土鍋 (20) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁端部はヨコナデで、外面は煤が厚く付着しているため調整不良である。

**壺**

茶釜 (21・22) 21は口縁部の細片で、口径20.50cmを測る。調整は口縁端部ヨコナデ、口縁部内外側刷毛目、肩部内面押さえ、体部外面ナデ、体部内面ヨコナデである。22は体部の細片である。外面には鈍に付け、鋤の下面は煤が厚く付着する。内面は体部上位は横方向の刷毛目、下位はヨコナデの薄盤で、外面は鈍上面及び体部上位がヨコナデ、下位は横方向の刷毛目の調整を施す。

**瓦質土器**

鉢 (23) 口縁部は素口縁でやや外反する。内面はやや細かい刷毛目調整であるが、外面は煤が付着し、表面剥離のため調整不明である。

**壺**

椎体 (24) 嵩部の細片で、底径16.00cmを復原する。7本単位の嵩口を体部及び底部の内面に施す。嵩土に砂粒を多く含む。

**石製品**

焼臼 (25・26) 25は上白で底径は26.00cm、高さ9.50cmを測る。側面に挽き手用の棒差し口を施し、背面には筋目を施す。26は下臼の取出口の先端部で断面は四形状を呈する。最大幅10.10cm、高さ5.95cmを測る。

**石塔**

(27) 石材は幾灰岩製で塔身の一部と思われる。表面・側面の中央部には「月輪」、表面の右下には「月」が工具で彫られている。

2SE·O20 (Fig.47, Pla.22)

**土師器**

土鍋 (28) 玉縁状口縁を呈した細片である。口縁部はヨコナデ、体部内面は刷毛目後ナデ、体部外側は煤が厚く付着しており調整不良である。

**椎**

椎鉗 (29) 口縁部の細片で、口径27.00cmを測る。体部内面は横方向の細かい刷毛目後に放射状に筋目を施し、口縁端部から体部外側にかけては刷毛目の調整を施す。

**瓦質土器**

鉢 (30・31) 共に口縁端部に沈線を呈し、外面には煤が厚く付着する。31は口縁端部内面に面を作る。

**骨盤**

皿 (32) 口径11.40cm、高台径4.40cm、器高3.30cmを復原する。微細粒を多く含んだ褐灰色の素地に解

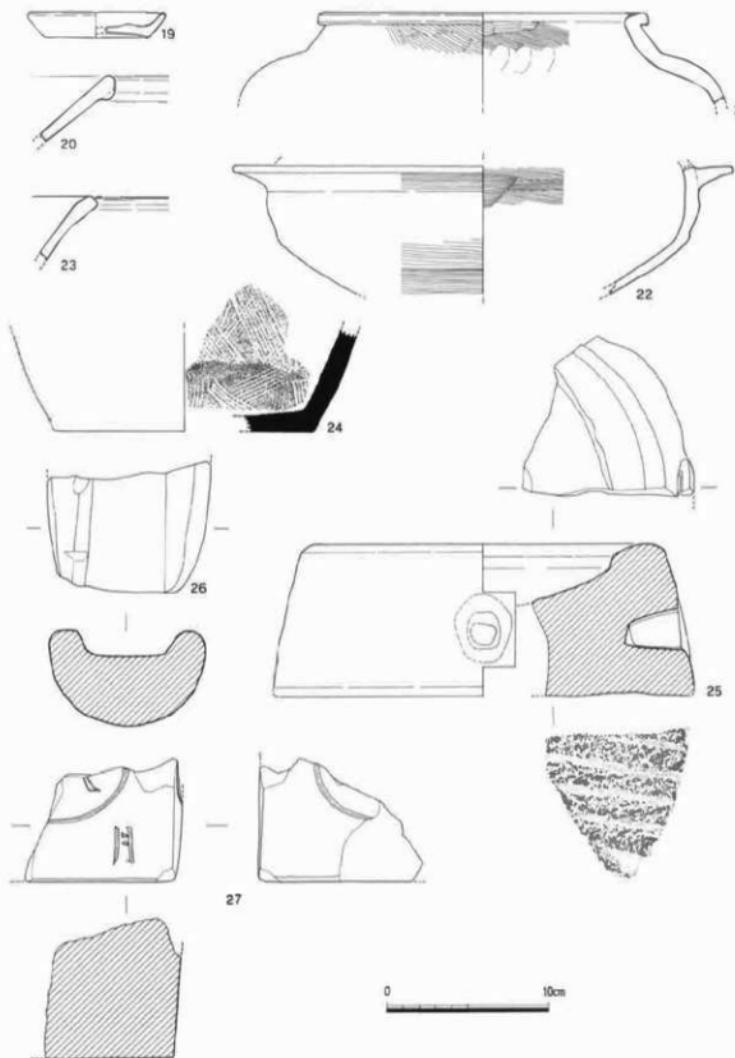


Fig.46 2SE010出土遺物実測図 (1/3)

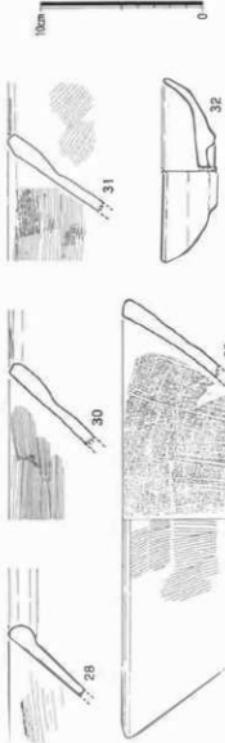


Fig.47 2SE020出土土器実測図 (1/3)

褐色の透明白釉を内外面に施釉するが、墨付けは露胎である。朝鮮系青瓷の可能性がある。

#### 土坑

2SK005 (Fig.48, Pla.22)

#### 土師器

小皿 (33) 口径9.00cm、底径6.60cm、器高.90cmを復原し、外底は斜切りで内外面はヨコナナデである。  
杯 (34~36) 34~36は口径3.15~14.60cm、底径10.00~10.90cm、器高2.55~3.00cmを復原し、外底は斜切りで内外面はヨコナナデである。36は内面に煤が付着している。

2SK023—カクラン (Fig.48, Pla.22)

#### 土師器

小皿 (37~39) 37~39は口径6.80~8.90cm、底径4.80~5.90cm、器高1.40~2.10cmを測り、外底は斜切りで内外面はヨコナナデである。

2SK025 (Fig.48, Pla.22)

#### 土師器

小皿 (40) 口径7.80cm、底径5.90cm、器高1.70cmを復原し、外底は斜切りで内外面はヨコナナデである。口縁部の一帯に油漬痕と思われる煤が厚く付着する。  
杯 (41~42) 41は口径11.00cm、底径4.30cm、器高3.10cm、42は口径11.00cm、底径4.20cm、器高3.20cmを復原し、共に外底は斜切り、内外面はヨコナナデである。

#### 陶器品

古鉢 (43~46) 何れも完形の「洪武通寶」(1368年初鋤)である。錢文は真書の書体で、43は背面に「浙」があるがその他の背面前は無文である。半径2.15~2.35cmを測る。

2SK030 (Fig.48, Pla.22)

#### 土師器

鉢 (47) 口縁端部に沈線を呈する。内面及び底部外周には横方向の細かい刷毛目、口縁部内外面はヨコナナデ、体部外周は縱方向の細かい刷毛目の調整である。外周には煤が付着する。

2SK035 (Fig.48, Pla.22)

#### 土師器

鉢 (48) 口径29.00cm、底径15.20cm、器高13.15cmを復原する。内面は本単位の掃目を洗浄状に、内底は不整円状に指目を施す。口縁部内外面はヨコナナデ、体部外面上位は斜め方向に指押さえ、体部下位はヘラタスリ、外底はナナデの調整である。

2SK037 (Fig.48, Pla.22)

#### 土師器

鉢 (49) 玉縁共口縁を呈し、口径50.00cmを復原する。口縁部及び体部の内面は横方向の細かい刷毛目、底部外周は刷毛目、口縁部外周にはヨコナナデ、体部外面上位は縦方向の刷毛目、体部下位は刷毛目。

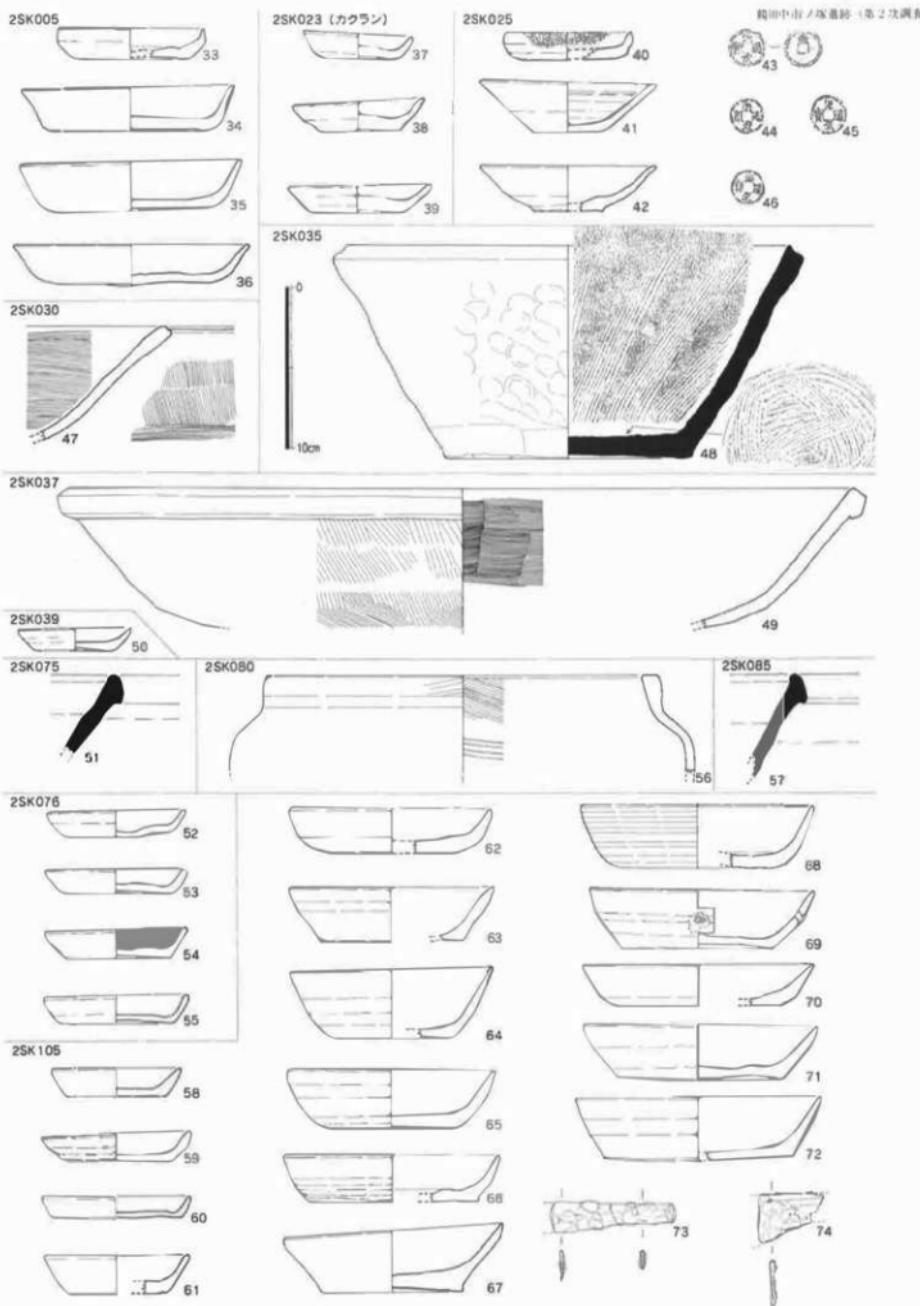


Fig.48 土坑出土遺物実測図及び古鏡拓影（1/3）

毛目後ヨコナマの調整である。外面には煤が付着する。

2SK039 (Fig.48, Pla.22)

**土師器**

小皿 (50) □径7.0cm、底径5.0cm、器高1.40cmを測る。外底は糸切りで、外面はヨコナマである。

2SK055 (Fig.48, Pla.22)

**粟播系須恵器**

鉢 (51) 玉縁状口縁を呈し、外面はヨコナマである。胎土は2mm程度の砂粒、微砂粒を多く含み、黒色粒子を少し含む。

2SK076 (Fig.48, Pla.23)

**土師器**

小皿 (52～55) 52～55は□径8.70～9.00cm、底径6.40～6.90cm、器高1.60～1.80cmを測る。外底は糸切りで、内外底はヨコナマである。

2SK080 (Fig.48, Pla.23)

**粟播系須恵器**

火鉢 (56) □径24.00cmを復原する。口縁部内外面は刷毛目、腹部外面はヨコナマ、肩部内面は刷毛目、肩部外面はヨコナマで後継毛目の調整を施す。内面には煤が付着する。

2SK085 (Fig.48, Pla.23)

**粟播系須恵器**

鉢 (57) 玉縁状口縁を呈し、外面はヨコナマである。胎土は2mm程度の砂粒、微砂粒を多く含み、黒色粒子を少し含む。

2SK105 (Fig.48, Pla.23)

**土師器**

小皿 (58～61) 58～61は□径8.00～9.20cm、底径5.90～7.80cm、器高1.40～2.25cmを復原する。外底は糸切りであるが<sup>41</sup>、60～61は板状压蓋が認められる。何れも内外面はヨコナマの調整である。  
平 (62～72) 62～72は□径12.60～15.20cm、底径7.40～11.80cm、器高2.60～4.20cmを復原する。62～71の外底は回転糸切り<sup>42</sup>であるが、72は静止の状態で糸切りを行っているようである。何れも内外面はヨコナマの調整で、69の体部には焼成後穴の穿孔を施している。

**鉢**

方子 (73) 墓尻から刃部にかけての割合で先端は尖損する。現在長7.75cmを測り、片刃が両刃かの区別は不明である。

錐 (74) 現在長4.10cmを測り、横の断面は凸状を呈する。

ビット  
2SP027 (Fig.49, Pla.23)

**土師器**

小皿 (75) □径9.40cm、底径8.80cm、器高2.00cmを測る。外面はヨコナマ、外底は静止の状態で糸切りを行っているようである。

2SP052 (Fig.49, Pla.24)

**土師器**

2SP053 (Fig.49, Pla.24)

**土師器**

土鍋 (77) 長さ4.45cm、外径0.80cm、内径0.25cmを測る。

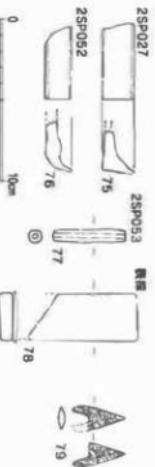


Fig.49 その他の出土遺物測図 (1/3)

### 表探 (Fig.49, Pls.24)

#### 石製品

石材は花崗岩製で、表面を砥面として使用している。現存長は6.70mを測る。

#### 石塊 (78)

石碑は黒曜石製で、块りが深く片側面を欠損する。

#### (4) 小結

調査の結果、掘立柱建物22棟、溝5条、井戸3基、土坑10基等が確認された。

#### 掘立柱建物

掘立柱建物は調査区Cから東西向建物13棟、南北向建物4棟が確認されており、遺構のデータは後述の「IV.まとめ (Tab.4)」に表した。当遺跡の各掘立柱建物は、鶴田中筋・堀遺跡 (第1次調査) で確認された掘立柱建物群が示す規模とはほぼ同等であることから、相互に隣接した一連の遺構として捉えらる。また、調査区C内の西側に集中して配置されていることから地形的な規制がかかっていたことが窺える。

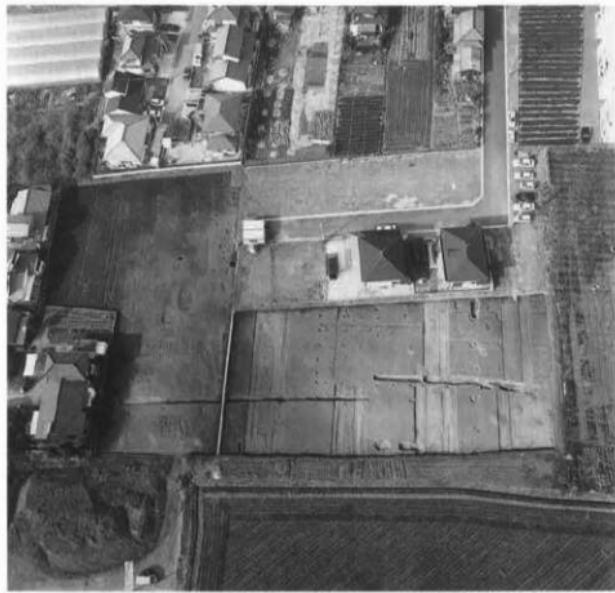
掘立柱建物から出土した遺物は、後に2SB215-P7から東播磨系須恵器 (鉢)、2SB255-P7から土師器 (火鉢) が認められているのみであるため時期的特徴には至っていないが、遺物に付随する2SD101 (雨落ち溝) からは14C代を比定する遺物が確認されており、参考資料として提示でききよう。さて、2SB295は建物の西邊及び南邊を沿うように斜抜に確認された雨落ち溝 (2SD100) を有する掘立柱建物である。注目されるのは、2SB296・火災を受けた建物であったことである。その廃止として、雨落ち溝である2SD100からは多量の焼土や小石が認められていること、建物を構成する各柱 (P7) 周土中には僅ながら炭化物を含んでいたこと、また、建て修繕を示唆する複数の柱穴が確認されていることによる。調査において火災遺物としては認識されるものは当建物のみであった。

今回の調査では、掘立柱建物の柱穴を意識的に半裁するまでのことで、柱代の構造が顯著に観察された。金般的にみると、柱穴の半裁アランは円形状または梢円形状を呈し、確認された柱幅は10~15cm程度を測る。一部の柱穴内部では、柱端にある柱穴底部に砂質土や粘質土、粘土が敷き詰められており、柱を支える周辺の埋土は粗いながらも版築状に粘質土を詰めている状況であった。

#### 溝

調査区B及びC内からは、(N-E方向)に北へする2SD050・060・070が確認された。各溝の配置状況は、調査区北部に2SD060 (N=7° 41' 18'' -W) が位置し、その南側にSD050が付設される。これより東方へ約1mの間隔をあけて、同位を示す2SD070が調査区内を貫通する。出土遺物をみてみると2SD060からは14C後半に比定される常滑窯 (焼)、2SD070からは16C後半に比定される柴焼 (III) が認められる。整理すると、溝は掘立柱建物とは同位を示し、また同時期に比定できることから、一連の集落に設けられた施設であったことが理解でき、跡の性格は集落を囲んだ区画溝であった可能性が考えられる。

3基 (2SE010・020・045) を確認し、井戸の配置状況は鶴田中筋ノ堀遺跡 (第1次調査) に似ている。3基の井戸は調査区C内のはざみ中央を南北Z方向に継続しており、井戸に不可欠な染み水の水脈は、井戸が配設するライン上にあったと推測される。ところで、井戸の調査はその特質な構造から大変危険な作業が伴う。雨内で行った発掘調査からも、これまで幾つかの井戸が陥れられながら、その大半は危険回避のため完掘までには至っていない。そこで、今回の調査では全ての作業が終了した後に重機で半裁することを試みた。対象としたのは2SE010で、半裁したことにより井戸の状況が調査員に覗えた。とりわけ注目されるのは、井戸壁を構成している地山の状況である。地山は標高11.80~12.60m域では粘土、標高11.67~11.80m域では粘土、標高11.33~11.67m域では砂質土、標高10.90~11.33m域では粘質土+砂質土、標高10.90m以下は赤茶色土を呈し、井戸壁においては西方で標高11.40m付近、東方で標高10.90m付近で抉られたように崩落していた。つまり、地山が粘質土から砂質土へと移行したレベルにおいて染み水があったことが理解でき、水源レベルは標高10.90~11.40m域であつまと推測される。井戸からは14C代を主体とした遺物が認められている。



鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）調査区全景（空中写真：真上から）



鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）掘立柱建物群（空中写真：真上から）

### 3.鶴田中市ノ塙遺跡（第3次調査）

#### (1)はじめに (Fig.50)

当遺跡は第3次市大字鶴田中市ノ塙417—外に所在し、標高12.5m位の低位段丘上に立地する。発掘調査は市営住宅鶴田団地建設事業に伴い、建物部分である1,277m<sup>2</sup>を実施した。調査期間は平成7年10月25日から平成8年3月31日まで実施し、この間、重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を行った。発掘調査及び写真撮影は小林勇作、遺構の実測は小林、水田佳子、江崎貴浩、奥村太郎が担当した。

調査区内からは柵列状遺構、掘立柱建物、溝、井戸、道路状遺構、土坑等が確認されたが、遺構の大半は、蚕勉強に施されていた溝溝によって著しく搅乱を受けていた。

#### (2) 條出遺構

##### 柵列状遺構

3SA120 (Fig.51)  
調査区内にはほぼ中央部から検出した南北方向の柵列状遺構で、P1～P7（6間分：10.05m）を確認した。图形は相立柱建物と類似するためその可能性も捨て切れないが、構造から間違せる可能性が認められなかったので柵列状遺構とした。柱穴の平面プランはほぼ円形状を呈し、P1～P2間1.82m、P2～P3間1.80m、P3～P4間1.79m、P4～P5間1.85m、P5～P6間1.87m、P6～P7間0.92mを測る。方位はN=7° 52' 59" -Wを示す。

調査区内の北西部で検出した東西幅の掘立柱建物で、柱穴（P1～P10）の平面プランは円形状または格円形状を呈する。建物の規模は東西4間（8.37m）×南北2間（3.95～4.25m）、建物面積34.23m<sup>2</sup>（南北0.27坪）で、南北軸はN=10° 48' 29" -Wの方を示す。更に各柱穴間はP1～P2間4.25m、P2～P3間2.35m、P3～P4間1.90m、P4～P5間1.65m、P5～P6間2.07m、P6～P7間3.95m、P7～P8間2.03m、P8～P9間2.10m、P9～P10間1.97m、P10～P1間2.02mを測る。P3、7～10においては径0.15～0.25mの柱頭跡を確認し、遺物はP2で施釉陶器（ト壺）、P3で青銅器（鉢）、P4で土師器（鳥形土製品）が出土している。



Fig.50 調査地点位置図 (第3次調査) 調査地点位置図 (1/2,500)

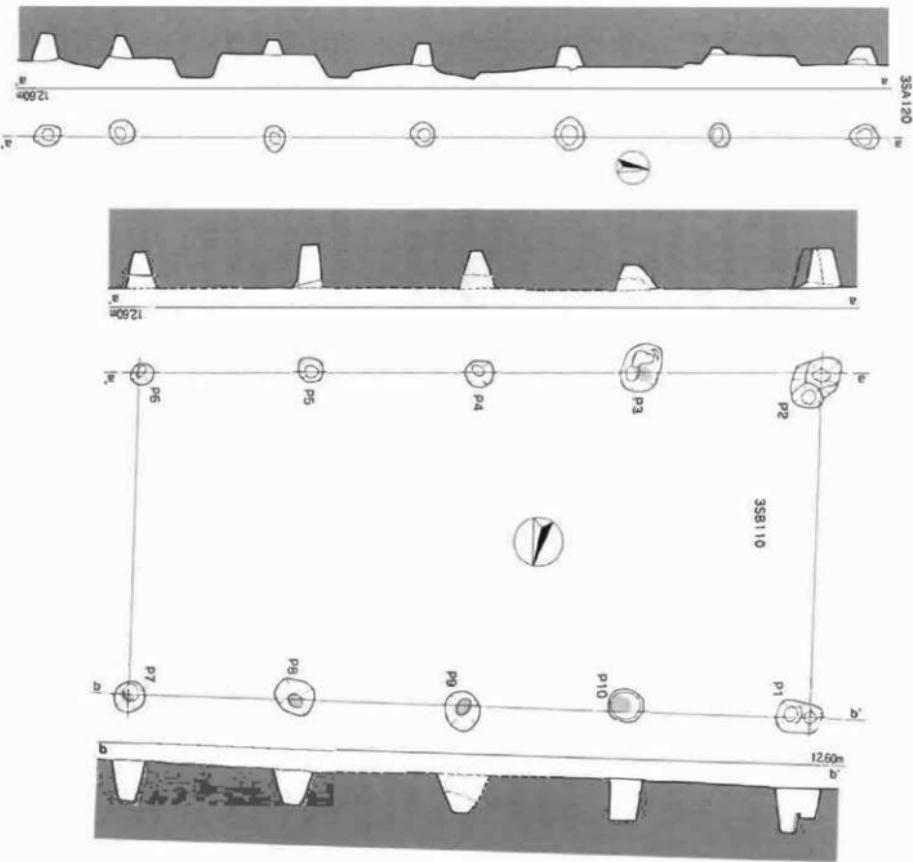


Fig.51 3SA120, 3SB110実測図 (1/50)

**3SB111 (Fig.52)**  
調査区内の西北部で検出した東西側の獨立な建物で、柱穴 (P1～P12) の平面プランは円形または格子形を呈する。建物の規模は東西4間 (7.85～8.07m) ×南北2間 (5.05～5.22m)、建物面積40.16m<sup>2</sup> (≈12.06坪) で、南北軸はN=11°29'20"-Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.77m、P2-P3間2.45m、P3-P4間2.05m、P4-P5間1.98m、P5-P6間2.13m、P6-P7間2.00m、P7-P8間2.65m、P8-P9間2.40m、P9-P10間2.05m、P10-P11間2.00m、P11-P12間1.75m、P12-P1間2.05mを測り、P4～11においては各0.12～0.25mの柱跡を確認した。P5～7、9～12においては同等の柱穴が隣接して2穴確認されており、少なくとも1回以上の修築等が施されている可能性が考えられる。

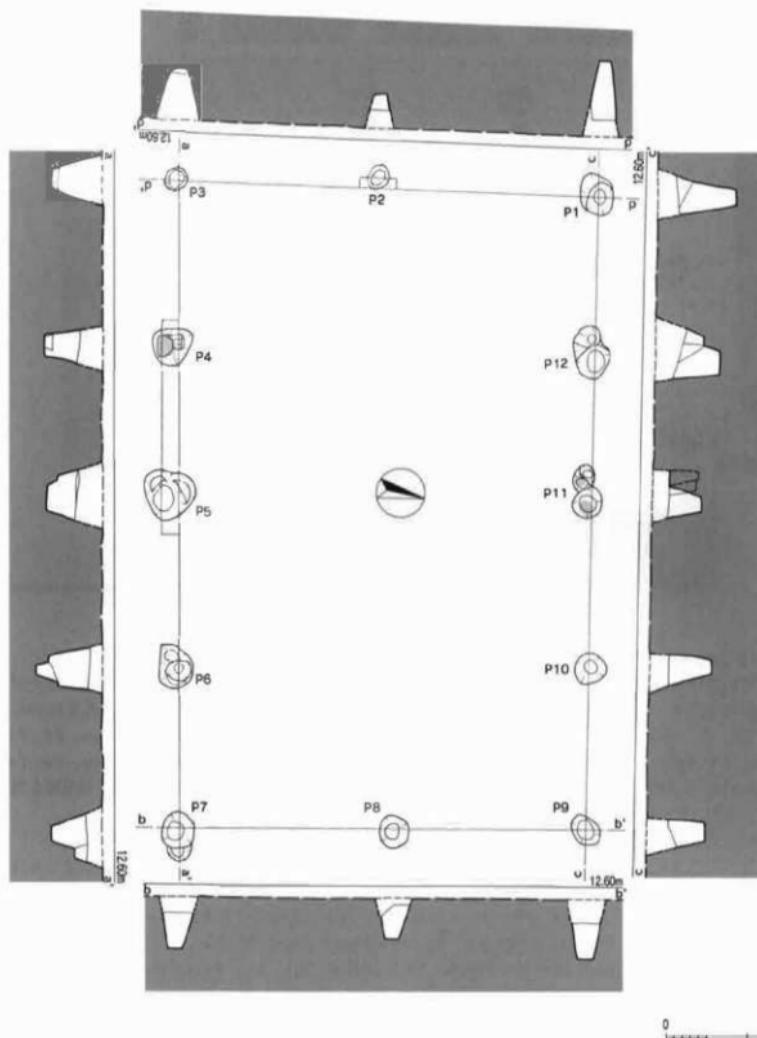


Fig.52 3SB111実測図 (1/60)

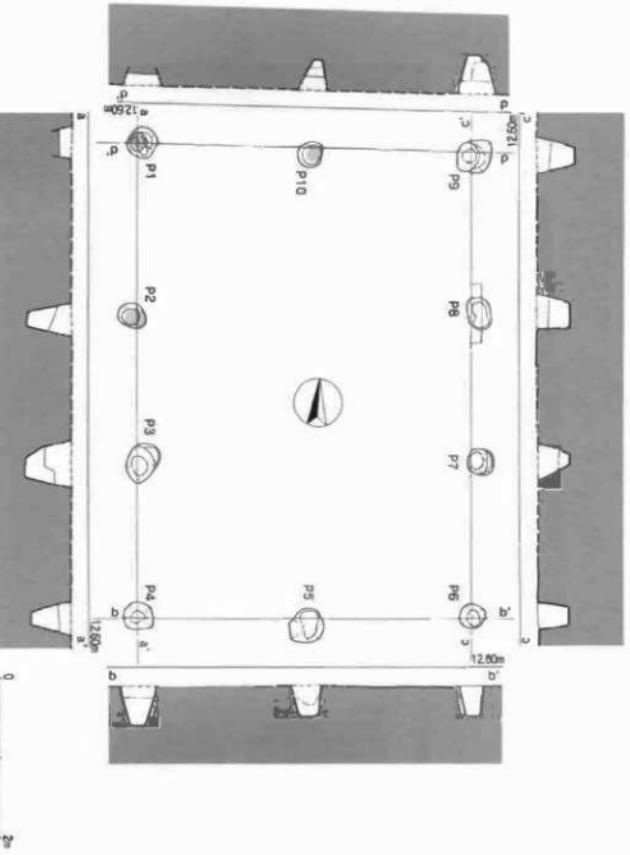


Fig.53 3SB112測定図 (1/60)

3SB112 (Fig.5.3)

調査区内の中央部で検出した構北棟の複数柱建物で、柱穴（P1～P10）の平面プランは円形または内円形状を呈する。建物の規模は東西2.0間（4.12～4.18m）×南北2.3間（5.73～5.93m）、建物面積24.08m<sup>2</sup>（≈7.23坪）で、南北軸はN-5°～48°-56'～Wの方位を示す。更に各柱穴周はP1～P2間2.23m、P2～P3間1.83m、P3～P4間1.88m、P4～P5間2.15m、P5～P6間2.03m、P6～P7間1.95m、P7～P8間1.78m、P8～P9間2.00m、P9～P10間1.95m、P10～P1間2.17mを測り、P1～2・10においては往1.15～2.26mの柱頭跡を確認した。なお、P1はレベル装置に剥落あり、立面図では上端部のみを示した。

副盆地内の西部は円形状を呈する。(約12.25坪)で、P3ⅢH2.30m、P3-P4ⅢH2.32m、P9-P10ⅢH2.91mにおいては後

調査区内の西隅で発生した東北吹雪の掘立柱遺物で、柱穴（P1-P12）の平面プランは円形状を呈する。建物の規模は東西4.4m（8.59~8.62m）×南北2.3m（4.80~4.85m）、建物面積40.80m<sup>2</sup>（≒12.25坪）で、南北軸はN=11°18'35"-Wの方角を示す。更に各柱穴間はP1-P2間2.50m、P2-P3間2.30m、P3-P4間2.27m、P4-P5間2.00m、P5-P6間2.15m、P6-P7間2.17m、P7-P8間2.53m、P8-P9間2.12m、P9-P10間2.20m、P10-P11間2.20m、P11-P12間1.75m、P12-P1間2.47mを測り、P1~4~7~9においては各0.15~0.32mの柱跡跡を確認した。

調査区内の四隅部で検出した東西側の柱立柱遺物で、柱穴（P1～P10）の平面アランは円形または内円形状を呈する。建物の規模は東西3間（7.15～7.72m）×南北2間（3.56～3.62m）、建物面積25.91m<sup>2</sup>（約7.78坪）で、南北側はN=2° 31' 14''～Wの方角を示す。更に各柱穴間はP6～P7間1.36m、P7～P8間1.76m、P8～P9間2.35m、P9～P10間2.43m、P10～P1間2.37mを測り、P10においては径0.15mの柱痕跡を確認した。P2は壊乱、P4・P5はSRK055によって消滅し、P1から土師器（小皿）が出土した。

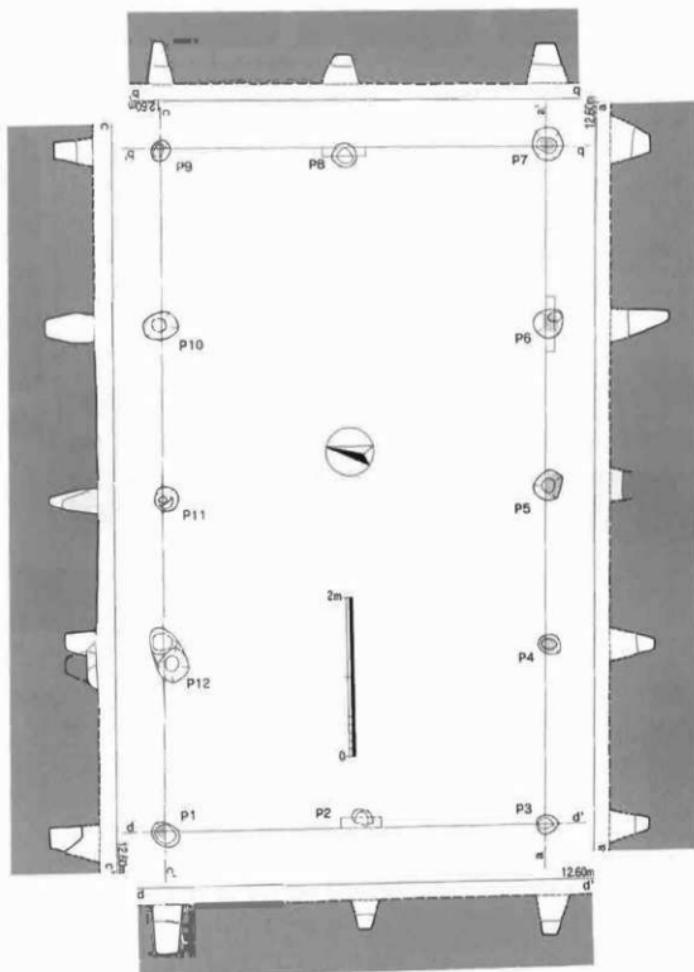


Fig.54 3SB113実測図 (1/60)

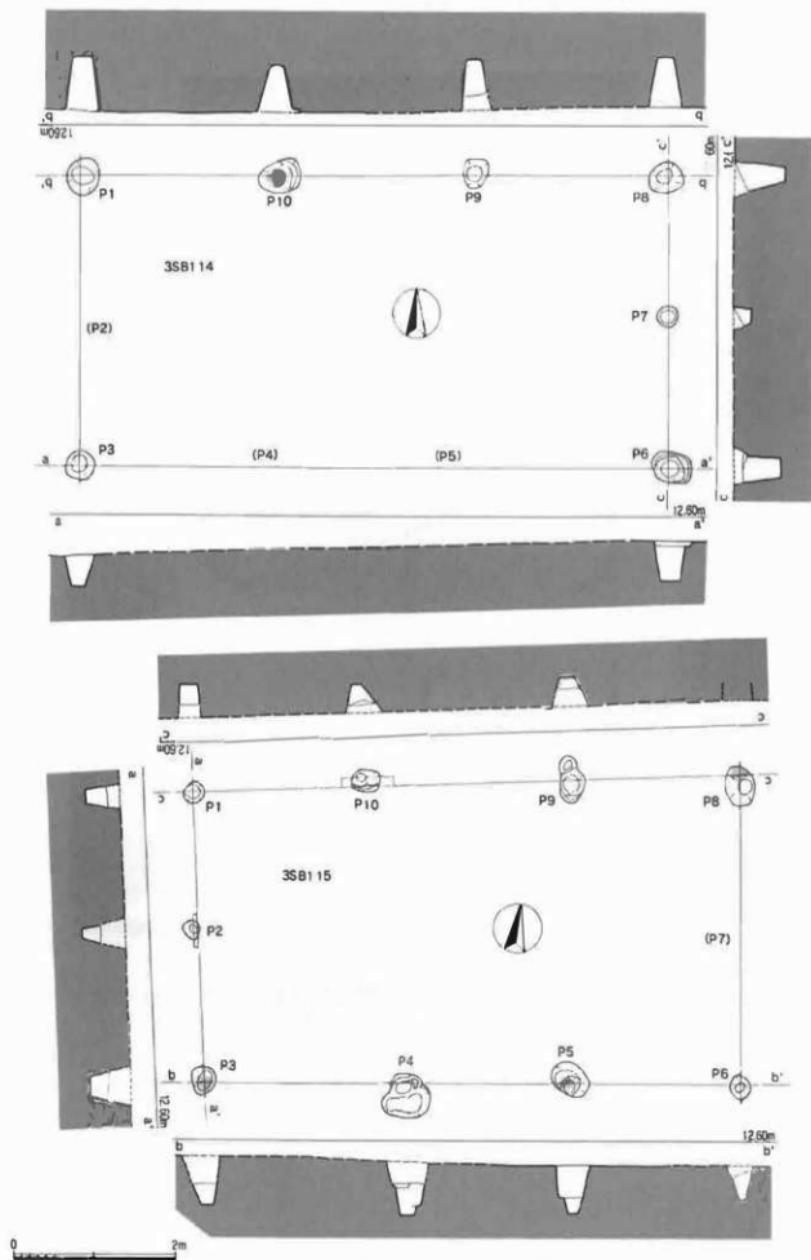


Fig.55 3SB114・115実測図 (1/60)

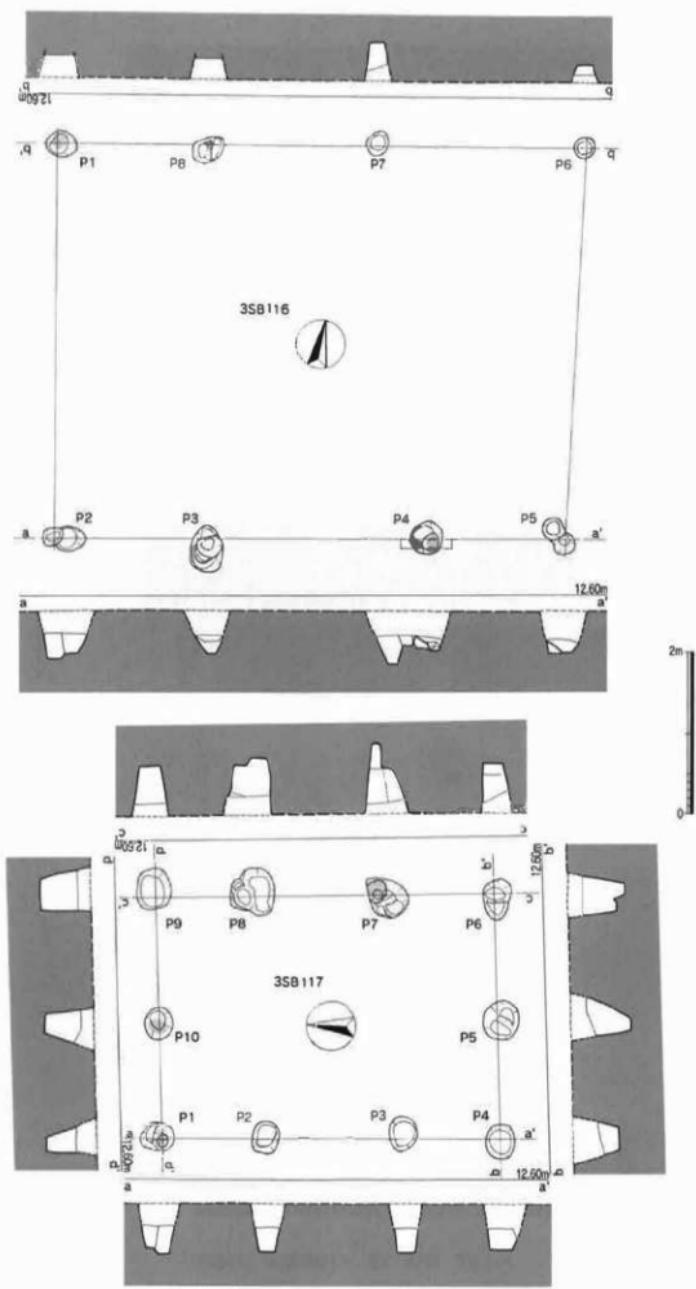


Fig.56 3SB116・117実測図 (1/60)

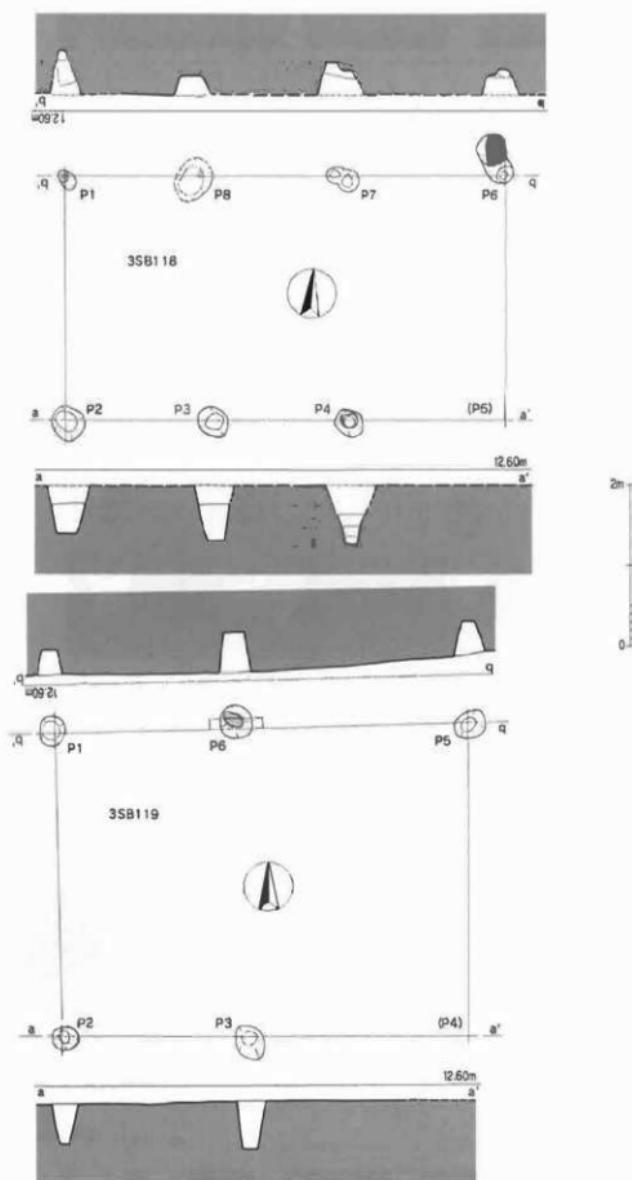


Fig.57 3SB118・119実測図 (1/60)

### 3SB115 (Fig.55)

調査区内の南北端で検出した東西棟の獨立柱建物で、柱穴 (P1)～P10) の平面プランは円形または楕円形形状を呈する。建物の規模は東西3間 (6.58～6.75m) × 南北2間 (3.56～3.80m)、建物面積25.58m<sup>2</sup> (約7.38坪) で、南北軸はN=−10° 07' 53'' −Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間1.68m、P2～P3間1.88m、P3～P4間2.47m、P4～P5間2.03m、P5～P6間2.08m、P6～P7間2.62m、P7～P8間2.03mを測り、P3・5・8においては各0.15～0.22mの柱振跡を確認した。なお、P8はレベル数値に誤りがあり、立面図では上場線のみを示した。

### 3SB116 (Fig.56)

調査区内の南北端で検出した東西棟の獨立柱建物で、柱穴 (P1)～P9) の平面プランは円形または楕円形形状を呈する。建物の規模は東西3間 (6.10～6.48m) × 南北2間 (4.85m)、建物面積30.97m<sup>2</sup> (約9.30坪) で、南北軸はN=−8° 38' 43'' −Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間1.85m、P2～P3間1.75m、P3～P4間2.20m、P4～P5間2.15m、P5～P6間4.85m、P6～P7間2.57m、P7～P8間2.16m、P8～P1間1.85mを測り、P1・4・8においては各0.14～0.20mの柱振跡を確認した。なお、P1・8はレベル数値に誤りがあり、立面図では上場線のみを示した。

### 3SB117 (Fig.57)

調査区内の南北端で検出した東西棟の獨立柱建物で、柱穴 (P1)～P10) の平面プランは円形または楕円形形状を呈する。建物の規模は東西2間 (3.07～3.09m) × 南北2間 (4.18～4.20m)、建物面積12.42m<sup>2</sup> (約3.72坪) で、南北軸はN=−4° 45' 49'' −Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間1.29m、P2～P3間1.72m、P3～P4間1.17m、P4～P5間1.42m、P5～P6間1.67m、P6～P7間1.45m、P7～P8間1.65m、P8～P9間1.10m、P9～P10間1.60m、P10～P1間1.47mを測り、P1・7・10においては各0.15～0.25mの柱振跡を確認した。P5は搅乱によつて消失している。

### 3SB119 (Fig.57)

調査区内中央の南端で検出した東西棟の獨立柱建物で、柱穴 (P1)～P9) の平面プランは円形形状または楕円形形状を呈する。建物の規模は東西2間 (5.15m) × 南北1間 (3.70m)、建物面積9.11m<sup>2</sup> (約5.74坪) で、南北軸はN=−1° 30' 26'' −Wの方位を示す。更に各柱穴間はP1～P2間0.70m、P2～P3間2.77m、P5～P6間2.90m、P6～P1間2.25mを測り、P6においては各0.18m前後の柱真跡を確認した。P4は3SE020によって消失している。

### 3SD001 (Fig.58, Pla.25)

調査区内の東端で確認したが、葡萄耕作に伴う浸漬(擾乱)を著しく受けている。南北方向の溝で、南北長は約25.00m、上幅1.50～2.20m、下幅0.50～0.80m、残存する遺構の深さは0.66～1.07mを測る。溝の断面形状は南北端で逆台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態であった。填土は黒茶色土を基盤とし、遺物は土器(小皿・土鍋・片)、磁器(片)、陶器(片)が出土した。

### 3SD004 (Fig.58)

調査区内の東端で確認した南北方向の溝である。検出長は約10.50m、上幅0.45m前後、下幅0.30m前後、残存する遺構の深さは0.23m前後を測る。溝の断面形状は逆台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態であった。遺物は土器(棒状土製品・火鉢)、磁器(皿・碗・片)、陶器(甌・片)、瓦・瓦製品等が出土した。

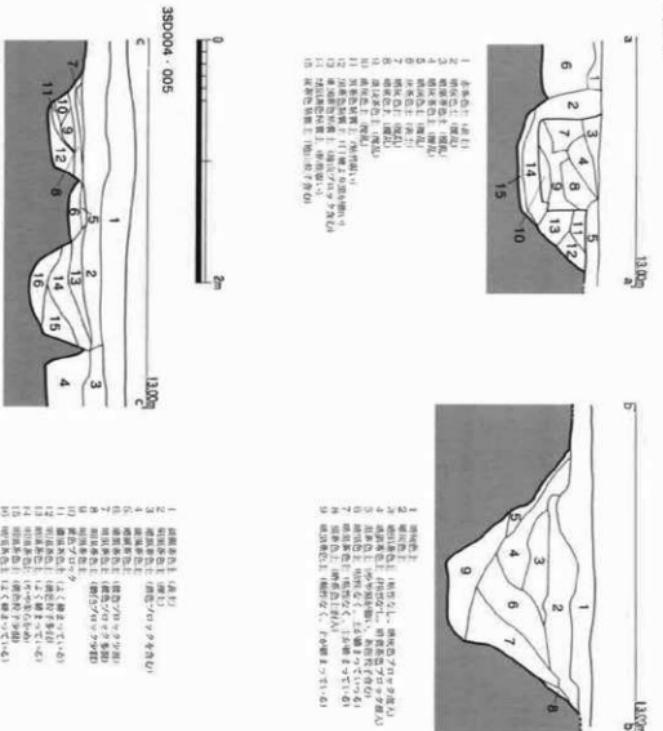


Fig. 58 漢土断面実測図 (1/40)

調査区内の東部で確認した東北方向の溝で3SD004に隣接する。検出長は約4.60m、上幅0.95m前後、下幅0.50m前後、残存する溝幅の深さは0.30m前後を測る。溝の断面形は逆台形状を呈し、溝底はほぼフラットな状態であった。遺物は土師器（片）が出土した。

## 井戸

3SE020（付図④、Pla.26）

調査区内中央の南端で検出した素掘りの井戸である。平面プランは楕円形状を呈し、径1.90~2.10mを測る。遺構検出面から約1.00mでは黒茶色土を基調とした埋土であったが、井戸内における壁が砂層に覆われなくなっている状況であったため、危険防止上掘削を断念した。出土遺物は須恵器（鉢）、土師器（小皿・土鍋・火鉢・片）、染付（片）、石製品（不明）が認められた。

3SE040（付図④）

調査区内の北西部で検出した素掘りの井戸であるが、調査区境界付近で確認したため遺構検出面から約1.50mまで掘削した。径は推定で1.80mを測るものと思われる。遺物は土師器（土鍋・壺鉢・火鉢・片）、瓦製品が認められた。

3SE045（付図④、Pla.26）

調査区内の中央部で検出した素掘りの井戸である。平面プランは円形状を呈し、径1.10m前後を測る。

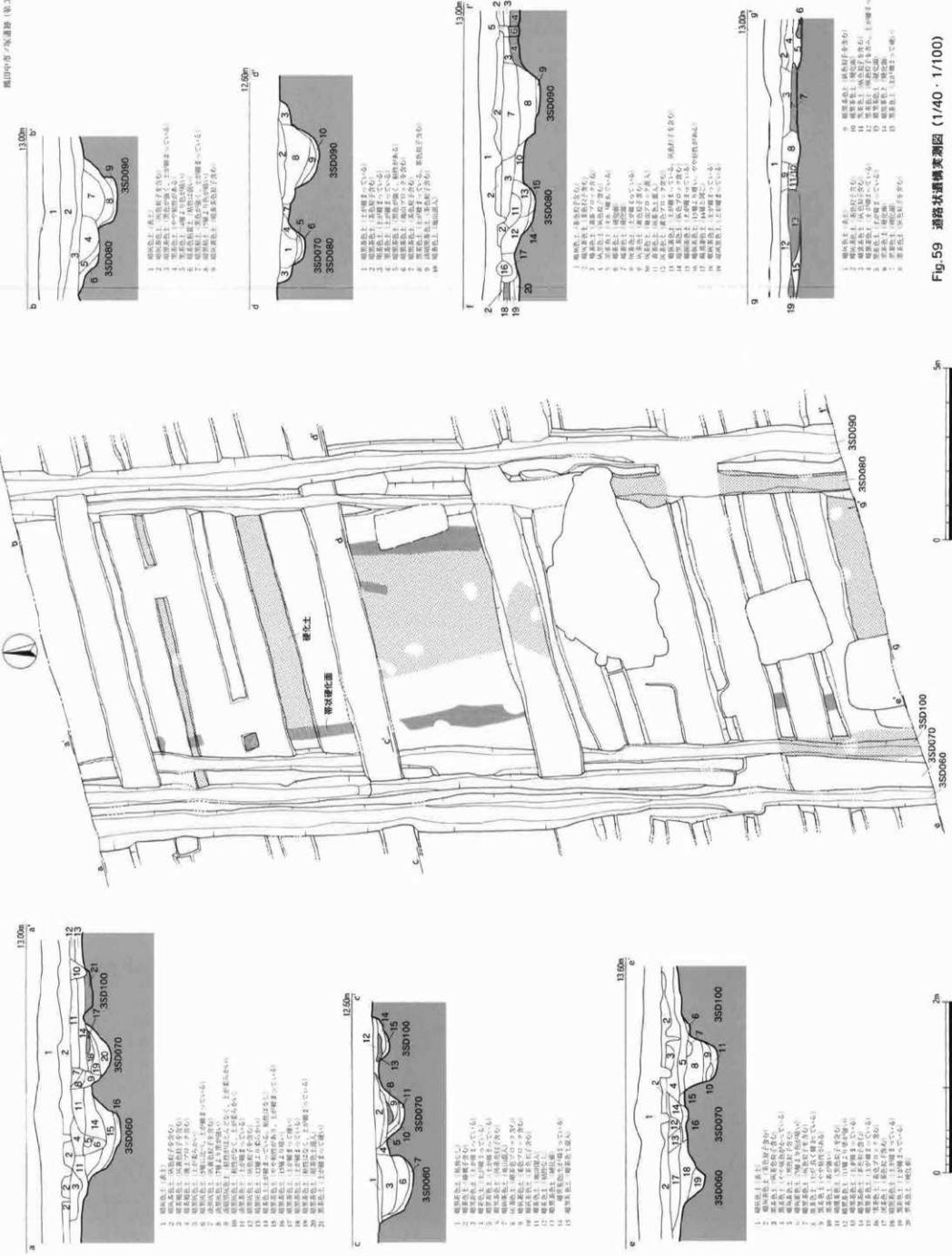


Fig.59 通過状況測量図 (1/40・1/100)

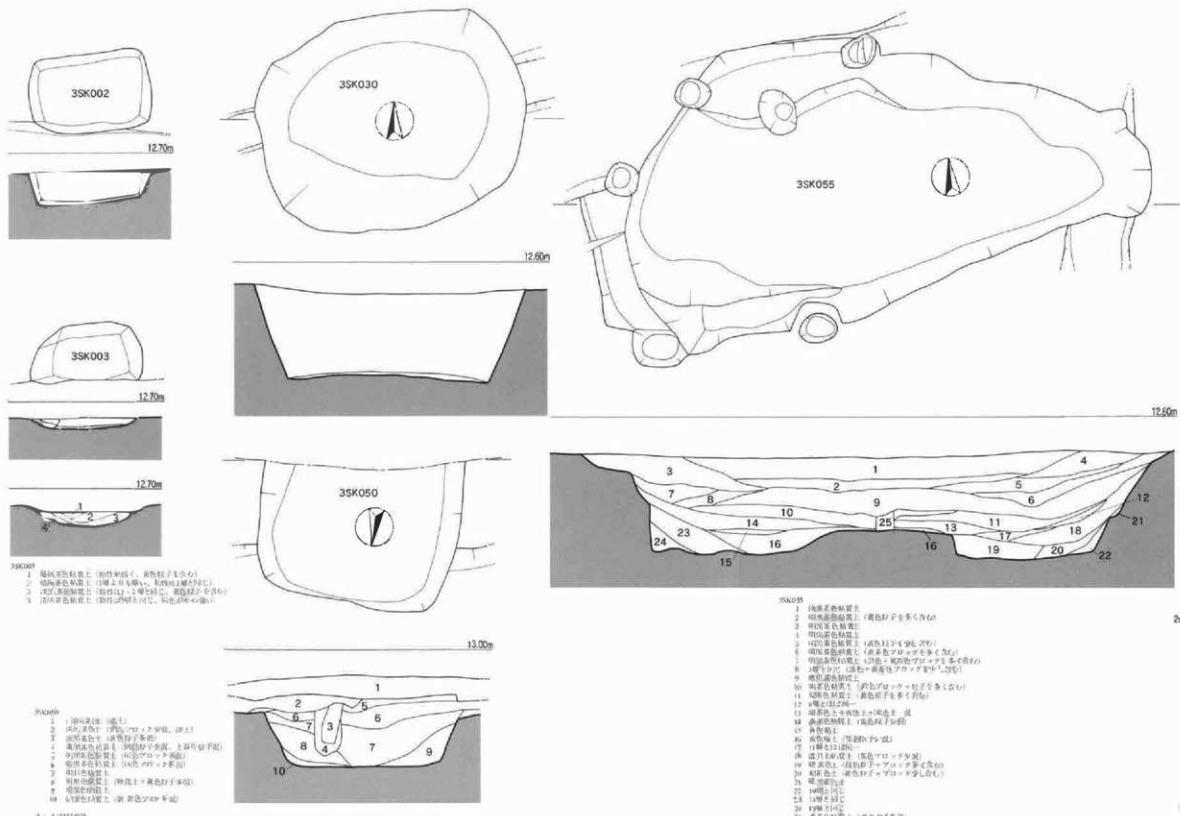


Fig.60 土坑検測図 (1/40)

遺構突出部から約1.00mのレベルでは大小様々な石が多い量に混入して確認され、これまでの出土は黒茶色土であった。ところが作円内における壁が砂層に変わり、もろくなっている状況であったため、これより下位は危険防止上撤削を断念した。H1.土遣物は須恵器(片)、土師器(瓶・火鉢・片)、瓦質土器(片)が認められた。

#### 道路状況機

道路状況機を説明するにあたって、まず遺跡状況に付設する遺構(船渠・路面等の状況)について先述する。

#### 西側船渠

##### 3SD060 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当溝は西側船渠3条の内の西溝にあたり、中央溝である3SD070に切られる。溝は擾乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約24.30m、上幅0.40 - 1.15m、下幅0.08 - 0.50m、残存する溝の深さ0.42 - 0.58mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、溝内における墨土からは礎化土は確認されていない。出土遺物は須恵器(甕)、土師器(片)を認めている。

##### 3SD070 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当溝は西側船渠3条の内の中央溝にあたり、溝は擾乱を受けているものの残存状況は良い。検出長約24.50m、上幅0.65 - 0.90m、下幅0.25 - 0.35m、残存する溝の深さ0.30 - 0.42mを測る。溝の断面はU字状を呈し、溝内における墨土からは礎化土が確認された。礎化土は黒茶色土または灰黑色土を呈し、溝内沿うように帶状に確認された。出土遺物は土師器(片)を僅かに認めた。

##### 3SD100 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当溝は西側船渠3条の内の東溝にあたり、溝は擾乱を受けているものの残存状況は良い。検出長約24.50m、上幅0.50 - 0.65m、下幅0.15 - 0.42m、残存する溝の深さ0.30 - 0.45mを測る。溝の断面はU字状を呈し、溝内における墨土からは礎化土が確認された。礎化土は暗黒茶色土を呈し、溝内沿うように帶状に確認された。出土遺物は皆無であった。

#### 東側船渠

##### 3SD080 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当溝は東側船渠2条の内の東溝にあたり、東溝である3SD090を引く。溝は擾乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約24.20m、上幅0.52 - 0.92m、下幅0.23 - 0.50m、残存する溝の深さ0.23 - 0.41mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、溝内における墨土からは南部で礎化土を確認している。出土遺物は土師器(片)を認めた。

##### 3SD090 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当溝は東側船渠2条の内の東溝にあたり、西溝である。3SD080に切られる。溝は擾乱を受けているものの残存状況は良く、検出長約24.20m、上幅0.93 - 1.15m、下幅0.40 - 0.65m、残存する溝の深さ0.42 - 0.53mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、溝内における墨土からは礎化土は確認されていない。出土遺物は須恵器(片)、土師器(蓋・片)を認めた。

#### 推定道路

##### 3SF200 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当道路状況機は3SD060(西側船渠) - 3SD090(東側船渠)間が該当する。溝の心々幅で約10.00m、溝の内外幅で約19.00mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

##### 3SF210 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当道路状況機は3SD070(西側船渠) - 3SD080(東側船渠)間が該当する。溝の心々幅で約8.50m、溝の内外幅で約18.00mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

##### 3SF220 (Fig.59, Pla.25 - 27 - 30)

当道路状況機は3SD100(西側船渠) - 3SD080(東側船渠)間が該当する。溝の心々幅で約7.60m、溝の内外幅で約7.10mを測る。道路中央部分からは路面・路盤・路床等の痕跡は認められていない。

## 3SF230 (Fig.59, Pla.25・27～30)

当道路状況は帯状にのびて検出された硬化面及び硬化土を指すもので、一部は面的に広く確認された。帯状の硬化的面は幅約0.30m前後、厚さ0.05～0.13mを測る黒茶色土または灰茶色土で、断面は凹状を呈する。3SD0805及び3SD1005の構内、削溝間の道路中央部で部分的に確認されており、当調査区から検出された道路状況の最終段階にあたるものと考えられる。その規模や状況から現在の小径に類似するものと想定される。

## 土塊

## 3SK002 (Fig.60)

調査区内の北東部で検出した隅丸長方形状の土塊である。長軸1.30m、短軸0.83m、残存する遺構の深さは0.38mを測る。土師器（小皿）が出土した。

## 3SK003 (Fig.60)

調査区内の北東部で検出した隅丸長方形状の土塊で、両端は搅乱を受けている。長軸1.21m、残存する遺構の深さは0.20mを測り、土師器（小皿）が出土した。

## 3SK030 (Fig.60, Pla.31)

調査区内の中央部で検出した隅丸長方形状の土塊である。長軸2.88m、短軸2.38m、残存する遺構の深さは1.23mを測る。遺物は須恵器（鉢）、土師器（坏）、青白磁（皿）が出土した。

## 3SK050 (Fig.60)

調査区内の南西部で検出されたが、両端は調査区外へ展開する。軸2.12m、残存する遺構の深さは0.62mを測る。黒茶色土を基調とする壤土で、土層断面では3SP135が切っている様子が顕著に認められる。

## 3SK055 (Fig.60, Pla.31)

調査区内の西部で検出された不整円形状の大盤土坑である。長軸6.25m、短軸3.00m、残存する遺構の深さは西部で1.02m、中央部で0.72m、東部で1.14mを測る。遺物は土師器（小皿・坏・土鍋）、白磁（片）、石製品（石鍋）が出土した。

## (3) 出土遺物

## 掘立柱建物

## 3SB110-P2 (Fig.61, Pla.32)

## 陶器

小壺（1） 口縁部が一部欠損したほぼ完形である。  
口径3.00cm、底径5.60cm、器高7.65cmを測る。素地は精磨された淡灰茶色で、断面茶色の鉄輪を軸底以外に施釉する。外底はヘラ切り、その他はヨコナナメ鋸歯である。

環（2） 底部の細片で、外底はヘラ切り、高台部及び内面はヨコナナメ調整である。

## 3SB110-P3 (Fig.61, Pla.32)

## 土師器

鳥形土製品（3） 土台及び口の部分が欠損する。長さ5.00cm、高さ4.60cm、最大幅2.50cmを測る。

## 3SB114-P1 (Fig.61, Pla.32)

## 土器

小皿（4～6） 何れも外底は系切り、内底はナデ、その他の内外面はヨコナナメ調整である。4は口径8.30cm、底径6.40cm、器高1.45cm、5は口径8.20cm、底径6.40cm、器高1.55cm、6は口径8.70cm、底径6.40cm、器高1.80cmを測る。6は口縁部の一部に油漬と思われる様が付着している。

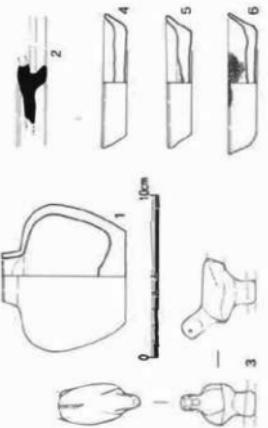


Fig.61 掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)

**漁 3SD001 (Fig.62, Pla.32)****土師器**

小皿 (7) 外底は余切り、内外面はヨコナテ調整である。口径9.00cm、底径7.00cm、高さ1.70cmを復原する。

**3SD004 (Fig.62, 66, Pla.32, 34)****土師器**

風呂 (8) 火入れ前の細片で、開口部及び口縁部には焼が付着している。口縁部内面には受け部が貼り付けされ、口縁部外面には菊文を押印する。

**土師器**

柿子土製品 (9) 断面が方形状を呈した棒状二製品で、片側が欠損する。最大幅4.60cmを測り、表面は二次焼成のため、一部が赤褐色に変色している。更に動物融解による付着物が看取される。

**白皿**

(10) 底部の細片で、高台径4.50cmを測る。稍遠された乳白色の素地に鈎色の透明釉を内面及び体部外間に薄く施釉する。見込みは蛇ノ目状に釉を引き取り、墨付けには砂が付着している。

**茶杓**

(11) 口縁部の細片で、口径7.00cmを復原する。乳白色の素地に透明釉を内外面に施し、外面上には具模で文様が描かれている。

**小皿 (12)**

口径1.60cm、高台径7.20cm、器高3.20cmを復原する。乳白色の素地に透明釉を外底以外に施し、内面には焼類で文様を描く。

**五**

平瓦 (13・14) 13は表面及び芯ともに暗黒灰色を呈し、燒成は瓦質である。厚みは2.00cmで、調整は不明である。14は表面が淡黒灰色、芯は淡灰白色を呈し、燒成は瓦質である。厚みは1.90cmで、調整は不明である。

**丸瓦 (15)**

芯は淡灰白色、表面は暗黒灰色または淡茶色を呈する。内面・焼目・裏が残る。

**鉄製品**

釘 (48) 断面形は長方形を呈し、頭部は折り曲げる。現存長は約4.00cmである。

**井戸****3SE020 (Fig.63, Pla.33)****廻縁系清掃器****土師器**

鉢 (16) 玉縁共口縁を呈し、内外面はヨコナナテ調整である。胎土は微粉状を多く含む。

**土師器**

茶釜 (17) 口縁部の細片で、口縁端部は凹状に浅線を施す。内面及び口縁部外面はヨコナナデ、体部外面は横方向の刷毛目調整である。

**瓦質土器**

鉢 (18) 口径47.60cmを復原し、外面上には焼が厚く付着する。口縁部内外面はヨコナナデ、体部内面は刷毛目、体部外面は指伸さえ後刷毛目、底部は刷毛目調整である。

**3SE040 (Fig.61, 66, Pla.33)****瓦質土器**

火鉢 (19) 口縁部の細片で、端部は逆L字状を呈する。口縁部内面から外面上にかけてはヨコナナデ、内面には刷毛目調整を施す。

**鉄製品**

釘 (49) 先端部と思われ、断面形は方形を呈する。現存長は3.70cmである。

**3SE045 (Fig.63, Pla.33)****須恵器**

瓶 (20) 体部の細片で、上位に径14.0cmの孔を認める。内面及び外面上位はヘラケズリ、体部中位は

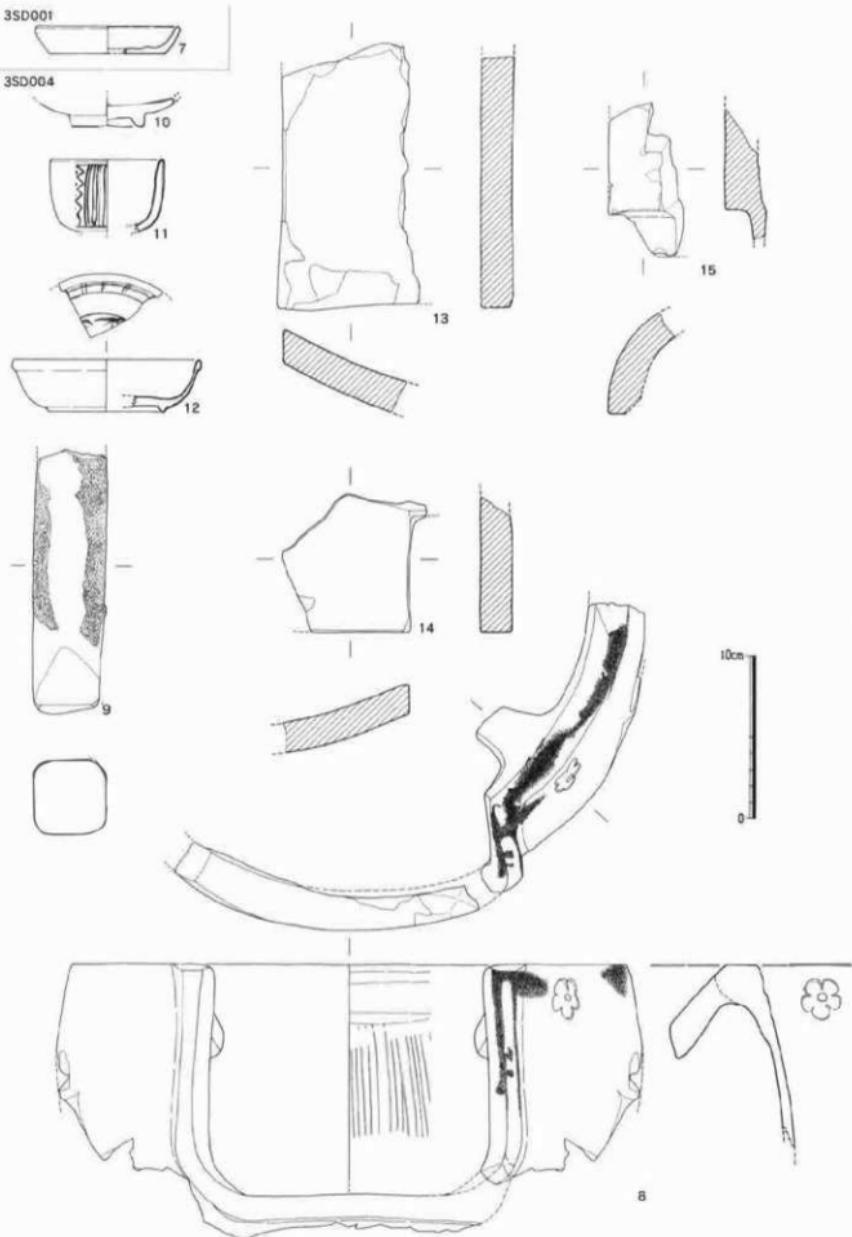
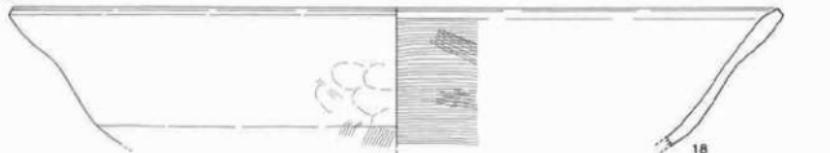


Fig.62 溝出土遺物実測図 (1/3)

3SE020



3SE040



3SE045

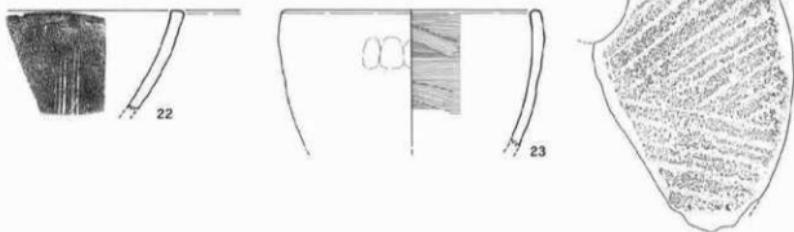
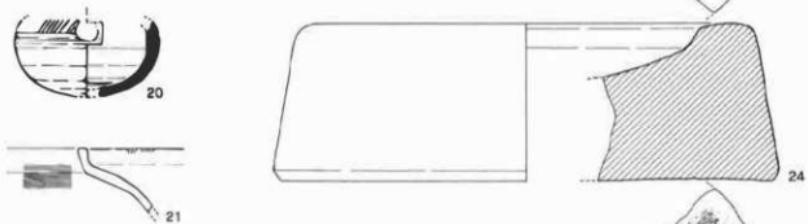


Fig.63 3SE020・040・045出土遺物実測図 (1/3)

ナデ、体部上位は工具にて線刻を施す。

#### 土器器

茶釜(21) 口縁部の細片である。口縁部内面及び端部はナデ、肩部内面は細かい横方向の刷毛目、体部内面はナデ、外面は工具によるナデ調整を施す。

擂鉢(22) 口縁部の細片で、内面には縱方向の擂目を認める。口縁部外表面はヨコナデ、体部内面はナデ、体部外表面は指押さえである。内面には煤が付着している。

## 瓦質土器

火鉢 (23) 口径5.60cmを復原する。内面は刷毛目、口縁端部及び口縁部外側はヨコナナ、体部外面上位は指押さえ、下位はテ子調整である。

## 石製品

塊臼 (24) 外径3.00cmを復原する上臼で、中心軸からやや外れたところに供給口が貫通する。石材は安山岩製と思われる。

## 道路状遺構

## 3SD090 (Fig.64, Pla.33)

## 猪突器

丸筒形 (25) 口縁部の細片で口径は8.00cmを復原する。内外面はヨコナナ調整で、外側の一部には自然

相が認められる。底土は微砂粒・黒色粒子を少量含む液灰茶色で、色調は暗黒灰色・淡赤茶色を呈する。

## 土師器

蓋 (26) 口径18.00cm、器高3.20cm、つまり径2.00cmを復原する。つまみ、口縁部外面、内面はヨコナナアで、天井部外面は回板ヘラケアリ調整である。内面の一部に小動物による引っかき痕が残る。

## 3 SK002 (Fig.65, Pla.33)

## 土師器

小皿 (27・28) 共に外底は糸切り、内外面はヨコナナ調整である。27は口径8.70cm、底径5.10cm、器高2.40cmを測り、口縁部の一部に繩が付着している。28は口径9.60cm、底径5.20cm、器高1.65cmを測る。

## 3 SK003 (Fig.65, Pla.33・34)

## 土師器

小皿 (29・32) 何れも外底は糸切り、内外面はヨコナナ調整である。29は口径7.00cm、底径6.00cm、器高1.15cm、30は口径7.10cm、底径5.90cm、器高1.35cm、31は口径6.90cm、長径6.00cm、器高1.30cm、32は口径7.20cm、底径6.10cm、器高1.30cmを測る。

## 3 SK030 (Fig.65・66, Pla.34)

## 東播系罐體器

鉢 (33) 玉縁張口縁を呈し、内外面はヨコナナ調整である。胎土は微砂粒を多く含み、黒色粒子を少し含む。

## 土師器

坪 (34・35) 34は口径12.20cm、底径8.00cm、器高3.50cmを測り、内面の一部に煤が付着している。外底は糸切り、内外面はヨコナナ調整である。35は口径14.10cm、底径11.80cm、器高3.40cmを測る。外底は糸切りで板状紙が残り、内外面はヨコナナ調整である。

## 青白磁

皿 (36) 輪花の皿で、黑色粒子を多く含む乳灰白色の素地に青緑色の透明釉を内外面に施す。

## 鉢

万字 (50) 現存長17.80cm、刃部長13.00cm、刃部最大幅1.60cm、茎厚0.25cmを測る。

## 3 SK050 (Fig.65, Pla.34)

小皿 (37・38) 共に外底は糸切り、内外面はヨコナナ調整である。37は口径8.60cm、底径6.00cm、器高2.75cmを測る。38は口径9.55cm、底径8.20cm、器高1.95cmを測り、内面の一部には小動物による引っかき痕が残る。

坪 (39・44) 何れも内外面はヨコナナ調整で、外底は糸切りである。39・40・42・43には板状紙が認められ、43は内面の一部には小動物による引っかき痕が残る。3912口径12.20cm、底径10.60cm、器高2.60cm、40口径13.00cm、底径11.40cm、器高2.80cm、41は口径13.00cm、底径10.60cm、器高3.00cm、42

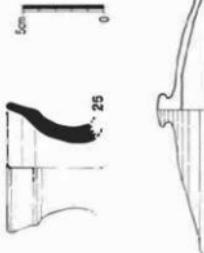


Fig.64 3SD090出土土器実測図 (1/3)

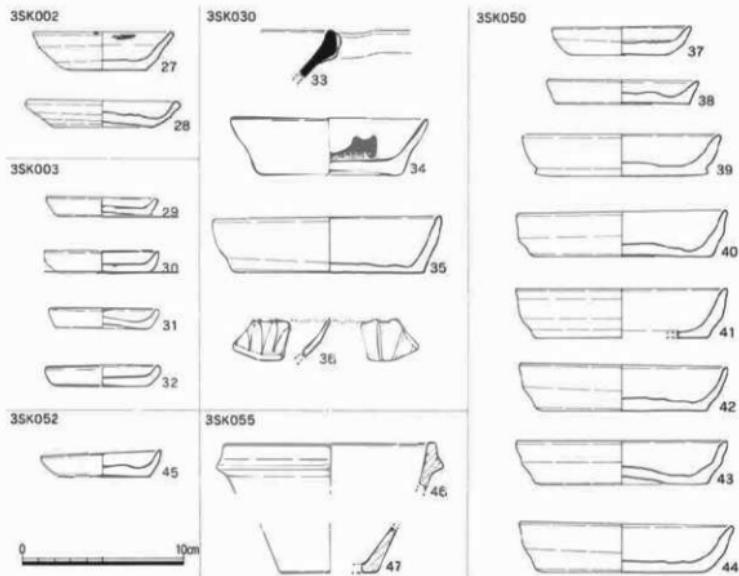


Fig.65 土坑出土土器実測図 (1/3)

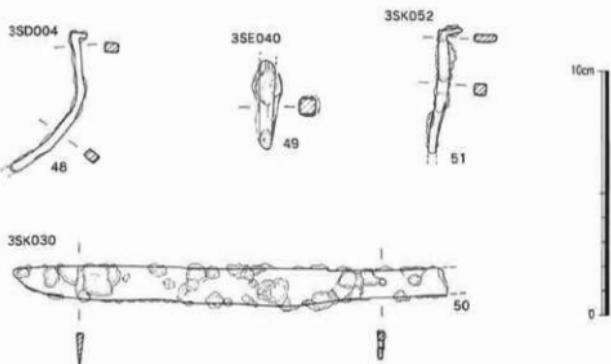


Fig.66 鉄製品実測図 (1/2)

は口径12.80cm、底径10.60cm、器高2.80cm、43は口径13.00cm、底径10.60cm、器高2.70cm、44は口径13.20cm、底径10.60cm、器高3.05cmを測る。

### 3SK052 (Fig.65・66, Pla.34)

#### 土師器

小皿 (45) 外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整で、口径7.50cm、底径6.00cm、器高1.40cmを測る。

#### 鉄製品

釘 (51) 断面形は方形を呈し、頭部は折り曲げる。現存長は5.10cmである。

### 3SK055 (Fig.65, Pla.34)

#### 石製品

滑石製石鍋 (46・47) 共に内外面は工具によるケズリ調整で、同一個体であった可能性がある。46は口縁部の細片で、口径13.20cmを復原する。鍋の断面形は台形状を呈し、47は底部の細片で、底径6.00cmを復原する。

#### (4) 小結

調査の結果、柵列状遺構1列、掘立柱建物10棟、溝3条、井戸3基、道路状遺構4路、土坑5基等が確認された。

#### 柵列状遺構・掘立柱建物

当遺跡で確認された柵列状遺構・掘立柱建物は後章の「M.まとめ」(Tab.5)に表した。

南北方向の柵列状遺構 (3SA120) を確認し、規模や形状が掘立柱建物と類似していることからその可能性も否めない。掘立柱建物は東西棟建物8棟、南北棟建物2棟が確認され、当調査区から確認された各掘立柱建物は、鶴田中市ノ塚遺跡(第1・2次調査)で確認された掘立柱建物群が示す規模や方位等とはほぼ同等であることから相互に関連した遺構として捉えられ、また、調査区内の西側に集中して配置されていることから地形的な規制の基で形成されたことが窺える。掘立柱建物は古代の道路状遺構を切っていることから、道路状遺構廃絶後に設置されたものと理解できるが、掘立柱建物からは時期を特定できる遺物には恵まれていない。しかし、3SB110-P2~4及び3SB114-P1からは僅ながら遺物を認めしており、年代特定の参考資料として提示できよう。

#### 溝

調査区内の東端で確認された南北方向の溝 (3SD001) は、出土遺物から中世に比定される。土層断面から流水を伴わない空堀であった溝と考えられ、土地を区画するための溝であったことが想定される。

3SD001の西側で確認された南北溝 (3SD004) は、出土遺物から18C代に比定される溝である。

#### 井戸

3基 (3SE020・040・045) が確認されたが、危険防止のためすべて完掘には至っていない。しかし、井戸の配置状況は第1・2次調査と同様に調査区の中央部に集中しており、当時の水脈を考えるうえで貴重な資料といえる。井戸からは13~15C代を主体とする遺物が認められており、集落が機能していた時期を示すものとして提示できる。

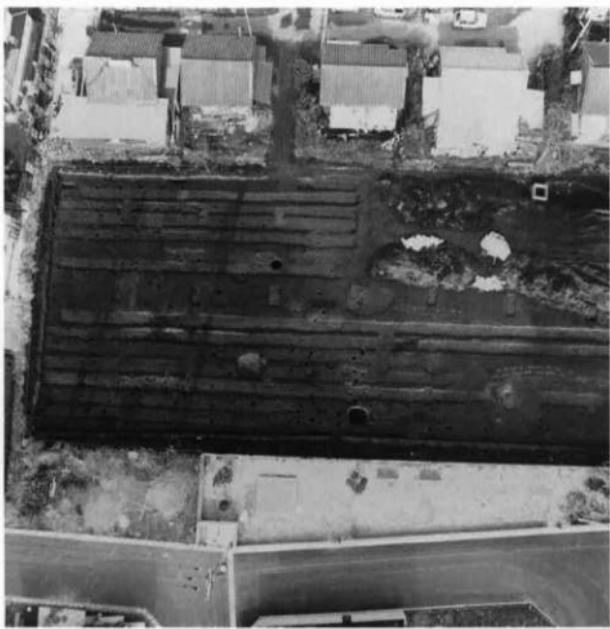
#### 道路状遺構

当調査区からは道路状遺構に付設する側溝、硬化土、硬化面が検出された。遺構の切り合いから古い順に3SF200→3SF210→3SF220→3SF230と4路の道路変遷を復原することができる。

3SF200は、その規模と配置状況から鶴田中市ノ塚遺跡(第1次調査)で復原された1SF500の延長部と捉えられ、律令期に整備された古代官道(西海道)と想定される。同様に、3SF210→1SF510、3SF220→1SF520、3SF230→1SF530の延長部と捉えることができ、当該地においてもほぼ同等規模の道路状遺構であったと考えられる。3SF200の東側側溝である3SD009からは8C後半~9C代に比定される遺物が認められており、年代特定の参考資料として提示できよう。



鶴田中市ノ塚遺跡（第3次調査）東調査区全景（空中写真：真上から）



鶴田中市ノ塚遺跡（第3次調査）西調査区全景（空中写真：南から）

#### 4. 鶴田中市ノ塚遺跡（第4次調査）

##### （1）はじめに（Fig.67）

当遺跡は筑後市大字鶴田字中市ノ塚417-1外に所在し、標高12.5m位の低位段丘上に立地する。発掘調査は市営住宅鶴田団地建替事業に伴い、建物部分である1,046m<sup>2</sup>（調査区A：565m<sup>2</sup>、調査区B：481m<sup>2</sup>）を実施した。調査期間は平成9年2月25日から同年3月31日まで実施し、この間、重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、末吉隆弥（現：川崎町教育委員会）の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林、末吉、江崎貴浩が担当した。

調査区は便宜上、南部調査区を「調査区A」、北部調査区を「調査区B」と称し、調査の結果、調査区Aからは道路状遺構、井戸、溝、土坑等が検出され、調査区Bからは道路状遺構、土坑等が検出された。



Fig.67 鶴田中市ノ塚遺跡（第4次調査）調査地点位置図（1/2,500）

## (2) 調査区A—検出遺構

溝

## 4SD003 (Fig.68)

調査区内の東側で検出した南北方向の溝である。約6.5m分を確認し、北部は途切れている。埋土は上層から灰色土→灰色土（茶褐色土及び乳灰色土のブロック混じり）→暗灰色土の3層がほぼレンズ状に堆積していた。上幅0.85m前後、下幅0.38m前後、遺構検出面からの深さ0.65m前後を測り、断面は逆台形状を呈する。遺物は土師器（片）、青磁（片）が出土した。

道路状遺構

## 4SD010 (Fig.68, Pla.35)

調査区内の西端で検出した南北方向の溝で、周辺調査の状況から道路状遺構の東側個体の一部と思われる。遺構は北端部で4SK008に切られ、中央部で4SK030を切るように検出され、約7.5m分を確認した。埋土は上層から淡黒茶色土→淡茶色土（黄色土粒子及び茶色土を少し含む）の2層が堆積しており、上幅1.15～1.35m、下幅0.28～0.38m、遺構検出面からの深さ0.17m前後を測り、断面は逆台形状を呈する。遺物は土師器（片）が出土した。

4SD003

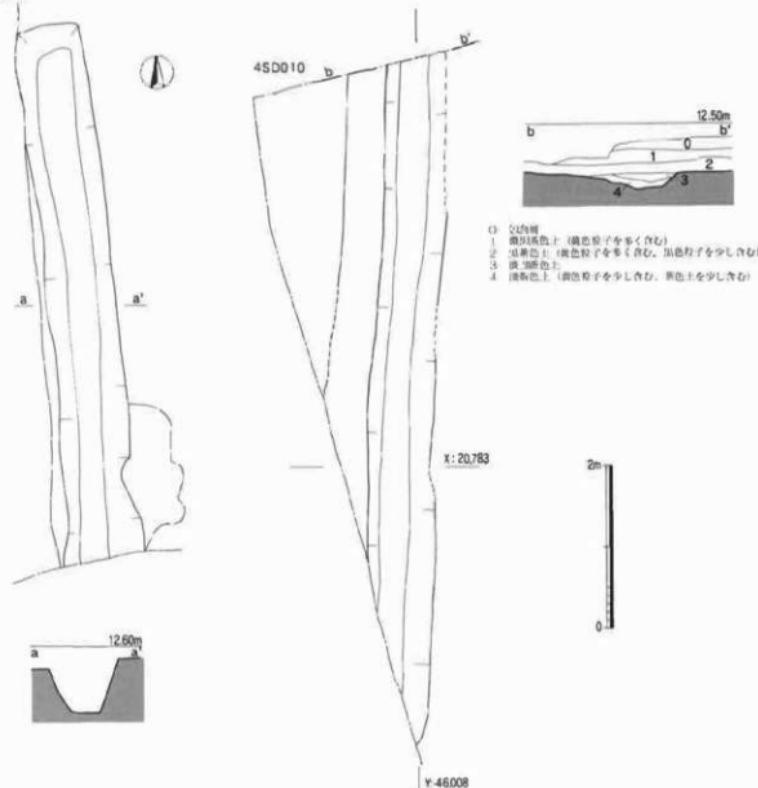


Fig.68 4SD003・010検測図 (1/60)

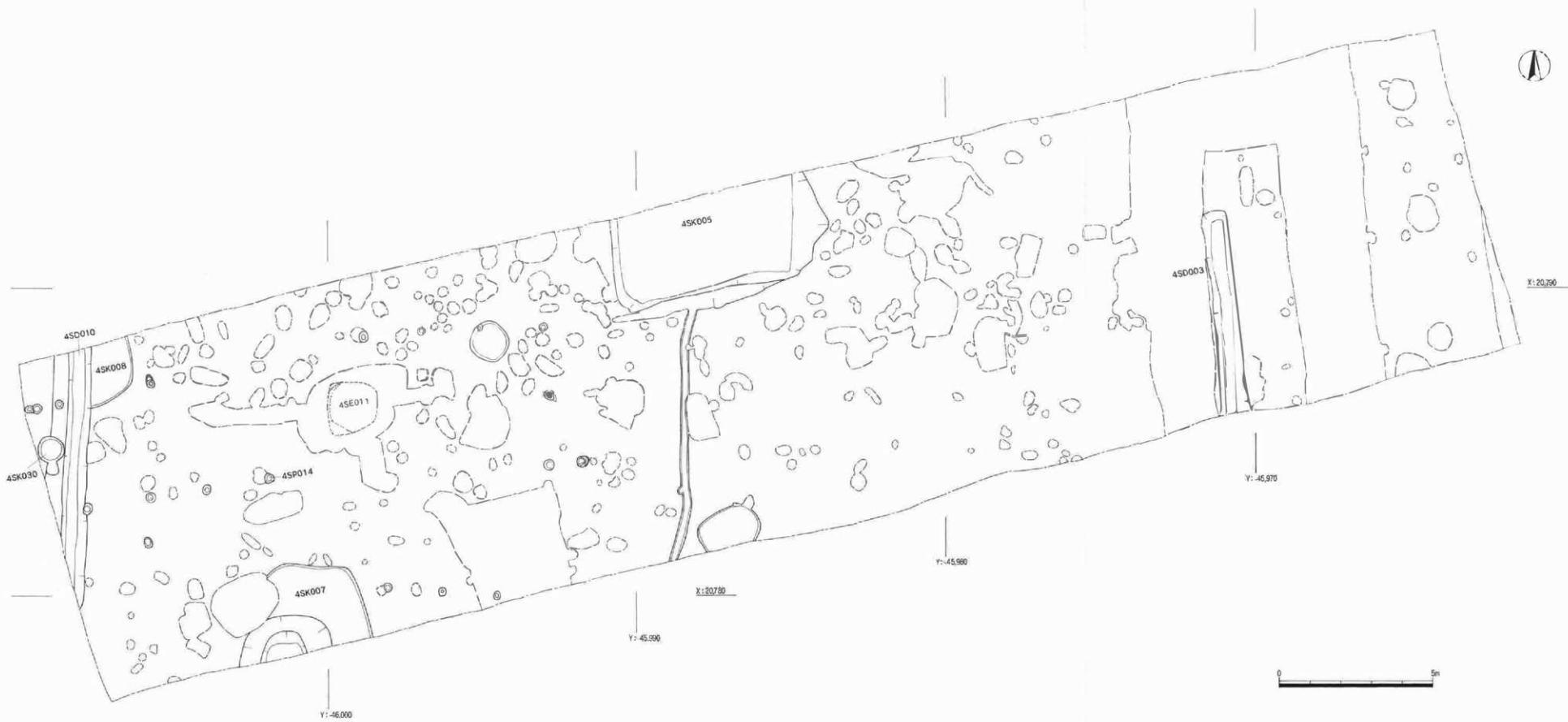


Fig.69 柏原市ノ塚遺跡(第4次調査)調査区A遺構全体実測図(1/100)

## 井戸

### 4SE011 (Fig.70, Pla.36)

調査区内の西側で検出した素掘りの井戸で、遺構の上部は搅乱を受けていた。平面プランは隅丸方形状を呈し、遺構検出面から約1.5m掘り下げた。埋土は上層から明黒色土（2~3cm大の礫を少し含み、粘性弱）→暗黒色土（5cm大の礫を少し含み、粘性質や強）→暗黒色土（黄褐色土ブロックを多く含む）→暗黒褐色土（粘性強）→灰色砂土（5~10cm大の礫を多く含む）であった。遺物は土師器（小皿・土鍋・擂鉢・片）、須恵器（鉢）、青磁（片）、白磁（片）が出土した。

## 土坑

### 4SK005 (Fig.71)

調査区内の中央で確認した大型の土坑で、遺構の北端は調査区外へ展開する。最大幅7.75m、遺構検出面からの深さ約0.35mを測り、遺物は土師器（小皿・土鍋・擂鉢・片）、陶器（片）が出土した。

### 4SK007 (Fig.71)

調査区内の南西部で確認した土坑で、遺構の南部は調査区外へ展開する。最大幅4.68m、遺構検出面からの深さ約0.37mを測り、遺構の底面は壠状を呈する。遺物は土師器（壺・土鍋・片）が出土した。

### 4SK030 (Fig.71, Pla.36)

調査区内の西端で4SD010に切られるように確認された。平面プランは南部にテラスを有した帆立貝状を呈し、長軸2.40m、短軸1.57m。遺構検出面からの深さ約0.41mを測る。遺構の底面には0.12~0.30m大の石が円形状に配置され、中央部には0.07~0.15mの小石が底面からやや浮いた状態で確認された。確認された石や埋土は特に焼けた痕跡は認められていないが、かの可能性が考えられる。他の遺物は出土していない。

## (3) 調査区Aー出土遺物

### 井戸

### 4SE011 (Fig.72, Pla.38)

### 土師器

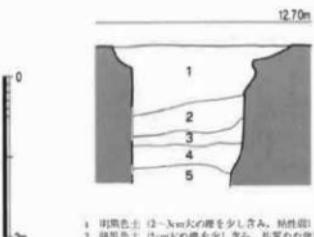
土鍋（1・2） 1は口縁状口縁を呈した口縁部の細片で、内面は横方向の刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指押さえの調整である。外側には煤が付着している。2は断面が台形状を呈した口縁部の細片である。口縁端部には回転繩文、内面は粗い刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はやや細かい刷毛目を施す。口径30.40cmを復原する。

### 瓦質土器

擂鉢（3・4） 3は口縁部の細片で、内面はヨコナデ後継方向に擂目、口縁部内面は刷毛目後ヨコナデ、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデの調整を施す。4は口径27.80cmを復原する。内面は刷毛目後3本単位の擂目を継方向に施し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目後ナデの調整である。

### 白磁

碗（5） 口径7.50cmを復原する。口縁部はやや外反し、微砂粒を少量含んだ乳白色の素地に乳白色の釉を内外面に施す。表面には貫入が認められる。



- 1 明黒色土（2~3cm大の礫を少し含み、粘性弱）
- 2 暗黒色土（5cm大の礫を少し含み、粘性質や強）
- 3 2と同じ（黄褐色土ブロックを多く含む）
- 4 暗黒褐色土（粘性強）
- 5 灰色砂土（5~10cm大の礫を多く含む）

Fig.70 4SE011実測図（1/60）

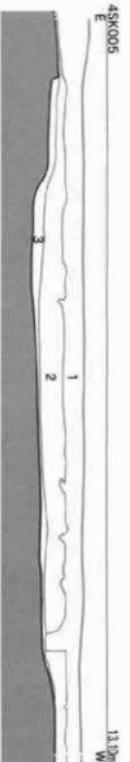


Fig.7.1 4SK005・007・030実測図 (1/30・1/60)

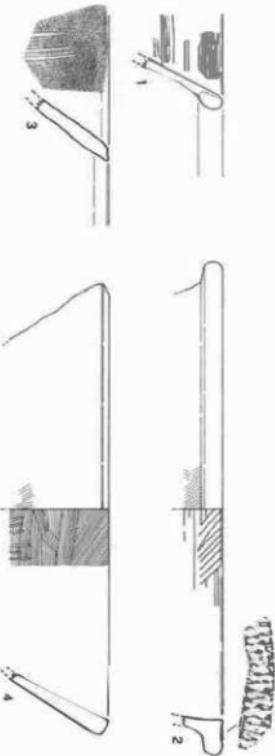
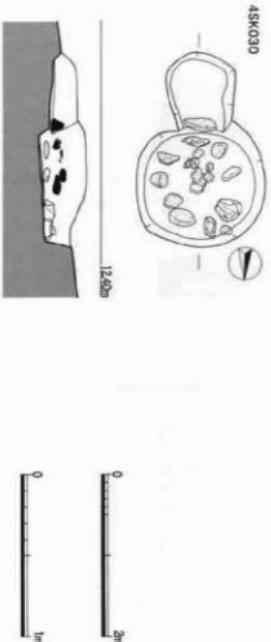


Fig.7.2 4SE011出土器実測図 (1/3)



Fig. 73 4SK005・007出土土器実測図 (1/3)

## 龍頭窓系青磁

小瓶 (6) 口径11.00cmを復原する。精選された暗青灰色の素地に青緑色の透明釉を薄くかける。

## 土瓶

4SK005 (Fig. 73, Pla.38)

## 土瓶器

小瓶 (7) 口径9.90cm、底径7.00cm、器高2.10cmを復原する。外底は斜切りで、内外面はヨコナデ調整である。

土瓶 (8・9) 共に断面は正様状を呈する。8は口径4.3-4.0cmを復原し、内面は刷毛目、口部外部外側はヨコナデ、底部上位外側は指押さえ、下位はナデの調整で、外面上には煤が厚く付着している。9は口径4.4-4.0cmを復原し、口部外部外側及び内面上位はヨコナデ、底部外側は指押さえ後削毛目、底部内外面は刷毛目の調整で、外面上には煤が薄く付着している。

## ビット

4SK014 (Fig. 74, Pla.38)

## 染付

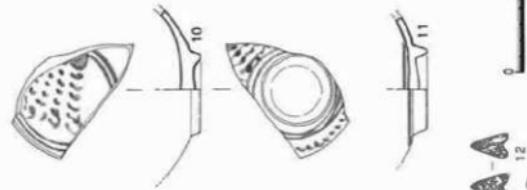
椀 (10・11) 瓢に底部の細脚である。10は高台径4.40cmを測り、黒色粒子を少し含むやや粗い塵灰茶色の素地に断乳白色の釉を内・外・縁に施す。表面は貫入が認められ、豊付けは釉を搔き落としている。内外面には突起で文様を振く。11は高台径5.00cmを測る。やや粗い淡黄白色の素地に乳白色の釉を施すが、豊付け及び底台内は露胎である。表面は貫入が認められる。

## 包合層

(Fig. 74, Pla.38)

## 石器

石鏡 (12) 石材は黒曜石製で、抉りの浅い二等辺三角状を呈する。両側は欠損する。

Fig. 74 その他の出土遺物  
実測図 (1/3)

(4) 調査区B—棟出遺構  
道路状遺構

西側側溝

4SD065 (Fig.76, Pla.35)

当溝は西側側溝3条の内の西溝にあたる。他遺構との切り合ひはなく、長さ約1.6m分を確認し、上幅0.95～1.27m、下幅0.25～0.62m、残存する溝の深さ0.23～0.33mを測る。溝の断面は概ね緩やかなU字状を呈し、埋土は上層から暗茶褐色土（かなり緑まっている）→明茶褐色粘質土（黄褐色粘質土のアロツク及び粒子を多く含む）の2層が堆積する。出土遺物は須恵器（片）、土師器（片）を認めた。

4SD070 (Fig.76, Pla.35)

当溝は西側側溝3条の内の中央溝にあたり、溝の南端から中央にかけては4SD095に切られている。長さ約1.6m分を確認し、上幅0.76～0.98m、下幅0.15～0.40m、残存する溝の深さ0.20～0.38mを測り、溝の断面は逆台形状を呈する。出土遺物はない。

4SD095 (Fig.76, Pla.35)

当溝は西側側溝3条の内の東溝にあたり、溝の南端から中央にかけては4SD070を切っている。長さ約1.05m分を確認し、上幅0.33～0.75m、下幅0.23～0.38m、残存する溝の深さ0.07～0.15mを測る。溝の断面はU字状ないしは逆台形状を呈し、埋土は明乳茶色土（黄褐色粘質土・黄褐色粘質土・プロック少し含む）の單一層であった。出土遺物はない。

東側側溝

4SD075 (Fig.76, Pla.35)

当溝は東側側溝3条の内の中央溝にあたる。4SD080を切るように検出し、長さ約1.6m分を確認した。北端の上幅0.52m、下幅0.35m、残存する溝の深さ2.6m、南端の上幅0.50m、下幅0.30m、残存する溝の深さ0.12mを測る。溝の断面は概ね逆台形状を呈し、埋土は北端で上層から暗茶褐色土（緑まりが強い）→明茶褐色土（黄褐色粘質土・黄褐色粘質土・プロック少し含み、緑まりが強い）の2層が堆積する。出土遺物は須恵器（片）、土師器（杯・片）を認めた。

4SD080 (Fig.76, Pla.35)

当溝は東側側溝3条の内の東溝にあたる。長さ約1.6m分を確認した。溝の上半を中央溝4SD085に切られているため上幅は不明で、下幅は0.20～0.30m、残存する溝の深さ1.20mを測る。溝の断面は概ねU字状を呈し、埋土は北端で暗茶褐色粘質土（黄褐色粘質土・プロック多く含む）の單一層であった。

4SF100 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は遺構の切り合いや過去の調査事例等から4SD065（西側側溝）—4SD085（東側側溝）間を想定したもので、溝の芯より幅11.00mを測る（溝の内々幅は遺構が切り合っていたため測定不能）。開削溝においては路肩や路盤を示唆する痕跡は認められていない。

4SF110 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は遺構の切り合いや過去の調査事例等から4SD070（西側側溝）—4SD080（東側側溝）間を想定したもので、溝の芯より幅9.20mを測る（溝の内々幅は遺構が切り合っていたため測定不能）。側溝においては路肩や路盤を示唆する痕跡は認められていない。

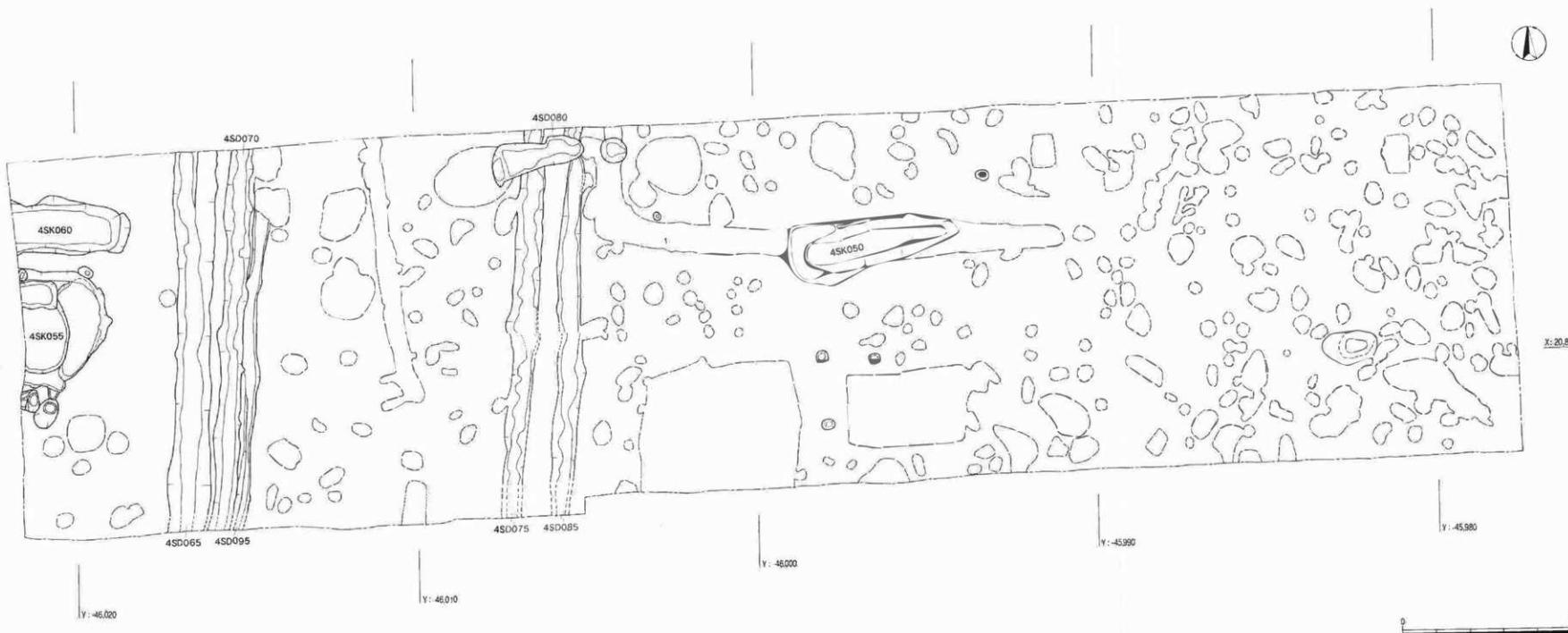


Fig.75 龍田中市／塚道路（第4次調査）調査区B道横全体実測図（1/100）

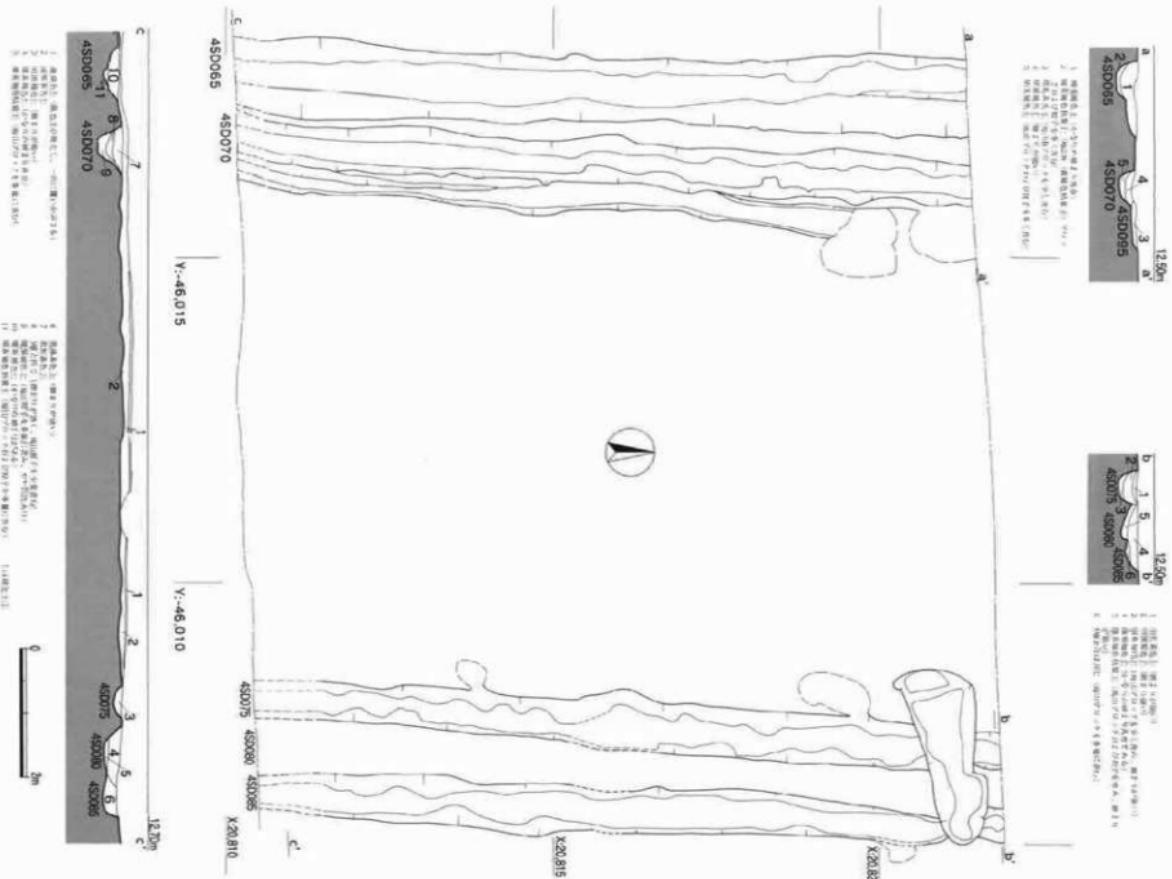


Fig.7-6 道路状況調査図 (175)

## 4SF120 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は遺構の切り合い関係から4SD095（西側側溝）—4SD075（東側側溝）間を指すもので、溝の芯々幅8.10m、溝の内々幅で約7.50mを測る。側溝間においては路面や路盤を示唆する痕跡は認められていない。

## 4SF130 (Fig.76, Pla.35)

当道路状遺構は南壁土層断面で確認された硬化土①を指すものである。鶴田中市ノ坂遺跡（第1・3次調査）で確認された帶状硬化土とは異なり、厚さ0.03m前後、幅6.10mを測る淡黒色土が直線的に捉えられるものであった（硬化土①は南壁土層断面では確認されたものの、調査区内及び北壁土層断面では確認できていないため重機による表土剥ぎの際に削平した可能性が高い）。更に硬化土の硬さにおいても帯状硬化土よりやや軟質であった。この状況から当道路状遺構は第1・3次調査で確認された帶状硬化土にあたる道路状遺構とは異質の痕跡であることが理解できるが、現在のところ時期的なものとしては大差ないものと判断している。

## 土坑

## 4SK050 (Fig.77)

調査区内の中央で検出した隅丸長方形状の土坑である。長軸5.15m、短軸1.30m、遺構検出面からの深さ約0.49mを測り、土坑内西側にはテラスを有する。土坑は土層断面から少なくとも1度以上の掘り直し

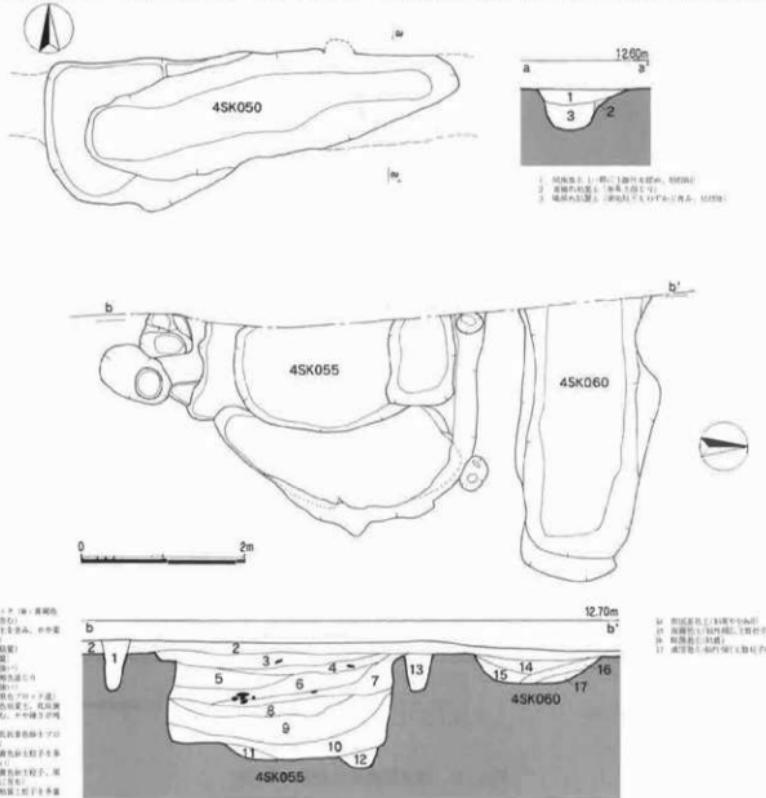


Fig.77 4SK050・055・060実測図 (1/60)

がされている。出土遺物は土師器（小皿・片）が認められた。

#### 4SK055 (Fig.77, Pla.37)

調査区内の西側で検出した。遺構の西端は調査区外へ延びるので、幅3.10m、遺構検出面からの深さ約1.30mを測り、土塊内東側にはテラスを有する。土塊は土礫、面から少なくとも1度以上の掘り直しがされている。出土遺物は須恵器（杯）、土師器（小皿・片）、石製品（五輪塔）が認められた。

#### 4SK060 (Fig.77, Pla.37)

調査区内の西側で検出した。遺構の西端は調査区外へ延びるので、幅1.56m、遺構検出面からの深さ約0.30mを測る。出土遺物は土師器（茶盞）、石製品（焼玉）が認められた。

#### (5) 調査区B—出土遺物

##### 土坑

#### 4SK055 (Fig.78, Pla.38・39)

##### 須恵器

杯（13・14） 13は五輪塔口縁を呈する。内外面はヨコナナド調整で、粘土は微砂粒、黒色粒子を少し含む。14は底部の稍片で、底径1.00cmを復原する。内外面はヨコナナドであるが、外底切り離しは不明である。粘土は微砂粒を少し含み、微砂粒を多く含む。

##### 石製品

五輪塔（15） 空・風輪のはば形で、石材は凝灰岩製である。空輪最大径11.70cm、風輪最大径12.20cmを測る。

#### 4SK060 (Fig.78, Pla.39)

##### 土師器

茶盞（16） □径15.00cmを測り、周縁には耳が側面2箇所に貼り付けられ、中心部に0.60cm前後の穿孔を施す。体部中位にはやや下方気味に弱め貼り付けられているが割れは不明である。内外面の上位はケズリ後ヨコナナド、下位は粗い刷毛目の調整である。口縁外側の一帯には鋭利な工具によって文様が描かれている。

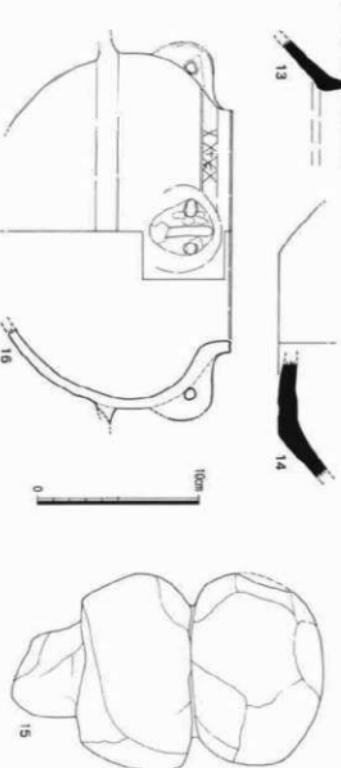


Fig.78 4SK055・060出土遺物実測図 (1/3)

## （6）小結

調査の結果、調査区Aからは道路状遺構に付設される側溝1条、隕1条、井戸1基、土壌3基等、調査区Bからは道路状遺構4路、土壌3基等が確認された。以下は、調査区A・Bから確認された主要な遺構について概要する。

### 調査区A内の東側で確認された南北方向の帯（4SD003）

調査区A内の東側で確認された南北方向の帯（4SD003）は、出土遺物から中世に比定され、溝の性質は区画溝が考えられる。

### 井戸

調査区A内からは素掘りの井戸（4SE011）1基が確認されたが、危険防止のため遺構検出面から約1.5mまで掘削したものである。井戸は鶴田中市ノ塙遺跡（第1～3次調査）で推定される水脈ライン上で確認されている。13世紀～14世紀を主とする遺物が認められている。

### 道路状遺構

調査区A内からは道路状遺構に付設する東側側溝、調査区B内からは両側側溝、硬化土、硬化面が検出された。顯著に確認された調査区B内の道路状遺構は、4SF100・110・120・130と4路を復原することができた。復原された道路状遺構のうち、4SF100は道路状遺構の規模と配肥状況からISF500（鶴田中市ノ塙遺跡・1次）及び3SF300（鶴田中市ノ塙遺跡・3次）の延長部と捉えられ、後方に整備された古代官道（西海道）と想定される。同様に、4SF110=3SF210=ISF510、4SF120=ISF220=1SF520、4SF130=3SF230=ISF530の延長部と捉えられるが、道路状遺構からは年代を比定する出土遺物に恵まれていないのは残念であった。

### 土坑

調査区B内の西端で確認されたISK055・060とは隣接した土坑である。共に中世の遺物が認められればより、第1～3次調査で確認されている中世集落に関連した遺構と思われ、遺構の性格としては施棄土坑の可能性が考えられる。



鶴田中市ノ塙遺跡（第4次調査）調査区全景（空中写真：真上から）

## 5. 鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）

### (1) はじめに (Fig.79)

当遺跡は高知市大学鶴田字中市ノ塚419-2外に所在し、標高12.5m位の低位置丘上に立地する。発掘調査は市営住宅鶴田団地建替事業に伴い、駐車場用地である96m<sup>2</sup>を実施した。調査期間は平成9年3月22日から同年3月31日まで実施し、この間、重機による表土除去（有限会社桜島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影、空中写真撮影は有限会社中写真企画に委託（同上）等を行った。発掘調査は小林勇作が担当し、堀田剛の協力を得た。また、遺構の実測及び写真撮影は小林が担当した。

調査の結果、井戸1基が検出された。



Fig.79 鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）調査地点位置図 (1/2,500)

### (2) 検出遺構

#### 井戸

#### 5SE1 (Fig.81, Pla.40)

調査区内の中央で検出したのは円形状の素掘りの井戸で、径は2.10m前後、深さ2.20m以上（安全基準上、地中で振り下げを断念した）を測る。井戸の上位は断面が幅狭長形、下位は断面形状を呈し、土は上層から黒褐色土（小甕混入）→茶褐色土（砂・小甕混入）であった。遺物は土器類（七輪・火鉢）が出土した。

#### (3) 出土遺物

#### 井戸

#### 5SE1 (Fig.80, Pla.40)

#### 土器類

土器 (1) 玉縁片口縁を呈し、内面は工具ナデ、口縁部外側はヨコナナ、体部外面は錐め方向の刷毛と思われるが、外側は埃が吸く付着しているため図示できていない。

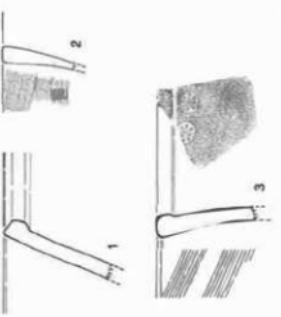


Fig.80 5SE1出土土器実測図 (1/3)

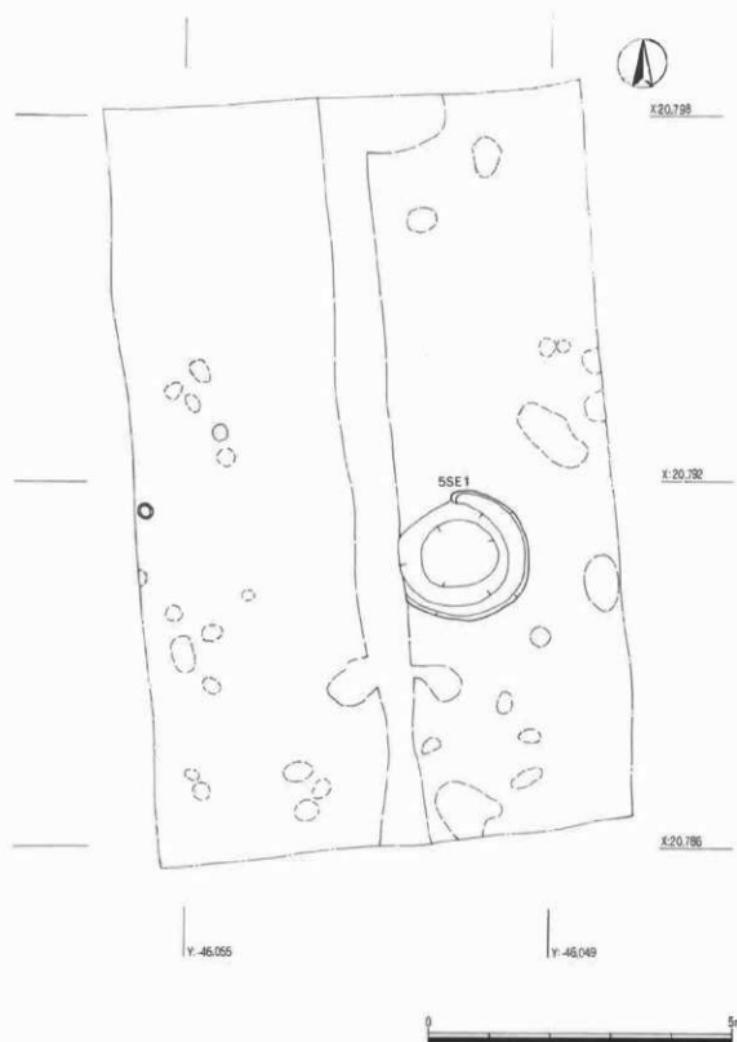


Fig.81 鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）遺構全体実測図（1/80）

### 瓦質土器

火鉢（2・3）　2は口縁端部が平坦面を呈する。内面は刷毛目、口縁端部はヨコナデ、外側は調整不明である。3は口縁端部が台形状を呈する。内面は斜め方向の粗い刷毛目、口縁部外側はヨコナデ、体部外側は工具ナデの調整で、口縁部外側に菊花文の印刻文が施される。

### （4）小結

調査の結果、素掘りの井戸が1基確認されたのみで、井戸の配置は鶴田中市ノ坂遺跡（第1～4次調査）で推定される水脈ライン上よりやや西よりにあたる。安全管理上、約2.20mまで掘り下がったが、井戸底部までは達していない。井戸からは玉縁状口縁を呈する土師器・土鍋が1点、瓦質土器・火鉢が2点確認されており、鶴田中市ノ坂遺跡（第1～3次調査）で確認されている中世聚落に関連した遺構と思われる。

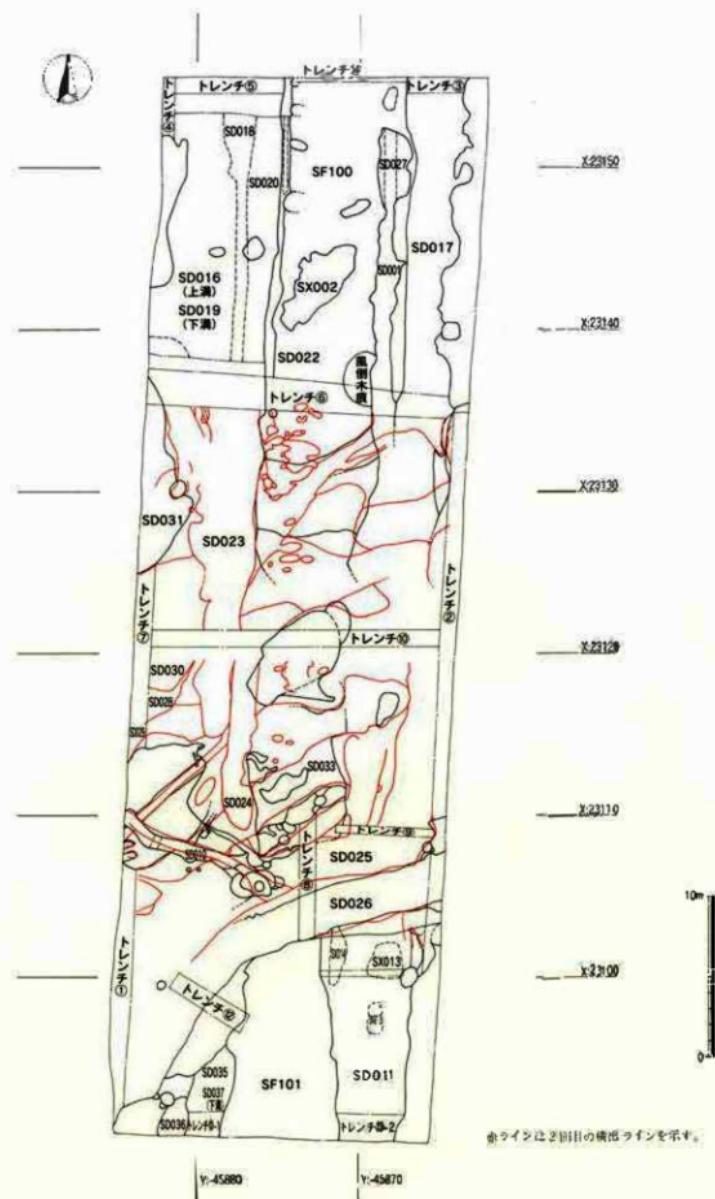


Fig.82 山ノ井川口遠跡遠横路測図 (1/300)

## 6. 山ノ井川口遺跡

### (1) はじめに (Fig.83)

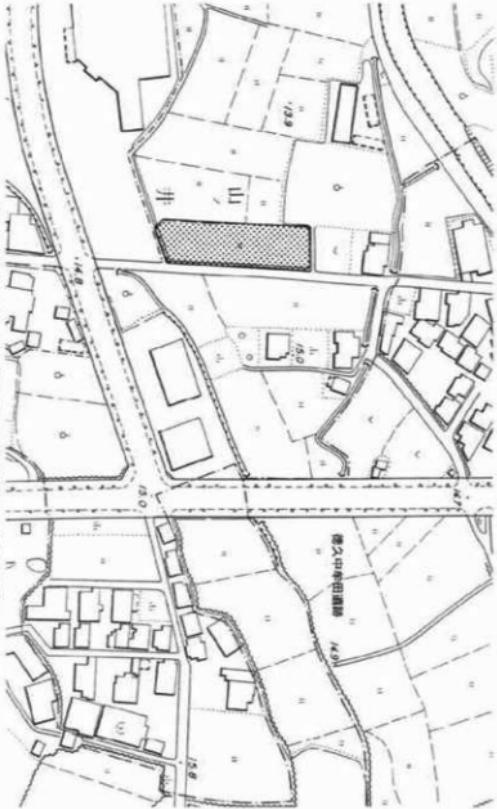
当遺跡は筑後市大字山ノ井字川口828—外に所在し、標高13.5m位の崩れ地性低地に立地する。開発事業者である嘉徳無線株式会社から店舗建設予定地内における埋蔵文化財の取扱いについて照会された。市教委ではこれを受けたが、予定地内は既に試掘調査を実施していた場所で、道路状遺構や窯が確認されていた。その後、協議を行った結果、当該地は導西南海道ルートに位置することから確認された道路状遺構はその可能機「當かつたた式」道路の保存を前提とした工事を実施する事前に確認調査を行うことで合意した。

調査面積は1,202m<sup>2</sup>で、調査期間は平成10年11月2日から平成11年2月16日までで、この間、重機による表土除去（有限会社福島建設に委託）、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影（空中写真撮影は有限会社空中写真会社に委託）等を行った。発掘調査は小林勇作・立石英二が担当し、遺構の発見及び写真撮影は小林、立石が作成し、上村英士、堀田剛の協力を得た。

### (2) 掘出遺構

各遺構の説明をする前に調査の内容について概要する。

調査は、遺跡が保存されることを前提とした研磨調査であったため、遺構の破壊となる掘削を極力なくすることを原則とし、トレーシングを主とした方法で調査を進めることにした。遺構は、試掘調査で確認されていた道路状遺構が調査区内の北部と南部で検出されたが、中央部においては砂や粘土が入り交じった堆積層を呈していたことから遺構の二重プランは不明瞭であった。このため不明瞭な部分を直機で5~10cm程度更に削平したところ、北東一南西方向を示す流路や構造が検出された。



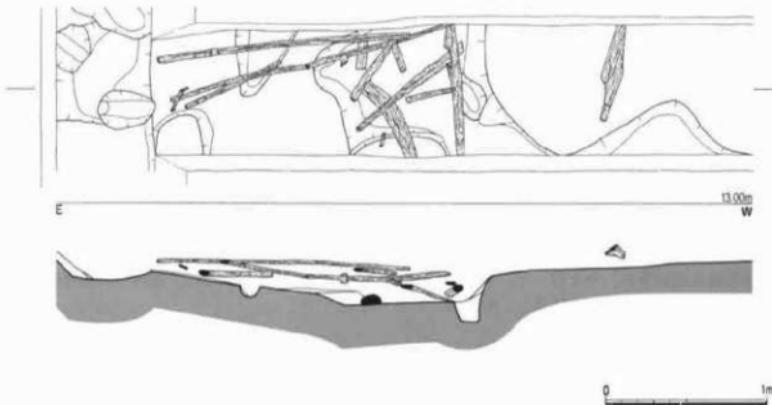


Fig.84 トレンチ⑩流木実測図 (1/30)

## 溝

## SD010 (Fig.85)

調査区内の中央西よりで、やや蛇行するように検出された。上幅0.45~1.35m、深さ0.32mを測る。当溝における遺構の切り合は古い順にSD025・SD028→SD010→SD026である。出土遺物はない。

## SD025 (Fig.86)

調査区内の南部で北東一南西方向に蛇行しながら貫通する溝で、検出長約24.50m、上幅4.35m以上、深さ0.85m程度を測る。溝の検出は、表面に堆積した砂や粘土が混合していったため容易ではなく、大別した平面プランを確認できたにすぎず、不明な点を残す結果となった。溝の検出状況は、南辺はSD026に切られているが、北辺は不明瞭で、途中SD033に切られるように確認された。このため土層断面による観察をしたところ、西端（トレンチ①）と東部（トレンチ②）は自然な傾斜を呈していたが、中央部（トレンチ⑧）では複数の溝が重なる様子が見受けられる。堆積土によるものか別の溝である可能性を考えられるが、現段階では不明と言わざるを得ない。出土遺物は須恵器（長頸瓶）、土師器（甕・片）等が出土している。

## SD026 (Fig.86)

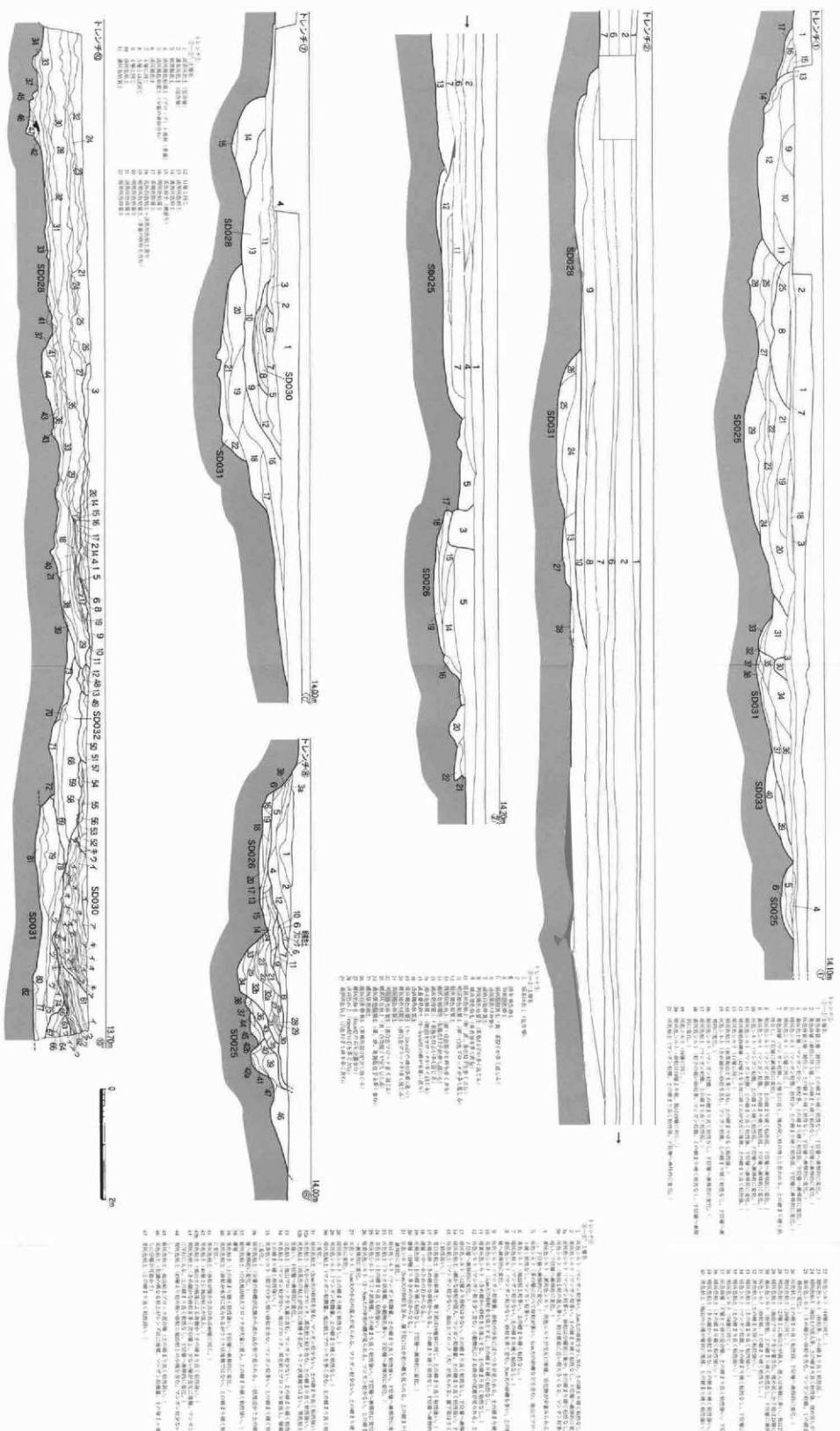
調査区内の南部で北東一南西方向に蛇行しながら貫通する溝である。溝の北辺はSD25を切り、検出長約25.00m、上幅3.50m以上、深さ0.60~0.85mを測る。土層断面による観察をしたところ、西部（トレンチ①）、中央部（トレンチ⑧）、東部（トレンチ②）は何れも自然な傾斜を呈する緩やかなU字状の断面形であった。出土遺物から中世の溝と考えられ、当遺跡の西方約150m、他久中寺跡跡で確認されているSD010の延長部に該当すると思われる。

## SD028 (Fig.86)

調査区内の中央部で東西方向に貫通する溝である。検出長約21.00m、上幅5.95m以上、深さ0.60m程度を測る。溝の検出は、表面に堆積した砂や粘土が混合していったため容易ではなく、大別した平面プランを確認できたにすぎず、特に中央部から東部にかけては不明な部分を残した。このため土層断面で観察をしたところ、西部（トレンチ⑦）では顕著に認められたが、中央部（トレンチ⑩）と東部（トレンチ②）にかけては広範囲に及ぶ自然な傾斜を呈する溝が確認された。更に、トレンチ⑩の東端の溝底からは、加工痕のない自然木が集積するように確認された。トレンチ部分のみでの確認に止まつたため、人為的なものであるかどうかはわからない。出土遺物から弥生時代の流路である可能性がある。



Fig.85 山ノ井川口道路遺構全体実測図 (1/100)



9.86 トレーナー①・②・⑦・⑧・⑩土層断面実測図 (1/60)

**SD030 (Fig.86)**

調査区内の中央部で確認した北東—南西方向の溝で、検出長約20.00m、上幅0.45~3.20m、深さ0.6m程度を測る。当溝はSD028及びSD030を切るように検出され、中央部から東部にかけては極度に渓谷が狹まる。溝の断面形は縫やかなU字状ないしはV字状を呈し、西端（トレーナチ<sup>(5)</sup>）と中央部（トレーナチ<sup>(5)</sup>）の土層断面では白色砂礫や暗赤色粘土が幾重にも堆積している状況が観察に認められた。この状況は総流程度の流水によるものと推定される。

**SD031 (Fig.86)**

調査区内の中央部で確認した北東—南西方向の溝で、深さは1.00m程度を測る。当溝の西端はSD031及びSD032に切られ、中央部から東部にかけてはSD028に切られるように検出されたことから検出長及び上幅は不明である。溝の断面形は概ね逆台形状を呈する。

**道路状況**

道路状況を説明するにあたって、まず道路状況に付随する遺構（側溝・路面等の状況）について先述する。

**西側側溝****SD016 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は調査区北部、西側側溝の上層にあたり、埋土は淡灰褐色砂質土を呈する。西側側溝はこのSD016の下層から蛇<sup>(6)</sup>に4段（SD018~020・022）が確認されており、溝は中央部で確認されているSD023・024へと移行するものと考えられる。検出長約20.00m、上幅7.00m以上、深さ0.10m程度を測る。遺物は須恵器（蓋・坪・微）等が出土している。

**SD018 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は断面形はV字状ないしは縫やかなU字状を呈し、隣接する西側側溝のSD019を切る一方、東側側溝のSD020には切られない。検出長約20.00m、上幅1.10~1.65m、深さ0.22~0.30mを測る。遺物は土師器（片）、瓦器（片）が出土している。

**SD019 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は調査区北端、西側側溝の最西端にあたりが、溝は比較的幅広であり、SD016の下位で確認された溝である。隣接するSD018には切られ、検出長約20.00m、上幅2.10~3.20m、深さ0.05~0.20mを測る。遺物は僅かに須恵器（片）が出土している。

**SD020 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝の断面形は逆台形状ないしは縫やかなU字状を呈し、隣接するSD018・022を切るように確認された。検出長約20.00m、上幅1.15~1.40m、深さ0.23m程度を測る。遺物は土師器（片）、黒曜石（鉄片）が出土している。

**SD022 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は調査区北端、西側側溝の最東端にあたり、隣接するSD020に切られるよう確認された。検出長約20.00m、上幅1.75m以下、深さ0.20~0.30mを測る。遺物は僅かに須恵器（片）が出土している。

**SD023 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は調査区中央部で検出された。調査区中央部を横断する一連の流路を切るよう確認されたが南北は終息する。検出長約20.10m、上幅1.80~3.25mを測る。遺物は僅かに須恵器（蓋）、土師器（片）が出土している。

**SD024 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は調査区中央部でSD023に切られるよう検出された。更に調査区中央部を横断する一連の流路を切るよう確認されたが溝部は終息する。検出長約25.50m、上幅1.10m前後、深さ0.08m前後を測る。遺物は僅かに須恵器（蓋）、土師器（片）が出土している。

**SD035 (Fig.87, Pla.41~47)**

当溝は調査区南端、西側側溝の中央溝にあたる。調査区南部、西側側溝は堀削時ににおいてSD015として全体を掘削したが、土層断面で分離されたためSD015を与えた。従って、出土遺物はSD015に帰属される。

溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、上幅1.56m、深さ0.20m前後を測る。隣接するSD36・37を切るよう確認された。

#### SD036 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区南部、西側側溝の西溝にあたる。SD035と同様にS015として全体を掘削したため出土遺物はS015に埋葬される。溝は自然な傾斜を呈し、上幅約1.70m、深さ約0.25mを測る。隣接するSD035に切られるように確認された。

#### SD037 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区南部、西側側溝の東溝にあたる。SD035と同様にS015として全体を掘削したため出土遺物はS015に埋葬される。溝の断面形は逆台形状を呈すると思われ、上幅約0.80m以上、深さ約0.20mを測る。隣接するSD035に切られるように確認された。

#### 東側側溝

##### SD001 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区北部、東側側溝の西溝にあたり溝の南北は終息する。僅かではあるが隣接するSD017を切るように確認された。検出長約18.50m、上幅0.70~1.65m、深さ0.05~0.18mを測り、遺物は須恵器(甕)、土師器(片)が出土している。

##### SD011 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区南部の東側側溝にあたり、北部は流路であるSD026に切られている。平面プラン及び土層断面では1条の溝として捉えられたが、溝の痕跡としてはSX012~014が該当すると考えられるため、本来は数条の溝が存在していた可能性がある。検出長約13.20m、上幅3.45~5.50m、深さ0.25m程度を測る。溝は西側側溝に比べると比較的軟弱な地盤(地山:灰白色粘土)に構築されていたため、溝底は凹凸が著しい。出土遺物はSD011から須恵器(片)、土師器(环・片)、SX012から土師器(片)、SX014から須恵器(片)、土師器(环)が出土している。

##### SD017 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区北部、東側側溝の東溝にあたり溝の南部は終息する。隣接するSD001に切られ、検出長約19.40m、上幅2.25~3.30m、深さ0.10~0.30mを測る。溝は西側側溝に比べると比較的軟弱な地盤(地山:灰白色粘土)に構築されていたため、平面プラン及び溝底においては不安定であった。遺物は僅かに土師器(片)が出土している。

##### SD027 (Fig.87, Pla.41~47)

当溝は調査区北部、東側側溝SD001の下位から確認され、検出長約12.60m、上幅0.30~1.15m、深さ約0.15mを測る。遺物は僅かに須恵器(片)、土師器(片)が出土している。

#### 路面・路盤・路床等

##### SF100 (Fig.87, Pla.41~47)

当遺構は調査区北部で確認された道路状遺構の側溝間ににおける部分を指す。

表土除去後、地山である灰白色粘土上に淡灰色砂質土を基層とした堆積土(以下、覆土)上に面が確認され、当遺構はこの面で検出した。遺構面は、覆土に対して円形・楕円形・隅丸方形等の様々な形状を呈した淡灰色砂質土・淡灰色砂質土・茶褐色砂質土・乳白色粘土・黒色粘土の堆積土が切りあう状況であった。この状況は、近年の道路状遺構に関する調査事例から道路運営に伴う痕跡であることが予想されたため、遺構検出面から地山に至るまでの全ての全ての痕跡を遺構として取り扱うこととした。調査は平面上での確認にあわせて、土層断面による立面での確認が妥当であると考えられたが、保存を前提とした確認調査であること、調査期間に限定があったこと等の理由から、調査区北部で確認された当遺構においては、平面プランを重点とした資料収集に努めることとした。

まず、平面上で確認された痕跡の検出状況について整理する。東西で確認された側溝間ににおける部分からは、地山上に堆積した路盤(ここでは路面と路床の間にあたる土・砂・石等で人为的に構成された土層を指す)である淡灰色砂質土に、小疊(パラス)や土器が混入した状態であり、刺突状痕跡(ここではピット状の遺構が集合した痕跡の意味として使用した)は、この堆積層上面に見なれていた。刺突

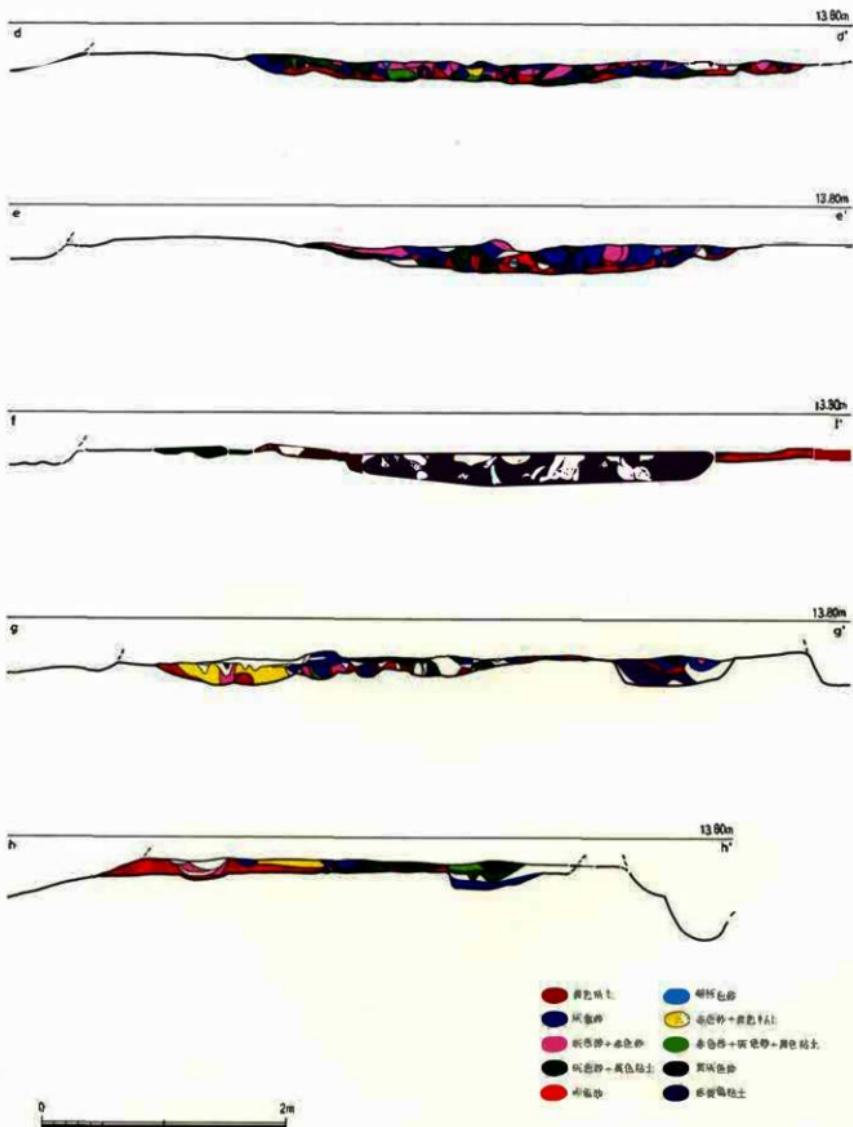


Fig.87-① 路面・路盤土層断面模式図 (1/40)



Fig. 87-② 道路状況測定面実測図 (1/40)

状況等の分布状況については、道路幅員におけるほぼ全件で確認されたが、密度的には道路中心部から西側にかけて多く認められた。その大半は単位ごとに捉えられる個々の側突状道路が密接し、ある程度の一元性を有することで群単位に捉えられるものであった。密集した側突状道路は、道路主幹に対してはは直行するよう突き込まれている状況で、不規則ではあるが、ある程度の間隔を保ちながら南北方向に分布するものであった。トレーニングで下層の状況を確認したところ、地山に形成された路床（ここでは道路の底下面を示す）と地山の境界にあたる面を指す）から、地盤は板状・凸起状（ここでは平面プランが不定形状を呈した浮き状の連続道路を指す）が確認され、底盤からは多くの小塊が認められた。小塊は被抜状凹凸状跡跡や路盤に含まれるものが大きかったが、路床に集中したものが多く、地山に突き刺さった状況も看取された。道路幅員は測定の内々幅で5.50～6.30mを測る。

#### SF101 (Fig.87, Pla.41～47)

当道路は調査区両端で確認された道路状況の細部例における部分を示す。  
当遺構の検出面は、表上部左後に確認された砂質土・粘質土・粘土等で構成された堆積土（以下、路側突状道路）が切りあう状況であった。この状況は、調査区北端で確認された道路沿壁に伴う模様であると認識し、地山上に堆积する全ての堆積土と地盤を選択して取り扱うこととした。  
調査は、北部で平頂プランを重視したことに対し、南部では平面上での確認にあわせて土留め面による立面での確認を行うこと（道路に対して直行する土留ベルト（幅約20cm）を每50cm間隔に均等に設定）とし、相互関係を重点とした資料収集に努めることとした。

次に、平面上で確認された道路の検出状況についての調査結果を示す。南側の検出状況は、北部で確認された立面上で確認された一連の側突状道路は、南側においても調査者に認められ、密接には北端より高いものであった。更に、ある程度の元気性を有した断面を呈していたことから、北端の様相に似ている。土留面による立面（→流れ込みによる層位を示すもの・上位から第2なれが層）を示すもの・砂や粘土を數き詰め・水平層位を示すものであった。上位から第2なれの層位における側突状道路の断面形は崩壊・V字形・U字形等を呈し、堆積土は黄色粘土・灰白色・灰白色+赤色砂・灰白色砂+黄色粘土・赤色砂・暗褐色・赤色砂+黄色粘土・赤色砂+灰白色砂+黄色粘土・灰白色粘土・灰白色+黄色粘土・明灰色+赤色砂・黄灰白色粘土等の多くの堆積土が組み合はせっている状況であった<sup>10)</sup>。北端でみられた堆積土に含まれる小塊（バラス）や土器は、南端では少し含まれる程度であった。地山上に見られる跡跡は、側突状における中央部が概ね疊んだ状況（オーバンカット）を呈し、詳細な部分では被抜状凹凸跡跡・溝状跡跡（ここでは道路上に形成された溝状の痕跡を指す）、ビット状跡跡（ここでは車体として捉えられるビット状に詳んだ痕跡を指す）が看取された。被抜状凹凸跡跡は道路主幹に対してやや斜め右向<sup>11)</sup>、ある程度の間隔を保ちながら南北方向に分布するものであった。道路幅員は測定の内々幅で4.20～7.35mを測る。

**推定道路**  
調査区の南端で確認された側突は不明瞭であったため、調査し確認された北端の道路状況についてのみ復元（試みた）。なお、以下に示した道路状況における路面・路盤・路床の状況はSD100及びSD101に委ねられるが、各道路状況に該当するとみられる路面・路盤・路床は判断し難いため、ここでの説明は避けることとした。

#### SF102 (Fig.87, Pla.41～47)

当道路状況はSD020（西側側溝）—SD001（東側側溝）間が該当し、溝の内々幅で約6.30mを測る。  
**SF103 (Fig.87, Pla.41～47)**  
当道路状況はSD022（西側側溝）—SD027（東側側溝）間が該当し、溝の内々幅で約8.00mを測る。  
**SF104 (Fig.87, Pla.41～47)**  
当道路状況はSD018（西側側溝）—SD017（東側側溝）間が該当し、溝の内々幅で約12.10mを測る。

## 不明遺構

SX002 (Fig.35)

調査区北部、SF100のほぼ中央で検出した棒円形状の遺構である。長軸6.30m、短軸2.35m、深さ0.18m～0.38mを測る。底面は段差を認め、一部で小礫が集積していた。地土は灰白色砂質土を基盤とし、海生土器(片)、須恵器(蓋・裏・片)、土陶器(片)、瓦器(輪・片)が出土遺物として認められた。

### (3) 出土遺物

#### 遺物状遺構

##### 備考

SD011 (Fig.38, Pla.48)

##### 土師器

碗 (1) 口縁部の細片で、高台径8.70cmを復原する。内外面は著しく磨耗しているため調整不明である。

SD016 (Fig.38, Pla.48)

##### 須恵器

蓋 (2・3) 共に口縁部の細片で、口径14.60cmを復原する。調整は削耗のため不明である。

环 (4～10) 4はかえりのある环である。内外面はヨコナナデ調整で、口径11.00cm、かえり径13.60cmを復原する。5・6は外底へラ切りで内外面はヨコナナデ調整である。5は口径12.60cm、高台径7.20cm、器高4.85cm、6は口径2.98cm、高台径、8.00cm、器高4.40cmを復原する。7は口縁部の細片で内外及び外面上位はヨコナナデ、中位はケズリ後ヨコナナデ、下位はケズリの調整である。8・9は底部の細片で、外底はへラ切り、内外面はヨコナナデ調整である。8は高台径10.20cmを復原する。10は底径8.00cmを復原し、外底はへラ切り、外底はヨコナナデ調整である。

蓋 (11・12) 11は口径14.00cmを復原し、内外面はヨコナナデ調整である。12は口径7.20cmを復原し、内面及び口縁部外面はヨコナナデ、体部外面は筋毛目調整である。

##### 土師器

环 (13～15) 13は口径15.40cm、底径13.00cm、器高4.45cmを測る。外底はへラ切り、その他はヨコナナデ調整である。14は高台径10.00cmを復原する。内外面は削耗のため調整不明である。15は高台径11.00cmを復原し、外底はへラ切り、高台部はヨコナナデ調整で、その他の削耗のため調整不明である。

甕 (16) 口径16.00cmを復原し、内面は削耗のため不明である。

土瓶 (17) 定形で長さ4.95cm、底大径1.25cm、穴口径0.60cmを測る。

SD02\_2 (Fig.38, Pla.48)

##### 須恵器

蓋 (18) かえりのある蓋で、内外面はヨコナナデである。口径11.00cm、かえり径9.40cmを復原する。

SD02\_3 (Fig.38, Pla.48)

##### 須恵器

甕 (19) 口縁部の細片で半円前面はヨコナナデ調整である。

トレンチ⑤ (Fig.38, Pla.48)

##### 土師器

环 (20) 口径3.20cm、底径8.20cm、器高3.10cmを復原する。磨耗のため調整不明である。

路面・路盤・路床

SF100—層土 (Fig.90, Pla.49)

##### 石製品

石匙 (46) 石材はサスカイトで、つまみを有する。周縁に二次加工を施し、刃部を作り出している。

SF101トレンチ (Fig.38, Pla.48)

##### 須恵器

切削調整 (21) 口縁部の細片で、口径5.20cmを復原する。(内)外面はヨコナナデ調整である。

甕 (22) 口縁部の細片で、口縁部内面に長びき外面はヨコナナデ、口縁部内面下位はケズリ調整である。

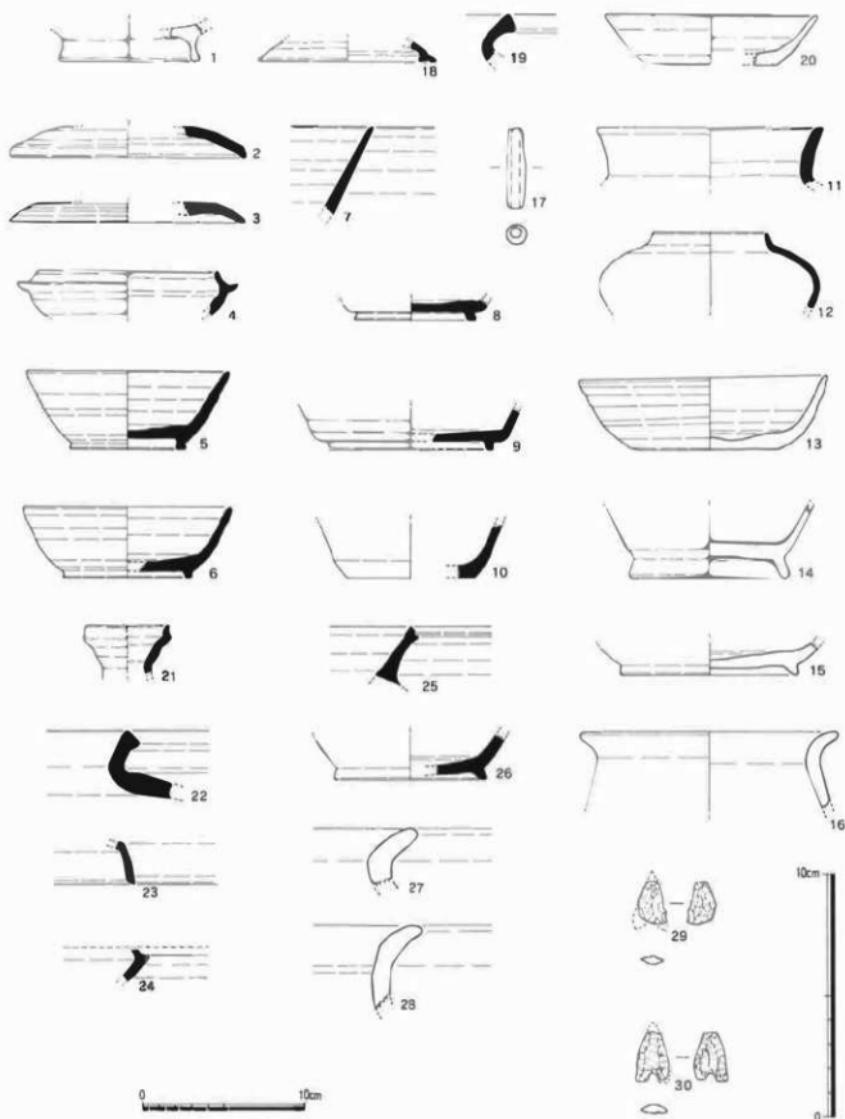


Fig.88 道路状遺構出土遺物実測図 (1/2・1/3)

蓋 (23) □縁部の細片で、□縁部外面下側及び内面はヨコナデ、□縁部外道上位はケズリ調整である。

坪 (24) かえりのある坪で、内外面はヨコナデ調整である。

石製品 石盤 (30) 尖端部及び片側端が欠損する。石材はサスカイト製で、抉りが比較的浅い両面加工の石盤である。現存重1.10gを測る。

SF101—墨土 (Fig.88, Pla.49)

須恵器 坪 (26) 高台付4.0cmを復原し、外底はヘラ切り、内底はナタでその他のヨコナデ調整である。

土師器 土器 (27・28) 共に□縁部の細片で、調整は消耗のため不明である。

石製品 石鏡 (29) 尖端部及び側端部が欠損する。石材はサスカイト製で、抉りが比較的浅い両面加工の石鏡である。現存重0.80gを測る。

滑

SD025 (Fig.89, Pla.49)

須恵器 長颈壺 (31) 脊部が突出した盖で、肩部外面はヨコナデ、体部外面は格子叩き後ヨコナデ、内面は同

心円叩き後ヨコナデ調整である。

土師器 土器 (32) □縁部の細片で、調整は消耗のため不明である。

SX002 (Fig.89)

須恵器 袋 (33) 指部が畳曲した蓋で、内外面はヨコナデ調整である。

不明遺構 不明遺構 (34)

土師器 土器 (35) □縁部の細片で、調整は消耗のため不明である。

SX003 (Fig.89)

須恵器 袋 (36) 指部が畳曲した蓋で、内外面はヨコナデ調整である。

SX004 (Fig.89)

須恵器 袋 (37) 指部が畳曲した蓋で、内外面はヨコナデ調整である。

SX005 (Fig.89)

須恵器 袋 (38) 指部が畳曲した蓋で、内外面はヨコナデ調整である。

SX006 (Fig.89)

須恵器 袋 (39) 指部が畳曲した蓋で、内外面はヨコナデ調整である。

トレンチ①

トレンチ②

トレンチ③

トレンチ④

試用

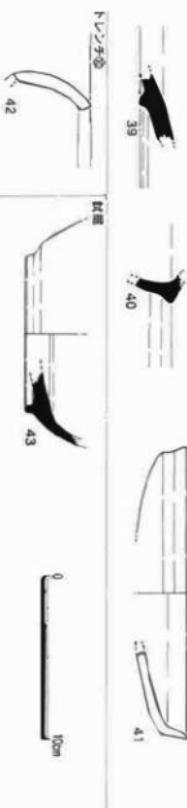


Fig.89 その他の出土遺物実測図① (1/3)

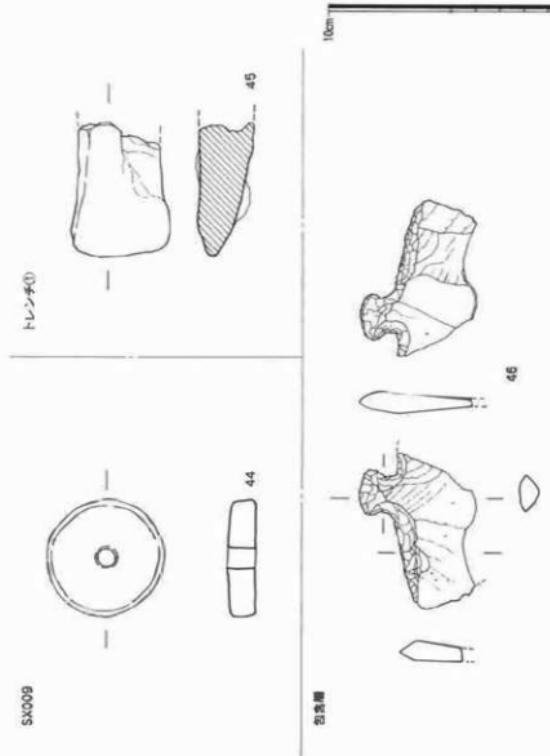


Fig. 90 その他の出土遺物実測図② (1/2・1/3)

SX008 (Fig. 89)

須磨器

环 (34) 口縁部の細片である。外底はへラ切り後高台を貼り付け、内外面はヨコナナデである。

SX009 (Fig. 90), Pla.49

土鋸器

石製品 細鉢車 (44) 石材は滑石製で、外径4.75cm、高さ1.20cm、穴径0.70cm、現存重は48.40gを測る。

その他遺構

レンチ① (Fig. 89・90, Pla.49)

瓦器

外? (35) 口縁部の細片で、内面及び口縁部外面はヨコナナデ、体部は横方向の刷毛目調査である。

瓦器

施 (36) 口縁部の細片である。口縁部はヨコナナデ調査であるが、その他は磨耗のため調査不明である。

鉢調品

不明 (43) 先端はやや尖り気味であるが、刃部は認められない。

レンチ② (Fig. 89, Pla.49)

弥生土器

夷 (38) 口縁部の細片で、磨耗のため調査は不明瞭であるが、口縁端部から口縁部内面上位にかけてはヨコナナデ、内面下位は斜め方向の刷毛目、口縁部外面は刷毛目後ヨコナナデ調査と思われる。

須磨器

环 (37) 底部の細片で、高さ15.8、20cmを復原する。外底はへラ切りで、内面はヨコナナデ調査である。

### トレンチ⑧ (Fig.89, Pla.49)

#### 須恵器

長颈瓶 (39・40) 39は底部の細片で、内外面はヨコナデ調整である。40は肩部が突出しており、肩部内外面はヨコナデ、体部内外面は叩き後ヨコナデ調整である。同一個体の可能性がある。

#### 土師器

III (41) 口縁部が外反する皿の細片である。磨耗のため調整は不明瞭であるが、外底はケズリ後ミガキ、その他はヨコナデ調整と思われる。口径18.00cmを復原する。

### トレンチ⑩ (Fig.89, Pla.49)

#### 弥生土器

甕 (42) 口縁部の細片で、磨耗のため調整は不明である。

#### 隠地試掘 (Fig.89, Pla.49)

#### 須恵器

环 (43) 底部の細片で、高台径9.60cmを復原する。外底はヘラ切り後高台を貼り付け、内外面はヨコナデである。

#### (4) 小結

今回の確認調査は試掘調査で確認されていた古代官道の規模や構築状況が焦点であったため、調査は遺構検出を行った後に主要な遺構にトレンチを入れることとした。調査の結果、遺構検出面で道路状遺構4路、溝7条が認められた。以下は、主要な遺構について概要する。

#### 溝

調査区内の中央部からは複雑に切り合った溝が検出され、その大半は溝の規模から流路と捉えられる大溝であった。当遺跡から確認された溝について説明する前に、まず周辺の地理的視野から概観することとする。

当遺跡は標高13.5m位の扇状地性低地に立地しており、当遺跡の北方約150mでは人工河川の山ノ井川が西流している。山ノ井川については『筑後市史』(註1)に詳細が記されており、このことは『徳久中牟田遺跡』(註2)において概略されているところであるが、今一度、市史の内容を要約しておく。

東方に隣接した八女市から筑後市に広がる扇状地性低地は、矢部川の河床より高いために水田の灌漑用水が取水できなかったようで、その排水路・灌漑用水路として人工的に造られた河川であったことがわかる（人工河川は山ノ井川の他に筑後市西部を西流する花宗川があり、同じ機能をもったクリークも整備された）。しながらも、扇状地性低地の地域は河川の増水や洪水による側方侵食力（河川を刻む力）によって、分流或いは乱流状態になった自然河川があったと推定されている。

のことから、当遺跡で流路と捉えられる一連の溝は、山ノ井川の前進である自然河川であった可能性が考えられる。

調査では複雑に切り合うSD29~31が確認された。当遺跡は北東一南北方向にやや蛇行する溝で、出土遺物から弥生時代に比定され、その規模からは流路として機能していたことが窺える。更に、調査区内中央部のやや南よりで確認されたSD25・26は、出土遺物から中世の溝である可能性が考えられる。中世の溝といえば、当遺跡の東方約150m離れた徳久中牟田遺跡で、北東一南北方向を直線的にのびるSD010（溝の下層は12C後半～13C前半に比定）が確認されており、このSD010を西方に延長させるとSD25・26付近を通過することが想定される。

#### 道路状遺構

先述したとおり、調査区内からは道路状遺構に付設する粗溝、路盤、路床等を顕著に確認することができた。道路状遺構は、側溝の状況からSF102・103・104の3路、路盤や路床の状況から1路（SF100とSF101）を復原することができる。道路状遺構の規模は、側溝の切り合い関係から縮小傾向を示しており、遺構の古い順にSF104→SF103→SF102→SF100・101と変遷を辿ることが予想できる。当道路状遺構を筑後市南部に位置する鶴田中市ノ塚遺跡で確認された道路状遺構と比較すると、SF104は「1SF500・3SF200・4SF100」の規模に相当すると考えられることから律令期に整備された古代官道（西海道）と

想定される。同様に、SF103は「1SF510・3SF210・4SF110」、SF102は「1SF520・3SF220・4SF120」、SF100・101は「1SF530・3SF230・4SF130」に相当し、各道路状遺構における延長部として捉えることができる。道路状遺構は、遺構の性格上、遺物を殆ど認めないケースが多いが、今回確認した道路状遺構西側側溝の上層にあたるSD016からは、8C代を主体とする遺物が多く出土した。道路年代を特定するにあたっては貴重な資料といえ、今後の研究の参考資料として提示できよう。

## [図]

- 1 「筑後市史一巻」 筑後市 (平成2年)
- 2 「佐久小町遺跡調査」 筑後市文化財調査研究会 第四回 筑後市教育委員会 (1999)



山ノ井川口遺跡調査区全景（空中写真：左が北）



山ノ井川口遺跡南部道路状遺構（空中写真：上が北）



山ノ井川口遺跡北部道路状遺構（空中写真：上が北）

## IV.まとめ

今回の報告は、筑後市内の中央部を南北方向へ直線的に延びる道路状遺構（古代官道）に焦点をあて、それに伴う関連遺跡の調査成果を集成したものである。調査成果は、古代の道路状遺構のみならず、鶴田中市ノ塚遺跡では中世の櫛立柱建物、井戸、溝、土坑等といった遺構とともに国内外から持ち込まれた遺物の搬入品や在地の遺物が認められ、また、山ノ井川口遺跡では弥生時代と中世の流路を確認、各期における土地利用の実態や生活の一端を垣間みることができた。

本来なら、各道路から確認された個々の遺構や遺物については多義にわたって検討しなければならないところであるが、時間的制約と紙面上等の理由から、ここでは主要と思われる古代の道路状遺構と中世の集落について概略する。

### 1. 道路状遺構について

先述したとおり、鶴田中市ノ塚遺跡（第1・3・4次調査）、山ノ井川口遺跡からは古代の道路状遺構が検出された。この章では、まず主体である古代官道「西海道」を概要し、確認された一連の道路状遺構について若干の所見を加えることとする。

#### (1) 筑後国の古代官道

はじめに、律令体制下における古代の駅路について概略する。

古代の律令国家は「五畿七道」に全国の地域を区分し、支配していたとされ、「五畿」は山城・大和・河内・和泉・攝津の諸国、「七道」は東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の諸道を指す。七道（駅路）は都と地方を結ぶ道路の名称であるとともに地方における呼称でもあり、現在の日本の行政区画や道路体系の骨格となつたといつても過言ではない。律令国家は、駅路を中心とした「駅制・伝制・烽制」（註1）などの通信制度を確立させることで、地方における行政システムを徹底させた。「養老令」によると、駅路には30里（約16km）ごとに駅家が置かれており、駅馬が配置されていたとある。重要度や頻度に応じて「大路・中路・小路」に区分されており、駅馬は原則として「20疋・10疋・5疋」が配置されており、大路は「山陽道・西海道の一部（20疋）」、中路は「東海道・東山道（10疋）」、小路は「北陸道・山陰道・南海道・西海道の一部と支路（5疋）」である。10世紀初頭に編纂された『延喜式』（巻28 兵部省）には全国の駅伝の所在駅と駅馬数が記されている。

さて、現在の九州に相当する西海道は、外交や国防の要地として大宰府に統括され、駅路は大宰府を中心として各國府に通じていた。筑後市が所在する筑後国には「御井・葛野・狩道」の3駅家名が『延喜式』にみえる。3駅家は筑後～肥後国府間の駅路に配置された駅のこと、各駅には5疋の駅馬が配置されている。筑後国に配置されていた駅路や駅家の所在については、近年の研究や発掘調査成果などの蓄積によって、今日その概要が明らかにされつつある。

次に、筑後国における研究史について概略する。古代道路の研究に関しては、明治の初めに全国的な駅路網の復原を想定してまとめられた吉田東伍氏の『大日本地名辞書』と大槻如電氏の『駅路通』、昭和40年代に藤岡謙二郎氏を中心とする24名の歴史地理学研究者によってまとめられた『古代日本の交通路』（註2）等がある。先学諸氏によって盛んに行われた研究史の中で、筑後市周辺における研究が画期を迎えたのは1970年代になってからである。著名なものとしては、1972年に日野尚志氏が『筑後国上妻駅家について』（註3）、1978年に本下良氏が『丁車路』考（註4）、1983年に松村一良氏が『筑後地方を輿断する古代駅路』（註5）等を発表し、歴史地理学的観点による地名・地形・遺物等を参考として古代の駅路と駅家の想定した。

日野尚志氏は酒井田（現在の瀬高町）の光明寺創建者である僧行基が橋や築堤の工事を行っていると『続日本紀』に記されていることから、下妻郡と山門郡の郡境にある「行基橋」に注目し、駅路を下妻郡の条里の里界線上に想定した。更に、『延喜式』や『和名類聚抄』に記載されている葛野駅家を筑後市大字羽太塚付近から下妻郡・三潴郡境にかけての一帯と想定しながらも、推定駅路と推定上妻駅家の

里界延長線との交点たる筑後市大字羽田原大字東和泉付近を具体的に想定している。

木下良氏は「舊制解史（資料編）」所収の「明治15年守りづ確」に記載されていゝ幼字地名「車路」「車地」に注目した。「車路」「車地」が示す位置・地形・地割り等が「直線上に分布していることから「車路」を古跡路の遺跡として捉えた。鶴野駅は小字地名である「庄ノマヤ」の「マヤ」に注目（駅家＝ウマヤ＝マヤ）し、筑後市大字羽文塚字丑ノマヤを遺跡として想定した。

松村一良氏は木下良氏が想定した駅路とは別途と見て想定した。

以上のように、諸氏らは既に地理学的研究によって筑後市内の聖路（古代官道）を想定している。これまでには研究史を中心に戛り始てきたが、以下は考古学的手法によって行われた調査の成果をもとに概略する。

## （2）筑後市内検出の古代官道及び関連遺跡

まず、本書に掲載していない「地歴における古道」一章の調査事例を記す。

### 1) 西海造跡（第2次）

平成9年度に久留米市教育委員会が実施した調査（註6）で、久留米市と筑後市の市境に位置し、当地の東側は小字地名の「東地」である。古代官道跡と、道路状遺構（SFI）は南北方向を示し、西側からはSD3、東側からはSD4の削溝が確認されている。「面端調査」にて削溝に削平を受けており、路面の上層風化から前後3回の掘り直しがされている。道幅は渋の芯々間で12.5m→11m→9mと縮小している。削溝の任地中点標はSD3（X：27580 Y：-45545）、SD4（X：27580 Y：-45535）である（座標値は報告書に掲載）。  
著者註：在いている平面図から削測した。

### 2) 鶴田木屋ノ角遺跡

平成10年度に筑後市教育委員会が実施した調査（註7）で、筑後市の南側に位置する。古代官道跡と、南北方向を示し、西側はSD01、東側はSD05の削溝が確認されている。削溝からR8K後半を比定する遺物が出土しており、周辺の土坑（SK02）からは墨書き土器の新患器（墓；「林家」ではないかと読みとれる墨書き土器）が認められている。削溝間の道路路面にあたる部分からは、方位表示を示す溝（SD10）が検出されているが、道路状遺跡との関係はわからず。削溝の任地中点標はSD01の「龍」（X：21760 Y：-45960）、南部（X：21680 Y：-45980、Y：-45950）、SD05の北部（X：21760 Y：-45949）、南部（X：21680 Y：-45954）である（座標値は報告書に掲載されている平面図から削測した）。

### 3) 鶴田木ヶ池遺跡（第2・5次調査）

第2次調査は平成10年度、第5次調査は平成11年度に筑後市教育委員会が実施した調査（註8）で、筑後市南側に位置し、鶴田木屋ノ角遺跡の南側にあたる。古代官道跡とされる道路状遺構として、第2次調査では不平整、第5次調査では東側の削溝と思われる車軸溝（SSD040）が後に判明している。更にSSD04の西隣からは南北溝（SSD045）が検出され、須恵器（盃）、土師器（杯）等の古代の遺物が認められている。第5次C調査区からは5SD040の車軸長部と認される溝が検出されているが、溝は北から南西方向へ大きくカーブしていることから直線的に延びる古代官道（削反するところが考えられ、相互的にには特定できない状況である。SSD040の任地中点標は（X：21505 Y：-45959）である（座標値は報告書に掲載されている平面図から削測した）。

### 4) 羽太塚中遺跡

平成3・8・13年度に筑後市教育委員会が実施した調査で、筑後市の中央部、小字地名である「車路」「庄ノマヤ」の西隣に位置する。奈良～平安時代を主体とする打置柱遺跡が検出されており、土坑からは墨書き土器である土師器（皿・杯）が多く出土している。墨書き土器は「東」字と書かれており、2SK170からでは「□鶴井脇野」（表土質試験調査・註9）字と書みとれる土師器（杯）が出土している。当遺跡は木下良氏、松村一良氏らが想定している「鶴野駅家」付近であることから、今後の研究においても注目される遺物である。

以上の調査成果でも明らかであるように、筑後市内における想定駅路上の各道路で確認された道路状遺構は、両側に側溝を有する道路が主体であり、道路の路面・路盤・路床といった部分は、立地状況等に応じて様々な様相を呈していることが明らかになった（Tab.1）。また、道路の規模を示す道路幅員は、側溝の切り合いで間隔から後世に従って徐々に狭まっていることが確認されていることから、律令体制の衰退に伴って道路が縮小していったことが窺える。

さて、今回の調査を振り返ると、鶴田中市ノ塚遺跡、山ノ井川口遺跡でも同様のことが窺えた。主として3~4路の道路を復原することができ、徐々に道路幅員が狭められながら道路の造成、補修等を行っていることが明らかになった。最も古い段階の道路状遺構は、鶴田中市ノ塚遺跡ではISF500・3SF200・4SF100、山ノ井川口遺跡ではSF102が該当し、道路幅員は側溝の心々幅で10.00m~12.10mを計測する。古代官道は、全国的な調査事例から駅場の頻度に応じて7・9・11…mの道路幅員であったと推測されていることを踏まえると、計測値に若干の誤差は生じているものの、おおよそ古代官道に近似した数値を示しているものと捉えることができる。想定駅路と調査で確認された道路状遺構の比較検討については稿を改めることとするが、現時点で古代官道に該当するとみられる道路状遺構は、市北境にある久留米市で1箇所、筑後市中央部で1箇所、南部で6箇所が確認されていることになる。先述したが、木下良氏、松村一良氏が葛野駅家に想定している筑後市大字羽足塚では、古代官道に関連するとみられる遺構と葛野駅家に関連した遺物が認められていることや、久留米市域では想定駅路から古代官道に該当するとみられる道路状遺構が32箇所以上（註10）で確認されていることから、久留米市から筑後市にかけての駅路は発掘調査によってほぼ明確化されたといつても過言ではない。このことは、先学諸氏らによって歴史地理学的に想定された駅路が考古学的手法によって実証されたことを意味し、大変意義ある成果として評価できるものである。しかし、駅路をめぐる立地状況や歴史的環境、駅路の構築・構造・時期等といった課題は未だ明確になっていない状況であるので、全容解明に至るまでには更なる調査事例や研究が必要と考える。

遺跡名	遺跡番号	測量面積	測量距離	測量時の心々幅	測量時の内側幅	路面・路盤・路床等の状況
鶴田中市ノ塚 (1次)	ISF500	ISD130	ISD140	約10.00m	約9.20m	不明
	ISF510	ISD135	ISD145	約8.50m	約7.60m	不明
	ISF520	ISD125	ISD145	約7.00m	約7.00m	不明
	ISF530	—	—	—	—	幅約30mの帯状硬化面を確認
鶴田中市ノ塚 (3次)	3SF200	3SD060	3SD090	約10.00m	約9.00m	不明
	3SF210	3SD070	3SD080	約8.50m	約8.00m	不明
	3SF220	3SD160	3SD090	約7.00m	約7.00m	不明
	3SF230	—	—	—	—	幅約30mの帯状硬化面を確認
鶴田中市ノ塚 (4次)	—	—	4SD080	—	—	不明
	4SF100	4SD065	4SD085	約11.00m	—	不明
	4SF110	4SD070	4SD080	約9.20m	—	不明
	4SF120	4SD065	4SD075	約9.10m	約7.50m	不明
	4SF130	—	—	—	—	幅約30mの帯状硬化面を確認
山ノ井川口	—	—	—	—	—	遺跡状況・剥食状・ゼット状の痕跡等を確認
	SF101	SD020	SD001	約6.30m	—	不明
	SF102	SD020	SD002	約6.00m	—	不明
	SF103	SD022	SD002	約6.00m	—	不明
西浦遺跡 (2次)	SF104	SD018	SD017	約12.10m	—	不明
	SF1	SD3	SD4	約12.50m	—	不明
	SF1	SD3	SD4	約11.00m	—	不明
鶴田木屋ノ角	SF1	SD3	SD4	約9.00m	—	不明
	SF20	SD01	SD05	約12.50m	—	床状遺構を確認
鶴田平ヶ池 (5次)	—	—	5SD040	—	—	西側で溝状遺構を確認

Tab.1 筑後市内における想定駅路上の道路状遺構一覧

### (3) その他の道路状遺構

古代の道路状遺構のみならず、市内からは各時代の道路が検出されている。事例としては極僅かであるが、ここでは筑後市内で確認されているその他の道路状遺構について列挙しておく。

#### 1) 横崎遺跡

平成4年度に筑後市教育委員会が実施した調査(註11)で、筑後市の中央部やや西よしに位置する。当遺跡は中世の道路状遺構として東西及び伴一窓云づSF190とこれに連続した東西方向のSF190が確認されている。片側ないしは両側に開溝を検出している。また、道路中央部の路面にあたる部分には砂利や小石が散き散らされている状況で、波板状凹凸痕跡も検出されている。更に、一部において礎化面や礎面などが確認されており、道路は3期の変遷が考えられる。

#### 2) 久富今町遺跡

平成9年度に筑後市教育委員会が実施した調査(註12)で、筑後市の東端に位置する。当遺跡では、道路状遺構に連続した施設と思われる連続した波板状の土坑が群発出土している。出土遺物は埴瓦がれないための施設の時期は不明であるが、古代以降の遺構として、古代の流路上から検出されているので、古代以降の遺構として捉えられる。検出状況としては2種類があり、連続した波板状の土坑が構内に配置されるもの、踏面として捉えられる礎化面及び礎面の下位に連続した波板状の土坑を呈するものがある。

#### 3) 久富縄打遺跡

平成12年度に筑後市教育委員会が実施した調査(註13)で、筑後市の中央部や「内ぶり」に位置する。当遺跡では、陥坑遺構が検出され、これは礎化面及び礎化土、底盤からはバクサや小石が散き詰められている状態で確認されていることから、階裏排水または道路状遺構の性格が考えられている。構内一部であるSD10からSD10からは13C代の遺物が認められている。

#### 4) 道路状遺構の名称

最後に、本書に用いた道路状遺構に付設する各遺構の名稱について記載しておく。

近年の発掘調査において、道路状遺構に関する事例報告は全国的に急増してきている。しかし、道路状遺構は他種遺構の事例に比べると非常に少ない状況で、調査事例は未だ発見途上といったところである。

さて、「道路」は道路に付設する各パート類によって構成されていることは周知のとおりである。各パート類は現代の道路に置き換えると路面・路床・路端・路帶等を指し、現代の道路における各パート類の名稱は全局的に呼ばれていている。ところが、古代の道路に際しては時代を経て様々な施行によって遺存していることから、そのパート類については遺存状態にあわせた名稱が用いられており、現在のところ統一した名稱は与えられない。こうして、今回記述された道路状遺構を記載するにあつては、付設する各パート類（遺構）の名稱を項目で説定して、報告する。なお、今回使用した用語は、あくまで本書に掲載した道路状遺構を概述するために一時的に設定したものであり、また用語説明においても現況で確認された遺構の状況を明確に伝えたるものとなつてないことは十分承知している。こうした状況を踏まえて、改めて軽自動で設定したことであるが、今後は遺構の状態を的確に示すことのできる名稱とその説明を追加、補足していくこととする。

#### 道路状遺構に付設する遺構の名稱及びその説明(Fig.91)

①路面・・・道路の上端面を示す

②路床・・・基礎・下層面を示し、道路と地山の境界面にあたる

③路盤・・・路面と路床の間にあたる土・砂・石等で人为的に構成された土層を示す

④側溝・・・道路の脇に備えられた溝状の貯水槽を示す

⑤礎化土・・・土・砂等が強く締まってできた土層を示す

⑥礎化面・・・礎化土の上端面を示す

⑦波板状凹凸痕跡・・・平面プランが不定形狀を呈した踏み込み跡・走行痕跡を示す

⑧刺突状痕跡・・・ピット状の痕跡が集合した遺構を示す

⑨溝状痕跡・・・道路幅員に形成された溝状の跡跡を示す

⑩ ッビ状痕跡・・・ピット状を呈した通路する遺構を示す

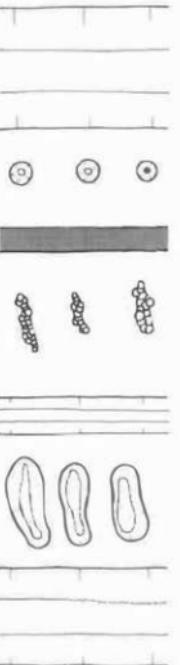


Fig. 91 道路状況構名表示圖

## 2. 中世の聚落について

この章では、鶴田市ノ塙遺跡で確認された中世の遺構や遺物について概要する。

(1) 條列状遺構・獨立柱建物  
第1～3次調査からは條列状遺構4例、獨立柱建物58棟が検出（付図⑤）され、各遺構の規模や方位等はTab.2～5に表したとおりである。これらの遺構は各調査区の中央部から西にかけて集中配置していることがわかり、極端いえばY=-45970～-46020の範囲にある。  
Tab.2～5を各遺構の方位別に見てみると以下のような（先述したように第1次調査では座標値に誤りがあると判明したので地図（S=1: 2500）上に図示して補正した）。

### 條列状遺構

$$N=0^{\circ} 5' - W=26[6]$$

$$N=5^{\circ} - 10^{\circ} - W=3[9]$$

$$N=10^{\circ} - 15^{\circ} - W=3[4]$$

次に、Tab.2～4を独立柱建物の規模別に見てみると以下のようなになる。

### 獨立柱建物

$$N=0^{\circ} 5' - W=4[8]$$

$$N=5^{\circ} - 10^{\circ} - W=19[4]$$

$$N=10^{\circ} - 15^{\circ} - W=30[4]$$

$$N=15^{\circ} - 20^{\circ} - W=5[4]$$

小型建物

$$1間\times 1間=6棟 \quad (\text{平均床面積}=7.74m^2 \cdot \text{平均坪数}=2.34坪)$$

$$1間\times 2間=12棟 \quad (\text{平均床面積}=14.73m^2 \cdot \text{平均坪数}=4.36坪)$$

$$2間\times 2間=2棟 \quad (\text{平均床面積}=14.79m^2 \cdot \text{平均坪数}=4.38坪)$$

中型建物

$$3間\times 1間=19棟 \quad (\text{平均床面積}=21.68m^2 \cdot \text{平均坪数}=6.57坪)$$

$$3間\times 2間=8棟 \quad (\text{平均床面積}=22.82m^2 \cdot \text{平均坪数}=6.91坪)$$

$$3間\times 3間=1棟 \quad (\text{床面積}=28.31m^2 \cdot \text{坪数}=8.5坪)$$

大型建物

$$4間\times 1間=4棟 \quad (\text{平均床面積}=35.14m^2 \cdot \text{平均坪数}=10.65坪)$$

$$4間\times 2間=3棟 \quad (\text{平均床面積}=41.64m^2 \cdot \text{平均坪数}=12.62坪)$$

通水率 [%]	田面水位 [cm]		田面水深 [cm]		万株/ha [灌水施肥量]
	平均水深 [cm]	平均水位 [cm]	平均水深 [cm]	平均水位 [cm]	
ISA-0/0	0.8	—	0.45	0.95	W
ISA-0/1	1.0	—	0.52	1.05	W
ISA-0/3	1.0	—	0.52	1.05	W
ISA-0/5	0.8	—	0.48	0.93	W
ISA-0/10	2.0	—	0.70	1.45	W
ISA-0/15	5.3	—	N <sup>a</sup> 0.51	N <sup>a</sup> 0.99	W
ISA-0/20	—	—	N <sup>a</sup> 0.52	N <sup>a</sup> 0.95	W
ISA-0/25	4.2	—	N <sup>a</sup> 0.59	N <sup>a</sup> 1.17	W
ISA-0/30	—	—	N <sup>a</sup> 0.67	N <sup>a</sup> 1.16	W
ISA-0/35	7.4	—	N <sup>a</sup> 0.52	N <sup>a</sup> 0.94	W
ISA-0/40	—	—	N <sup>a</sup> 0.78	N <sup>a</sup> 1.44	W
ISA-0/45	9.1	—	N <sup>a</sup> 1.11	N <sup>a</sup> 1.58	W
ISA-0/50	20	—	N <sup>a</sup> 1.6	N <sup>a</sup> 4.7	W
ISA-0/50	—	—	N <sup>a</sup> 1.3	N <sup>a</sup> 4.0	W
ISA-0/50	—	—	N <sup>a</sup> 9	N <sup>a</sup> 5.9	W
ISA-0/50	—	—	10.0	—	—

— 1 —

Iab.4 諸田中市／塙道郎（第2次調査）

講田中市ノ深道圖(第4)  
掘立柱建物計測値一覽

	$\pi_{\text{obs}}$	$\pi_{\text{true}}$	$N_{\gamma} \cdot 10^{-3}$	$\Delta E$	$\Delta E'$
2SB775	3	1	$N_{\gamma} \cdot 15^{\circ} \cdot 30^{\circ} \cdot 56^{\circ} = W$	13.9	5.19
2SB390	3	3.025	$N_{\gamma} \cdot 12^{\circ} \cdot 15^{\circ} \cdot 47^{\circ} = W$	24.67	7.40
2SB385	4	3.810	$N_{\gamma} \cdot 10^{\circ} \cdot 07^{\circ} \cdot 28^{\circ} = W$	43.96	11.30
2SB390	3	2.665	$N_{\gamma} \cdot 7^{\circ} \cdot 48^{\circ} = W$	10.12	
2SB395	3	4.115	$N_{\gamma} \cdot 10^{\circ} \cdot 52^{\circ} \cdot 06^{\circ} = W$	23.11	7.66
2SB430	1	5.095	$N_{\gamma} \cdot 12^{\circ} \cdot 38^{\circ} \cdot 27^{\circ} = W$	16.41	
2SB435	1	5.060	$N_{\gamma} \cdot 11^{\circ} \cdot 34^{\circ} \cdot 07^{\circ} = W$	10.12	
2SB435	2	4.595	$N_{\gamma} \cdot 11^{\circ} \cdot 34^{\circ} \cdot 07^{\circ} = W$	10.12	

流傳者  
2510200  
25820  
25821  
25112  
25122  
25823  
25824

東西	平均長
2	5.57
1	2.42
1	1
1	2.00
1	2.12
3	3
4.22	4.22
1	1
1.55	1.55
1	1
1.30	1.30
1	1
2.41	2.41
1	1
1.92	1.92

Tab.2 鹽田中市ノ深淵跡相列状況概要測定一覽

龍田申希）逐道歸（第1次調查）

福井市ノ様式（第三回）

fab.3

この他に1棟が計測不能で、2棟が南北側で測定が異なるため、上記からは除外した。以上のことを整理すると、種別状況構と独立住居物が多く存在していたことが窺える。より、規模としては小～中型の獨立住居物が多く存在していたことがわかる。更に、各独立柱部物の平均柱間は南北柱間=2.249m、東西柱間=3.073mを計測することから、これを現在の尺量(1尺=0.303m)に換算すると南北柱間=7尺4寸、東西柱間=10尺1寸(計測値には若干の差違が含まれている)となる。このことから、当遺跡から確認された獨立柱建物群は、東西軸と南北軸で柱間の長さが異なっていたことが数個から読みとれる。獨立住居物は母屋、中堅建物等は母屋、中堅建物された3間×3間の純柱建物(1SB310)は、母屋構であった可能性も考えられる。

## (2) #戸

当該地内からは13棟もの井戸が確認されており、当時積極的に井戸の開削が行われていたことが窺える。最後市街における地下水については、「鎌後市史」(註12)に詳細が記されている。これによると、気候条件における地下水を含む地層は一般的に第四紀層といわれており、幕後平野の洪積台地・扇状地性低地・三角州性低地は地下水が極めて豊富とされる。幕後市街の南端を西流する矢器川(当遺跡から南へ約6km)の流水は地下水の供給源で砂岩層の中を運動する自由地下水となっている。幕後市街におけるボーリング調査では、当該地区は極めて浅い帯水層が存在していることが明らかにされていることから、当遺跡から確認された井戸は比較的浅い掘削で湧水を認められたと想定される。このことは、第2次調査において、重機を使用した井戸の断ち割り調査(2SB010)でも実証されている。このように、当該地はこうした豊富な地下水で恵まれた良好な立地であったことは明らかである。今回確認された井戸の配置状況を見みてみると北東から南東方向へは直線的に分布していることがわかる。これは地下木の道、町や水路を示唆しているものと推測できることから、当時の人々が水脈位置をほぼ正確に把握していた可能性が考えられる。

## (3) 中世墓場の位置と環境

獨立柱建物群を中心とした開墾遺構は出土遺物から中里中一後半を主体としていたことが考被される。像出遺構の種類や配置状況からすると、当條例にみられる範囲が想定される。中世墓場に開墾した遺構はこれまでの発掘調査によって市内で数件が確認、報告されているところであるが、ここでは今回確認された中世墓葬が豈きどのような立地状況であったのかを簡単に概説することとする。

詳細な時期は不明であるが中世の筑後市街は、概ね北部を上妻郡飯田庄、南西部を下妻郡水田庄、西端部を下妻郡下妻庄、南東部の一部を長田庄が構成していたことが知られている。当遺跡は市内の飯田庄、Fig.92(註14)に見える尾崎町付近に位置していることから、開墾があるとされる柱廻は水田庄と長田庄である。地図上では、当地が阿羽庄園のちょうど中間にあたることから、どちらに含まれていたのかは特定できないところであるが、何れにしても岡原園の境界付近に位置することから緊迫した地域であったことが窺える。

さて、前文において獨立柱建物群の内、独立柱建物(1SB310)がその規模から物見槽である可能性が考被されるとしたが、こういった背景からするとその存在の可能性も十分に考えられる。更に、独立柱建物群の東端からは当該期の南北部が3箇所で検出されており、一連の構造が集落を形成した区画論と考被するならば外縁から守るために防衛施設であったことをも推測される。全く今まで推測の波を匂いでいるのが、当遺跡から確認された大堀塚、獨立柱建物群は、こういった状況の中で運営された集落であつたことが窺える。

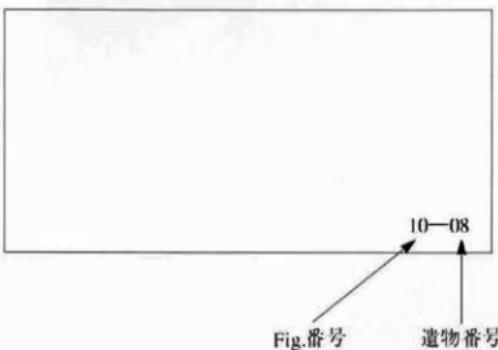
Fig.92 水田莊・廣川莊關係地圖 (約1/150,000)



# P L A T E

## 凡 例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。





調査区全景  
(空中写真：右が北)



道路状造構築完結状況  
(空中写真：南から)



1SE030検出状況（西から）



1SE040検出状況（東から）



1SE0501様出状況（北西から）



1SE070様出状況（西から）



1SD125・130・135土層觀察状況（北から）



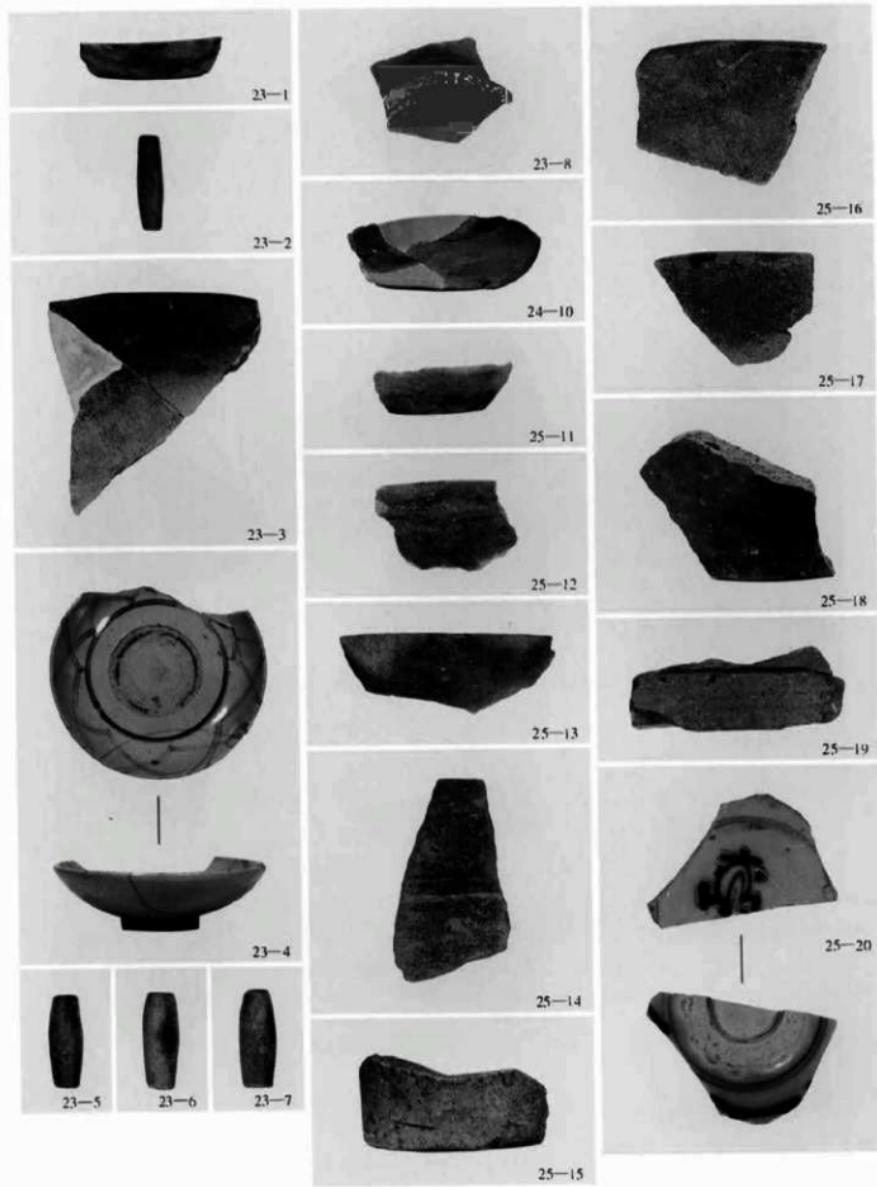
1SD125硬化土確認状況（北から）

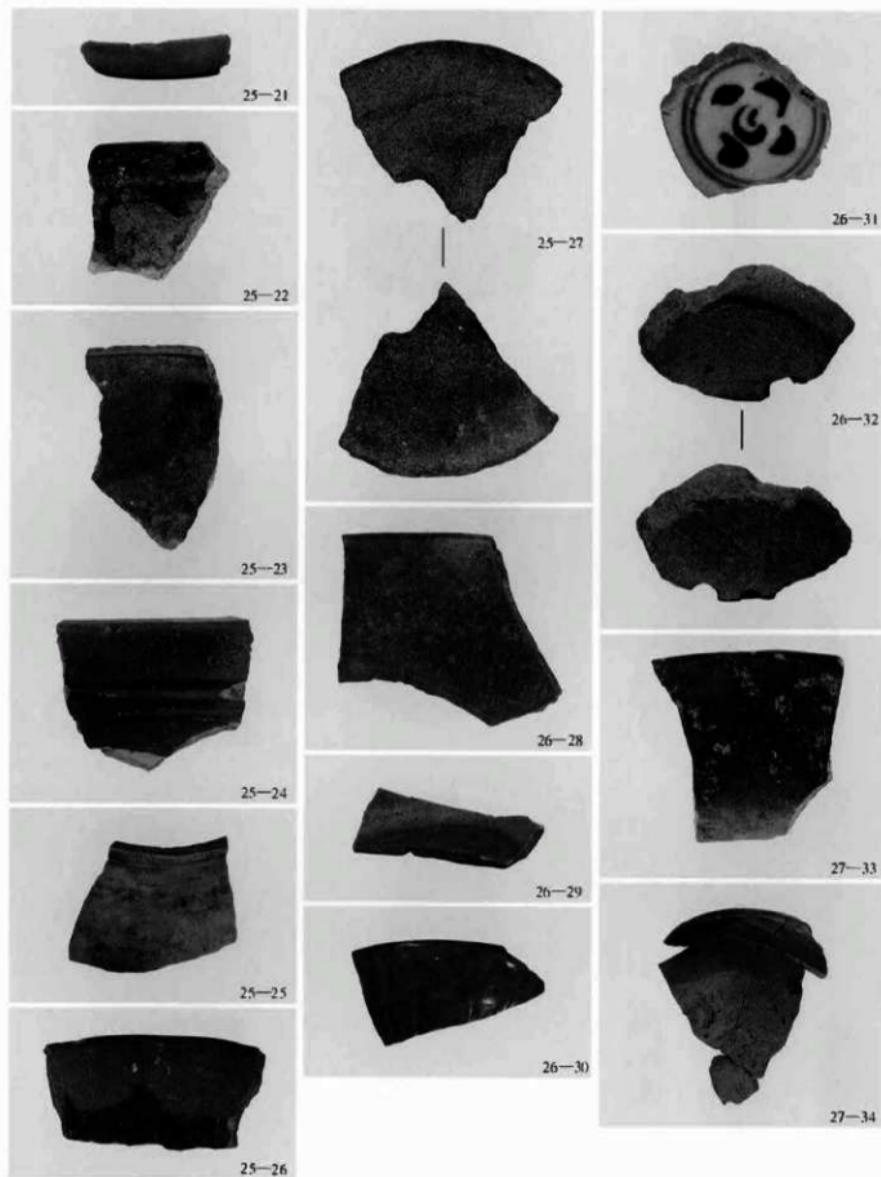


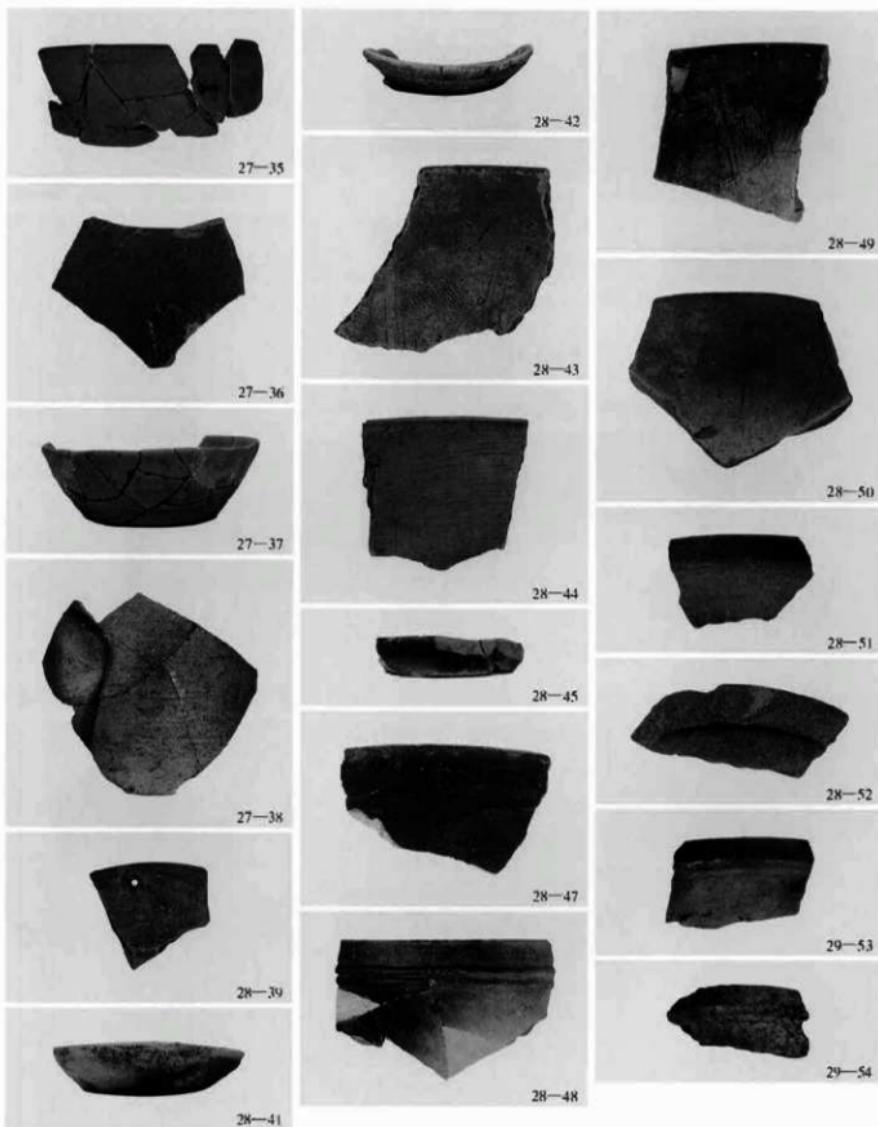
道路状遺構中央部確認状況（写真右下は帯状硬化面）

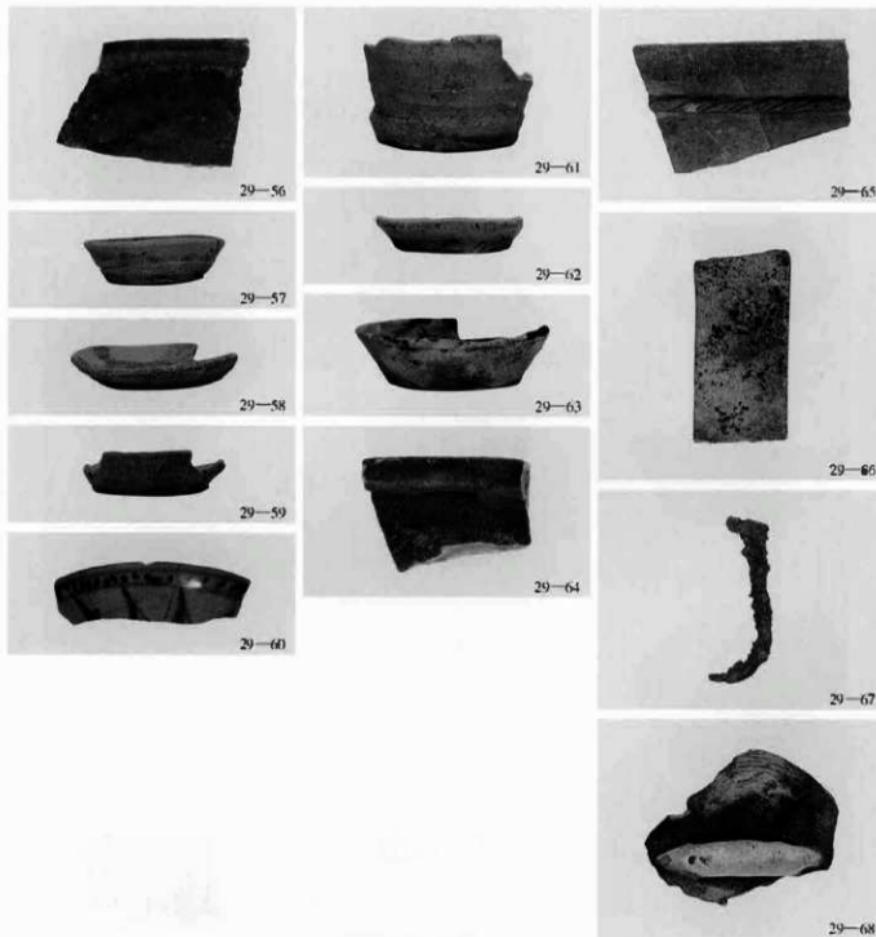


1SK 105土層観察状況（西から）







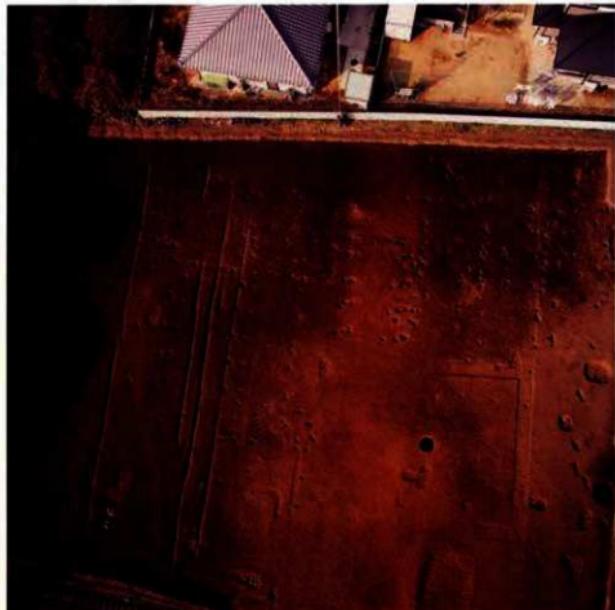




調査区A全景  
(南東から)



調査区C・C全景  
(空中写真：右が北)



据立柱建物群  
(空中写真：右が北)



2SB255 (P7) 柱痕検出状況



2SB255 (P8) 柱痕検出状況



2SB265 (P4) 柱痕検出状況



2SB270 (P8) 柱痕検出状況



2SB285 (P4) 柱痕検出状況



2SB285 (P5) 柱痕検出状況



2SB285 (P7) 柱痕横出状況



2SB285 (P12) 柱痕横出状況



2SD050土層観察状況（北から）



2SD060土層観察状況（北から）



2SD070北ベルト土層観察状況（南から）



2SD070中央ベルト土層観察状況（南から）



2SD070南ベルト土層観察状況（北から）



2SE010棟出状況（南から）



2SE010土層觀察状況（北から）



2SK030遺物出土状況（東から）



2SK035遺物出土状況（西から）

2SK075壳囊块见(北方向)



2SK065壳囊块见(南方向)

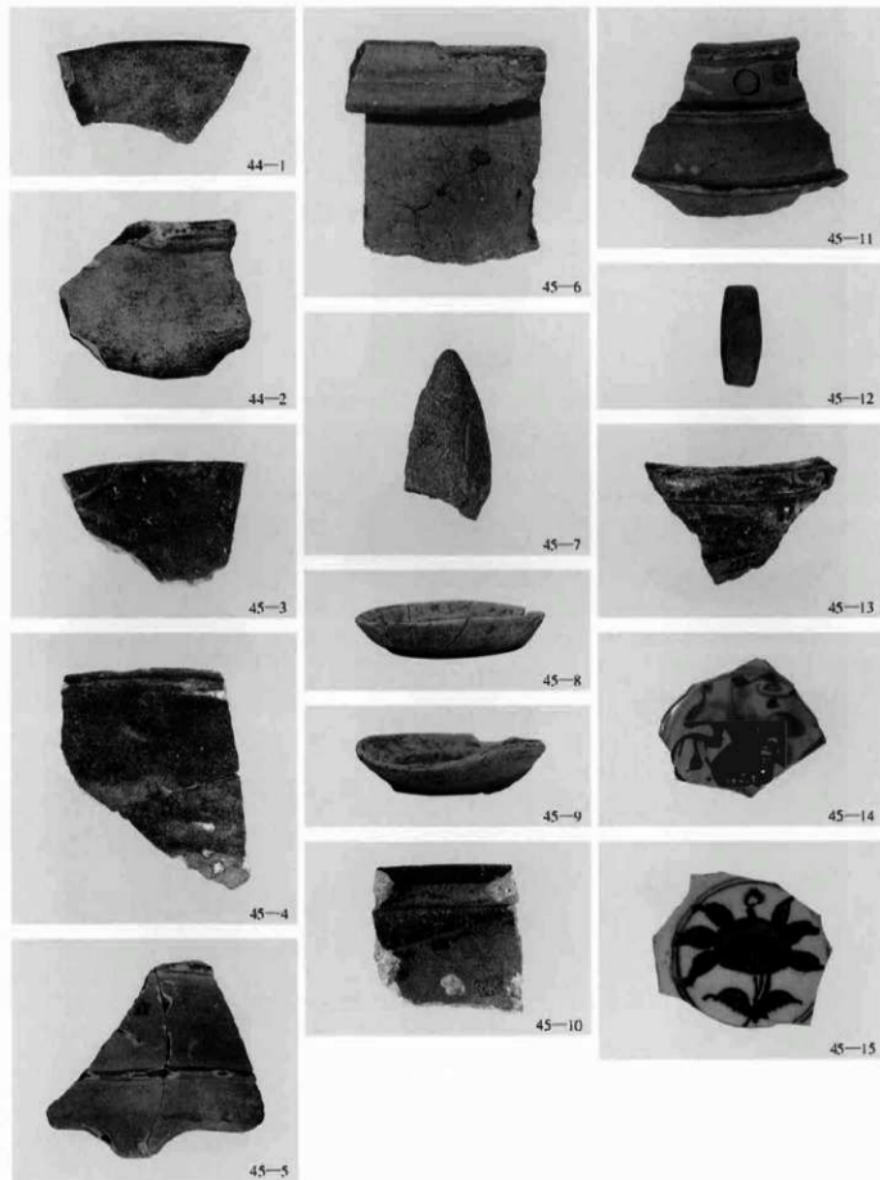


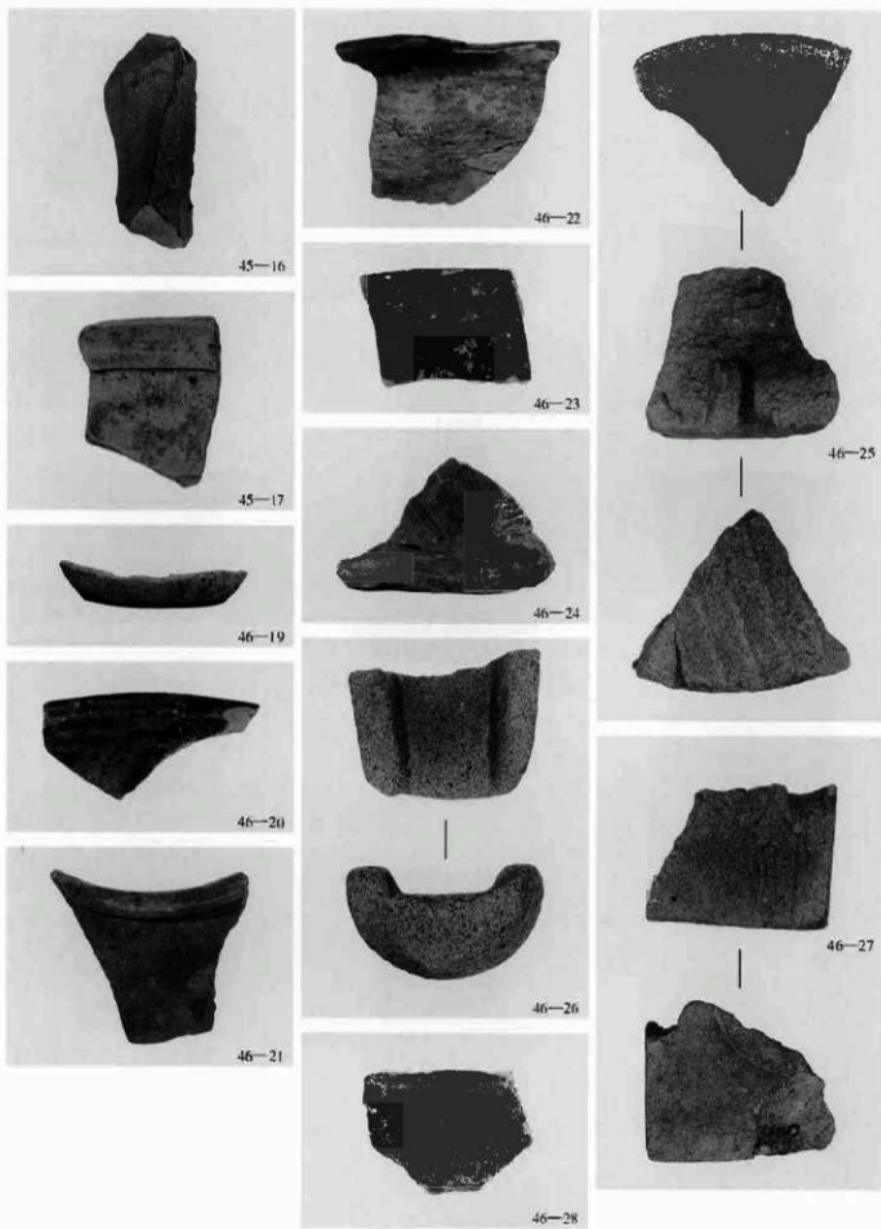


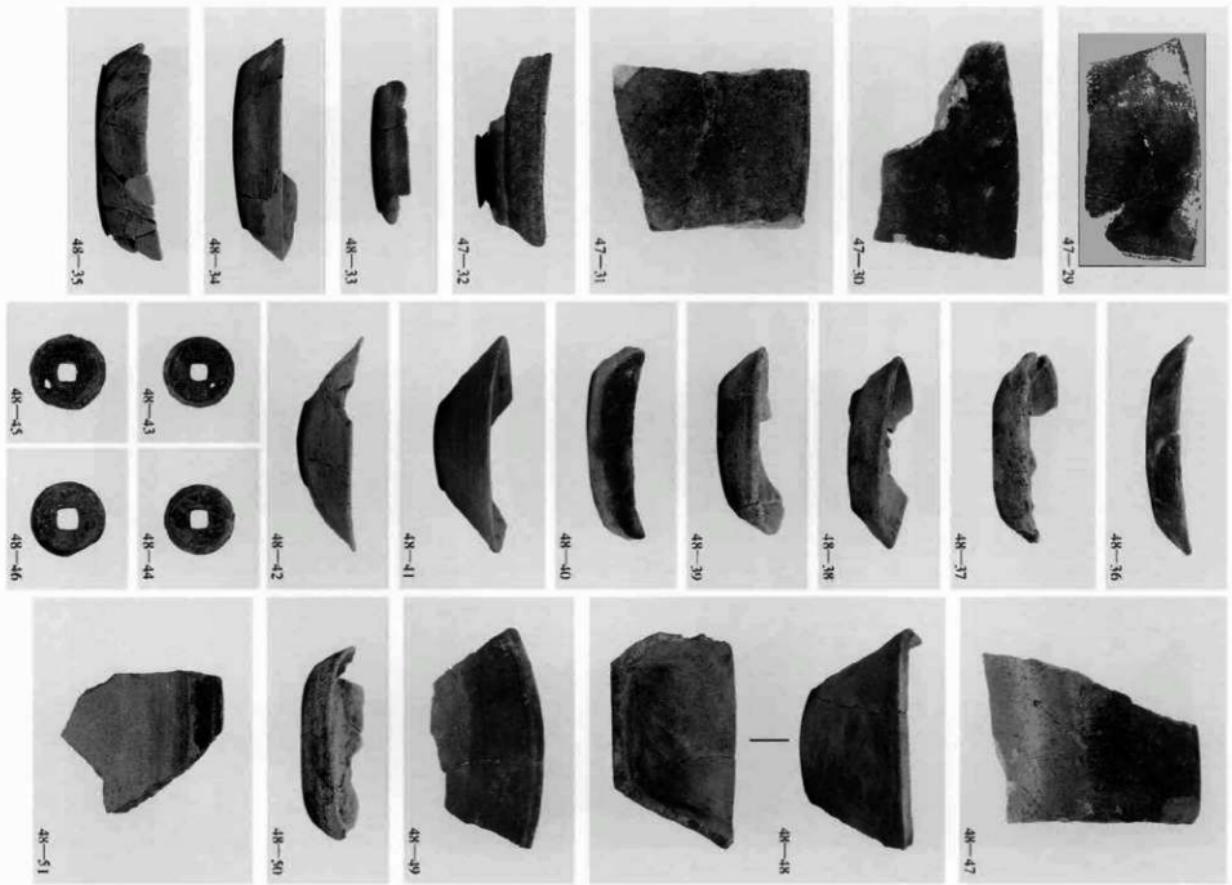
2SK076遺物出土状況（南から）

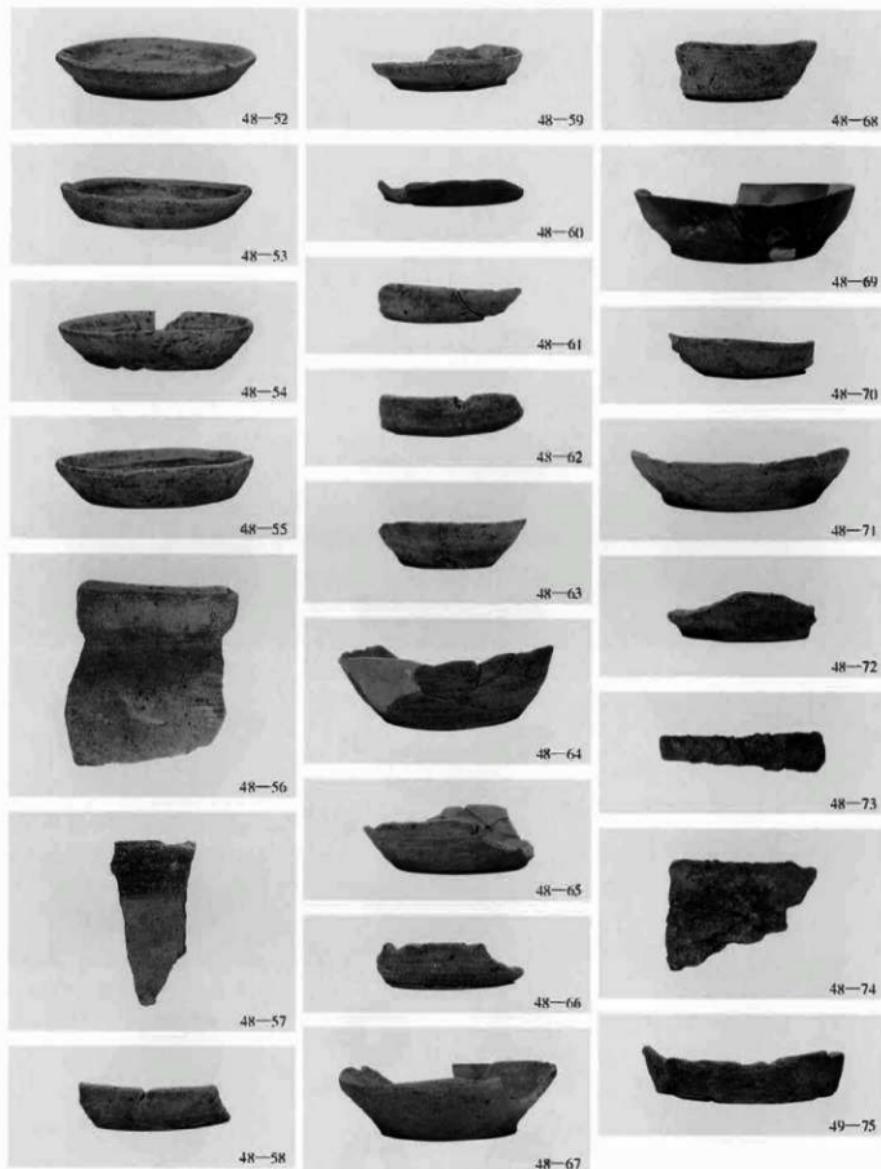


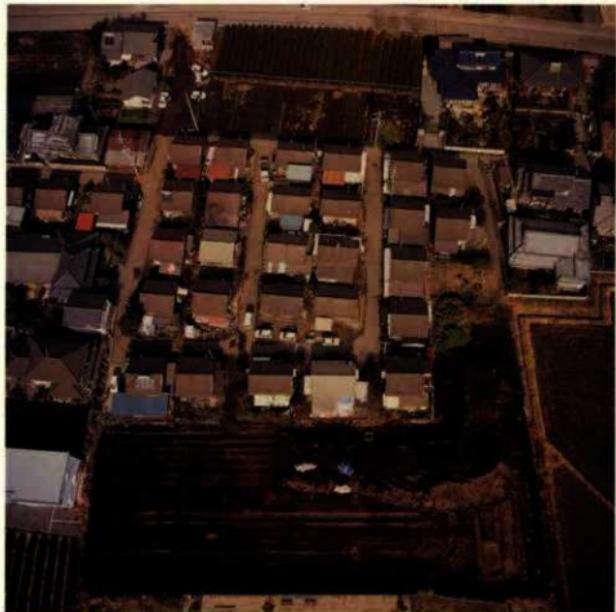
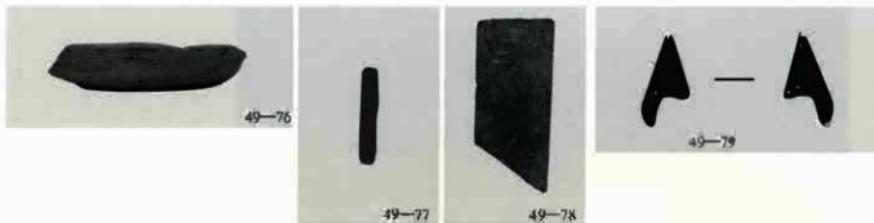
2SK105遺物出土状況（東から）



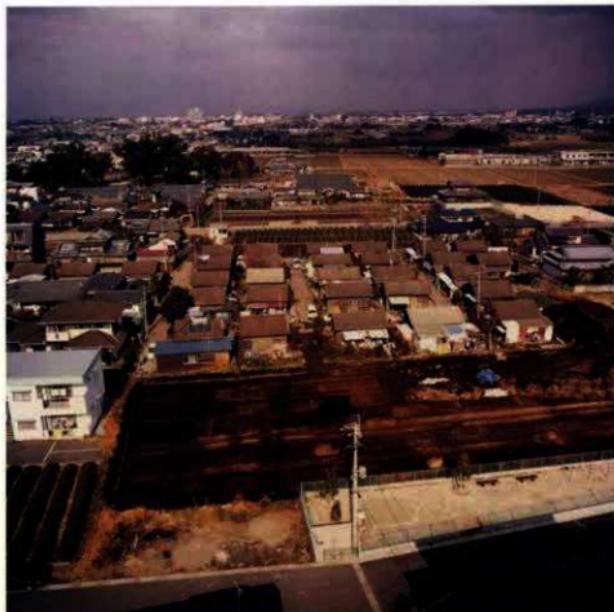








調査区全貌  
(空中写真：上が北)



道路状況検出状況  
(空撮写真: 3月から)



3SD001発掘状況(北から)



3SE020検出状況（東から）



3SE045検出状況（東から）

純田中町ノ廻道跡（第3次測量）



道路状況構造完結状況（南から）



帶状硬化土確認状況（北から）



帯状硬化面棲出状況（東から）



帯状硬化面棲出状況（斜上から）



道路状遺構西側側溝（北壁）土層観察状況（南から）



道路状遺構西側側溝（南壁）土層観察状況（北から）



道路状遺構東側側溝（北壁）土層観察状況（南から）



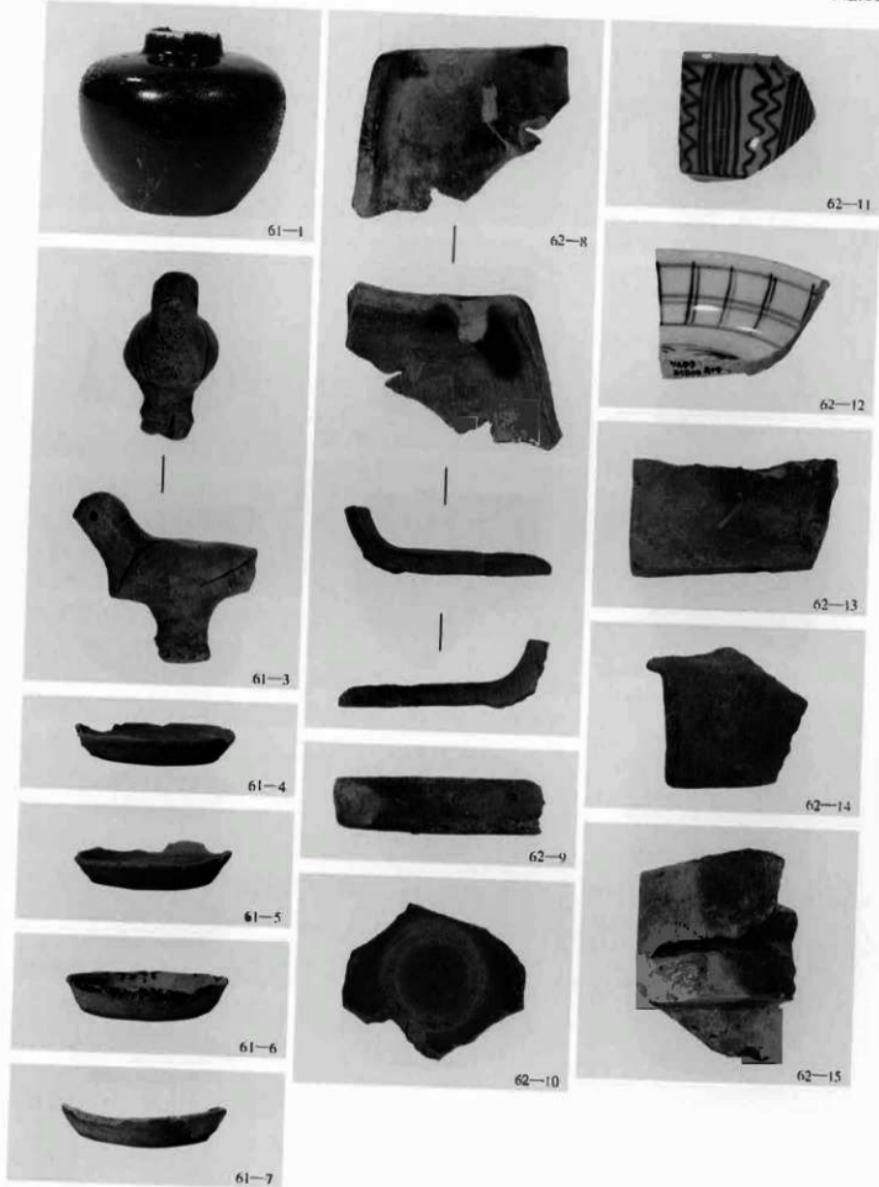
道路状遺構東側側溝（南壁）土層観察状況（北から）

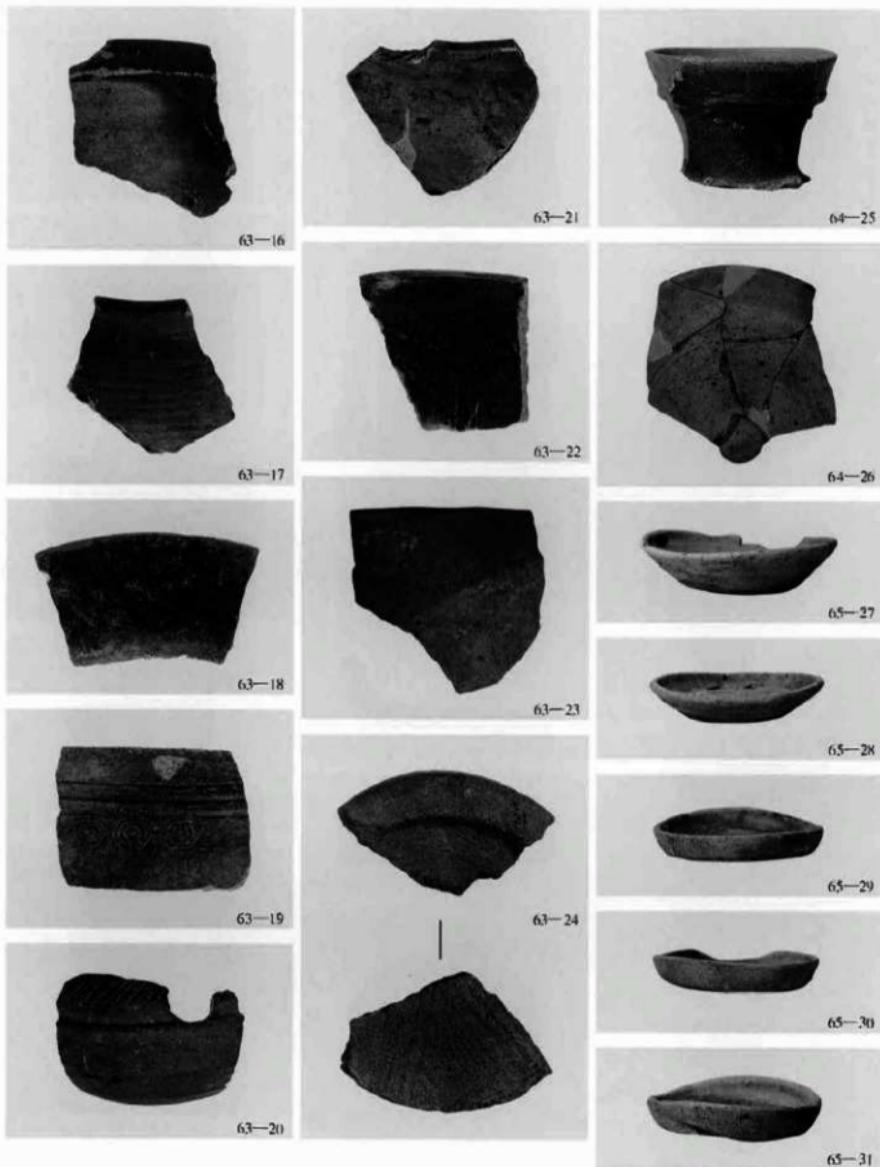


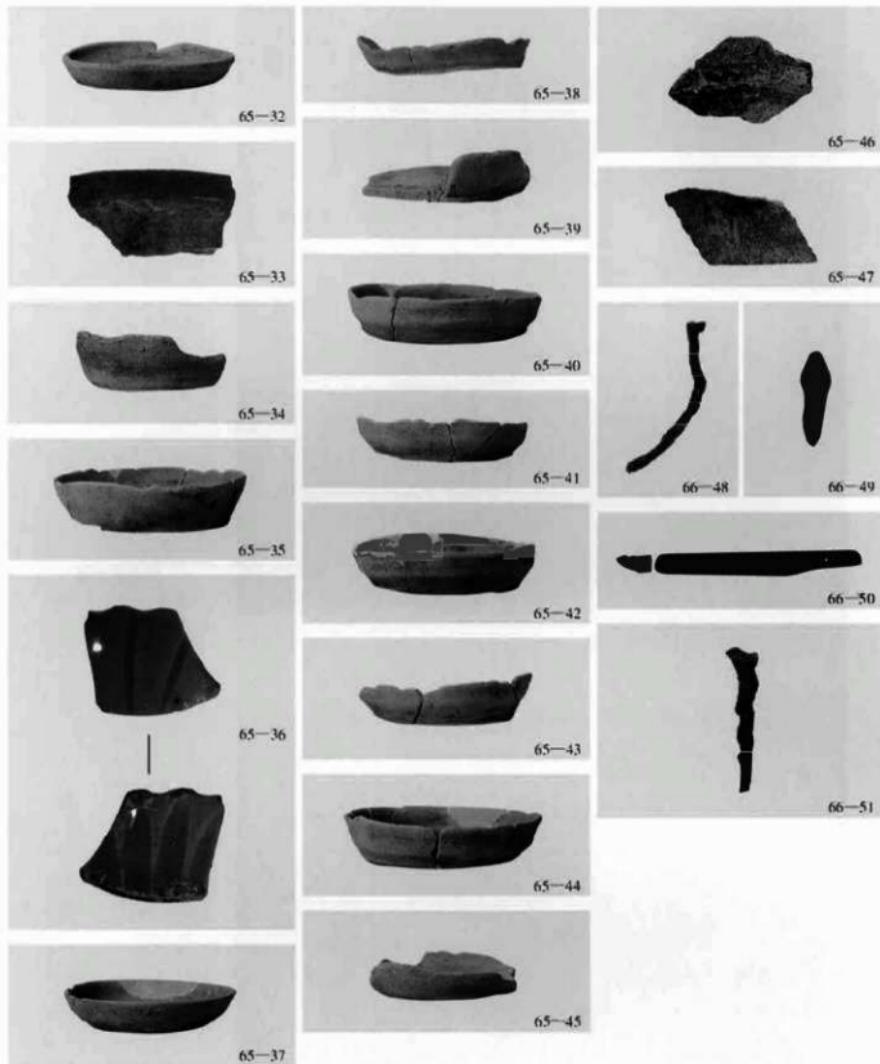
3SK030発掘状況（東から）



3SK055発掘状況（西から）









調査区全景  
(空中写真: 上が北)



道路状造構成地状況  
(空中写真: 南から)



4SE011確認状況（西から）



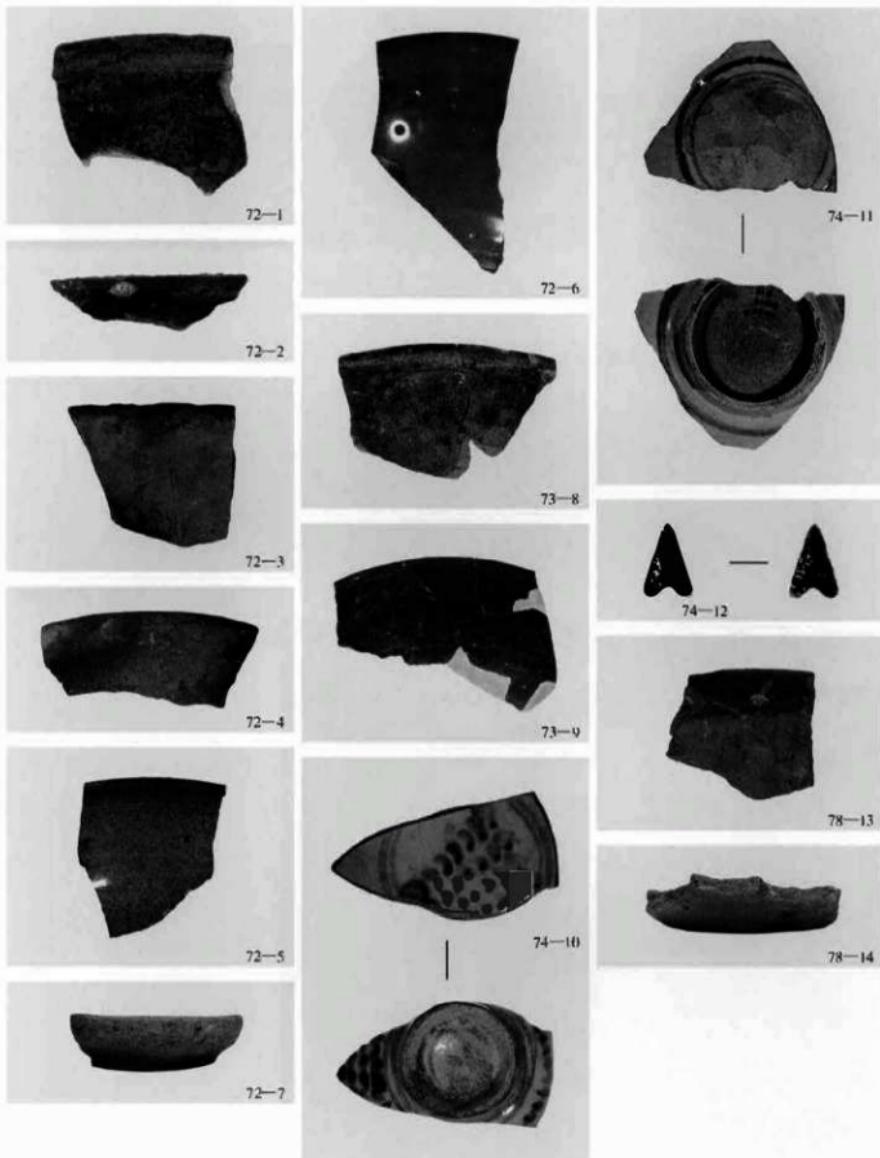
4SK030遺物出土状況（東から）



4SK055 棲出状況（東から）

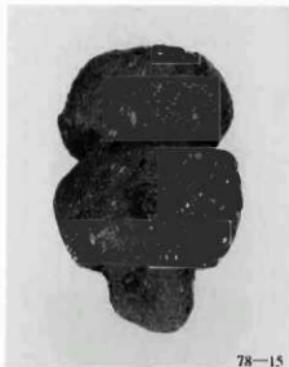


4SK060 棲出状況（東から）

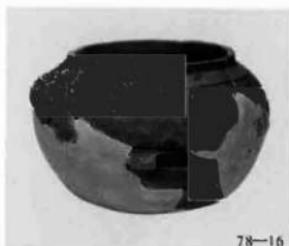


Pla.39

鶴田中市ノ塚遺跡（第4次調査）



78-15



78-16

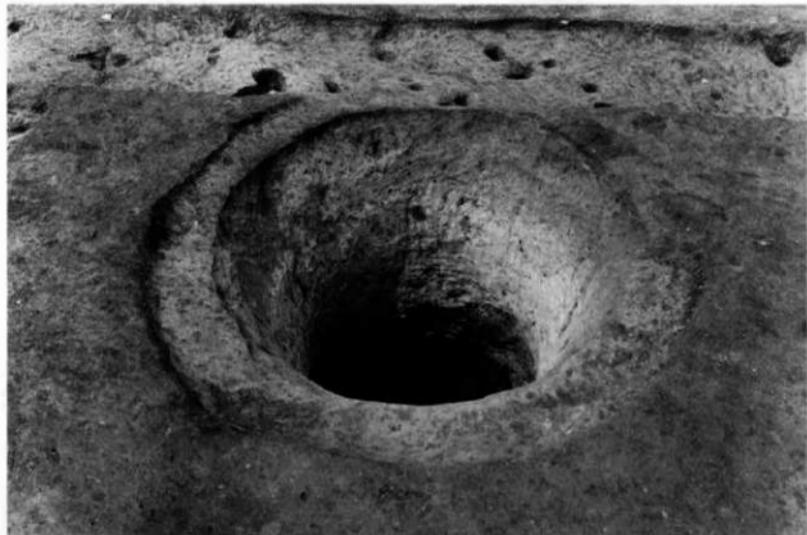


78-16

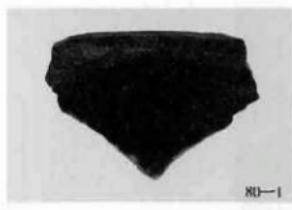
鶴田中市ノ塚遺跡（第5次調査）



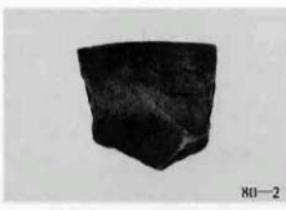
調査区全景  
(空中写真：右が北)



5SE1検出状況（東から）



8D-1



8D-2



8D-3



調査区全貌

(空中写真：左から)



道路状況

(空中写真：南から)



道路状遺構（北部）検出状況（南から）



道路状遺構（北部）西側側溝検出状況（南から）



道路状遺構（北部）東側側溝検出状況（南から）



道路状遺構（南部）土層観察状況（北から）



刺突状痕跡①検出状況（北から）



刺突状痕跡②検出状況（南東から）



刺突状痕跡③棲出状況（北から）



刺突状痕跡④棲出状況（北から）

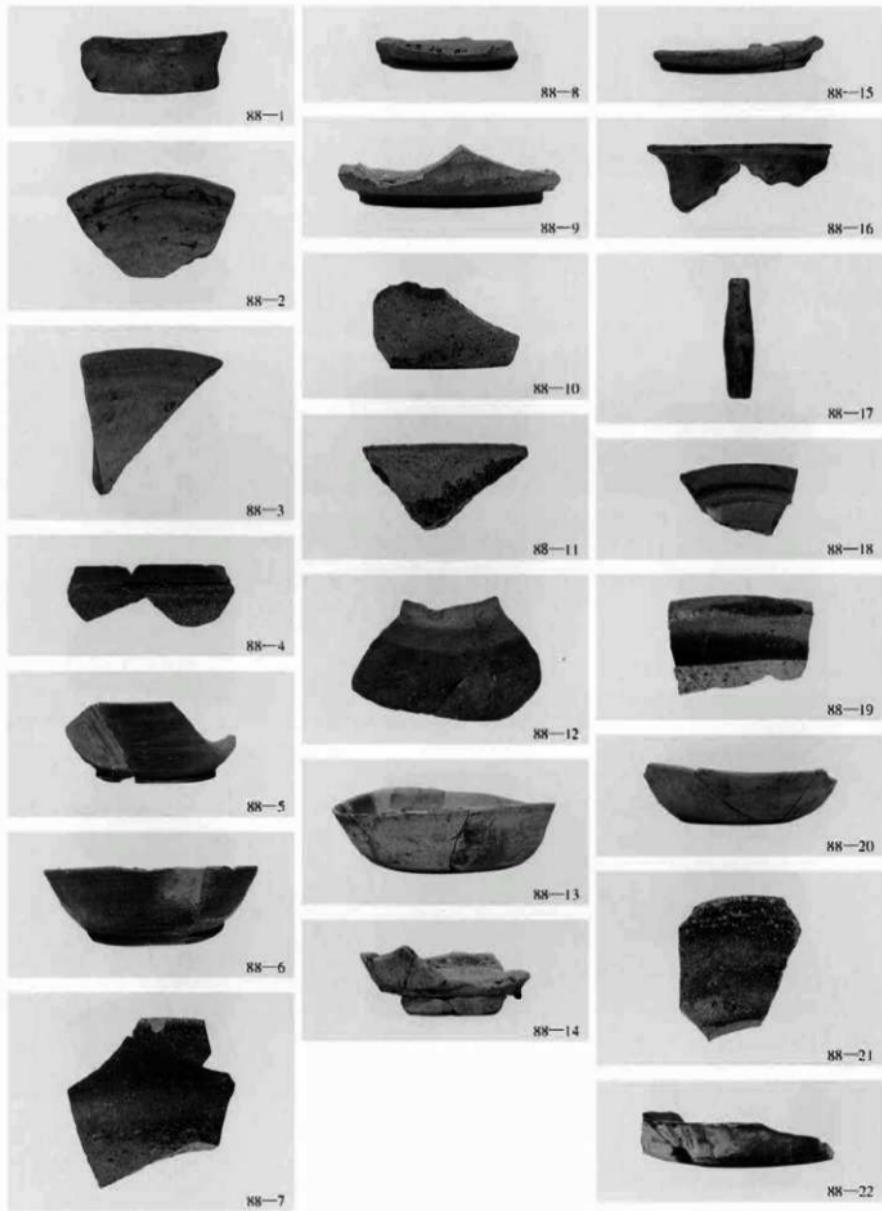


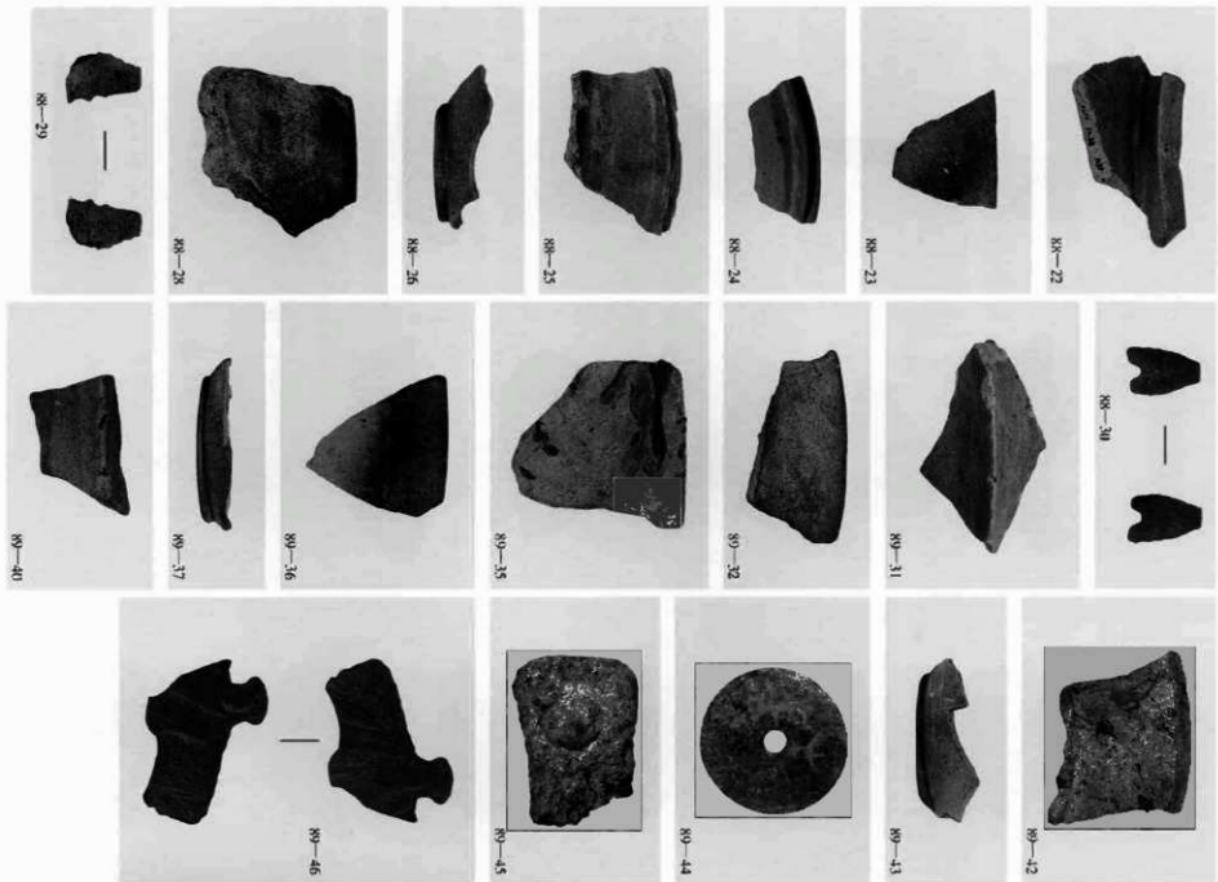


道路状遺構（北部）路床確認状況（北西から）



トレンチ⑩流木出土状況（東から）





筑後市内遺跡群IV  
筑後市文化財調査報告書

第45集

平成14年3月31日

筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

(章) 四ヶ所印鑑

福岡県日本市天子町336

発行

印刷



付図① 鎌田中市ノ塚遺跡（第1次調査）遺構全体実測図（1/100）



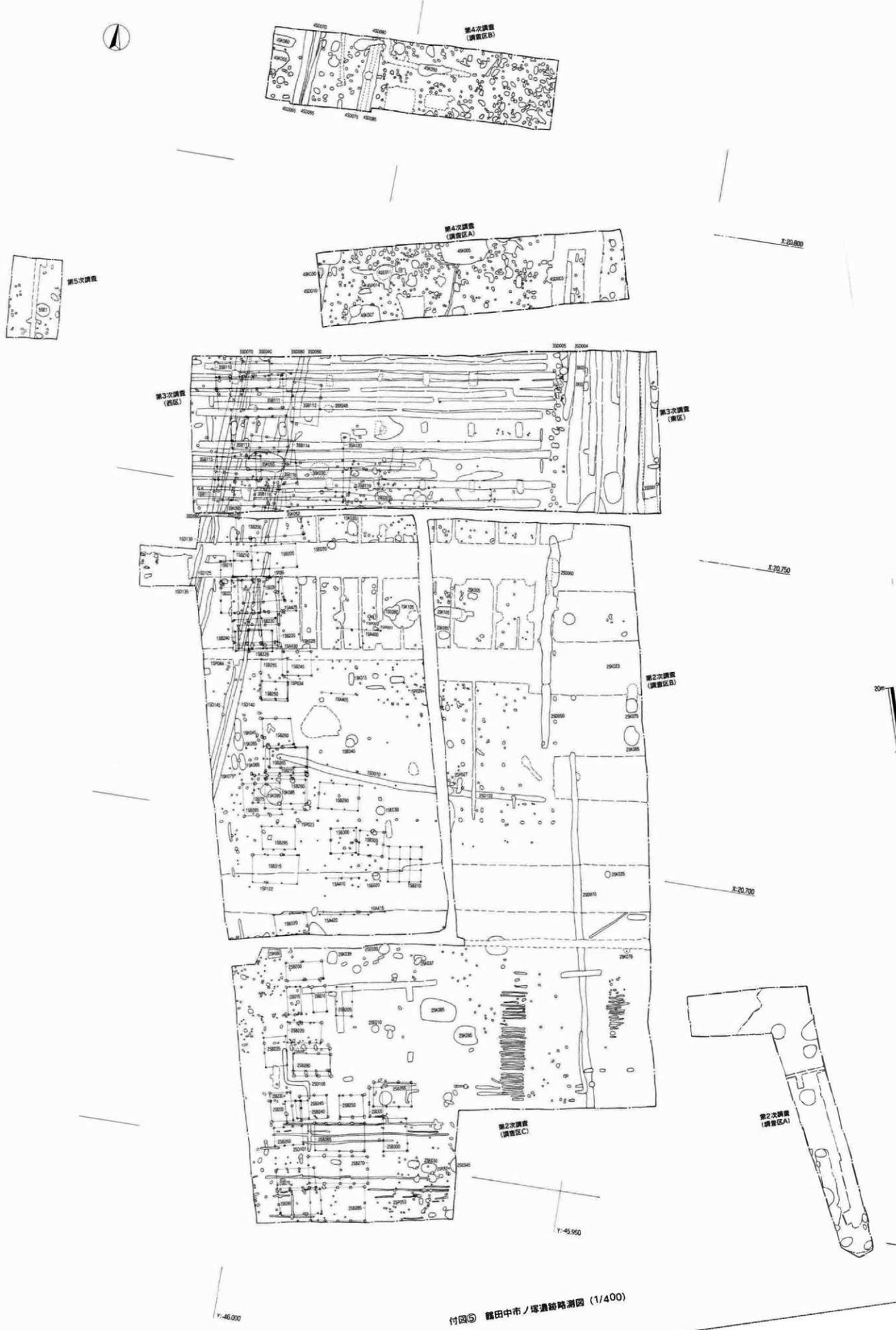
付図② 鶴田中市ノ塚遺跡（第2次調査）調査区B遺構全体実測図（1/100）

0 10m



付図③ 錦田中市ノ森遺跡(第2次調査) 調査区C遺構全体実測図(1/100)





付図⑤ 錦田中市ノ運送路測図 (1/400)